
遼州戦記 播州愚連隊

橋本 直

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遼州戦記 播州愚連隊

【Nコード】

N7225F

【作者名】

橋本 直

【あらすじ】

敗戦国胡州。特攻崩れの無頼漢明石清海はかつてのライバルと出会う。その出会いから始まった物語は惑星の運命を動かす事件の証人になることを彼に強いることになる。設定使用等は次のブログで
<http://blogs.yahoo.co.jp/tt1933mania>

動乱群像録 1

キザでにやけた優男の手にある銃の銃身。その先には三つ揃いの黒い背広を着たスキンヘッドにサングラスの大男が立っていた。そしてその大男、明石清海^{あかしきよみ}はただ口をへの字に結んで立ち尽くす。優男の周りにたむろするのは他にも五人のチンピラ。しかもそれぞれヒ首で武装している。

『俺も焼きが回ったもんだ』

明石はそう観念した。相手のシマに一人で乗り込むなどと言うことは自殺行為なのは分かっていた。だが、復員してから今まで、ただ死ぬことばかり考えていた自分を思い返すと自然にその口に笑みが浮かんできた。まるでこうして銃口を向けられて何もできずにくたばることをを自分が望んでいた。莊思えないこともなかった。すると当然のように自虐的笑みがこぼれてくる。

相手のチンピラも芸州で知られた指定暴力団、旭星会の若頭の明石が無様に倒れている様子を堪能しようと下品な笑みを浮かべている。

「何をしている！」

突然誰も顔を突っ込みたくない汚れた路地裏に叫び声が響いた。

明石は自分がまだ天に見放されていないことを知ると少し残念な気分になった。

『余計なことせんでもええねんで……』

心の中で明石がつぶやく。彼を取り巻いていた男達は、声の主が紺の詰襟が目立つ胡州海軍の制服を着ていることを確認すると困惑したような顔をする。とりあえず銃やヒ首を隠すが、声の主の海軍士官はそのまま彼等に近づいてくる。人を呼ばれたら勝ち目は無いと悟った男達はばらばらに逃げ始めた。

明石は駆け寄ってきた三人の男の姿を見上げた。明石が学徒兵として軍にいた時代からかなりデザインが変更された胡州海軍の士官の制服が目に入る。先頭を歩く巨漢の明石より少しばかり背が低い

男は帯剣しているところから見て佐官以上の階級だった。彼の視線が一度明石を見て不思議そうな顔から驚いたような感じへと変わるのを明石は額から流れる血を気にしながら見上げていた。

「おい……もしかして明石か？帝大の？」

その男は明石の顔を見るなりそう聞いてきた。『帝大の明石』と呼ぶ高級将校に苦笑いを浮かべる。この芸州で『千手の清海』以外の名で呼ばれるのは初めてだった。

「確かにワシは明石言いますが？」

「おい魚住！やっぱりこいつ明石だぞ。おい！覚えてるか？俺を。実業大の別所ってピッチャー」

ピッチャーという言葉が、明石の心を掴んだ。もう遠くに忘れてきていた出征前の大学時代を思い出させる響きがそこにあった。

「やっぱり！こんなでかい坊主頭他にいるかよ！俺だ！法大の一番の魚住だ！大学野球じゃ三回お前に盗塁を刺されたことがある」

「別所？魚住？」

明石は次第に思い出していった。学徒出陣の直前の禁裏球場での試合。帝大史上最強の四番、本塁の守護神と呼ばれていた時代が自分にあつたことを。

「別所少佐。この方は？」

一人残された海軍の大尉が静かにこちらを覗いている。しばらくは放心していた明石だが、三人の胸に最新鋭の人型戦闘機『アサル・ト・モジュール』、胡州名称『特戦』のパイロット章が輝いているのが見える。その最後の男。緑色の不自然な髪の色からしてゲルパルトの人造人間の一人だろうか。明石は男の人造人間を見たのは彼が初めてだった。

「こいつは帝大の四番。明石だ。何度か話したろ？俺はこいつに二本も長打を打たれてるんだ」

「三本の間違いや。それに一本は本塁打やったのも忘れたらあかん」

明石は切れた口の中から流れる血をぬぐいながらそう言うと言っ

と安心したとでも言うように笑った。昔の話をされると先ほどまでの殴る蹴るの暴行で力も抜けていたはずの体が軽く感じられた。泥だらけのジャケットをはたいてゆつくりと立ち上がる。

「汚い格好だなあ、おい。まあいいや、明石！これから付き合わんか？」

別所はそう言うとき昔の大学生のような笑顔を浮かべた。損得勘定のない笑顔というものを見るのは明石には久しぶりだ。

「しかし、別所少佐これから赤松大佐の宴席に……」
弱々しく口ごもる人造人間。

「黒田！だから言ってるんだよ。『明日の胡州を作るにはまず人である』てのが赤松准将の信念だ。来るよなあ、明石！」

明石は実業義塾大のエースだった別所晋一の言葉に懐かしさに駆られて立ち上がった。

「それも、ええやろ」

ジャケットに袖を通しながらの明石の言葉にかつてのライバル別所、そして法律技術大の韋駄天と呼ばれた魚住雅吉を見下ろした。

「でかいなあ、相変わらず。じゃあ行こうか」

ちらちらと明石を見上げる緑の髪の男に連れられるようにしてそのまま路地から歩き出した。

起き上がった服に付いた埃を払うとようやく三人のきちんとアイロンの当てられた制服を眺めた。そして急に明石にはいたたまれないような気持ち湧き上がってくるのを感じていた。急に湧き上がる焦燥感。そして二人の軍服の似合い方を見て分かったとも言えるようにつぶやいた。

「貴様等は軍に残ったんか？」

「まあな。実はお前を探していたんだ。ついて来い」

別所はそう言うとそのまま路地を出て歩き始めた。海軍のエリート士官の後ろをついて歩くどう見ても堅気に見えない大男に歓楽街を歩く客達は思わず目をそらす。その様子を当の本人の明石が苦笑いを浮かべた。

「まあ大学を出ても仕事も無いしな。闇屋始めるにも手持ちの金も無いって訳で赤松の大將に拾われたんだ」

そう言うってからからと笑う魚住。帝都六大学野球の最後の対法大戦で気弱な自軍のエースに危険球を投げるようにサインを出したことを思い出してつい明石に笑みがこぼれる。

「闇屋は儲かるか？」

先頭に行く別所が振り向く。明石は答える代わりに左腕に巻かれた金のブランド物の時計を見せる。

「なんだよ！俺も闇屋になるんだっとな！」

そう言うて明石より頭一つ小さい体の魚住が笑い出す。隣の明石と同じくらいの背格好の人造人間は引きつったような笑いを浮かべていた。

「黒田。闇屋は良いぞ！俺等の仕事じゃ稼ぎなんて高が知れてるかな」

魚住の冗談に困惑した表情の黒田と呼ばれる人造人間。

「ああ、コイツの紹介がまだか。黒田監物大尉殿だ。見ての通りの

ゲルパルトの『ラストバタリオン』の出身だ」

そう言っつついてくる明石を振り返る別所。黒田はそのまま軽く明石に頭を下げる。

「別所が中佐で、魚住が少佐。ずいぶん階級の安売りをしてるんだな海軍も」

皮肉のつもりで言った明石の言葉は魚住の笑いの中に消える。

「先の大戦でほとんどの職業軍人は戦死か追放だからな。俺等みたいな学徒兵上がりも出世は思いのままってところだ……おつとあそこの店だぜ」

魚住が指差したのは傾きそうなバラックに暖簾をかけている串カツ屋だった。戦後の軍に知識の無い明石でも知っている海軍の重鎮あかまつただみつの赤松忠満と言う人物の宴席には到底不釣り合いな店構えに見える。それを見て明石は立ち止まった。

「今日のところは挨拶だけで……」

昨日、その店にシヨバ代の件で舎弟に顔を出させたのを思い出し躊躇する明石。

「逃げるなよ」

そう言っつて別所は明石をにらみつけてきた。かつてマウンド見た威圧するような視線は今ではさらに凄みを増していた。

「別所さん！御大將がお待ちですよ！」

店の前で雑談していた下士官が別所達を見て声をかけてきた。

「こういう時は度胸だぞ！」

そう言っつて明石の背を叩く魚住。仕方なく明石は三人のあとに続く。

「別所中佐！この方は？」

腰の拳銃をちらつかせながら下士官は明石を見上げる。明石はその好奇の視線にいらだちながら自分の腕なら殴れば穴が開きそうな壁が目立つ串かつ屋の店を眺めていた。

「大学時代の知り合いだ。有為な人材は逃すなってことだ」

そう言っつて別所が縄のれんをくぐって店の立て付けの悪い引き戸

を開ける。

中には海軍の将校達が串カツを片手に活発に議論を戦わせていた。しかし、別所の顔を見るとすぐに立ち上がり敬礼をする。

明石は自分が場違いな場所に来ていることをしみじみと分かった。「お客さんか？晋一、そないにワシを喜ばせても何にもでえへんぞ？」

店の奥で白髪が目立つやつれた顔の店の亭主と雑談をしていた将官の制服に身を包んだ男がカウンターの高い椅子降りてそのまま明石の前に歩み寄ってきた。

動乱群像録 3

「『千手の清海』か……極道にも顔がきくんかいな、晋一は」

そう言つて赤松は明石を眺めている。先の地球と遼州星系の戦争で追い詰められていく補給部隊や撤退する輸送艦を護衛して一隻の脱落者も無く護衛駆逐艦の艦隊を率いた男。伝説の策士を目の前に明石はただ呆然と立ち尽くしていた。

「おう、いつまで立つとん？ここ、ここに座れ」

明石はそのままカウンターの手前を叩いて明石を座らせる。人のよさそうな顔に口ひげを蓄え、多少出っ張った腹を叩きつつ店の亭主からコップ酒を受け取る赤松。

「別所！お前等もや」

明石の言葉にカウンターに席を占める別所達。

「この芸州じゃあ帝大出の坊主の倅が肩で風切つて歩いとる言う話は聞いたが、ずいぶんとおとなしいもんやなあ」

一口酒を口に含むと堅苦しい顔の中にめり込んでいるように見える大きな目で別所を見つめる。

「なあに、場所をわきまえているだけでしょう。まさか御大将の目的の一つが人材の一本釣りをは思っていないでしょうからね、こいつは」

別所の口から一本釣りと言う言葉を聞いても明石はまるで理解できなかった。

「お前さんの親分さんな。杯返してくれ言うとったわ。土下座はいらん、とつとと出て行って……なあ！」

そう言つてカウンターの後ろの座敷で議論に明け暮れていた部下達に赤松が目を向けると彼等は笑顔で頷いた。

「破門……なんでワシが？」

明石はなぜ自分にこれほどの好意を赤松が見せるのか理解できなかった。しかもそれが海軍への引き抜きと言うことらしいのでただ

呆然と立ち尽くす。

「兄貴……ですか？」

明石が考えてみると兄の差し金以外に考えが回らなかった。播磨コロニー群一の名刹福原寺の次男として生まれ、胡州帝国第一大学の文学部のインド哲学科に学んだころから兄、明石清園あかしせいおんとはかなりギクシヤクした関係だった。貴族に列し伯爵の爵位も持つ大本山の跡継ぎは兄に決まり、恩位の制で子爵の格を得てどこかの寺の婿養子になる運命だった明石はまるで当然のように時代が戦争に向かうことに巻き込まれていくことになった。

戦況の悪化で文系の大学生を対象とした学徒出陣で大学を早期卒業した明石はそのまま学徒兵対象の指揮官教育を受けると少尉として『決起攻撃隊』に配属となった。対消滅爆弾にコックピットをつけてそのまま敵艦隊に突入する。アステロイドベルトの基地でそのための訓練を部下の幼年兵達に施すだけの毎日。そして命令があればそのまま人間爆弾として敵艦隊に突撃する。そんな緊張感が自分を蝕んでいたことが分かったのは戦争が終わり福原寺に帰ってすぐのことだった。

敗戦国として多額の賠償金を課せられた胡州は役人になる基準を厳密化し、戦前ならば貴族であると言っただけでどんな無能な人間も採用したコロニー管理局などの役所にも明石は門前払いを食らった。ただのんびんだらりと居候を続けて3ヶ月。兄の視線、その嫁の視線が痛く突き刺さることと、常に死を感じながら訓練を続けた記憶に追い立てられるように明石は実家を飛び出した。昔から野球で鍛えただけあり腕力には自信があった。度胸もそれなりに自慢だった。魚住が言ったとおり、貴族の年金を元手に闇屋を始めた明石がいつの間にかヤクザの世界に入っていたのは自然な流れだった。

そんな自分にどうしてこの人のよさそうな猛将が興味を持つのか。そんなことを考えながら明石は目の前に並ぶ串カツに手を伸ばした。

串カツを喰え。注がれたままのビールを見ながら明石は思い返す。それは先の戦争がどうして始まり、胡州はどう敗れたかということだった。

それはたった一つの半径5 kmほどの遼州星系外アステロイドベルトの小惑星をめぐる領有権争いがきっかけだった。胡州帝国、ゲルパルト帝国、遼南帝国。この三国を中心とする枢軸陣営は地球を中心とする秩序を否定した新たな世界観を提唱すると言つ名目で全面戦争に突入した。

枢軸側の奇襲は一枚岩になれないアメリカを中心とした連合軍を寸断し、緒戦は枢軸側の圧倒的勝利で戦いは始まった。地球ではアフリカ、中央アジアや南米で枢軸側は破竹の勝利を続け、同調する東アジアにも食指を伸ばそうとしていた。この遼州星系でも第三惑星遼州の衛星、大麗を占領し、遼北、西モスレムを圧倒して戦い帰趨は決まるかに見えた。

だが連合国の足並みが揃いだすと広がりきった補給線を抱える枢軸側の進撃は鈍った。他の植民惑星の連合側での参戦が次々と報道されるにしたがつて無茶とも言える進撃は止まった。参戦を打診していた東和の中立宣言が進撃を一方的敗走に変えた。遼州星系第四惑星と二つの衛星、そして幾多のコロニー群で構成される胡州帝国は地球圏と遼南支援作戦で戦力を消耗、風前の灯と見えた。だが多数の戦死者を出し講和の道を探していた遼北人民共和国との電撃休戦と言う外交戦術で何とか直接攻撃を受けることは無く終戦を迎えた。

休戦協定で多くのアステロイドベルトの権益を失い、遼南東海州の領土を割譲され、多額の賠償金と貴族制中心の国家体制の変更を連合国に突きつけられ斜陽の大国の様相を呈していた。遼北との休戦協定の締結に尽力した外交官僚、さいおんじもとよし西園寺基義は軍部との対立で放

逐されていた中央政界に復帰、胡州四大公の筆頭の当主として次第に政治的発言権を強めていた。

一方、連合国との協定文書で軍部や官界を追われた下級貴族達は四大公で西園寺との確執が噂されていた烏丸頼盛を頼った。彼等は貴族だけが被選挙権を持つ枢密院での数を背景に西園寺が率いる庶民院に強い政治集団の『民派』との政治抗争を開始した。

亡国の体を見せた政治抗争が続く中。この両者の対立を収めたのが保科家春と言う個性だった。四大公の一つ大河内家の惣領に生まれながら、弟に家督を譲って枢密院での形ばかりの議員をしていた男は人材の枯渇した胡州の政界に颯爽と躍り出るようになった。西園寺家、烏丸家とも姻戚である彼は政争に走ろうとする巨頭二人に会談の場を設けて烏丸頼盛を首班とする挙国一致内閣を成立させ、自ら枢密院議長としてにらみを利かせた。

時に対戦中に皇帝が追われて枢軸を抜けた遼南共和国で内戦が勃発。同じく国家解体されていたゲルパルトなどの外惑星コロニーでの独立運動が活発化するとその中央に位置する胡州の戦略的価値は上昇、旧連合国もその安定化を促進するために賠償金の免除や積極的投資などにより復興が加速していた。経済的安定は一時的に政治抗争を中断させることになった。そして貴族の没落、経済人の発言権の拡大は自然と胡州を連合国が望んだ民主国家へと変貌させることになる。誰もがそう思っていた。

だが、そんなことは今の明石にはうそ臭いごまかしのように見えていた。

拝金主義で金で貴族の爵位を買いあさる成金。公然と賄賂で財を成す官僚貴族。上官の政治的立場でころころと態度を変える職業軍人。闇市で素人を食い物にする自分への言い訳の為に彼等の偽善を心の中で暴き立てて喜んでいる自分を嫌いながらもそう生きるしかないと覚悟して今まで生きていた。

そんな明石の隣で串カツを旨そうに頬張る赤松と言う男を明石はどう定義すれば良いのか悩んでいた。

赤松家は『西園寺の大番頭』と呼ばれる西園寺家臣団の筆頭の家柄である。そして海軍は現在は病氣療養中の大河内吉元前海軍大臣に代表される『民派』の牙城である。

「あのう……」

明石は恐る恐るコップ酒を傾ける將軍に声をかけた。

「なんや？……おう、少ししか食うとらんやないか！とにかく食え」

そう言つて赤松は串カツの乗った皿を明石に突きつける。

「金なら気にするな」

反対側に座る別所がそう言いながら串カツを啜える。隣の魚住はすでにコップにあふれるほど注がれていた日本酒を一息で空ける勢いで飲んでいる。

「ワシは……なんで？」

まだ状況の読みきれない明石は恐る恐る赤松に話しかけた。

「なんでやて？使える奴がふてくされて場末の居酒屋で俠客気取りで寝ておりますなんて別所が言うからな」

赤松はそう言うところコップ酒を進めた。明石が振り返ればそこには薄ら笑いを浮かべる別所の姿がある。

「騙したんか？」

口をついて出たのはそんな言葉だった。明石はそんなネガティブな言葉しか出てこない自分の今の語彙に引きつった笑みが浮かぶのを感じた。

「事務所を訪ねたんだが出ていると言う話だったからな。はじめから貴様に会いに行つたんだ」

別所の言葉にそれまで座敷の将校達と雑談を続けていた魚住が大きく頷いている。緑の髪黒田も真剣な顔で明石を見つめていた。

「それほどワシは立派な人間じゃ……」

「それや！」

赤松はそう言つて手を打った。そして喜びに打ち震えるように明石の手を握り締めて立ち上がる。

「自分が立派やなんて思うとる奴にろくな奴はおらん！自分のことがわからん奴は信用でけへん。ワシもそうや！この別所かて自分をただの人殺しや言うて、うちに来るのを嫌がつた末に引き抜いたんや。今、胡州にはそう言う謙虚な人材が足らん！どいつも天狗かアホしかおらん……」

つばを飛ばしてまくし立てる赤松に明石は苦笑いを浮かべた。明らかにそれが芝居だと言うことは見抜けない明石ではなかった。だが、その言葉は大げさにしろ本心から出ているだろうと言うことがわかつて少しばかりこの將軍を信用する気になり始めた。

「それでワシは何をすれば……」

そう言つてしまうと明石の前の將軍は言葉を止めてにんまりと笑

う。赤松が目で合図すると座敷の士官が手にしていたトランクを明石の前に置いた。

「まず格好から行こか」

赤松の言葉とともに開かれたトランクには胡州海軍の詰襟が入っていた。集まってきた将校に汚れたジャケットとズボンを剥ぎ取られ、そのまま中の新品の軍服に着替えさせられた。

『もうどうなつてもかまへん』

そんなやけっぱちな気分で体の力を抜いて士官達に着替えさせる明石。

「どや！」

着替えが終わって明石は階級章を見た。

「中尉？」

「すまんなあ、とりあえず一階級しか上げられなんだ。海軍のお堅い連中はホンマ使えんわ」

赤松はそう言うつと別所に目をやる。彼の手には冊子が握られている。

「とりあえず特戦訓練課程への推薦は済ませてある。貴様なら手加減せずに鍛え上げられるからな」

そう言うつ別所が何を言いたいのか明石にはわからなかった。

「特戦？ああ、アサルト・モジュールとか言うロボットに乗れ言う話ですか？それで鍛える……？」

「別所教導官殿の特別メニューが待ってるってことだ！俺や黒田も手伝うけどな」

魚住が満面の笑みを浮かべている。

「これもまたありやろか？」

自分に言い聞かせるように明石はつぶやいていた。

ほとんど成り行き任せのように明石は赤松の推薦で胡州海軍に復帰することになっていた。血なまぐさい思い出の残る芸州コロニー群から第四惑星胡州の第二衛星播州に移ると、胡州海軍名称『特戦』と呼ばれる人型戦闘兵器アサルト・モジュールの搭乗訓練が彼を待っていた。かつての特攻兵器の異様と思えるハードな訓練を経験した明石にはぬるく感じる訓練にも慣れて二ヶ月が経った。その頃には明らかに自分より年下の同期の訓練生と同じメニューだけをこなすのはプライドが許さず、休みには昇進試験のための勉強をすることにしていた。

その日も明石は本来は二人部屋だが別所の計らいで彼専用になっている部屋で国際軍事法のテキストを開きながら昼食までの時間を過ごそうとしていた。呼び鈴が来客を告げた。明石はテキストを閉じるとそのまま部屋の扉に向かう。

「よう！元氣か」

そう言って一升瓶を抱えて飛び込んできたのは魚住だった。後ろには別所、そして黒田の姿もある。

「おう、昇進試験向けの勉強か？さすが帝大出は頭の出来が違うねえ」

魚住はそのままベッドに腰掛けると日本酒の瓶の蓋を取る。

「魚住少佐！日中ですよ。それに勤務中じゃ……」

明石は無理に標準語でしゃべろうとしてアクセントがひっくり返る。その姿が面白いのか魚住はにんまりと笑うとコップを黒田から受け取ってそのまま豪快に注ぎ始めた。

「安心しろ、今日は俺達は非番だ」

そう言って隣の椅子に腰掛ける別所。黒田は魚住の隣に座り手にしたコップに魚住が酒を注ぐのを待っていた。

「基礎は出来ているみたいだから推薦した俺も鼻が高いよ。教官と

しても問題点も一度注意すればすぐに自分なりの回答を用意してくれているから教えがいがあるしな」

別所はそう言いながら黒田の酒を受ける。

「そないにおだてても何もでえへんぞ。それにワシは訓練生じゃ一番の階級で年も上じや。それなりに実力を示さな顔が立たんわ」

明石はそう言っただけでグラスを受け取る。この面子での飲み会が初めてでは無かったが、昼間に訓練所の寮で飲み交わすと言うのは初めてだった。黒田は手にしたスルメを順に配っている。

「何かあるんか？」

一息ついたというように黒田が酒を含むのを見て明石が口を開いた。

「ああ、実はお前には今の訓練メニューを切り上げてらうことになってな。それを伝えに来たんだ」

別所の突然の言葉に明石は困惑した。

「早すぎるんじゃない……」

そう言っただけでスルメを口にくわえる明石。だが、魚住や黒田の顔を見てもそれが冗談とは思えないものだった。

「わかってるよ。実機の宇宙空間でのバランスがようやく取れるようになったところで卒業。確かに自信があるほうがどうかしてるよな。だが、訓練用の97式と現在配備中の三式じゃあかなり機体の特性が違うんだ。はるかにOSが進歩してパイロットの負担を軽減するようになっているからな」

別所の言葉に明石は素直に頷いた。

「で、ワシの勤務先は？」

そこで別所達にはにんまりと笑う。

「第三艦隊第一遊撃機動部隊。隊長はコイツだ」

魚住はそう言っただけで別所の顔を見つめた。

「なんや、また下っ端か？」

椅子にどっかりと腰を下ろしてそう言つて笑いかける明石に余裕の表情を見せる別所。だが、すぐにその顔は厳しいものとなった。

「そう言ふなよ。現在お前さんの階級も大尉へ昇格するように上申してやったんだ。それに今度発足する部隊は赤松の御大将の直参になる部隊だからな」

別所の言葉に明石はようやくこの異動の裏にある政治的な意味に気づいた。

遼南内戦が結果的にはムジャンタ王朝の復活と言う結末を迎えた遼州系。そんな中でこの一月で胡州の株式市場は大暴落を開始していた。予定では来月にも凍結を解除すると地球諸国が公言していた胡州の在地球凍結資産。それに対して遼南の安定が実現した今、アメリカをはじめとする地球諸国は民主化が進んでいないとして首脳の非公式な見解として無期延期を示唆する発言が続いていた。そして現在の保守的な烏丸政権と対立して比較的地球に対しては穏健な姿勢をとっている西園寺基義が外務省批判の論文を発表したのは昨日の朝刊だった。

「軍事行動は政治の一活動に過ぎないと言つたのは『戦争論』を書いたクラウゼビッツと言うプロシアの参謀だが、ほんまやのう」

そう言つて明石は書庫を眺める。元々インド哲学を専攻して僧侶になることが自分の一生だと思つていた明石は好んで哲学書や古典を読む習慣のある男だった。並んでいる本も実用書や小説よりも哲学書が多くを占めている。

「さすが帝大……プロシアなんて言葉は俺からは出てこないわ」

「『帝大』『帝大』って……魚住。ワレは同じことしか言えんのか？」

酒を煽つて上機嫌な魚住ににらみを効かせる明石。だが、別所は

冷静に明石を見つめていた。

「そうだな。赤松准将の直属になると言うことはひいては西園寺公のシンパになると言うことだ」

「これも西園寺卿が主張しているところの貴族制の弊害と言うっちゃな」

別所の言葉に少し意地悪く答えた明石だが、別所はそれを否定するつもりは毛頭ないように見えた。

「しばらくは帝都勤務になる。当然陸軍の連中と街で出会っわけだ」

ほのめかすように話す別所。だが、陸軍と言う言葉だけで事足りた。陸軍は戦争中には過激分子が西園寺家に対してテロを行うなど西園寺家、そしてその被官である赤松家にとっては宿敵とも言える関係にあった。現在では四大公家の嵯峨家を西園寺基義の弟嵯峨惟基が継いでおり、その腹心である醍醐文隆少将が西園寺卿と懇意と言うことで過激派を押さえ込んではいるが、海軍と陸軍の間の怨恨が消えたわけでは無かった。

「ワシはそれほど手は早くないで。闇屋の掟は喧嘩はできるだけ避けるのが決まりや」

そう言って笑う明石。だが別所は笑う様子は無かった。

「タコ。まあコイツは御大将のお気に入りだからな気になることが多いんだろうよ」

「魚住、タコってワシのことか？」

にらみつけければ魚住は笑いながら酒を煽る。黒田ははらしながら二人を見つめている。

「なあに、帝都に行けばわかるさ。今のこの国がどういう状況なのかな」

そう言って静かにコップ酒を煽る別所に明石は一抹の不安を覚えた。

遼州星系第四惑星『胡州』、その首都である帝都。明石は荷物を地面に置くと懐かしい赤い空を見上げた。今から14年前に帝都大学を早期終業し出陣して以来の帝都は明石には活気に満ちているように見えた。芸州や播州のような鬱屈した敗戦国の雰囲気はそこには微塵も残っていないかった。軍の施設から公用車呼んだ別所は明石をそこに押し込みそのまま黒田に車を運転させて大通りを走る。

「さすがに帝都やな。人もぎょうさんおるわ」

後部座席の窓から街を眺める明石。その前では貴賤、老若、男女を問わず忙しく歩き回る帝都の人々の姿が見えた。

「タコ、これからどこに行くことになると思う？」

いたずらをする子供のような顔で魚住が話しかけてくる。その姿に呆れたような表情で助手席から顔を覗かせる別所。

「なんや、海軍省にでも出頭するんちゃうか？」

明石の言葉に呆れたような顔をする魚住。

「ならなんでタコの私物をトランクに積んだんだ？海軍省にそのまま住み着くつもりか？」

そんな魚住の言葉を聞いて噴出す運転中の黒田。

「おい、監物。言っくんじゃねえぞ！面白くないからな！」

だが、車が帝都の中心部ではなくそのまま郊外の屋敷町に入った時点で明石には疑問が頭をもたげた。

「この辺りは近衛師団の先任区域で……でも……近衛の連中は陸軍の管轄や思うとったけど……」

「ぶふっ」

ここに來て我慢できずに黒田が声に出して噴出す。

「気になるのう。どこに向かっとなる？」

さすがにおもちゃにされるのもしゃくで明石は助手席の別所のシートを小突いた。

「お前のことを気に入った殿上貴族の方が貴様をボディガード代わりに下宿させたいんだと。興味深い話だろ？」

別所の言葉で明石の不審は一気に晴れた。この豪勢な貴族の邸宅が続く街。それでも今だ西園寺派、烏丸派の過激派のテロが新聞記事に載らない日は無い状況で明石に一番似合う仕事は用心棒だと自分でも納得できた。

「じゃあ、赤松家か？それとも西園寺……」

「馬鹿だねえ。西園寺家はタコみたいな無粋な輩には居場所がねえよ。赤松様のお屋敷の方だ」

魚住の言葉で行き先が分かると納得して明石はまた外の景色を眺めた。屋敷町らしく警官の姿が多い、人通りも軍港の周りの歓楽街とは違い閑散としている。ただ高級乗用車が行き来する様はこの国の政治が切羽詰った状況にあることを露呈していた。

「裏口から入るからな。黒田、その門をくぐれ」

別所の言葉で黒田がハンドルを切る。車の存在を察知して自動的に裏門と呼ぶには大きすぎる門が自動的に開く。

赤松家の裏門。代々西園寺家の傍に仕える名門らしく、裏門とは言え大きな館の玄関前には車止めがあり、庭は手が行き届いて新鮮な緑を明石達に見せた。

「よし、そこでいい」

そのまま車を横付けするように言うと別所は真っ先に車を降りた。

続いて降り立った明石が母屋に目を向けると殿上貴族の邸宅らしい裏門の大きな柱の根元に海軍幼年学校の制服を着た少年が立っていた。

「あれは？」

明石が魚住を見るとにんまりと笑う。

「直満嬢ちゃん！^{なおみつ}」

黒田が叫ぶが、直満と呼ばれた少女はそのまま明石をじっと見た後そのまま走って屋敷の奥に消えていった。

「嬢ちゃん？」

黒田の言葉に明石は不自然さを感じた。その表情が面白かったらしく魚住が含み笑いをしている。

「赤松准将の上のお嬢さんだ」

「でも直満やぞ！変やろ」

明石の顔を見ると別所は困ったような顔をした。

「それじゃあ先代の赤松家の当主は？」

そう言われて明石は初めて理解した。赤松家は海軍の要職を世襲する武家の名門であるが、先代の時代は男子の相続者が居らず長女の虎満^{とらみつ}が家督を相続したことは有名な話だった。『播磨の虎』と呼ばれた彼女は第三艦隊司令として先の大戦で初期の電撃的勝利を手中に入れた猛将として知られていた。

「妙な家じゃのう……」

そう言いながらトランクを開けた明石が着替えなどの最低限の荷物を取り出して裏口に立つとそこには直満を従えてすくつと立っている冷たい感じのある女性が明石を見つめていた。

別所、魚住、黒田達が静かに目礼をする。

「あなたが明石大尉ですね。確かに強そうに見えますわね」

紫の小紋。どちらかと言えば落ち着いた色調の着物にその長い髪

と目鼻立ちがはつきりとした気の強そうな表情が明石の視線を奪う。

「赤松の親父の奥方様、貴子様だ」

別所に耳打ちされて頭を下げる明石。それを見てにっこりと笑う姿に明石は緊張した手足の自由を取り戻した。

「直満！怖くないでしょ。いずれはあなたはこの家を離れることになるのですよ」

そう言って貴子が娘の頭を撫でる。直満は母が傍にいると言うこともあり、再び禿頭の大男である明石を見上げた。

「この人……お坊さん？」

直満の言葉に別所と魚住が目を合わせる。そして貴子も口に手を当てそれまでの楚々とした様子をひっくり返すような高らかな笑い声を上げた。

「そうよ、この人はお坊さんが本職なのよ。そうですわよね、別所君」

「ええ、コイツは坊さんになり損ねて今は兵隊をやっていますが、いずれはどこかの住職になる予定ですから」

別所の言葉で自分の言ったことが正しいと分かると、初めて直満はうれしそうな瞳で明石を見上げてきた。

明石は頭を掻きながらどうにも彼を恐がっている直満が近づくのを見ていた。そしてその少女が西軍幼年学校の最上級生である襟章をつけているのが分かった。

「お嬢、幼年学校に通つとるのか？」

荷物を担ぎながら明石は直満を撫でようとするがそのまま直満は後ろに下がってしまう。

「嫌われたもんだなあ、明石」

そう言うつと魚住がそのまま裏口に腰掛ける。

「今日は少し料理にもこだわりましたのよ。新三郎さんから鯛の良いものが入りましたから」

嵯峨家当主嵯峨惟基がまだ西園寺家の部屋住みだったころの西園寺新三郎の名を聞いて明石はここが政治の中枢帝都であることを思い出した。そうしてみると回りの気配が変わる。庭に続く道には衛兵がライフルを抱えて立つており、外にも私服の警備員と思われる人物が立っていたことも思い出される。

「それは結構ですね。明石！とつと荷物を片付けるぞ！」

別所の言葉に直満と向き合っていた明石は気がついたように靴を脱いで玄關に上がる。女中が手ぬぐいを差し出すが、魚住は笑ってそれを返した。

「それじゃあ、明石さん。こちらですよ」

そう言つて貴子は明石を見つめた。それに続く魚住と黒田。

「ああ、明石。俺は少し大将と用があるから」

別所がそのまま赤松と会うために庭沿いの縁側に向かう。貴子は建物の奥へと明石達をいざなう。

「それにしても使用人の数が少ないですね」

ポツリと明石がつぶやく。微笑んで振り向く貴子。

「そうですね、お寺さんと違って雇える使用人の数も限度があり

ますから。それに最近は領邦からの収入も減っておりますから仕方ありませんわ」

貴子はそのまま大屋根の屋敷に向かう。そこは本来は使用人の寝起きした部屋のようなものだが、人の気配はまるで無かった。

「どこでも好きな部屋を使っていたいて結構です。ああ、奥の部屋は運転手の多田と庭師の田中が使っておりますからそれ以外ならどの部屋でも」

笑う貴子を見た明石は手前の一室のふすまを開けた。掃除は行き届いているが、もう何年も使った様子が感じられなかった。

「もしよろしければ畳を……」

「いや、大丈夫なんちゃいますか？」

そのまま部屋に踏み込む明石。だが突然ずぶりと明石の右足を畳が飲み込んだ。

「あのなあ、人が住んでないと家は腐るんだぞ。貴子様、畳のほうお願いします」

苦笑いを浮かべながら魚住が貴子に頭を下げる。思わず噴出して笑いをこらえていた貴子も頷きながら困った顔の明石を見つめた。

「黒田。助けてやれよ」

魚住の言葉だが、体重がほとんど変わらない黒田が踏み込めば二重遭難になると思って首を振る。仕方なく明石は自力で踏み抜いた畳から抜け出し、そのまま貴子達が立っている廊下まで出来るだけ接地面積を増やすように四つんばいで歩み寄ってきた。

「ほんま……勘弁してえや」

畳の上で奇妙に貼っている禿頭の大男を見て付いてきていた直満が笑う。

「嬢ちゃん。よろしゅうな」

明石の言葉にようやく笑顔になって直満が頷いた。

赤松の屋敷に住み込むようになって明石は自分がかかなり丸くなったのを感じてきていた。

用心棒と思っていた赤松家の暮らしたが、元々先の大戦での英雄である赤松忠満准将の用心棒を買って出る士官は海軍に数知れずいた。おかげで明石は週に三度の別所達を仮想敵としてのアサルト・モジュール3式の実機訓練の他にも帝大法科の講義を聴講し、海軍大での佐官任官試験の為に必要な座学の単位を着実にためる毎日を送ることができた。

そうして軍に戻って一年。あつという間に時間が過ぎていくのを感じていた。だが回りを見回せば、時代がきな臭くなるのを肌を感じる人が多い日々だった。烏丸内閣と野党指導者西園寺基義は正面を切つての政争に動くことは無かった。実に奇妙な個性がそれを阻んでいた。

保科家春と言う枢密院議長を務める人物、彼の弟で西園寺の後見とも言えた大河内元吉が病に倒れていることで西園寺派は本格的な倒閣運動を行なうことも無く状況を静観していた。それが遼南で人民軍の内戦での英雄として担ぎ上げられた嵯峨惟基がクーデターで遼南の実権を握ったと言う状況が状況の緊迫を煽ることとなった。

烏丸頼盛は西園寺基義の弟の遼州皇帝即位に脅威を感じてこれまで対地球と言う意味で封印していた貴族制度の維持に関する法案を矢継ぎ早に提案してはそれに反対する西園寺基義の影響下の議會を空転させることになった。そのたびに議長の保科家春が間に入り調停を行うと言う流れが毎月のように繰り返された。

そんな決まりきった政治のルーチンワークが繰り返される度に明石は次第に周りの軍関係の人間の態度が硬化していくのを感じていた。

赤松家には西園寺派の海軍将校が絶えず出入りし、陸軍でも西園

寺家に近い醍醐將軍のシンパが出入りすることも多くなっていた。別所達と連れ立って町に飲みに出かければ喧嘩をしている将校は西園寺派か烏丸派と言うのが普通の話だった。店もそれを知ってか、赤い提灯を下げている店が烏丸派で白い暖簾を下げているのが西園寺派と店まで分けるような根深い対立に波及していた。

そんなある日のこと、非番で部屋で法律書と格闘していた明石の部屋のふすまを許しも得ずに開くものがいた。

「おい、聞いたか？」

それは魚住だった。明石はめんどくさいと言うように振り返り、浴衣の襟をそろえて難しそうな面をしている魚住を見上げる。小柄な魚住とはいえ、机の前の座布団に正座している明石よりはるかに高い。だが、そのまま魚住は明石の視線に目を合わせるようにして息を整えた。

「なんや、騒ぐだけ騒いでだんまりかいな」

明石の言葉を無視して呼吸を整える魚住。

「いいか、落ち着いて聞けよ」

「それよりお前が落ち着かんかい」

明石の皮肉に口元を緩める魚住。

「遼州の……政軍同盟が発足した」

魚住の言葉に明石はただ意味が分からないと言う顔をして見せるしかなかった。

「魚の字。同盟？どこどこが同盟を結んだんや？遼州つてもいろいろ国があるやろ……それに状況がつかめんのやったらテレビを見たほうがましやん」

そう明石に言われて気がついたように頭を掻く魚住。

「まあ、先か。一週間前、嵯峨の大公が遼南皇帝に即位しただろ？」

「兄貴の西園寺公が烏丸首相に即位式に出るなって噛み付いてもめた件か」

明石はそこまで聞いて嫌な予感に包まれた。西園寺兄弟。兄西園

寺基義と弟嵯峨惟基は犬猿の仲とされていた。西園寺の家中が基義と一蓮托生と覚悟しているのに嵯峨家家中は筆頭の被官、地下家の佐賀高家は烏丸派でも有力な勢力を保ち、その弟で分家の醍醐文隆は西園寺基義の陸軍における橋頭堡のような立場だった。嵯峨家の領邦は胡州の人口の半分を占める大身である、その帰趨が大きな意味を持っていることは明石も十分承知していた。

「言い出したのは遼南皇帝嵯峨……今はムジャンタ・ラスコー陛下だな。そして内戦中に懇意だった遼北人民共和国も加入の宣言をした。さらに東和共和国まで発足宣言を出しる。そしてそのまま三首脳の連盟の声明で現在遼州星系の各国に参加を要請中だ。大麗と西モスレムは現在事務手続き中、ベルルカンや南方諸島もほとんどが加盟を公言しているぞ」

ようやく座布団を取って腰を落ち着けた魚住を明石はめんどくさそうに見つめた。

「なんや、みんな仲良くってことやんか？ええこつちゃ」

そう言って再び机に向かおうとする明石の肩を叩く魚住。

「馬鹿野郎！そんな単純な話じゃないぞ！烏丸内閣は加盟に向けての法制度の整備に動き出した」

「だから良いことやん」

「いいから、聞けよ。烏丸首相の狙いは地球から押し付けられた身分制度改革の白紙撤回だ。同盟に参加すれば地球から押し付けられた約束は反故にしてもかまわないと言う世論が形成される。そうなれば……」

「俺達は失業だな」

そう言って入ってきたのは別所だった。珍しく気を利かせたように一升瓶を抱えた黒田が続いてくる。

「なんでや？みんな仲良う遼州同盟。仲良きことは美しきかなって言うやん」

明石も本気でそうは思っていないがつい不機嫌にそうつぶやいていた。

「再び敗戦前の貴族の栄光を手に入れようって奴が旗を振っているとしてもか？無理だな。それまで下級貴族が担ってきた官僚制度はすでに平民に開かれている。軍もそうだ。もはや貴族の特権は年金

と一部の名誉職の優先権くらいだ。どちらも国家の益になると言うより無駄な出費と言った方が的を得ている。烏丸政権の政策では同盟のお荷物になるのが目に見えているぜ……それ以前に門前払いで『やはり胡州は孤高の大国だ』とか変な自画自賛がネットで駆け回るんじゃないか？」

そう言いながら別所が腰を落ち着ける。着いてきた黒田が茶碗を配る。そして酒瓶を受け取った魚住がそれを注いで回る。

「その中心が問題やな……その嵯峨って男はどうなん？」

明石はそう言うのと別所を見つめた。二年前まで行なわれていた遼南内戦中に別所は嵯峨の動向を探るために遼南に潜入した実績があることは話に聞いていた。

「わからん」

それだけ言うのと別所は酒を煽った。明らかに理知的な医師の資格を持つ別所らしくないところを見つけて明石はこの冷静な男が焦りを隠せないで見抜いた。

「しかし……嵯峨大佐は本来胡州の軍人だ。それなのになんでそれなら胡州を真つ先に誘わないのかね。烏丸派の貴族の復興が不可能で兄貴も信用が置けないなら同盟参加を呼びかけたら烏丸さんはほいはい付いてくるぞ。しかも西園寺卿は頭の切れる人だ。今胡州に楔を打てば遼南の政治的地位は高まるだろうしな……まあ胡州は加盟を巡り大惨事になることは必至だが」

魚住の言葉に黒田も頷いた。権力基盤が脆弱な遼南朝廷にとって外交での成果は政権の、いや国家の存亡にかかわる重大事件のはずである。胡州に同盟参加を持ちかけたとすれば西園寺派が議会を動かして時期尚早で拒否するにしても、烏丸派が治安部隊でも動かして議会を先に制圧して加盟を強行したにしても遼南は不安定な胡州を批判しながら一気に遼州の主導権を握ることができる可能性も残されているはずだった。

明石はしばらく目をつぶり黙り込んだあと、頭の中で物事を整理した。

「単純に考えようや、どうせ胡州の首相は一人しか椅子が無い。そこに今烏丸頼盛言う人が座つとるが、それより実力のある西園寺基義言う人がそこに座りたいと思つとる。ならどうなる？」

明石は嚙んで含めるように魚住に言った。そしてしばらく考えた後、魚住は明らかに沈痛な面持ちへとその表情を変えた。

「今は無理だな……」と言うかどちらも動けないだろう。保科家春と言う御仁がいる。西園寺派でも醍醐さん陸軍の一派は前の大戦の休戦協定で助けられた恩がある。さらに問題なのは大河内家の被官連だ。大河内卿が療養中の今、事を起こしても足並みがそろわないことになりかねない」

別所の言葉にじつと耳を澄ます黒田。部屋の雰囲気が暗くなる。すでに明石達が政治に口を出せばろくなことにはならないと自覚していた。だが黙っていることができるほどおとなしくはなれないと思うと明石は禿げ頭を叩く。

「保科家春。面白そうな爺さんやのう」

そう言つて笑う明石を見て、不意に別所の顔がまじめになった。

「それなら会つて見るか？」

突然の話に魚住が噴出す。しばらく咳き込み動けなくなる彼の背中を明石がさすった。

「なんでそうなる！ 枢密院議長だぞ！ 相手は。そんな急に……」

「別に今すぐ会うなんて言っていないぞ。ただ、赤松の親父のコネを使えば会えないことも無いという話だ。まあじっくり部屋でも借りてとは行かないだろうがな」

そう言つて別所は酒を口に含むようにして進めた。

「問題の本質を知つていそうな人間に会う。それええなあ。うん、実にええことや」

明石はひざを叩きながら頷く。その笑顔に触発されたように黒田も珍しくコップのそこに少しだけたらした酒を舐めた。そしてすぐに顔が赤くなる様は非常に滑稽で今度は明石が酒を噴出しそうになった。

「いつ頃会える？ 出来ればワシ等四人で会つのが一番なんやけど」
「そう急くな。あの方もなかなか忙しい方だ。明日で枢密院の通

常会議は閉会だ。その後は陸軍関係の視察の予定が入っていたはずだから……その後は、どれも私的な勉強会か。保科さんらしいな」

胸のポケットから取り出した携帯端末をにらむ別所。

「おい、はじめからそれが狙いか？俺達を誘ってお偉いさんに意見する。まあ楽しみつつ言えば楽しみだけだな」

魚住の言葉を無視して端末のモニターをいじる別所。

「辞めとけ。昔からコイツはひねくれとった。いつだって勝負球はこちらの読みの裏をかいてくる」

そう言う明石を情けない目で見つめる別所。だが、明石は自分の口に笑みが浮かんでいるのを自覚していた。

「そうだな、来週の金曜の午後は海軍省の視察だそうだ。そこで非公式な懇談会が催されると言う話だからそのときに良い席を取るように手配しとくか」

別所の手配の早さに舌を巻きながら見つめる明石。赤ら顔の黒田を見るとつい面白くなってそのグラスに酒を注いってしまった。

「それじゃあ、今日は飲むか！」

そう言って一升瓶に手を伸ばす別所を見て明石は立ち上がった。

「どうした？便所か？」

魚住の言葉に首を振る。

「つまみが欲しいなあ思うてな。ちと貴子さんに頼んでくるわ……！って」

部屋の戸を開けるとそこには少女が立っていた。手にした盆にはエイヒレと四つの酢の物の小鉢が入っている。それは赤松邸のマスコットである赤松直満だった。

「お嬢。気いきくやないか」

「お母様が持っていていけって」

赤松直満はにつこりと笑うと巨漢の明石に盆を渡した。

「有難うな！お嬢さん！」

魚住が叫ぶのを聞くと顔を赤らめて直満は廊下を走って消えていった。

「つまみもある。酒もある。じゃあ飲むしかないな」

そんな別所の言葉に三人は頷くとそれぞれ自分の小鉢と皿に手を伸ばした。

胡州帝国海軍省の地下の会議室。主に爆撃などに備えてのシェルターの機能も兼ねているこの部屋に集まった若手の將校達の顔ぶれに明石は圧倒されていた。

西園寺派でもその側近の赤松准将の直属の部下であると言うことで、明石達はこの『私的な』と冠されているがどう見ても政治的な色に染まりそうな会議の演壇の前、最前列に陣取ることが出来た。海軍では勢いの無い烏丸派は入り口のあたりで席にあぶれて、立つたままこの胡州の重鎮の言葉を聞こうと背伸びまでしていた。

「おう、ずいぶんと元気なのがいるじゃないか」

決して狭くは無い会議室に現れた白髪のお紳士は熱気で蒸し暑さすら感じる会議室を見渡すとその小柄な体に似合わない大声を響かせた。下座で拍手が起きると、それは次第に伝染して部屋を覆いくした。

「お、福原寺の坊主がいるのか？どうした、今日は俺の通夜でもやるのか？」

明石の剃り上げられた頭を見てお紳士、保科家春一代公爵は高らかに独特の濁りがある声で笑う。周りのSPが明石をにらみつけているのを見て、明石は少しばかり緊張するのを感じていた。

「静粛にしたまえ！」

ざわめく若手の海軍將校達を前に一人の海軍准将の襟章が目につく狐目の男が叫んだ。明石は周りの士官達を眺めてみた。明らかに明石の周りの西園寺派の士官達はその海軍准将、清原和人きよはらひと参謀局長を敵意の目で見ているのが分かった。

保科家春の海軍での活動をすべて掌握していると言うこの高級將校の噂は明石も聞いていた。どちらかと言えば事務屋として定評のある清原准将は総じて前線を支える指揮官の進路に進む將校には甚だ評判が悪かった。先の大戦で保科内閣による休戦条約締結までの

物資管理を徹底して休戦まで戦線を維持できる補給計画の立案を行うなど、切れ者であることは誰もが認めたが、その才能を鼻にかけた人柄は海軍幹部からも疎まれるところがあった。

席についてマイクを握ろうとする保科の前に置かれた水をコップに注ぎ差し出す清原。

「まるで、召使だな」

明石の隣に座っていた魚住がわざと壇上の保科と清原に聞こえるように叫ぶ。西園寺派の将校達が失笑を清原に与える。だが、まるで気にする風でもなく清原はそのままSP達の後ろに陣取って会議室に顔をそろえている若手の海軍将校達をにらみつけた。その切れ長の目ににらまれて、それまで笑っていた士官達が沈黙する。

「どうやら、この部屋には人を見た目で判断する人間がいるようだな。実に残念だ」

保科の第一声に後ろの立見席から拍手が起きる。前列に陣取る西園寺派の士官達がその拍手の方を振り返るのを見て保科は興味深げに台に立ててあったマイクを手に取り話を続けた。

「諸君の苦心については私も理解しているつもりだ。兵士の士気は下がるばかり、装備は老朽化し、そして自分の給料も上がる見込みが無い。まあ、私も給金は今年も国庫に返上になりそうだがな」

その言葉に会議室の中央から後ろの士官達が拍手をする。大河内派と嵯峨派の士官も当然この議場には入場しているはずで、明石はこの状況を楽しむようにして壇上から見下ろしている小男がどういう持論を展開するのか確かめようとその大きな目玉で演台の上を見据えていた。

「なんでこんな老人にこれほどの若い将来ある人達から声がかかるのかは分からないが、とりあえず私の発言には期待しないで欲しい。今の胡州の窮状は私が何かを言って変わる状況じゃないんだ」

そう言い切って保科は聴衆である青年士官達を見回した。前列を占める西園寺派の将校は頷き、後ろに立ち並ぶ烏丸派の将校は言葉を飲み込む。

「だが、諸君等に希望を託す者として正直この海軍の状況は情けないものだと言わせてもらおう。国の存亡にかかわる状況で派閥争いにうつつを抜かす輩がこうして若者を先導すると言うのは非常に嘆かわしいものだ」

「そうだ！」

立見席から声が飛んだ、すぐに前列からはその声に向けて野次が飛ぶ。そのまま会議室は騒然とした。振り向いて野次馬のような笑みを浮かべている魚住がいる。今にもその野次合戦に参加しそうな彼を何とか明石は押しとどめて座らせた。

最前列でのこんなやり取りに背後に下がっていた清原がマイクに近づいてそれに手を伸ばす。

「止めたまえ！見苦しい！君等には誇りが無いのか！」

清原が叫ぶ。さらに西園寺派の将校が壇上の清原に野次を飛ばし、それに同調するように大河内派や嵯峨派の将校からも野次が飛んだ。「黙りたまえ！君達は……」

そのまま保科の隣でマイクを握り締める清原を老人は押し止めた。そして黙り込む。しばらく野次の応酬が繰り広げられたが、黙ってその様子を見つめている保科の姿に次第に騒ぎは静まっていく。

「君達は何をしたいんだね。内戦かね、それともクーデターか？君達には義務があるはずだ。一つはこの国を守ること、そしてこの国のすべての住民の安全を確保すること。これが第一の役目でないと

言うのならばここを去ってもらったほうが良い。出来ればそのまま軍から身を引いてもらいたい」

その言葉に数名の西園寺派の将校が席を立った。立見席でも数名が失望した目をして廊下へ消えていく。

「若いのは良いな。実に正直だ。枢密院の石頭の貴族達につめの垢を煎じて飲ませたいくらいだ」

乾いた笑いが聴衆に広がる。明石はそこで保科と言うこの国の力リスマの瞳が光るのを見た。

「今の危機的な状況の中。自己の保身の為の貴族制度の維持。これを本願にしている政治家がいる。そして軍内部にもその勢力は多い」

保科はそう言うて後ろに立っている清原の顔を見る。表情を変えない清原を一瞥してそのままマイクを握る。まばらな拍手が前列に広がる。魚住や黒田もそんな西園寺派の将校達と一緒に拍手をしていた。その様子に呆れたように明石はただ目を壇上の老人に向けた。「だが貴族制なんていうものは所詮システムでしかない。それを優先して無益に他国との関係を悪化させるのは正直無駄な努力だ」

「そうだ！」

今度は前列から声が飛んだ。立見席で再び囁きあう声が響くが保科老人は話を止めることが無かった。

「どんな社会も同じ地位に同じ人間がいれば腐敗するものだ。常に流動する社会が理想だと私は思っている。だが、それは難しい。特にわが国の貴族制度がそれを阻害していることは間違いない」

後ろの囁き声がさらに増すのが最前列の明石からも分かった。

「ただここで留意しなければならないのはわが国は現在孤立していると言う事実だ。既存の制度を完全に破壊して新しい制度を構築する。言葉で言うのは簡単だが、実際それを実行しようとすれば長期の政治的空白を生むことになる」

その言葉で今度は前列の西園寺派の将校が囁きあいをはじめめる。だが、明石はこれまでの話し方が明らかに両派の将校を自分の話に

集中させるための前振りだと思って次の言葉をつむごうとする保科の黒い目を見つめていた。

壇上で保科老人は待つていた。壇上でマイクを手にも一言も発せずざわめく聴衆を眺めていた。

西園寺派と烏丸派の将校達はしばらく仲間内で話を続けていたが、現在この国を動かしている老人の沈黙を察して次第に声を潜めていった。

「現在。首相は烏丸君が勤めている。彼は実に才気あふれる人材だ」

その言葉に再び部屋が仲間で議論しあう状況に包まれる。だが、再び沈黙した老人の言葉を聞きだそうとすぐに静まった。

「だが、あえて言えば彼は正直度量が小さい。身内のことにばかり執着しすぎる」

「気が小さいの間違いじゃないですか！」

明石の隣の魚住が叫ぶが、そこに奥で立っている清原が切れ長の目から視線を魚住に向ける。身を乗り出して睨み返す魚住。だが再び保科老人は黙り込んだ。

「西園寺君は野党をまとめているが、彼の野心は私も鼻につくところだ。それが才能の裏書のあるものだとしてもどうにも胡散臭いところがある」

そう言つてまた沈黙する老人。彼の話術にはまったように聴衆の若手将校はじつと壇上の老人の言葉を聞くことに決めたように黙り込んだ。明石はそれでこの人物が只者ではないことを実感していた。「野心に見合う実力のある人物を登用する。私は常にそう烏丸君に頼んではいるが、烏丸君はどうもそれを聞くつもりは無いようだ。少しは度量を見せると言っているのだがね」

その言葉に西園寺派の将校は部屋の後ろに立って話を聞いている烏丸派の将校達に振り向く。

「だが、これでは政局は混乱するばかりだ。西園寺君の弟君の武陽

帝、君達が言うとしたら嵯峨惟基陸軍大佐だが彼は的確に遼州諸国をまとめて遼州同盟を立ち上げた。東和、遼北、大麗、西モスレム加盟を急ぐ動きが我々の頭越しに行われている」

最新のニュース。多くの士官達も同じようにこの国際政治の動きに目を向けているところだった。そして、その動きを左右しかねない胡州の重鎮であるこの老人の言葉に耳を貸そうとしていた。

「あいにく彼は胡州に同盟加入の話を持ってきてはいない。実に残念な話だ」

それまで黙っていた聴衆が再びざわめき始める。同盟設立に向けて水面下で活発な動きがあると知っていた将校達だが、その動きが胡州に及んでいないとこの国の指導的立場の人間の言葉で確認するとその事実はそれぞれの思惑や立場に変換されさまざまな言葉で語られ始めた。

明石は隣の魚住が黒田に耳打ちしているのを見たが、気にせず再び壇上の老人を見た。

「胡州は遼州独立の旗を掲げた伝統がある国だ。私はそう誇りに思っている。そして今、遼州が大きな変革期にあると言うのに、そこから突き放された。これは実に残念なことだと言わざるを得ない」

会議室の後ろの立見席の雑談がさらに大きくなる。同盟加盟により地球の脅威を押さえ込みたい、そして地球から課せられた貴族制の廃止等の改革案を反故にしたい烏丸派。ざわめきの原因を想像しながら明石はただ黙っていた。

「しかし、我々にも問題があると言うことがわかるな、ここに立ってみると。君達は同じ派閥の言葉で話すことしか出来ないほど主義主張に凝り固まっている。実に残念だ」

そう言う安保科老人はマイクを置いてしまった。驚いて後ろの清原が歩み寄る。

老人は入り口で清原に止められて小声で話し合い始めた。明らかに焦ってまくし立てる清原の声にただ頷く安保科老人。

「あなたしかいないんですよ！国をまとめられるのは！」

部屋の中央の嵯峨派や大河内派の士官の一人が叫ぶ。手拍子が始まる。それははじめは中間的な両派の士官だけのものだったが、次第に前列に陣取る西園寺派や立見席の烏丸派まで広がった。

それを見て照れたように頭を掻くと保科老人は再び演台に戻った。

「それなら君達が態度で示せ！」

そう叫んで保科老人はSPを連れて退出した。それに続き明石達を一にらみして立ち去る清原准将。会議室は騒然とした。

「出るぞ」

それまで一人黙り込んでいた別所がそう言った。明石も立ち上がり、あちこちで怒鳴りあいを始めた若手将校達を押しつけてそのまま会議室を出た。

「なんだよ。結局ただの説教じゃないか」

魚住の言葉に黒田も頷く。

「そうやるか？少なくとも同盟の話が胡州抜きで進んだら言うのが分かっただけで収穫やと……」

そんなことを言っている明石の視界に一人の陸軍大佐の姿が目に入った。

「安東大佐？」

別所が足を止める。

安東貞盛。彼は赤いムカデの描かれた胡州軍制式アサルト・モジュール97式を駆り、奇襲と伏兵で進出を急ぐ連合軍をアステロイドベルトで翻弄した。その戦いは『胡州の侍』と呼ばれて、終戦後は彼の存在を不快に思った連合国への配慮のため事実上の軟禁生活を送っていた男だった。

その伝説の名将が今目の前で保科老人と清原准将と雑談をしている。

「動くな。これは」

それだけ言っていると別所はその光景を眺めている明石のわき腹をつついた。

「どういうこっちゃ？安東はんは……」

「先月、烏丸首相は敗戦時の追放リストの見直しを行った。その中

に安東さんの名前もあつたと言っただけのことだ」

そう言う別所の声が震えているのを明石は聞き逃さなかった。

「これで陸軍の烏丸派の連中の意気が上がるなあ」

魚住はそう言いながらちらちらと安東大佐のいた辺りを振り返る。

黒田もそれにならった。

「なに、軟禁されていたなまくらなど私達の敵じゃないはずだ」

自信をこめた声で黒田がそう言った。

「あれやな、保科はんももう現状は止められへんいうのがよう分かったわ。胡州はいつ火が入ってもおかしくない火薬庫になった。そう言うことやな」

明石の言葉に悲しげな表情で振り返った別所。そして彼はその言葉に頷くことしかできなかった。

海軍省の建物を出るとすでに胡州の赤い空は次第に夜の紫に染め上げられようとしていた。

「そうだ、明石。付きあえ」

突然の別所の言葉に明石は当惑した。だがそれを別所に悟られるのが悔しくて向きになって彼を見下ろした。

「ええで。だがこいつ等の足はどないすんねん」

そう言つて魚住と黒田を見やる。別所の車で四人で来たため二人は足を奪われることになった。

「ああ、心配するな。タクシーでも拾つていくことにするから」

魚住は満面の笑みで黒田を見上げる。黒田はそれで何かを気づいたと言つようににんまりと笑つた。

「じゃあ、決まりだな。来い」

そう言つて別所はそのまま裏手の駐車場に向かう。明石もそれに続いた。閑散とする駐車場に一台止められている黒いスポーツカー。それに向かつて歩く別所。

「どうだ？保科と言う御仁は」

車の周りで挨拶をしている武官達をやり過ぐすとつぶやくようにたずねてくる別所に明石は首を振った。

「あれだけで分かるんやったら苦労せえへんわ」

「そうだな」

別所はそう言つと車のキーを開ける。明石は体を折り曲げて狭い車内に体をねじ込むようにして座った。

「黒田の奴、よう座つとつたな。ぶちきれて殴りかかるんやないかとひやひやしたで」

そう言つ明石の言葉を見無視してそのまま別所は駐車場を出た。

「それはともかく……実はな。お前の昇進と部隊配属が正式に決まっただ」

友の口からそんな言葉が出て、特に明石は驚かなかった。赤松准将の懐刀として知られた別所は上層部にもパイプを持っていることは知っていた。さらに、西園寺派の陸軍の醍醐少将などとの連絡を行っているのは彼の部下達だった。

「まあ、昇進試験は自信があつたからな。それに西園寺公の推挙があれば海軍じゃフリーパスなんやろ？」

皮肉るつもりだが、別所は乗つてこなかった。そのまま車は屋敷町を走る。

屋敷町でも官庁街からすぐの大きな門をくぐつた。それが西園寺基義卿の館であることは明石も読めた。すぐに書生が駆け寄つてきて奥の駐車場へと車を誘導する。

「なんや、御大将も来とるやないか」

明石の目に第三艦隊の『二引き両左三つ巴』、赤松家の家紋をかたどつた隊旗をつけた公用車が見える。

「貴様の昇進を祝いたい人がいるつてことだ。良い話だろ？」

そう言つてキーを抜いて駐車場に降り立つ。だが、明石はそこで見慣れないガソリンエンジンのスクーターが止まっているのに気づいた。

「なんや、あれ。出前でも取つたんやろか？」

明石の言葉に苦笑いを浮かべながらそのまま別所は玄関へと向かう。

赤松家よりも二回りも大きい玄関だが、そこには駐車場にいた書生以外の人の気配が無かつた。だが、別所はそのまま靴を脱ぎつばなしで上がりこむ。書生が駆け寄つて靴を持つのを見て明石もそのまま上がりこんだ。

長い廊下。次第に闇に落ちていく庭を見ながら二人は奥に進んだ。

「ええ匂いがするんやけど……」

明石がそう言うのと別所は足を止めてにやりと笑った。

「お前はこの屋敷は初めてだったな」

そしてそのまま再び廊下を歩き続ける。視界が開けて当たりに庭が広がる。獅子脅しの音、それに混じって宴会でもやっているような声が遠くで聞こえる。

「西園寺亭には食客が多くてな。いつも宴会が催されている。お前も聞いたことがあるだろ、その噂くらいは」

「まあな。西園寺サロン言うところは帝大でも有名な話やさかいな。平民出の知り合いは皆懂れとったわ」

西園寺家は文化の守護者。これは胡州の国民なら知らぬものはない事実だった。この屋敷に世話になりつつ芸を磨く芸人。出入りしては糊口をぬらす詩人。酒を求めて出入りする歌手。胡州の芸能の守護者でもあるのが西園寺家のもう一つの顔だった。明石はただ宴会の続いているような別棟から離れるように進む回廊を別所に続いて進んでいた。

行き着いた先。砂の敷き詰められた広場に煌々とライトが照らされている。そこで別所が歩みを緩めてそのまま片ひざを着いて伺候した。

その光の中に陸軍の士官候補生が一人、木刀を構えて立っている。そしてそれに向かい合うように和服の女性が薙刀を構えて向かい合っていた。

「控えろ、康子様と要様だ」

別所の言葉に明石も片ひざをついた。西園寺基義の妻康子の噂は明石も時たま耳にすることがあった。遼南貴族の出で、その人となりは天真爛漫。その奇行で周りを惑わす。どれも四大公の筆頭の妻女としては疑問に感じる行動にただ西園寺基義と言う切れ者が相当

な物好きだと思つ以外の感想は明石には無かつた。だが、明石は槍に自信があるところから目の前の康子が相当な薙刀の達人であることだけは一目で見抜くことが出来た。

薙刀にしる槍にしる。どちらも弱点は間合いの中に入られることにある。そうすれば短い剣に抗することは難しい。だが、じりじりと迫る娘の要の間合いから、ぎりぎりのところまで来ると素早く下がり、回り込む。娘の要が隙を突くべくにじり寄るタイミングをずらして迫るのだが、それを見越したように絶妙な間で回り込んでいた。

『これは……康子様が勝つな』

そう思つた瞬間、待ちきれずに要が上段に構えた木刀を持つて一拳に切り込んだ。しかし、それは軽くかわされ、振り下ろされた薙刀が要の背中に打ち込まれる。

「これは！」

思わず立ち上がった明石を別所が止める。

「ああ、晋一君。見たの？」

まるで調子の狂うのんびりとした言葉に明石の力が抜けた。

「康子様。ご機嫌……」

「何よ！晋一君たら。照れちゃつて！それとそこのお坊さんは？」

背中をさすっている娘の要の肩を叩きながら満面の笑顔で康子は頭を垂れている明石に目をやった。

「ああ、明石清海あかしきよみ言います。娘さん……大丈夫ですか？」

「大丈夫よね！」

明るくたすき掛けをした帯を緩めながら康子が叫ぶ。だが背中を打たれて倒れていた少女はしばらく膝に付いた砂を払っていて康子の問いに答えることは無かった。

「ほら大丈夫！」

「大丈夫に見えますか？お母様」

砂を払い終えて立ち上がる要。腕まくりをしているひじから先に筋のようなものが見える。

『そう言えば要様はサイボーグだったな』

明石は祖父を狙ったテロで瀕死の重傷を負い、体のほぼ90パーセント以上を失った要の過去を思い出していた。西園寺家はいつも国粋主義的な勢力にとっては敵以外の何物でもなかった。多くの当主がテロで倒れ、子息は凶弾に倒れた。それでも進歩的な家風で常に政治の局面に関わり続ける一族の力に明石はただ感服しながらその次期当主の要の姿を眺めていた。

「サイボーグがそんなに珍しいですか？」

鋭い言葉を吐く要だが、闇市で無法者同士のやり取りを繰り返してきた明石にはかわいらしく感じられた。所詮は安全地帯にいた人間の目。いくら不良を気取ろうにもそんな自覚のない甘えがその目の奥に見て取れた。

「それでは自分達はこれで」

別所が頭を下げる・明石は二人が気になりながらもつれてきた別所の手前、一礼して稽古の場から去った。

「晩御飯は期待していいわよ！」

子供のように見える笑顔で康子は明石達を見送った。

そのまま廊下は続く。そして池に囲まれたそれほど大きくない離

れに着いたとき、再び別所はそのふすまの前でひざを突いた。

「別所、明石。入ります」

別所の声が静かな離れに響く。しかし何の反応も無かった。

「別所！明石！入ります！」

今度は力を入れて別所が叫んだ。

「聞こえてるよ！入りな！」

澄んだ声かふすまの向こうから聞こえる。それを合図に静々と別所はふすまを開いた。中でこの館の主、西園寺基義と二人の上司の赤松忠満は目の前の碁盤を並んで見つめていた。

「ああ、無駄ですよ。その黒石。丸々死んでますから。また俺の勝ちですね」

どう見ても自分達より若い男が陸軍の制服を着て西園寺達の前に座っていた。静かにふすまを閉める明石。

「ああ、明石。お前は囲碁はわかるか？」

助けを求めるような調子で赤松が明石を呼ぶが、明石は首を振った。

「だめだめ！もうこうなったら挽回不可能ですよ。でもまあ兄貴もずいぶんとましになりましたね」

西園寺を兄貴と呼ぶ。そのことでその陸軍大佐が遼南皇帝にして胡州四大公の当主嵯峨惟基であることが分かり明石は当惑した。

「おう、忠さんのところの子飼いか？噂は聞いているって……確か、別所君とは会ったのはこれで二回目か？」

嵯峨が盤面を見つめる西園寺を置いて明石達を振り向く。

「ご無沙汰しています。しかし……」

「気にするな！まあ気になるのも当然だな。ベルルカンに治安出動している部隊の指揮を取っているはずの俺がここにいるのがおかしいってんだろ？」

ニヤニヤと笑いながら当惑した顔をしているだろう自分達を見つめる青年將校に明石は振り回されているような感覚にとらわれている。た。

「皇帝陛下が自ら軍を率いて同盟加盟を表明したカイリシアに……」

「ああ、俺は大軍を指揮するのは苦手だね。どうせ部下任せになるからな。こうして胡州の動静を探っていた方がよっぽど建設的だろ？」

そう言う隣においてあった徳利から酒をついで煽る。

「しかし、映像でもはつきりと見たんですけど」

「ああ、あれは弟。親父が兄弟を100人以上こさえやがったからな。おかげであのくらいの望遠での映像なら区別がつかないのもいるわけだ」

嵯峨は笑いながら明石達を面白そうに眺めている。

「やっぱり駄目だな」

西園寺は相変わらず碁盤を見つめていたが諦めたようにそう言つて嵯峨を見あげた。

「だから言っただじゃないですか。もうおしまいだつて」

盤面を見つめていた赤松はようやく納得が言ったように隣に座りなおす。

「しかし、二人とも驚いていないとは……忠さんも良い部下がいるみたいだ」

「十分驚いとうように見えるんやけど。それと新三しんざのところの切れ者に比べたらどうにも。あの吉田とか言う傭兵崩れがおればワシも安心して部隊を留守にできるんやけどな」

そう言つて隣に忘れられたように置かれた杯を取る赤松。

「新三なんて言つてもこいつ等に言つても分からねえよ。ああ、忠さんと俺は高等予科学校からの同窓でな」

「本当にそれは何度も文句言いたい思うとつたんやけど腐れ縁の間違いやぞ」

明石はそこであることを思い出した。

『胡州高等予科学校』。先の大戦の終戦前まで貴族の教育機関のひとつとして開設されていた学校である。軍に進む子弟の早期教育を目的に設立され、軍幹部にはその出身者が多かった。特筆すべきところは成績優秀者は陸軍士官学校や海軍兵学校を経ずに直接陸軍大学、海軍大学の受験資格があると言うところだったが、その試験は過酷で数年に一人という合格実績だった。

その数少ない合格者の一人が目の前の嵯峨だった。家柄も才能も優れた名将として彼が軍に重用されることになるのは当然の話と言えた。だが、その家柄ゆえに嵯峨は中央から追われることになったのは皮肉なものだった。

西園寺新三郎として四大公筆頭西園寺家の部屋住みだった彼が、ゲルパルトの名家シュトルベルク家の長女と結婚して中央政界から追放状態だった西園寺家に世の注目が集まると、軍は陸軍大学を出た彼を東和大使館付き武官として東都に送った。中尉待遇での花形デビューと言う体裁だが、事實は軍の中央から遠ざけることがその目的だった。事実その後も嵯峨は二度と軍の中央へ近づくことは無かった。

だが現在その胡州軍の中央と縁が薄いと言うことが嵯峨の優位に政治的状況が展開する可能性を秘めている。そう明石は見ていた。

元々嵯峨家の領邦には2億の民を抱えるコロニー郡がある。全人口が八億に満たない胡州で図抜けた領邦とその人脈を使える嵯峨は未だ西園寺派や烏丸派とは一線を画して動くことが出来る状況にあった。彼の手足となる被官の陸軍の重鎮、醍醐文隆中将は西園寺家に近い立場とはいえ、三老の醍醐文隆の兄佐賀高家大將や池幸重^{いけゆきしげ}准将などは烏丸派が勢力を持つ陸軍に会って中立を守っていた。

「二人とも俺がここにいるのは驚かなかったわけだ。だが、俺がなぜここにいるかは分かるか？」

いたずらをする子供のような瞳。明石は自分より一回り上の年であるはずの陸軍大佐の顔を見つめていた。

「それは先ほどおっしゃった……」

「それじゃあ子供の答えだ。胡州の動静をたどるなら部下や被官にやらせる方がよい。そうしないともし俺がそれだけの為にここにいとばれたら奴等は自分達が信用されていないってことでへそを曲げるかも知れねえからな」

再び嵯峨は徳利を傾けた。

「じゃあ、お二人と協力して……」

そう言った別所に赤松が諦めたような視線を向ける。それも承知の上と言うようににやりと笑った別所が嵯峨の顔色を見ていた。

「保科公の健康やないですか？嵯峨大佐がにぎってはるのは」

明石は試しにそう言ってみた。西園寺と嵯峨の兄弟は顔色を変えなかったが、上司に当たる赤松が二人の顔色を見たところで明石は自分の問いが正解だったことに気づいた。

「良い目をしているよ。最近の保科さんの動き。明らかに目に付いてね。いろいろと調べたんだが、やはり相当悪いらしい。ただ血管

がプツンしてリハビリ中の大河内公爵とは違って消化器系の癌だがせいぜい延命が効く程度の対処しかできない。それも本人が断ったそうだがね」

今の胡州を支えている老人の死。一瞬で場が凍った。

「そして、兄貴に釘を刺しに来たわけだ」

しばらくの沈黙の後、嵯峨は兄の西園寺を見つめる。

「釘？何のことだ？」

そう言った西園寺に嵯峨は一通の手書きの書状をポケットから出して兄に渡す。

「もう少しこういうものは丁寧に扱えよ」

西園寺はすぐにそれを読みはじめるが、次第に目を嵯峨に向ける回数が増え始めた。

「まあ、池もまじめな男だからな。露骨に高家の領邦の半分を譲ると言われても俺にお伺いを立ててきやがる。困ったもんでしょ？」

嵯峨の言葉に読みかけの書状を放り投げた西園寺。それを拾った赤松は読まずにそれを畳んだ。

「じゃあ清原からの書類もあるやろ？」

赤松の言葉に今度は携帯端末を開いて文書を画面に表示する。そしてそれを西園寺と赤松。二人に見せる嵯峨。

「よく考えたもんだな。こちらでは嵯峨の直轄地まで切り取って池に差し出すと書いてあるぞ。新三、そんな予定はあるのか？」

半分笑うような調子で西園寺は画面から目を離して嵯峨の顔を覗き見た。

「なあに、西園寺派が倒ればそれに見合う領邦を俺に差し出すっていつつもりでしょ？清原さんは」

淡々と答える嵯峨。それを別所は冷たい目で見つめる。

「こんな紙切れが行きかっているとして今回の状況をどう運ぶおつもりですか」

怒りをこめた別所の言葉に白々しくおびえたふりをする嵯峨。

「怖い顔したつてどうにもならないんだけどな。ただ烏丸さんや保科さんに会って分かったことは俺にゃあもう手を上げるしかねえってことだな」

そう言う嵯峨は杯を干した。

「おい、お前がそないなこと言ったら……嵯峨家が終わるんちゃうか？」

赤松の言葉に悲しげな表情を作る嵯峨。それが本心からのものは明石にも分からなかった。

「だってしょうがないだろ？この国の制度を根本から変えるにはどちらかが倒れるしか無いんだ。強力な指導体制により制度を根幹から変革することで国家の発展を目指す。これは俺もやったことだが人に勧めるつもりはないが、それ以外に今の胡州に選択の余地が無いことは理解しているつもりだよ……だがねえ……」

嵯峨はそう言うタバコを取り出した。灰皿がこの屋敷に無いことを知っている別所が何か代わりのものを探そうとするが、嵯峨は手で押し止める。

「ああ、携帯灰皿を持ってるんだ。俺は昔から肩身の狭い愛煙家だからな」

そう言ってポケットから金属の小さな円盤を取り出す嵯峨。

「ああ、そうだ。貞坊には会ったのか？」

赤松の言葉にしばらく別所と明石は呆然とした。

「一般受けしない呼び方は止めとけよ。安東貞盛大佐殿だろ？ 会ったよ」

嵯峨の言葉に沈黙に包まれる。明石も黙り込んだ。赤松の妻が安東大佐の姉であり、安東の妻が赤松の妹。その複雑な事情を考えれば言葉を繰り出すのが難しかった。

「アイツは本当に融通が効かねえ奴だな。まあ昔からだけどな」

そう言つてしばらく考え事をしていた嵯峨。そこにふすまの外に人の気配を感じた。

「康子か？」

西園寺の声にふすまが開く。そこには下女が一人目の前にすき焼き鍋を置いてかしこまっていた。

「おう！ 待ってたんだ」

嵯峨の言葉に合わせるように変わった円盤を持った康子が現れる。

「あの、それ……」

「電熱器。知らないでしょ」

そう言う康子は非常にうれしそうに両手に持った電熱器を別所の前と夫の基義の前に置く。二人の女中は手にした鍋を康子の置いた電熱器に置き、その隣に肉の乗った皿を置いた。

「へえ、これが西園寺流のすき焼きですか」

別所はじつくりと鍋の中を見つめる。いまだ温まっていない割り下に浮かぶ春菊に目がひきつけられる。

「ちよつと時間がかかるのが困るのよね」

そう言いながら続けて入って来た女中から卵などを受け取る康子。「要！ あなたも来なさい！」

ふすまの外に座っていた西園寺要が遠慮がちに部屋に入ってくる。明石はその雰囲気にな心でできるような感じを抱きながら見守っていた。

西園寺家の会合から二ヶ月。少佐に昇進し中隊長に任命された明石には忙しい日々が待っていた。

第三艦隊のエース。人型兵器『アサルト・モジュール』胡州名称『特機』の新任部隊長。彼の部下達はみな若く、海軍兵学校の中途課程の学生ばかりなのが気になったが、逆にそれが裏の世界で生きてきた明石には新鮮で楽しい日々に感じられた。だが彼等を見るうちに次第に不安が芽生えてくるのもまた事実だった。

胡州の格差社会は極めて残酷なものだ。生まれたとたんにその赤ん坊の将来を決め付けることが出来るそんな世の中に明石は違和感を感じていた。人口の70パーセントが貧困寸前の状態のこの国で小学校、中学校、高校と進めるのはほんの一握りの人間に過ぎない。多少勉強が出来る生徒にはそのしがらみから抜けるには二つの道しかなかった。

一つは彼の部下達のように軍に入ること。15歳で兵学校に入り、成績優秀ならばそのまま推薦で下士官待遇での部隊配属。そしてここでも上官の信頼を得ることが出来れば士官学校への道も開ける。

そしてもう一つの道が寺に入ること。明石も子供のころからそう言う野心家の小坊主達に囲まれながら日々を過ごしていた。彼等も寺の経営する私立中学、高校を経て推薦で大学に進む道があり、多くは寺とは関係ない学科に進学して卒業後は大企業に勤めると言う道もあった。そんな小坊主達とともに育った明石にとって部下の平民や貧民上がりの下士官達のやる気と根性は賞賛するに値することだった。

その日も部下の出した戦術関連のレポートを見ながら隊の隊長室でのんびりとそれに点数をつけていた明石の部屋をノックするものがいた。

「ああ、開いてるで」

答えた明石。そこに静かに入ってきたのは兵学校の一回生と思しき少女だった。

『なんや？貴族上がりのお嬢さんか何かか？』

そう思っている明石に少女は敬礼をした。

「今度この中隊に配属になりました正親町三條おおぎまちさんじょうかえで楓と申します！」

「おおぎまち……？」

「正親町三條です！」

しばらく明石はその無駄に長い名前を頭の中で繰り返していた。

「長いな……」

「はい！僕もそう思います」

少女は自分を僕と呼んだ。その言葉にしばらく明石の思考は止まる。

「正親町侯爵とは親戚か何かか？」

「いえ、父は嵯峨惟基陸軍大佐であります！」

その言葉で明石はようやくこれまでの思考が無意味になるほど状況が理解できて来た。

正親町三條家は嵯峨家の一門である。嵯峨惟基には双子の娘があり、一人は現在東和に在住しているが、本来なら家督は彼女が継ぐのが当然とされていた。部屋住みである妹の楓が分家したところで不思議な話ではない。そして自分も部屋住みで停止されているものの貴族年金を受けるときは子爵待遇の身分を証明する必要があった。なんとなく似た境遇に自然と明石の頬は緩んだ。

「長い名前やなあ……何とかならへんのか？」

明石の言葉に理解できないと言う顔をする楓。

「まあ、ええわ。楓曹長でええか？」

「ハイ！」

明石の言葉に楓は初々しい敬礼をして見せた。

じつと立っている楓に明石は仕事を始めるかどうかで悩んでいた。「そう言えば時々ワレの親父さんが来とるようやけど……」

「そうなんですか？」

きびきびと話す楓に明石はしばらく彼女と付き合うことを選んで端末のモニターを休止させた。

「ああ、知らんのやったらええわ。それよりなんで海軍に？」

「はい！お姉さま……いえ、西園寺要准尉の勧めで……僕なら陸軍では無く海軍がいいと言うことでしたので」

その言葉に明石は皮肉の笑みを浮かべざるを得なかった。烏丸派の牙城の陸軍で苦勞する対立勢力の一人娘。その苦勞は容易に想像できた。楓の口ぶりから要とは相当仲が良いのだろう。苦勞をさせまいと目の前の少女に海軍行きを進めるサイボーグの女性の姿がまぶたの裏に浮かぶ。

「ああ、親戚同士仲のええことはええことや。じゃあ何で特機部隊を選んだ」

その言葉にしばらく考えた後、楓は口を開く。

「父上の影響を受けました！」

よども迷いも無かった。先の大戦での遼南戦線。そして遼南内戦。そして現在続いている同盟による軍事活動。どの場所にも黒いアサルト・モジュールを駆る嵯峨の姿があった。エース・オブ・エース。そのような言葉をかけたのなら自虐的な笑顔を浮かべてタバコの煙を吹きかけてくるだろう人物の顔が脳裏をよぎる。

「ちよい待ってください」

そう言つと明石は再び端末の画像を見ると楓の士官学校での成績を見てみた。

「ほう、技術系の成績が良いな。それと戦闘系。特に射撃と格闘戦が得意……うちの先輩達にも見せたい成績だな」

「恐縮であります！」

成績を見た後に楓を見てみるとその長い前髪と結わえられた髪は戦国時代のじゃじゃ馬姫のようにも見えた。

「それじゃあ、うちの悪たれ共と顔合わせせなあかなあ……そうや。うちの隊の本文とする言葉、知つとるか？」

そんな明石の言葉にしばらく考える楓。

「それはなんですか？」

素直に答える少女の姿について笑みが浮かぶ明石。

「『至誠』って言葉だ。誠を尽くすのが武人の本懐。後に指揮官となるんやったらちゃんと覚えとき」

「はい分かりました！」

その言葉に合わせて明石も立ち上がる。

『ワシも年を食った……って20代が言う台詞やないなあ』

明石はそう言つと直立不動の楓をつれて隊長室を出た。

廊下は静まり返っていた。帝都警備を任務とする海軍部隊の基地では最大規模の三条基地だが、その中にも西園寺派と烏丸派の対立があつた。

基地司令の名前を貸している赤松の影響もあり、どうやっても西園寺派の優勢である部隊だが、烏丸派やその被官である隊員も少なくはない。誰もが無用な接触を避けて部屋に閉じこもっているばかりで一人の隊員ともすれ違わずに明石の中隊の詰め所にたどり着いた。

「お！隊長」

第一小隊指揮官の少尉が明石を見つけて敬礼する。そしてその後ろに美少年のような楓を見てなにやらニコニコと笑いを浮かべる隊員達。

「隊長、その坊やは」

「失敬な！僕は坊やじゃない！」

その言葉が女性の声なのに驚く隊員達。

「おう、ワレ等の後輩になる奴じゃ。挨拶せい」

「正親町三条楓曹長であります！」

その言葉に部屋の奥で腕立て伏せをしていた予科練上がりの下士官達が飛び上がって敬礼する。

「しかし、なんですか。どこかの姫君みたいな名前じゃないですか」

教導隊らしい雰囲気第二小隊の古参の小隊長の中尉が楓に目をやる。

「ああ、嵯峨大公の娘さんじゃ」

そんな明石の言葉にそれまで緩んでいた部屋の空気が張りつめる。

「赤松のおやつさんも思い切ったことをするねえ」

古参の中尉の言葉に意味が分からないと言うように明石を見上げる楓。

「人質か？そないな姑息なことをする赤松さんじゃないやろ。おい楓曹長。部隊配属の希望はどこで出した」

「は！教導部隊であります！」

その言葉に奥で直立不動の大勢を取る若手が拍手を送っていた。

「まあ俺等は軍人だ。親父が宰相だろうが皇帝だろうが特別扱いはいないからな。それじゃあ荷物の片付けに行つて来い！」

「了解しました！」

古参の中尉の一言で廊下を早足で歩いていく楓。

「使えるんですか？あの娘」

そう言う第二小隊長の肩をさつきから端末を叩いていた第三小隊の部隊長の眼鏡の少尉が叩く。そしてその画面に映っている楓の成績を見て口笛を吹いた。

「お前等！すぐに追いつかれるぞ！とりあえず鍛えろ」

その言葉に奥で直立していた若手のパイロット達は再び腕立て伏せを始める。

「確かにこの成績なら人質じゃなくてスカウトですね」

第一小隊の少尉の言葉に隊の下士官達も頷く。

「ええ人材や。ちゃんと育てろ」

そう言う明石は晴れやかな気持ちで彼等を置いて部屋を出て行った。

明石から見ても楓の成長は異常だった。配属一ヶ月で彼女の相手が務まるのは明石だけになっていた。それどころかシミュレータでの訓練では明石も苦戦と言うより逆に追い込まれることも多くなっていた。いつもの通り執務室の端末のモニターで第六艦隊所属第一特機戦団相手にまるで子ども扱いするような余裕の教導を行っている明石の部下達。だがその中でも楓の働きには目を見張るものがあった。

「おい、明石」

画面に夢中だった明石が突然の人の声に驚いて目を剥くとそこには別所が立っていた。

「なんや、晋の字か。ちゃんとノックぐらい……」

「したんだがな。俺もそれほど暇じゃないんだ」

そう言うとは別所は明石の執務机の前に置かれたソファに腰を下ろす。

「嵯峨大公の姫君か。お前が入れ込むのも当然だな。先週はうちの若いのも天狗の鼻を折られて良い体験をさせてもらったよ」

別所はそう言うとは携帯端末を取り出す。

「おべんちゃらを言いに来たんか？ほんま、暇やな」

そう言うて向かいのソファに腰を下ろす明石に苦笑いを浮かべるが、すぐに別所の顔は真剣なものへと変わる。

「保科さんが入院した」

別所の言葉にそれまで浮かんでいた明石の笑みが消えた。

「病気か？お前一応医者免許もつとんのやろ？どないなっ」とる

予測はされていた事実とは言え、二人の表情は自然と暗くなった。「今度は消化器系から転移して肺ガンらしい。しかもかなり進行しているそうだ」

それだけ言うとは別所はテーブルの上に置かれた安いライターを手

に取る。

「ガン言ったら手術どころかレーザーでもなんとかなるんや……」

「初期のガンならばその通りだ。さらに最近は転移が無ければほぼ治癒率は90パーセントを超えている」

実業義塾大学医学部出身だけあって、その深刻そうな表情には嘘はないように見えた。現在二派に分かれて権力闘争を続けている胡州貴族達をまとめているカリスマの病状。それが重大な意味を持つことは誰の目にもあきらかだった。

「肺以外にも……」

「ああ、俺が聞いた範囲では胃から下、十二指腸、小腸、大腸、直腸。どこもぼろぼろらしい」

その言葉に明石は唇をかみ締めた。

「もって……どれくらいだ？」

沈痛な明石の顔を見ると、別所は大きく深呼吸をした。

「おそらく会話などの意思疎通が出来るのは今月一杯。生命維持装置をつけても半年が良いところだ」

別所の言葉に明石は身震いが走った。胡州の重鎮、保科家春が倒ればそれまで彼を緩衝地帯として直接の対決を避けてきた西園寺烏丸両派は間違いなくぶつかることになる。そしてその仲裁することが出来た人物は一人しかいなかった。

「嵯峨殿の胡州復帰は……」

すぎるような明石の言葉に別所は静かに首を横に振った。

「なんでも現在は、東海州の騒動で手が離せない状況だそうだ」

嵯峨惟基公爵。今は遼南の武陽帝として帝位にある彼がほんの数日で胡州への帰属を求めて反旗を翻した花山院家の東海州を制圧した話は明石も聞いていた。そしてその無茶な独立戦争を煽ったのが烏丸派の有力者清原和人であることも知ることが出来る位置に明石はいた。

「自分で自分の首を絞めたいということやな。それにしても…… タイミングが悪すぎるんちゃうか？」

明石はそう言うしかなかった。

「それだけじゃない。烏丸殿が枢密院の秘匿会議を開いて終戦協定で追放リストに載せられた政・官・軍の全員の追放解除を決定したそうだ」

その言葉に明石は言葉を失った。当時、外務官僚だった西園寺基義を窓口に強引に遼北との電撃的休戦協定締結を成し遂げた保科内閣が切り札として遼北に示した有力貴族を含む政治家や官僚、軍人の追放措置。それを保科家春が倒れるとすぐにやってのけた烏丸頼盛公爵のあからさまな挑発行動にただ呆れるしかなかった。

「そないなことしたら……」

「早速遼北は反胡州キャンペーンを国営メディアを総動員してかけはじめたって話だ。大麗や西モスレムも追随するのは間違いない。そうなれば胡州の同盟加盟は水泡に消える」

別所の言葉を否定できるような材料は明石の知識には無かった。

「あの御仁は戦争がしたいのか？」

そうつぶやくのがやっとだった。

「戦争にもならないだろうな。現在胡州7艦隊のうち第一、第二、第五、第七艦隊は外惑星でのゲルパルト独立派の支援のために動きが取れない状況だ。アステロイドベルトのアメリカ海兵隊や遼南南

都のアメリカ海軍、遼北旭港の中国艦隊、西モスレムシャロンのフランス艦隊。これだけ束になれば地球勢力だけでも二派に分かれて統制の取れない胡州を征服するのには十分すぎるくらいだ」

別所の言葉は大げさではなかった。敗戦で課せられた巨額の賠償金で復興すらままならない宇宙艦隊しか持つていない胡州。たとえ二派に分かれていなくてもそれだけの艦隊に対抗できる力は無かった。さらにその状況を利用して同盟加盟を棒に振ってでも国益優先で参戦を計る国が出てくるのも十分予想できた。

「状況は最悪やな。もしかすると保科公の命より胡州の命脈の方が先に尽きるんじゃないか？」

そこまで言って明石は笑わざるを得なかった。

「これが烏丸殿の『国家の尊厳』と言う奴なのかも知れんな。尊厳を守るためなら自殺もするって事なんだろう。付き合わされる国民はいい迷惑だ」

別所も皮肉めいた笑みを浮かべる。

「で、肝心の西園寺公は？」

力なく発せられた明石の言葉に別所は首を振る。

「すべての会議をボイコットすると宣言して屋敷に籠っておられる。赤松の親父が面会に行ったそうだが追い返されたそうだ」

その言葉で明石はさらに力が抜けていくのを感じた。

「挑発合戦か……戦争するだけむだやん。マジで辞表でも書くか」

「それは冗談としては二時間前までは有効だが今じゃしゃれにならんぞ」

ただそう言って別所はゆっくりと立ち上がった。

「どないする気か？」

立ち上がる気力もない明石は別所を見上げる。

「あがいてみようと思つてな。どうなるかは分からないけどな」

別所の目に光があるのを見て明石はようやく口にゆがんだ笑みを作る程度の力を取り戻した。

定時を過ぎて3時間。人影もまばらな隊舎の廊下を明石は歩いて
いた。黒の上下に紫のワイシャツ。ネクタイは赤。それにサングラ
ス。はじめは好奇の目で見られた明石のスタイルもすでにそれが普
通と思われていて、警備の兵士も敬礼をして彼を見送る。そして自
分の車のドアに手を伸ばしたとき背中に気配を感じて振り返った。

「なんだ、別所か」

安堵の声をあげる明石。そしてそこにはいつもどおり海軍の勤務
服姿の別所がいた。

「とりあえず来い！」

突然別所が明石に手を伸ばす。

「なんや！突然！」

「いいから、車は置いていけ」

そう言うとそのまま隣の車止めに止めてある公用車に明石を引き
ずり込んだ。

「ええのんか？あぐくのにも流儀がいるやろ？ワシはこんな格好で

……」

「かまわん。出してくれ」

そう言うって別所が声をかけた運転手は黒田だった。

「オメエ本当にそれじゃあ堅気にはみえないな」

助手席には魚住が座っている。車はそのまま制限速度を超えて官
庁街へ向かう道をひた走る。

「なんやねん。説明、きつちりしてもらおうか？」

自分の剣幕に少しは驚いて見せるだろうと思った別所だが、彼は
まるで明石の言葉が聞こえないようにフロントガラスの外の景色を
眺めていた。

「拉致するからな」

突然別所が吐いた言葉に明石は顔をゆがめた。

「拉致つて……。それは……穏やかやないなあ」

口の中の唾液を飲み下す明石。車はそのまま海軍省の地下駐車場へと乗り込む。黒田が車を止めるとすぐに扉が開かれる。

「狙いは誰や？」

その言葉にようやく笑顔を見せる別所に明石は背筋が凍るのを感じた。

「赤松の親父だ」

別所はそのまま腰の拳銃に手を当てている魚住に続いてエレベータに乗り込む。

「大丈夫」

明石の剃り上げられた頭の中はひたすら混乱するばかりだった。

「おう、扉が開けば艦隊司令の会議室だ。覚悟を決めろよ」

そう言うつと別所も腰の拳銃を抜いてスライドを引いて装弾、そしてそのまま安全装置をかけてホルスターに戻す。

「開くぞ」

魚住の言葉に明石も覚悟を決めた。

そのまま第三艦隊司令室のある海軍省に乗りつけた明石達は周りの目も気にせずに銃を手にしたまま階段を駆け上がった。そして三階の司令室の並ぶフロアーに付くと人々に銃を見せるようにして威嚇した。

「急ぎ赤松司令にお会いしたい！」

そう叫びながら拳銃をちらつかせる別所の姿に、廊下に散在していた司令部付きの将校達は驚いた様子で道を明けた。別所は赤松の懐刀と言われるほどに重用されている士官である。その男がいつも司令部では顔パスで通っている別所の親友、魚住、明石、黒田を伴って歩くさまに圧倒され誰もその歩みをとめることができなかった。

別所はそのまま第三艦隊司令室に入り込んだ。

「うるさ……なんや、別所か？物騒なもんを持ってからに」

「赤松司令！ご同行願えますか？」

別所の顔を見て、その手にした拳銃を見る赤松。

「ずいぶんとまあ……急やな」

「ご同行願います！」

繰り返す別所に諦めたような顔をして赤松は立ち上がった。明石は目で合図を送る別所に従って赤松の腕を掴む。

「乱暴な……」

そう言いながらニヤニヤ笑う赤松を部屋から連れ出しそのまま拳銃を構えつつもと来た廊下を引き返す。誰もが異常に気づきながらただ呆然と見守るだけ。その中を四人の青年将校と第三艦隊司令が歩いていく。そしてそのままエレベータに赤松を連れ込んだところで別所は拳銃を仕舞って土下座した。

「なんやねん。話聞こか」

明石に押さえられていた肩をぐるぐる回すと落ち着いた調子で赤松は別所を見下ろす。

「会っていただきたい方がいるので」

それだけ言々と別所は立ち上がる。

「ここまでして会わせる？誰や」

赤松はまるで彼の方が別所をさらったと言つような表情で訪ねる。

「それはしばらく」

「ほう、別所がそこまで言うとは。楽しみやな」

満面の笑みの赤松。エレベータは地下駐車場について扉が開く。

拳銃を取り出した別所がそれを赤松の額に突きつけて立ち上がる。

予想通りすでに警備の兵士達が外で待機していた。構える自動小銃にやりと笑みを浮かべながら明石が羽交い絞めになっている赤松を見せつけながら別所は兵士達をにらみつける。

「見ての通りや。何もするな」

落ち着いて兵士に叫ぶ赤松。別所は拳銃をちらつかせて道をあけるように指示する。

開いた先、黒田が車に飛び乗りそのまま運転席に座る。明石は後部座席に赤松を押し込みそのまま別所と赤松をはさむようにして座った。

兵士達はそのまま呆然と走り去っていく車を見守ることしか出来なかった。

「さてと、これでワシは無理やり青年将校に拉致されて会場へ引き出されたい証言が作れるなあ」

赤松はそう言って両手を伸ばす。

「別所！貴様！」

明石は自分が完全に踊らされていることに気づいて叫んだ。若手海軍士官による強制的和睦。それが今回のシナリオだった。

「ああ、坊さんすまんな。別所のやり方はどうも乱暴でいかんわ」
そう言っただけで黙って前を向いている別所をかばう。

「さてと、正親町三条邸へ……そや、正親町三条さんは明石の部下やっとな」

赤松の言葉にしばらく混乱していた明石だが、それが彼の唯一の女性の部下正親町三条楓をさすことを思い出し手を打つ。

「仕組んだのは嵯峨大公でんな」

じつと赤松をにらみつける明石。自分の顔が闇屋の用心棒のときのものになっていることくらいは明石も分かっていた。だが赤松も別所も黙って車に揺られている。追跡する車は無い。ただ黒田の運転する車は官庁街を抜け、貴族の邸宅の並ぶ町並みを進んでいた。

「ですが西園寺大公は家から出ていない言いますけど」

「新三のことや、康子はんをつこうて首根っこ掴んで引き出したんとちやうか？」

そう言っただけで赤松は笑う。車が減速し大きな門構えをくぐる。車止めには先客がいた。陸軍の公用車、自然に赤松の顔が曇る。

「清原さんか」

車が止まり、書生がドアを開ける。別所、赤松、明石の順で正親町三条家の玄関に降り立つ。

「おう、貞坊！」

赤松が叫んだ先には暗闇に一人の陸軍大佐が立っていた。明石が

目を凝らす中、その将校はゆつくりと近づいてくる。

「安東大佐……」

別所の言葉に明石もその男が『胡州一の侍』と呼ばれたアサル・モジュールパイロット安東貞盛大佐であることを理解した。

「西園寺公は？」

ゆつくりと一語一語確かめるようにして安東は赤松に尋ねた。

「康子さんのことはよう知つとるやろ？大丈夫なんちゃうか？」

それだけ言うと赤松が何かに気づいたように振り返った。黒い高級車が屋敷の車止めに止められる。その中でちらちらと刃物のようなもののきらめきが見えて別所が腰の拳銃に手をかけようとした。

「やめとけ、康子はんや」

赤松の言葉に書生が開けたその車のドアから薙刀の先が突き出しているのが見えた。それに続いて諦めたような顔の西園寺基義が現れる。

「赤松君！これはどう言うことだ！」

車から降りた西園寺はそのまま自分を笑顔で見つめている赤松に詰め寄る。

「ああ、この文句は新三に」

その赤松の言葉に安東が腹を抱える。その二人の息の合い方を明石は不思議に思いながら見つめていた。

「あの二人は義理の兄弟だからな」

別所の囁きで赤松貴子が安東貞盛の姉であることを思い出し、笑いあう安東と赤松の顔が一斉に西園寺に向かっている意味が分かった。

さらに車が現れる。今度はバンであり、大きな寝台でも運んでいくような車だった。

「保科のつつあんか」

安東が腕組みし、赤松が渋い表情で車を見る。運転手達は車が止まると同時にそのまま後部のハッチを開いた。

「よう、元気そうだな」

寝台から上半身を起こそうとする保科老人を黙って赤松と安東は眺めていた。

「君達もいるのか。嵯峨君はなかなかのやり手のようだ」

そう言うとき保科を乗せた寝台は屋敷の中へと向かう。赤松と安東はそれに寄り添うようにして正親町三条家の屋敷の玄関へと向かった。

「これでどうにかなる話なんやらか」

ぼんやりとつぶやく明石の肩を叩く別所。

「恐らくは保科さんの命が続く限りのひと時の平和だろうな」

そんな悟りきった言葉を吐く別所を明石はにらみつけた。

「ひと時だろうが平和が命を救うのはお前が一番知っているだろ？」

別所の顔は真剣だった。明石もその言葉の意味は分かっていた。長距離ミサイルにコックピットを取り付けて敵艦隊に突入する。その特別攻撃部隊の隊長として終戦を迎えた明石には停戦がどれほどの意味を、平和がどれほどの命を救うかを知っていた。

「その間にどうすれば命が消えずに済むか考えろってことやな」

明石のつぶやきに頷く別所。たたずむ車止め。従卒達はタバコを吸いながら中で行われているだろう会議を空想していた。

「ああ、別所君！」

突然西園寺公を乗せてきた車から女性の声が響いた。暗がりには時々薙刀の刃がギリリと光るのを眺めていた明石だが、そこから和服の女性が降りてきたので自然と頭を下げた。

薙刀を車のドアに立てかけるとその女性西園寺康子は車の助手席に乗った執事から重箱を受け取った。

「これ、もってきたんだけどいかがかしら？」

屋敷の中の明らかに殺気だった雰囲気になつた。突然の康子の提案に目が点になった。

「魚住君や黒田君も……楓ちゃんの家を軒先でも借りましょうよ」
そう言うとそのまゝ康子は屋敷の玄関に腰を下ろす。

「皆さんもいかがですか！」

康子が楽しそうに従卒達に声をかける。

「じゃあワシはいただくかな」

ぼんやりしている別所を置いて明石はそのまま小皿を運んできた正親町三条家の使用人から箸を受け取るとそのまま夜食のつもりで康子の重箱からかまぼこを突くことにした。

「これを飲めと？」

清原和人は一枚の紙を手にはぎ、政敵である西園寺基義の顔を見つめていた。仮病とは分かっていたが、それにしても明らかに見下すような態度で見られていることに久しぶりの不快感を感じてその紙を主家の当主である烏丸頼盛に返した。ちらりと見た主君の顔は紅潮し、その手は怒りに震えていた。

じつとそんな二人を見つめる安東は予想していたこととはいえため息をつくしかなかった。西園寺基義は議会と裁判院を掌握している。さらに海軍も多くは西園寺内閣実現を公言する幹部が数多く存在する。隣で黙って自分達を見つめている赤松忠満などもその一人だった。烏丸も内閣総辞職を覚悟して保科の調停に応じたのは分かっていた。だが西園寺はそれ以上の手を持って彼等を迎えていた。

まず第一に烏丸内閣の手による追放解除の取り消し。これはある程度覚悟していたところはあった。遼州諸国の予想以上の反発に栄光ある孤立などが出来るはずもない自国のふがいなさを烏丸も知っていたところだろう。第二に貴族年金の減額に関する法案。これもまた貴族の支持で立っている烏丸内閣では出来ない提案だったが西園寺の提案と言うことならば何とか呑める範囲の妥協だった。経済状況の好転が見込めず、多くの在外資産を凍結されている現状で歳費の大幅な削減は誰もが考えているところである。そしてそれは西園寺の意向で動く内閣でなければ出来ない施策だった。

だが、内閣人事と言って西園寺が示した一枚の紙切れがこの緊張した雰囲気を作り出していた。

西園寺派でも普通選挙推進派や枢密院の権限縮小を唱える政治学者。そんな烏丸が予想していなかった民間からの閣僚登用が記された閣僚名簿。そして目の前の西園寺基義はその中には名前が無かった。

「君が責任を取るのではないのかね」

震えるような声で烏丸がようやく言葉を繰り出した。首相の名前の波多野秀基と言うところを指差しているのが安東からも見て取れた。アメリカへの留学経験もあるその法曹界の寵児の名前を烏丸は口に出すことすらなかった。

「責任？何のことですか。私はただ現在の行き詰った政治状況を何とかできる人材を見つけてくれと言われてそれに答えただけです。波多野君は優秀だ。私のような過去の人間は静かに見守るだけで口を出すなんておこがましい」

そう言つて笑う西園寺。

「だまし討ちがお好きなようですね、西園寺の家の人々は。弟君はどうおっしゃつて……」

「清原君。これは私の思案ですよ。惟基は関係ない」

そう言つて烏丸の手から内閣人事案を取り上げる西園寺。

「平均年齢38歳。閣僚未経験者14名。新しい時代の新しい内閣。これで現在の難局を……」

「だまらっしゃい！」

西園寺の演説を止めたのは調停役のはずだった保科だった。そのまま咳を始め、うつ伏せになる保科の背を赤松がさすった。

「君は……西園寺君は……そんなに……」

そのまま息を整えようとする保科。だが哀願するような赤松の目を見ても動ずることなく西園寺は静かに座りなおす。

「では、具体的にどこに不満があるのか、そしてその場合誰が適任なのかそれを示していただきたい」

西園寺の声は澄んでいた。烏丸と清原は見つめあい当惑する。

「貴方達は政権を放り出すつもりなのでしょう？ならば当然次の政権に必要な人材、今の内閣の何が足りなかったのか、それをご教授いただきたい。それが出来てからでないと話にはなりません」

そう言つと西園寺は立ち上がるうとした。

「待て！」

立ち上がろうとする西園寺を烏丸は呼び止めた。明らかに不愉快そうな顔の西園寺を見上げる烏丸。

「その人事案、決定ではない訳だな？」

搾り出すような烏丸の声に安東は彼の敗北感を感じていた。

「当然ですよ。私の狭い知識を絞って出てきた人材ですが、より適任な人がいるならお知恵を拝借したいと言っのが私の立場です」

そう言って再び西園寺は腰を下ろした。そしてその時ふすまが開いた。

「あのう……」

中を覗き込むのはこの館の当主、正親町三条楓だった。

「おう、茶でもいれてくれるかな。それほど時間はとらせないよ」

姪に優しい微笑んだ後、西園寺は烏丸の前に閣僚名簿を置いた。
「波多野さんがだめと言うことですか……他にもどれが気に入りませんか？」

閉められたふすまに消える姪を見送った西園寺はそのままどっかりと腰をすえて烏丸と清原をにらみつけた。

「陸軍大臣。醍醐君はまだ経験不足だと……」

烏丸の言葉を聞くとすぐさま背広の内ポケットから蛍光ペンを取り出して×をつける西園寺。

「じゃあ他には？」

まるで子供が自分のテストの採点をするような表情で烏丸を見つめる西園寺。

「そんなすぐに結論が……」

清原の声に場が凍りついた。

「なるほど、即決は出来ない……あなた達も支持する人達のとこで話し合いをしたいのでしょ。う。よろしい、このリストはお持ち

帰りください。なんなら端末に送りますけど？」

にやりと笑みを浮かべる西園寺に烏丸は視線を落とす。

「ほう、話せばわかるということだな。結構！」

ひざを叩く保科。だが一人安東だけは納得がいかないような顔をしていた。それを見抜くと赤松はふすまの外の気配を見抜く。

「楓！」

赤松の声に手に盆を持った女中と海軍下士官の正装をした楓がふすまを開いて入ってくる。

「とりあえずこれで一つ山を越えたわけだ」

そう言う保科老人に部屋の中の人々は彼の意思がすでにかつてのカリスマとしての機能を果たさなくなっていることに気づき、この会談が遠からず無意味だったことになることを感じながら苦い茶を啜ることになった。

「この段階での連携。特に最後尾の特機の動きが敵のけん制にならなければ意味がありませんから。常に制圧射撃が可能なように中距離での制圧火力を重視して……」

海軍曹長の制服姿の少女がモニターをポインターで示しながら屈強な男達が狭苦しそうに座るブリーフィングルームで説明を続けていた。

「ほう、楓お嬢様も教導部隊の隊員の格好がついてきたじゃないか」

微笑みながら正親町三条楓曹長の説明を見守っていた明石の背中ですぶやいたのは別所だった。

「ええのんか？ 強襲部隊の訓練は確か明日やる？ 部下へのアドバイスとかは早めに……」

振り返る明石に別所は満面の笑みを浮かべる。

「なあに、傾いているとはいえ胡州海軍最強の第三艦隊強襲特機部隊だ。俺からの助言なんかたいした役にはたたないよ」

そう言うつと別所は明石のわき腹を小突いた。仕方なく部屋をでる明石を別所は教導隊長室に誘う。

「なんやねん、ワシも仕事が……」

明石の視線に隊長室の前の魚住と黒田が見えて黙り込んだ。明石は隊長室の前で雑談している従卒に目をやり人払いをした。扉を開くと当然のように魚住と黒田は来客用のソファに腰を下ろす。

「いいねえ、教導部隊は。前線部隊の指揮官室なんか殺風景なもんだぜ」

皮肉めいた笑みを浮かべる魚住。明石は苦笑いを浮かべながら隊長の執務机に腰掛けた。

「波多野首相のことなんちゃうか？」

誘うように明石がそう言うつと黙っていた黒田の鋭い視線が明石に

突き刺さる。

「まあな」

別所はそう言いながら黒田達に向かい合うようにしてソファアに座る。

一週間前の会合の直後、烏丸内閣は総辞職した。議会での勢力が足りない彼等に追い討ちをかけるようにして第一党の『共和制運動』党首波多野秀基は西園寺基義の支持を取り付けて内閣を組閣し、烏丸派は野党に落ちた。先の会談で何があったのか。別所なら知っているだろう。そう思いながらもこの切れ者がそう簡単に上司の赤松に口止めされているだろうその過程を話さないことは明石にもわかった。

「でもあれだな。憲兵隊や公安の連中も大変だろうな。いつ烏丸恩顧の天誅組が波多野さんの首を取りにいくかわからないんだから」
そう言つて魚住が笑う。海軍のもっとも西園寺大公に近い立場とされている第三艦隊所属の中堅将校である彼等にとつて魚住の言葉はあまりに不遜に聞こえて明石は魚住をにらみつける。

「だってそうだろう？ 領邦放棄なんて胡州の屋台骨をぐらつかせかねない主張をしている学者さんを首相に据えたんだぜ？ 俺は領邦返上には大賛成だが周りの連中もかなり揺れてるぞ。第三艦隊でこの有様なら他の将校や官僚達がどう考えているかなんて推して知るべしだぜ」

魚住の言葉は当然だと明石も思った。部屋住みの明石は貴族年金の対象になるだけの話だが、別所や魚住は領邦を持つ中堅貴族である。黒田も年金の中には赤松家の徴税管理を代行することによる禄があることも明石は知っていた。

「でも首相就任後はその手の発言は控えてもらっているからな。それに内閣には烏丸家の被官の面々も顔を出している」

「ああ、どうせ大臣の椅子を餌に一本釣りをしたんだろうな。まったくえげつない人だ」

別所の言葉を聞いてさらに皮肉を飛ばす魚住。明石もさすがにこ

の話題では魚住に同意しなけりばならなかつた。

「そんな状況だから明石に会つとく必要があるんだ」

別所の言葉に明石はすぐにその意味を理解した。

「教導部隊はどの派閥も関係なく順番が回ってくれば仮想敵を演じて見せるのが仕事や。派閥や陸海の区別無く部隊長と顔を合わせるのがワシってことか？」

そんな明石の言葉に満足げに頷く別所に明石は少しばかり違和感を感じた。

「職業上知りうる情報を他に漏らす言うんはでけへんことちゃうか？」

「そんな詳しい話を知りたいわけじゃない。雰囲気、所感。そんなもので良いんだ。他の部隊の連中がこの状況をどう捉えているかそれを知りたいんだ」

そう言つて別所は立ち上がるとドアへと向かう。少し開いていた扉に顔をつけていた若い従卒を捕まえると明石を向き直る。

「ああ、小松。茶を入れてくれんかのう」

明石の言葉で別所から解放された従卒はそのまま外へと飛び出していった。

「アイツの気持ちも分かるよな。俺達は西園寺の旦那の尖兵扱いだ。どこに行つてもいつ動くとかどこが叛乱を起こすとか物騒な話題を振られて苦笑いの毎日だからな。ここの連中も神経質になつてるんだろうな」

そんな魚住の指摘は正しいことを明石は一番良く知っていた。時には部下を率いて陸軍基地や演習宙域での模擬戦の時には露骨に明石への敵意をむき出しにする指揮官も珍しいことでは無かった。

「それはそうなんやけど……別所。ワレの方がよう知つとるような気がするんやけど」

明石の言葉が途切れたときに従卒がドアをノックする。

「おう、入れ」

上官の言葉を聞いてポットを抱えた小松と言う新兵が遠慮がちにそれをテーブルに置く。そしてそのまま入り口の隣の棚から茶と急須、そして湯飲みを取り出してテーブルに並べる。

「軍だけじゃなく会議と言う会議は迷走三昧だな。もう作戦や方針の優劣よりも西園寺派が白と言えば烏丸派は黒。それに誰が乗つかるかと言うような話題ばかりでめちゃくちゃだ。議会が機能しているから法令はちゃんと下りてくるし、予算も見通しが立てやすいはずなんだが、それをひっくり返そうと清原將軍なんかの息のかかった連中が怒鳴り始めて手がつけられない状況になるのがいつものことだ」

そう言うつと別所は従卒の手から湯飲みを受け取り一口茶を口に含んだ。

「確かに。俺もたまに会議で海軍省に出向くがほとんど意見がまとまったことなんてないぞ。散々怒鳴りあった末、その会議の議長が西園寺派なら内閣の指示に賛成。烏丸派なら意見書をつけて上に送り返す。まるで会議なんて意味が無い状況だよ」

魚住も茶に口をつけながらそう言った。

「やはり、大河内元帥が出てこないことには話が進まない状況ですよ」

手に湯飲みを握ったまま黒田がそう言うつて明石を見つめてくる。

「大河内さんか嵯峨さんあたりが仲裁に入らないとまずいのは分かるんだがねえ」

別所はそう言いながら湯飲みをテーブルにおいて頭を掻いた。だが、四人ともそれが難しいことは知っていた。海軍元帥大河内吉元は病床にあった。脳血管のバイパス手術でようやく集中治療室を出たばかりの老提督にこのめまぐるしく変わる政局や軍内部の調整を依頼するのは酷だった。また四大公三位である嵯峨家当主の嵯峨惟基大佐は軍籍を抜けて現在は遼南皇帝の地位にあり、もし動いたとしても彼の発言で不利益を得る派閥が内政干渉と騒ぎ立てるのは目

に見えていた。

「ちよつと待て、連絡が入った」

そう言つて別所が携帯端末をポケットから取り出す。そのまま画面を見た彼は突然にんまりと笑つて明石達の顔を見回した。

「その御仁の到着だそうだ。秘密裏に嵯峨さんが帝都に入ったそうだ」

別所の言葉に明石達は安堵の表情を浮かべて従卒を一瞥した後ゆつくりと茶を啜った。だが別所は不機嫌に黙り込んでいた。

「うまく行けば良いがな」

その言葉に明石は不安を隠すことが出来なかった。

「お前が動く必要はあるのかね」

帝都、西園寺邸。この屋敷の主である西園寺基義は目の前で寿司を無造作に放り込む弟、嵯峨惟基を眺めていた。弟は現在遼州星系の要とも言える要職、遼南皇帝の地位にある男だった。二百年以上前、地球からの独立を宣言したこの遼州星系の民の心の支えであった遼南皇家。胡州帝国もその名の『帝』とは遼南皇帝のことを指すことは形式だけとなった今でも変わることはなかった。

その皇帝が単身、着流し姿で西園寺邸に現れたことに兄である基義は不快感を隠せなかった。

黙って土産と称して手にしてきた寿司の桶から寿司を手に取り、妻の康子が出した取って置きの大吟醸を水でも飲むように口に流し込む弟に付き合う自分の人の良さを笑う基義。だが、海胆を食べ終えたところでようやく人心地ついたというように杯を干した弟の目は真剣なものがあつた。

「兄貴。すまないけどしばらくどこかに隠れてもらえませんか？」

突然だった。そしてその言葉に不意に笑いがこみ上げてくるのを西園寺は止められなかった。

「馬鹿言つなよ。今は一番この国の重要な局面だ……」

「だから言ってるんですよ」

強い調子で迫る嵯峨。弟がこういう強い調子で自分に意見することなど初めてのことだったので、西園寺は黙って弟を見つめた。一回り以上年下だが、それ以上に童顔の弟を見ると西園寺に怒りはこみ上げてこなかった。実際、彼の政敵達は自分の退場を望んでいることは知っていた。遼州同盟の拡大と言う事実と同時進行する貴族制と言う国家の根幹に関わる方針をめぐる対立。その中で西園寺派の主張である貴族制の解体と言う主張に多くの貴族達は西園寺家の出仕停止を求める請願を司法裁判所に起こしていることも知っている

た。

「それじゃあ何か？清原あたりの連中の好きにこの国を動かせといいたいわけか、新三は」

新三。嵯峨惟基がまだ西園寺家の部屋住みの時代の名前を使つて弟をにらみつけてみた。だが、そのときと顔つきはほとんど変わっていないというのに、どこか余裕のある笑みを浮かべて再び寿司に手を伸ばす弟に西園寺は違和感を感じていた。

『成長しやがって……』

内心安堵すると共に、不安感が西園寺を襲った。突然父に引き合わされて弟となつたと告げられた嵯峨惟基、遼南を追われた十二歳の甥ムジャンタ・ラスコーを初めてこの屋敷で見たとき、西園寺はそのか細い首筋を見て幻滅したことを思い出した。実の父との皇位継承権争いに敗れ、叔母に当たる康子を頼つて亡命してきた幼い皇帝は吹けば倒れるような弱弱しい印象しか残らなかった。だが、今こうして自分に意見している弟はそんな弱弱しい皇子様と同一人物とは思えない傑物としか見えなかった。

「俺が引いたとする。そうすると奴等がどうすると思うんだ？同盟の中でも胡州の加盟には民主化が必要だつていう東和の意見がある限り烏丸さん達が政権を握る間は胡州の同盟加盟は不可能なんだ。それとも何か？お前が同盟結成の言いだしっぺだということで東和や大麗の説得をしてくれるとでも言うのか？」

そう言つて西園寺は初めて寿司桶からかっぱ巻きを手にして口に運ぶ。

「じゃあしばらく時を待てば良いんじゃないですか？幸い大河内公は回復に向かっているそうじゃないですか。西園寺と大河内両家の当主の合意と言うことになれば烏丸さんも無視はできない。その状況なら俺も被官の説得に動くくらいのことは出来ますよ」

弟の言葉に西園寺は自然と笑みが出てきていた。彼自身もこの政治対立を武力衝突まで拡大させるのは本意では無い。政争が内乱にまで発展すれば先の敗戦で多くの駐留部隊を派遣する協定を遼州星

系諸国と結んでいる地球列強の介入を招くことすらありえない話ではないことは彼も十分承知していた。

「だが、それまで清原達が待てるのか？」

そう言々と西園寺は先ほど弟が注いだ酒を口に含んでその苦味に顔をしかめた。

「政治は一握りの貴族のための物ではない。それは親父の口癖ですよ？」

そう言つて嵯峨は酒をあおる。その姿を見ながら西園寺も徳利の酒を注いだ。

「つまらない正論に何が出来る」

西園寺の口元が笑みでゆがむ。目の前の弟もただ闇に沈んだ庭に目をやるだけだった。

「東和の支援を餌に民衆を動かしたらどうなります？」

そう言う弟。だが、それはすでに西園寺の考えの中にあるプランの一つだった。現在の首相に過激な反貴族制論議の喚起を叫ぶ波多野秀基をすえたのもそれを見込んでのことだった。実際東和の動きは早く、外務大臣が就任式典を理由に訪問、実務者の往来は烏丸前首相のときの数倍のペースとなっている。それ以上にアステロイドベルトの開発を進める合意もとりつけてあった。

「甘いな」

「そうです。実に甘い」

弟のその一言に西園寺の顔がゆがんだ。

「兄上にはその後の立場の保障は無い。留守にはねつかえりが事を起こせば立場は一変、完全に悪者で通用するようになる。もうこの屋敷にも戻れなくなる」

平然とそう言つてグラスを干す嵯峨。そしてその瞳に浮かんでいるのは兄にも見通せぬ闇のようなものだった。

「このまま残つて乱を待つか、どう出るか分からない賭けに出るか俺が決めることじゃない。ただどちらにしろ育ててくれた胡州に不利益になることをするつもりはありませんよ」

そう言つた弟の目に生気が無いのを見て、西園寺は黙り込んだ。
「それなら俺は乱を選ぶしかないだろうな」

「そうですね」

あつさりと肯定する嵯峨。

その時ふすまの外に人の気配を感じた西園寺は立ち上がった。

「新ちゃん」

開いたふすまから西園寺の妻康子が顔を出す。

「ああ、お姉さま」

それまでの余裕を失い口を引きつらせる弟に西園寺は笑いをこらえるのに必死だった。

「新ちゃんはこの家が滅びても良いという考えなわけね」

そう言つて静かに弟ににじり寄る妻を西園寺は見物することに決めた。

「そう言うわけじゃないですけど……」

「嘘！新ちゃんは遼南皇帝でしょ？なら勅書を出してこの対立を収めることくらい出来るはずでしょ？」

そう言つてさらににじり寄る姉に身を固めて動けない弟。貧弱な幼帝だった彼に武術を教え、剣を研がせた師である姉が最大の天敵であることを知っている西園寺にはこれからの行動が見えてついには噴出していた。

「康子さん。あまりいじめないでくださいよ。コイツも事情があるんだ。なあ」

兄の言葉にようやく我に返った嵯峨は静かに身ずまいを整える。

「そうね、じゃあこれだけは約束して頂戴ね」

そう言つて康子は振り向いた。そこには陸軍士官学校の制服を着た娘の要が立っていた。

「要ちゃんに恥ずかしくない胡州を作ること。それだけは約束してね」

姉ににらみつけられる嵯峨。彼には頷く以外の道は残されていないかった。

明石が首相波多野秀基暗殺の知らせを聞いたのは、嵯峨の隠密裏の胡州入国を聞いた三日後の話だった。最新のアサルト・モジュール『飛燕』のテストを終え、機体の評価の報告書を隊長室で入力していたときに慌てて駆け込んできた正親町三条楓の一言にただじっとモニターを見つめていた。

「手口は？」

そう答えるのが精一杯だった。

「遼南の東モスレムのイスラム過激派が良くやる手法です。人体発火による自爆テロで波多野首相以下4名が即死、重軽傷者は100人を越えています」

「ほうか」

それだけ言うと明石は再び新型機の評価のレポートに向かった。ただ入り口で楓が報告を終えても立ち尽くしているのが見える。そして顔を上げてみれば半分開いたドアから部下達が恐る恐る様子をうかがっているのがわかった。

「ああ、下がってもええんやけど」

そう言うが明石を見つめたまま動かない楓。仕方なくレポートを保存した後、明石は立ち上がった。

「首相暗殺。治安部隊の警備体制は完全にテロリストにばれてたんちゃうか？確かに遼州系の人間には地球人にはない力を持っている人間もいるからう。暗殺が議事堂から出たところでって言うが気になるわ。敷地に入るときチェックでアストラル反応検査くらいはやってるはずやから手引きした人間がいると考えるのがふつうなんとちゃうか？」

その言葉は楓の予想していた言葉の範囲内であるらしく黙って明石を見つめながら立ち尽くしている。

「あのなあ、ワシに何を期待しとるんじゃ？」

「これは烏丸派の……」

「わあつとる！」

楓の言葉が出る前に明石は叫んだ。予想された、予告されていた殺人。文明社会だと信じていた胡州でテロを許す体制が存在すると言う事実、明石は打ちのめされていた。彼の仲間達が爆弾にしがみついて敵艦隊に突入してまで守りたかったのがテロが横行するこの胡州の今の状況だと言ったことが腹立たしくてたまらなかった。

楓もさすがに怒鳴りつけた明石に驚いたように身を震わせるが、一歩も引くことなく立ち尽くしていた。

「ほな、ワシはどないしたらええねん。ワシはただの教導部隊の隊長やぞ。憲兵の真似事なんざ出来るわけも無い」

「波多野氏の後任人事は？」

楓の言葉に明石はそり上げられた頭を掻いた。

「あのなあ、ワシは兵隊さんや。政治向きの話ならお前の伯父さんの方がよう知つとるやろ。そちらに話してみ」

「それは無いんじゃないですか！我等に黙ってみていろとでも？」

ここでもようやく明石の部下達が隊長室に入ってきた。彼等は平民上がりである。軍に志願することが今の胡州で平民が出世できる数少ない場である。しかも明石のような西園寺恩顧の上官にかなければただの駒として消費されるしかない。そんな現状を知っている下士官達の顔をそれぞれ見つめた後、明石は諦めたように椅子に座りなおした。

「ワレ等の気持ちは分かった。別所に聞いてみるけ、今回は収めといてくれ」

明石の言葉に安心したように息を吐く楓。部下達に肩を叩かれながら出て行く楓を見送ると明石はすぐに別所に連絡を取り付けることにした。

敗戦と復興で持ち直したのがうわべに過ぎないことはこの帝都でも路地に迷い込んでみればすぐ分かる。明石はこの路地を歩きながら去年まで肩で風を切って歩いた芸州コロニーの闇市を思い出して歩いていた。後ろからついてくるのは是非との意向で部下達を代表してついてきた楓がきよろきよろと辺りを見回している。

「なんや、珍しいんか？」

リラックスしている明石を緊張した面持ちで見上げて無言で頷く楓。だが、明石は別所が会合の場所を選んだ寺に向かって歩みを速めた。通り過ぎる人々も海軍の制服を着た二人をわざとらしく無視している。

明石もかつてはそうだった。

戦争と言う天災に近い出来事で人生そのものを棒に振った気持ちで、ただ地べたを這い回るしかないなどと自分を慰めながら同じ境遇の者同士で寄り集まるのは負け犬だったかつての自分。やっかみと羨望で軍人や官僚達を持ち上げてすごしていた時代を思い出して明石は苦笑いを浮かべた。

「あそこに墓地が見えますよ」

楓がそう言う前に嗅ぎなれた線香の香りに明石は気づいていた。路地を行きかう闇屋や担ぎ屋ではない参拝客を目にするようになると、古びた本堂の伽藍が目に入る。周りのバラックと比べれば確かに瓦がきちんと並んでいる屋根は見事に見えた。だが墓には雑草が見え、塀は破れ、塔婆が散らかっているのが見える。

「荒れてますね。こんな……」

「そないな顔せんといてな。貴族相手の寺やったら別やけど今はどの寺も今はこんなもんやで」

そう言いながら明石は破れがちの塀に沿って門を目指す。門には背広の男が立っており、明石の顔を見ると黙って道をあける。

「大丈夫なんでしょうか」

楓が言うのも当然な話で、男の左胸には膨らみがあり、そこには銃が隠れているのは間違いが無かった。門をくぐると寺の荒れ方がかなり本格的なことに気づいた。襖はつぎはぎで覆われ、柱には大きく傷跡が見える。

そうして入り口には今度は陸軍の制服を着た下士官がライフルを構えて立っている。

「ご苦労さん」

そう言つて明石が頭を下げると下士官は戸惑うように笑った後、奥を覗き込んだ。見慣れない陸軍士官がきびきびと歩いてくる。

「明石清海少佐ですね。それと……」

「正親町三条楓曹長であります！」

直立不動の姿勢で敬礼をする少女に微笑んだ陸軍中尉は敬礼を返す。

「靴を脱いで上がってください。あと、出来るだけ下を見ながら歩いてくださいよ。床が傷ついているので下手をすると靴下をだめになりますから」

そう言つて靴を脱ぐ二人を眺める中尉。警備の下士官は二人の靴を横に片付ける。40足以上の靴が並んでいるところから見てもそれなりの規模の集会であることは分かった。明石も奥に消えようとす

る中尉について薄暗い寺の屋根の下を歩いた。

「来たか！待っていたぞ」

満面の笑みの魚住。黒田の顔も見える。本堂には他にも海軍や陸軍の中堅士官達がスルメをつまみにして酒を飲んでいた。

「君が明石君か。話は聞いているよ」

そう上座から声をかけてきたのは写真では何度も見たことのある人物だった。

「これは醍醐少将！」

明石は身が固まるのを感じた。だが、醍醐文隆陸軍少将は明石が連れてきた楓の方に目が行くと突然立ち上がり楓の前に額づいた。先の大戦では参謀としてアフリカ方面戦線で活躍し、遼南軍の崩壊にあわなければ要衝モガディシオを陥落させたとも言われる人物である。しかし醍醐の視線が隣に立っている楓に動くと急変した。

「これは姫様！申し訳ございません！」

突然の醍醐の懺悔に硬直したままその禿かけた頭を見つめる楓。彼女は視線で明石にどうしたら良いか訪ねてくるようなそぶりを見せた。

「ああ、将軍。頭上げてくださいよ。コイツはワシの部隊の代表で来とるだけなんで」

明石がそう言っても醍醐は頭を上げようとしなない。

「醍醐さん。いつも父上が迷惑をかけています。こんな状況になったのも……」

「いえ！私の独断で未来ある若者達に危険なことをさせているんです！これは……」

「醍醐さん！」

凜と響く楓の声が本堂に響く。苦笑いを浮かべながら土下座する醍醐を見つめていた同志達はその声に呼び起こされるようにして立ち上がった。

「同志の一人じゃないですか！あくまで我々は胡州の変化を作り出すべく立ち上がったんです！」

「そうだ！家柄など無意味！」

「志を持っているんだ、歓迎するよ」

彼等はそう言っただけで楓に握手の手を伸ばしてくる。自分の言葉が呼んだ状況だと言っただけで戸惑うように明石を見つめた後、それぞれの手に握手を返す楓。

「將軍。頭を上げてください」

一通り握手が終わると、楓はまだ頭を垂れている醍醐の肩を叩いた。醍醐はゆっくりと立ち上がり上座に戻って皿の上のスルメを手取る。

「隊長。これは？」

楓は珍しそうにスルメを眺めている。

「ああ、酒のつまみやけど……ああ、ワレはあかんで。酒のつまみやさかい」

そう言っただけで明石は楓からスルメを取り上げて自分の口に運ぶ。

「いいじゃないですか、酒じゃなくてスルメくらいなら」

隣の髭面の海軍大尉がそう言っただけで笑った。

「その部隊章。濃州ですか？」

楓の声に髭面の男は明石越しににんまりと笑顔を浮かべて楓を見つめた。

「ああ、濃州だが。齋藤一実大尉だ。さいとうかずみ濃州分遣艦隊でアサルト・モジュール隊の教導を担当している」

そう言って手を伸ばす齋藤。周りを見回すとリーダー格の醍醐の次ぐらいの年齢でこの場の将校達と比べると二回りは年上に見えた。濃州は胡州のアステロイドベルト開発の拠点とされるコロニー群であり、その領邦領主は先の大戦の海軍を代表するエースとされた齋藤一学中佐を擁していた。彼が戦死した後は女性の領主が立っているはずだった。

「ああ、誤解するなよ。俺も齋藤一門だが庶流だ。と言っても本当は洋子様もこの場に同席される予定だったがこのご時勢だ。俺が名代と言っわけだ」

そう言っつと齋藤はどっかりと本堂の床に胡坐をかく。明石もその隣に座るが、楓は胡坐のかきかたが分からないように何度か足を組みなおした後、諦めて正座した。

「おい！誰か座布団を！」

そんな齋藤の一言で魚住がはじかれたように走り出す。その様子に笑みを浮かべながら齋藤は目の前の酒を飲み干した。

「これで全員だな」

魚住が走り出したのを見てタイミングを計るように別所が立ち上がる。その様子を見て集まった士官達は醍醐の方に頭を向けた。

「同志諸君！残念なお知らせはご存知だろうが波多野卿が凶弾に倒れて一週間が経った。警察は烏丸殿に遠慮して捜査らしい捜査もせず、テロリストは野放しにされている」

この別所の言葉に多くの士官が頷く。

「こうしている間にも、烏丸殿の作った貴族制擁護、官僚擁護の法案に触れるとして多くの志を同じくする人々が囚われ、殺されている現状を我々は看過することが出来ずにこうして集まったわけだ」

その別所の言葉でこの場上官であり一番の民派と呼ばれるようになった西園寺派の領袖である赤松がいない理由が明石にも分かった。これはクーデター計画を練るための会合であると。

見れば士官の中には陸軍のレンジャー部隊、海軍の陸戦隊や空挺部隊の部隊長の顔も見えて取れて、これから話し合う内容が要人略取や施設占拠を目的とする作戦行動を指すと言ったことが読み取れた。「これも清原將軍を討ち取れば話が済むんじゃないか！」

末席ですでにかなり酒が入って赤い顔をしている海軍陸戦隊の少佐が叫ぶ。さすがに極論だと言うように周りの士官達は冷ややかに笑った。

だが、一人楓だけは静かに頷いていた。

「おう、姫様は分かるんだな！」

そんな楓を見つけて不器用な笑顔でにじり寄ってくるその男を睨み返す楓。

「はい、この場で酒を飲みすぎて正気を失うような同志の発言は無視した方が良いことは分かります」

はつきりと言い切った楓の言葉に同志達は拍手と笑いを送る。陸戦隊の少佐は頭を抱えてそのまま席に戻った。

「実際我々が動くか、それとも彼等が動くかは情勢によるわけですが、波多野卿の無念を晴らすためにもそれぞれが同志を募り、策を練り、機会をうかがうべき時であると……」

別所がそこまで言ったとき、杯が砕ける音が響いた。

それは明石の隣の斎藤と言う海軍大尉が床に杯をたたきつけた音だった。

「君達は馬鹿か？」

その一言に場は一拳に緊張した。明石も魚住や黒田の顔に殺気が走るのを見て身構える。

「馬鹿？馬鹿とは聞き捨てなりませんなあ！」

海軍大尉の階級章の男が立ち上がる。それを見ても斎藤はうつたえずに座ったままで彼を見つめる。

「今現在、この胡州をめぐる状況をどうお考えなのか皆さんにお聞かせ願いたい！」

一瞬盛り上がった怒りが急に衰え始めた。黙って周りを眺める明石の目にもその言葉が血気にはやる者たちに十分な打撃を与えるに足る言葉だとわかった。そんな明石を見つけた斎藤は言葉を続けた。「確かに一撃で倒せる相手ならいざ知らず、事を起こせば間違いない胡州の植民コロニーをめぐった大騒乱になることは確実だ。そうなれば先の大戦の傷が癒えないこの国は地球や同盟諸国に切り取られることにもなりかねない。事実、遼南の東海州は嵯峨殿に切り取られたではないか！」

東海州の事象が効果的にこの場の将校達に冷や水を浴びせた。第三惑星の飛び地である東海州は胡州貴族に列する花山院家の領邦であったが、遼南皇帝ムジャンタ・ラスコー、胡州名嵯峨惟基の姦計により切り取られ遼南帝国領にされたのは否定のしようがない事実だった。

「ゲルパルトの独立戦争をめぐり、地球と対立関係にある我が胡州で内乱が起きる。それを待っているのはなにも地球圏の列強ばかりではないということをお忘れいただいては困る」

そう言うつと斎藤は手にした一升瓶に口をつける。

「では、斎藤さんはどうこれからの道のりを考えるおつもりですか」

そんな醍醐の言葉に場の将校達の視線は斎藤に向いた。隣でスルメを口にくわえていた楓が斎藤を見ているのに気づいた明石も自然と隣の中年士官を見つめた。

「なに、時代は我々に風が吹いていますよ。東和も遼南も大麗もこの国の民主化を望み、国民もそれを望んでいる。腐った貴族制は自然に崩れる。それまで国を支えていれば自然と時は満ちるものだ」

そこまでいうと再び斎藤は一升瓶を傾ける。だが青年将校達は納得する様子は無く鋭い視線を斎藤に浴びせている。

「根拠は？どこにそんな根拠がある！」

「弱腰ですなあ！濃州はいつこんな弱腰になられたのか！」

「老人の出る幕ではない！」

叫ぶのはどれも明石より年下。先の大戦を経験したことがないであろう若い士官達だった。さすがに彼等の勢いについていくことは出来ずに魚住も苦笑いを浮かべながら場を眺めていた。

斎藤は黙って酒を飲み続ける。そこに楓が自分に渡されていた杯を斎藤に渡した。

「おう、姫様。いかがお考えですか？」

静かな斎藤の一言。それを聞くと急に青年士官達は黙り込んだ。「そうですね。波多野様を暗殺計画を策定したと自首してきた陸軍将校は完全黙秘していますがすでに烏丸一派であることは分かっていますから。我々が動けば私怨としか国民は見えてくれないでしょう。さらに政治に暴力を持ち込んだことで官派の信用は国際的には低下しています。ここは耐えてみせるのが得策だと思います」

冷静な楓の言葉に場が静まる。青年士官達は小声でささやき会った。

そんな中、明石は醍醐に視線を向けていた。平然と自分を慕う若者達の議論を聞き入っていた殿上人は何も言葉を吐くつもりは無いというように黙り込んでいる。そしてその隣では別所が満足げに楓の言葉に頷いていた。

「ワシは……難しいことをいうつもりは無い」

たまらずに明石は自然と口を開いていた。

「ただ……」

周りの空気がピンと張りつめて明石の言葉を待っていた。その空気に吞まれて一瞬言葉を躊躇するがすぐに明石は気を落ち着けた。

「水がよどめば腐るものですよ。そんなところで魚は飼えない。この国の貴族制度、国家体制がよんだ水のようなものだと思うって皆さんはこの場に集まったのだと思う」

柄にも無く標準語を使おうとして見せるだけアクセントがいつもの関西弁に近づくのに気づきながらも明石は言葉を続けた。

「ワ……いや、私も貴族制度の恩恵を受けてきたのは事実だ。復員してからそれなりに食えたのも貴族年金のおかげ、闇屋を始める手付金もそれで出しました。でもほとんどの復員兵が金も、いや明日の食にもありつけない状況だったのは皆さんもご存知だと思う」

そこまで言って明石は言葉を止めた。周りの同志達は皆それなりの階級に生まれてきた者達である。彼等は庶民の困窮を『見た』と言うがそれがどの程度のもののかは明石も知ることが出来ないことだった。そして明石自身についても闇屋でふざけた値段で取引される食品を買う層などは限られていることは分かっていた。

「だったら変えれば良いじゃないですか！」

明石の沈黙を破る海軍兵学校の制服を着た少年。

「変える？明らかに足りないものだと言うのに……変えれば一皿の団子が二皿になると言うんですか？」

自分でもアクセントがかなりおかしくなっていることは知っていたが、明石は口調を変えずに関西のアクセントのまま話を続ける。

「この国を変える？大いに結構。血のつながりで能力無視で採用された役人、親から領地を引き継いで見たものの管理も出来ない領主、地盤を引き継いだことだけでいつまでも大臣の椅子にしがみつく政治家。それらのほしごをいっぺんに外す？さぞ爽快だとは思

ますよ」

開き直ってそう言いきる明石。同志達とはげとげしい視線を彼に向けた。

「だが本当にそれで変わるんですか？ 国家の持つ最大の暴力機関である軍を動かす。それで変えられるというが本当ですか？」

そう言って明石は手にしたコップの中になみなみと注がれた清酒を一気に飲み下す。そして明石の視線はこの席の主である醍醐の方に向かった。

「それなら明石君は座して死を待つつもりなのかな」

ぼつりと醍醐がつぶやくと座の青年士官達は大きく頷いてそのまま棘のある視線を明石に向けた。

「守旧派を打倒するって言う綺麗なものだ。だがそこで血が流れること。その中には我々が救いたいと思う人の血も混じることになる覚悟を君達はしているのかね」

斎藤が明石の言葉を引き継ぐ。そして彼の言葉で熱狂の中にあつた青年士官達の心が冷やされていくのを明石は見つめていた。

「それが内戦と言うものだ」

そう言ってにこりと笑った斎藤は楓が注いだ酒の入ったコップを傾けた。

内戦と言つ言葉。

それは場の雰囲気を変えるには決定的な言葉だった。血氣盛んな将校たちも斎藤と明石の迫力の前に押し黙った。醍醐もまた上座で黙って酒をすすっている。

「内戦とか……そんなことは私達は……」

「じゃあ何がしたいんだ？テロか？政変か？」

明石がたたみ掛けると言葉を発した眼鏡の海軍技術将校は押し黙る。

「状況を把握する。若い人には難しいのかね……」

杯を干した醍醐はそう言うのと前のめりになって明石達ににじり寄った。

「内戦は避けられないな。辺境コロニーじゃ小競り合いも始まっている。陸軍省にも事件報告が山のようにある。斎藤君。君の濃州も越州の城達とやっているじゃないか」

醍醐の言葉に思わず視線を落とし頭を掻く斎藤を見て明石は改めて国の現状を思い返した。

すでにいくつかのコロニーでは中央に軍籍を返還して帰郷、私財を投じて自警団を結成する動きがあるという噂は聞いていた。

「お嬢様は少し状況を樂觀しているのは事実ですけどね。ただ俺達も黙ってみているほど甘ちゃんじゃないですよ」

斎藤はそう言つて楓が差し出す酒瓶に杯を差し出す。酒が静かに注がれる。辺境コロニーの情報は下士官クラスには秘匿されていた情報だった。場が小声でのささやきあい包まれ、緊張感が同志達に広がる。

「どうやら時間のようだ……すまないな別所君。できるだけ多くのシンパを集めることが第一。情報の共有が第二の課題だ。残念なが

ら保科老人のもたらした平和も一時的なものだったのが分かった今、態度を明確にしていけない連中を一人でも多く困ったほうが今回の戦いに勝つことになる。頼んだよ」

そう言うのと醍醐は立ち上がった。場にいる士官達は立ち上がり、去っていく醍醐の背中を見送った。

「内戦か……」

明石がつぶやくのを周りの将校達が見つめている。それぞれの目に決意と絶望が写っているのを見て明石は昔の自分を思い出した。

『世間に顔向けできないことを始めようというときの面やで、あれは。まあ人さんには顔向けできへんやろな、こんな物騒な話』

そう思うと明石は一番にどっかりと腰を下ろした。

「どうだい、まだ飲みますか？」

斎藤はその正面に座ると徳利を差し出す。明石もニヤリと笑って彼に杯を差し出した。

清原和人は拳銃を手にしながらひたすら走り続けていた。

バラックの立ち並ぶ闇市。帝都でも少し郊外に行けば先の大戦の爆撃で更地になったところに破壊されて居住不能になったコロニーの住人達の難民キャンプばかりが目につくようになる。視察に同行したSPや彼の従卒はすでに清原を暗殺せんと現れたテロリスト達の銃弾でこの世から立ち去っていた。

『波多野さんのことばかり考えているからこうなるのかね』

つい自虐的な考えが回ってきて息を切らしながらも口元に笑みが浮かぶのを感じていた。

すでに事態は暴力の応酬へと向かっている。それは以前の正親町三条邸の会談の時にはすでに自覚していた話だった。事実、下町探訪を趣味としている西園寺基義は帝都の自宅から一步も出ず、その邸宅の付近には私服の西園寺派の軍人や警察官が張り付いてハリネズミのように武装しているのは知っていた。

元から平民の出、保科家春と言う酔狂な政治家に拾われなければ良くて少佐になれば奇跡だったろう。そしてそれならばぎらぎらした視線で帽子を失い、ひざに転んだ時の泥がたつぷりといった准将の制服を着たまま難民達から白い目で見られながら逃げ惑う今の自分は無かった。

『追え！逃がすな！国賊め！』

清原を襲った西園寺派の過激分子と思われる海軍の制服の士官達の声が遠くに響く。

『今……死ぬわけにはいかんだ。今は……』

米屋のトタン屋根の脇を抜けて倉庫と呼ぶには粗末過ぎる建物の脇でようやく人目から離れることができて安心したように清原は柱を背に座り込んだ。

『探せ！時間が無いぞ！』

相変わらず市場の雑音に混じって響く襲撃者の激。清原は手にした銃の薬室に弾が入っていないことに気づいてスライドを引いて弾を装填した。

『もはや保科卿の死は時間の問題だ。こちらも波多野首相暗殺を見るように過激な分子の制御は不可能だ……どうなるんだこの国は……』

自分や彼の主の烏丸頼盛が始めたはずの西園寺派との政争は二人の思惑から外れた次元へと移ってしまった。そしてその争いはどちらかが斃れるまで続くことも、憲兵隊の到着を知らせるサイレンを聞いて声を潜めた西園寺シンパの襲撃者達を見るまでも無く分かっていたことだった。

「清原將軍！ご無事でしたか」

憲兵隊の下士官が小銃を手にしながら倉庫の隅の穴から身を乗り出して声をかけてきた。

「ああ、なんとかな」

そう言うつと一代貴族とは言えいつもの貴族であると言う自覚が立ち上がる自分に生気を与えてくれるのを清原は感じていた。

「没収だ！この区域での食品の売買は禁止されているはずだ！応援を呼べ！摘発するぞ」

大通りから救護に來た憲兵隊の隊長らしき男が手のサーベルを引き抜いて闇屋に群がる市民達を威圧している。彼の部下達は背に山のような食料を背負った帝都から來た市民らしき男女から荷物を没収していた。

「あれは何とかならんのか？彼等も食うために必死なんだ……それに……」

「いえ、例外は認められません。すべて没収し焼却処分にします！」

清原が肩を貸してくれた下士官に声をかけたがその返答は残酷なものだった。

『どうせ焼却処分といいつつ横流しをするのだろつな……秩序だ。』

この国には強力な秩序が必要なんだ……」

次々と闇市の物品を応酬する憲兵隊の手際を見ながら清原はそう
思っ唇を強く噛んだ。

「丸腰で歩けと？」

別所の言葉に黙って赤松は頷いた。赤松の私邸に集められた別所晋一などの腹心達は苦しそうにシンパの公務以外での銃等の携帯を自主的にやめると言う言葉に耳を疑った。

「元はといえば波多野首相暗殺を行なった官派の連中が悪いんじゃないですか？なんだって急に……」

広間の下座から立ち上がって赤松の前にどっかりと腰を下ろした魚住の言葉に明石も頷いた。

「昨日、清原准将が襲われたんやて。犯人は海軍の将校や言うところだ」

「やるなら首を取るところまで行くべきだな。中途半端だからこういうことになる」

魚住について上座に上がりこんできた黒田はそう言うのと腰のベルトから拳銃の入ったホルスターに手を伸ばす。

「今は微妙な時期だ。波多野首相の後任は……さすがにもう西園寺卿も逃げられないだろうしな……」

赤松のそばに座っている別所と明石も仕方なく腰のベルトに手を伸ばす。それを見て第三艦隊を中心とする赤松恩顧の士官達も渋々腰のホルスターや軍刀に手を伸ばした。

「ですが……このまま済むと思いますか？」

別所が銃と太刀を目の前の畳の上に並べながらつぶやくと赤松の表情はさらに渋いものに変わった。

「大の男がぐちぐち言うべきでは無いんではなくて？」

庭園に面した下座の廊下から聞こえる声に将校達は振り返った。

赤松の妻、貴子が家人を連れて酒席の準備のためにそこに立っていた。清原の右腕とされる安東貞森大佐の姉に当たる彼女の言葉に士官達の顔の表情は冴えない。特に気の短い魚住ははずした太刀に手

を伸ばしていた。

そんなぴりぴりとした空気をものともせず、質素な小紋の留袖を振りながら彼らの間を悠々と歩いて夫の前までやってきた貴子はその冷たい感じのする面差しを急な武装解除命令に冴えない表情を浮かべている若者達の前に向けた。

「軍に奉職している以上、常に危険はつき物。死は覚悟している皆さんがなぜそんなに拳銃や刀を持ってないくらいで悩むのですか？それに今回の話は私的な会合などでの武装を禁止するだけの話じゃないですか。東和や大麗では勤務時以外の武装は禁止されてますわよ。これまでの胡州が異常だったんではなくて？」

貴子の言葉に誰も文句をつけるものは無かった。それぞれの前に酒と肴が置かれていく。その様を見ながら少し満足げに妻を見上げる赤松。

「そう言う事や。こちらから仕掛けて反乱分子の汚名を買ってもしやあないやろ？今はひたすら我慢比べや。西園寺卿もさすがにここまできたらいつまでも裏方と言うわけにいかんくらいの分別はあるやろし、烏丸はんの手のものも次にワシや醍醐はんが襲われたらよそさんに顔向けできへんようになることくらいわかつとるやろ」

そう言つと赤松は静かに杯を手にする。微笑んだ貴子は静かに家人から徳利を受け取ると赤松の杯に酒を注いだ。

「次はどう出るか……」

別所はつぶやきながら静かに女中からの酒を受け取る。明石もその様子に安堵しながら同じように杯を手に掲げた。

赤松の指示は愚直に実行に移された。彼らを襲撃するものが無いのは陸軍・海軍の憲兵隊の監視によるものと明石は気づいていた。現にいつもどおりの訓練を終え帝都西城基地でアサルト・モジュールから降りてそのまま着替えをするために更衣室にたどり着く間に憲兵章をつけた兵士と5人もすれ違うことになった。

「父上の配慮でしょうか？」

更衣室から出てきた明石を迎えた楓はそう言うのにこりと笑う。あまり笑顔と縁がないと思っていた少女の表情の変化に明石も苦笑いを浮かべた。

「ワレの親父さんが憲兵隊に在籍していた時期があつたのは知ってるけど……今でも影響とかあるんか？」

そんな明石の言葉にあいまいな笑みを浮かべる楓。

「おう！いたか！タコ！」

「誰がタコやねん！」

突然背後から声をかけられて明石はその声の主の魚住の頭を思い切り押し付けた。2メートルを超える長身を誇る明石の手を載せられてもがく魚住。

「魚住中佐。何か事件でも？」

「ああ、正親町三条の嬢ちゃんも一緒か？なら話は早いな。端末を起動してくれ」

明石の手を振り解いた魚住の言葉に二人は腕の端末を開いた。休憩所にたどり着き、各種のデータを検索したがそこに出てくるのは一人の男の話題だった。

「とうとう腹を決めてくれましたな」

画面で演説をする男。西園寺基義の姿に明石は安堵しているようなため息をついた。

「そうだな。とうとう本命が出てきたわけだ。こりゃあ荒れるかも

しれないな」

じつと画面を見つめている楓を一瞥すると魚住がそう言って明石を見上げる。巨漢の明石から比べればかなり小柄な魚住。そんな魚住の向こう側にも広がるパイロットの待機室には数多くの先客がいる。誰も彼も自分の端末に目をやり緊迫した状況に頬を震わせている。

『……であるからして。同盟諸国との連携を図る必要があると考えるわけです』

「ふざけるな！」

一人のパイロットスーツの将校が腕の端末を取り外すと床に投げ捨てた。周りの人々は彼に目をやる。同調するようなそぶりを見せるもの、嫌悪の念を視線に乗せるもの。

明石はすでに矢が放たれたのを感じながら呆然と自分を見つめている魚住の方に向きなおった。

待合室の空気が魚住に流れていた。赤松提督の子飼いの士官として名の売れている明石と魚住。明石は教導部隊の隊長としてこの場においても自然だったが、その明石に魚住が会いに来ていることがこの場にいる烏丸派の将校達の視線を厳しいものにした。

「同盟との連携だ？なんであんな連中と手を組まにやなんのだ？」

「やってられるか馬鹿野郎。とつと政治犯扱いで刑務所に放り込めよ」

端末を壊した士官の肩を叩いていた同僚達が明石達を見ながらつぶやいているのを聞いてこぶしを握り締める明石の背中を魚住が叩いた。

「挑発には乗るな。分かってるだろ？」

心配そうな楓の表情を見て明石は勤務服の胸のポケットからサングラスを取り出してかける。

「そやな。年金頼みの貴族連の腰巾着の……」

そこまで言ったところで端末を壊した士官は明石に走り寄っていた。彼が振りかぶった右のこぶしはすでに殴る体制のできていた明石には無意味だった。明石のストロークの短い左のジャブがパイロットスーツの士官の腹にめり込んだ。彼は何もできずにその一撃で意識を失い倒れこんだ。

「弱い犬ほど良く吼える……真理やなあ……」

さつと背筋を伸ばした明石。仲間を一撃で倒されて烏丸派の残りの二人の将校は後ずさりながら明石を見上げた。もともと闇屋から裏家業での生活の長い明石はこういう時の喧嘩の仕方は良く心得ている。そしてそれ以外にも二人の将校が読み間違えていることがあった。

「どこで喧嘩をしてるか分かっているのかねえ」

「やつちまつて良いですか？」

「赤松公の慈悲で丸腰なんだよ俺らは。ついてるなお前等」

自動販売機に並んでいた技術士官やエアカーテンの中でタバコを吸っていたパイロット達。彼らも多くは赤松恩顧の兵士達だった。倒れた同僚を助け起こすこともできずに取り囲まれる二人。

「止めや！リンチはいかんで。なあ」

余裕の笑みで明石が二人を見下ろす。冷や汗を掻きながら状況を見守っている二人に魚住は気を利かせて気絶をしている最初に手を出した将校を抱えて手渡した。

「すまないねえ。明石は極道モンだから加減を知らなくて……」

そう言つてにやりと笑う魚住を見るとすぐに二人はようやく意識を取り戻して唸り始めたパイロットスーツの士官の肩を取るとそのまま引きずって廊下へと消えた。

周りの西園寺派の将校達は納得したようにあたりに散る。そんな様子を楓はただ呆然と見守っていた。

「お嬢。このくらいでびびっとしたらいくら心臓が丈夫でもおかしくなるで」

「いえ、殴つても良かったんですか？ああ言う手合いは。僕はその……判断がつかなくて……」

そう言つて笑いながら指の関節を鳴らす楓に明石は改めて彼女があの嵯峨惟基の娘であることを確認していた。

「忠さ……いや、赤松の動きは早いですね」

陸軍省参謀局次席参謀の執務室。ソファーに腰掛けた安東貞盛大佐はそう言つて部屋の机の主に声をかけた。

「そのくらいのことをしてもらわなければ命がいくらあつても足りないだろ？ なんなら君の手のものに護衛をしておらおうかね」

清原和人准将はそう言つて自分が追放解除に協力した片腕に苦笑いを浮かべた。

「ですがこちらから仕掛けるにはこの措置はちよつと厄介ですよ。それに西園寺卿と言う魔物まで復活してきた状況は決してこちらには有利な状況とは言えませんから……」

そう言つと安東は長い足を組み替えて清原を見上げる。

「なに、今の状況で政権を握ることは西園寺さんの派閥には不利な点が多いんだ。どうせ在地球資産の凍結は解けるわけではないしそれが解けなければ国家の破綻寸前の財政の回復は望めないんだ。その為にはこの国の力をすべて中央に結集する必要がある」

清原の言葉に大きいため息をつく安東。彼は正直なところこの軍籍回復に努めてくれた恩人である清原を好きにはなれなかった。清原和人という男。保科家春に見出された下級貴族出の俊才は確かにその軍政家らしい判断のできる人物だった。

軍事は政治に付随するものだ。そのことは予科時代に今は敵となつた赤松や無茶な量の課題の作成に協力してくれた嵯峨などと机を並べていた時期に教官から叩き込まれていた。そして先の大戦ではエースとして人型兵器アサルト・モジュールパイロットとして活躍するものの拙い政治判断で次第に悪化する戦線を見た彼にとつて清原の手腕は賞賛に値する功績をいくつも上げたことを知っていた。

だがどこまで言つても清原は参謀本部の人間だった。

正直、安東は追放解除で軍籍を回復した時に比べてこれほど清原

が忠義を尽くす烏丸派が勢力を獲得できないとは思ってはいなかった。牙城である陸軍はアフリカで勇名をならした醍醐准将が発言権を強めていた。さらに醍醐と同じ嵯峨家の被官達の多くは態度を鮮明にしていない。それに流されるように西園寺基義の貴族特権の返上運動に危機感を募らせているはずの多くの将校達も表立って自分達を支援する動きは見せてはいなかった。

「……このひどい財政状態を回復する策が無い以上、アステロイドコロニーでは乱が起きる。そうなれば……」

清原が続ける希望的観測の演説を諦め半分に安東は聞いていた。

例え烏丸卿が政権を握っても国家の現状が変わらないことは安東も百も承知だった。おそらく一人で自分に向けて演説を続けているこの部屋の主もそれを否定することはできないだろう。それどころか烏丸派が掲げる政策である貴族制度の再編成による強固な国家体制の確立は地球や同盟にとっては脅威以外の何物でもなく、この国は孤立したまま両者との軍拡競争にひた走りさらに財政の悪化を招くのは必然だと思っていた。

「……安東君。私の話を聞いているのかね？」

少し不快そうな顔で清原が安東の顔を見下ろした。

「ええ、まあ……」

曖昧な返事をする安東。

だが、彼は決意を固めていた。清原には軍籍回復に努めてくれた恩義がある。そして烏丸家には幼いころ父母を失い姉と二人の後見として動いてくれたおかげで今がある。

『すまんな忠さん。俺は最後までこの御仁を支えることにするよ』

安東は旧友赤松忠満とその妻である姉貴子のことを思い出しながら演説好きな清原を黙らせるためにゆっくりと立ち上がった。

「どうしたんだね？」

機嫌を損ねた清原の言葉。だが安東にはそれを続けて聞くつもりはなかった。

「申し訳ありません。これから午後のブリーフィングがありますの

で
「

仕事となれば文句は言えない。への字に口を曲げた上官に敬礼を
すると安東は部屋を後にした。

わざわざ恩人に会いに来た安東にブリーフィングなどの予定があるはずが無かった。ただ陸軍省の参謀級将官の執務室が並ぶ廊下を一人歩く安東。突然腕の携帯端末が着信を告げたとき、恩人への態度が失礼だったことを思い出して苦笑いを浮かべながら受信に切り替えた。

空間に開く画面。そこには懐かしい顔があった。

『おう、忙しそうだな』

着流し姿の上半身が見える。嵯峨惟基は画面の向こうで半笑いで不愉快そのものと言う表情の安東にだるそうな笑みを投げてくる。

「そういうお前はすいぶん暇なようだな。皇帝と言う職業はそんなに気楽なものなのか？」

安東の皮肉に額を叩くと嵯峨は手にした杯を傾けた。

「ああ、皇帝家業はしばらくは弟達が変わりにやってくれてるよ。同盟成立までが俺だからできること。後のことは優秀な政治家さん達に任せることにしているからねえ」

嵯峨には腹違いの兄弟が百人以上いる。そんな中に影武者を務めている者がいることは安東も耳にしていた。

「それよりどうせ清原さんと喧嘩でもしたんじゃないかその面は。まああの人は頭と口が先に動くばかりの人だからな。まじめな貞坊には見てられねえだろ」

自分のことを『貞坊』と呼ぶ竹馬の友の言葉に曖昧に頷く。

「どうせ暇なら酒に付き合えと言っただろ？分かった。どこで飲んです。上町か？」

諦めてそう言った安東を満足そうに見つめる嵯峨。背景の掛け軸の艶画から見て色町として知られる上町のそれなりの店で飲んでいられるらしいとあたりをつけた。

「正解だ。さすがだねえ……そういえば明日は斎藤の命日だしさ。

飲み明かすのも悪くないんじゃないか？」

「そうか……そんな日だったな」

斎藤一学。軍人志望の貴族子弟を教育する機関である『胡州高等予科学校』時代の安東と嵯峨の親友の一人だった。いつも今は敵である赤松を加えた四人で馬鹿なことばかり続けていた学生時代。喧嘩や悪戯では安東と赤松が一番後先考えない行動でどちらかと言えば押さえ役の斎藤を苦勞させたものだった。そして騒動がばれて呼び出されるのは三人だけ。一番暴れていた嵯峨は要領よく逃げおわせて一人窓の外から説教を受ける三人を笑って見つめていたのが懐かしく感じられた。

その三人も先の大戦ではそれぞれの道を歩むことになった。

非戦を唱える西園寺家の出と言うことで中央から忌み嫌われた嵯峨は東和共和国大使館付き陸軍武官に飛ばされそのまま中央に戻ることは無かった。一方で安東は陸軍のパイロットとして華やかに活躍し、何度と無く戦意高揚のための線で映画に登場することになった。同じく駆逐艦の艦長を任された赤松も地球などからの撤退戦では輸送艦の兵士達から『守護天使』と呼ばれる活躍を見せた。

そんな中、斎藤もまた海軍のパイロットとして活躍を見せていた。予科時代からの甘いマスクとすでに歌壇で注目され始めた歌人としての人気は絶大で胡州の少女達は彼に応援の手紙を送るのがブームになるほどだった。

だが、冥王星域における最後の撤退戦で一人敵陣に突入した彼は帰還することは無かった。三年後にデブリを回収していたリトニアの業者が斎藤の愛機の97式を回収しその中から酸欠を恐れて拳銃自殺した斎藤の遺体を発見したことを安東は昨日のことのように思い出していた。

「大佐、車はどこに回しましょうか？」

田中と言う従卒。半年ばかり安東を担当しているこの青年下士官の気配りが最近うれしいと思うようになってきていた。ロビーには陸軍幹部との接見を求める格地区の防衛部隊の幹部連とそれに付き従ってきた士官達であふれていた。

「今日は隊には戻らない。タクシーを拾うから先に帰っていてくれ」

そんな安東の言葉に嫌な顔ひとつせず敬礼するとそのまま自動販売機に向かう田中。安東はそのまま階下へ向かうエレベータを待つことにした。ちらほらと振り返るとロビーでは相変わらず烏丸派と西園寺派の将校達が談笑を続けていた。部隊の幹部連中と言うことで明石から聞いている若手将校の小競り合いのような殺気だった雰囲気は無かったがそれぞれに相手を意識しながら小声で話し合っている。その内容がお互いの悪口に終始しているだろうと思うと安東の気持ちは憂鬱になった。

「大佐これを」

エレベータが開いて乗り込もうとした安東の背中に声をかけてくる田中。彼の手から缶コーヒーを手にして軽く笑みを浮かべると一人で安東はエレベータに乗り込んだ。扉が開くと静けさが狭い箱の中に広がる。そしてそこは思索に向いていると安東は思っていた。どおりこれから会う一国の皇帝のことを思い出した。

嵯峨は昔から気が付く男だった。

高等予科の学生時代から俊才として知られた嵯峨。何をやっても完璧にこなし、それでいていつもふざけているような表情で教官達をからかい続けた食えない男と言うのが安東の嵯峨と言う男の感想だった。授業中は寝ていることもあるが多くの教室にいないことすら多かった。安東も何度か屋上で胡州の赤い空を見ながら居眠りを

している嵯峨を起こしに行ったものだった。それでいて常にテストとなると首席には常に嵯峨の名前があった。

『教科書一回読めば大体のことは分かるぞ』

得意げにそういう彼に安東がカンニングペーパーの作成を依頼したことは一度や二度では無かった。まじめな斎藤は別として安東と赤松の二人は多分嵯峨がいなければその後士官学校への入学は無理だったと正直思っていた。

そしてそんな予科を出ての進路を考え出したとき、斎藤が上町の芸者に入れ込んでいると言う話を聞いた。

斎藤はともかく胡州の女学生には名前が通っていた。喧嘩と悪戯でワルと呼ばれていた安東達と付き合っているというのに斎藤の評判はどこでも悪いものではなかった。特に歌壇でもてはやされるようになった17のころからは男ばかりの高等予科の校門の前に斎藤を慕って来た近隣の女学校の生徒達を見るのは珍しいことではなかった。だがいつの間にか斎藤は悪友の嵯峨や赤松、そして自分達と一緒に嵯峨の兄、西園寺基義のコネで出入りが許された上町の料亭に入り浸るようになっていた。さすがに遊び人で知られていた外交官である西園寺基義も未成年に座敷遊びを教えることはしなかったが、そんな中でいつの間にか一人の売れっ子の芸者が斎藤に付きまとうようになっていた。

斎藤から彼女の身請けの話の相談を受けたあのころ。部屋住みの悲しさで金の工面が付かないことに気づいて泣きじゃくる斎藤をなだめたあの時の嵯峨の落ち着いた顔が思い出される。

「あのころは……あのころには戻れないんだな」

そう独り言を言ったときエレベータの扉が開いた。仏頂面の醍醐文隆とその取り巻きが見えた。

「どうも……」

何を言っているのか分からないまま頭を下げた安東に醍醐の取り巻き達が下品な笑いを向けてきた。安東はそれを無視するとそのまま陸軍省の正門へと歩き始めた。

安東は三味の音を聞きながら夜まだ早い料亭の庭を横目で見ながら廊下を歩いていった。こんな緊張した時期だというのに客は多い。だが安東はこれからの死を覚悟しているように遊びに夢中の士官達を責めるつもりは無かった。嵯峨達と飲んだ座敷は決まっている。足は案内の赤い振袖の少女に無意識についていった。

「こちらです」

少女はそう言うと言ふすまの開いたままの座敷の前に座った。いつものように少女に駄賃をやらうと勤務服のポケットに手を入れながら中を覗き込んだ安東の手が止まった。

「なんや……貞やんやないか」

驚いた表情の赤松忠満。海軍の制服に驚いて酒を少しばかりこぼした赤松の袖を懷から出した手ぬぐいで拭くのはかつて斎藤が愛した芸者トメ吉だった。

「トメさん。ええって……それより久しぶりやな……」

少女に駄賃をやつてふすまを閉めさせて用意された膳の前に座る安東を驚いた様子で見つめている赤松。それを見ながら安東は一人三味線をいじっている嵯峨に目を向けた。

「そついうことだ……っとこれで良いんじゃないですかねトメさん」

昔と変わらず慣れた様子で三味線の音色を合わせる着流し姿の嵯峨。だがその隣にはここに来ることの無い客の膳がすえられていた。そしてその手前には予科時代の帽子を斜に被って身構えたような表情の斎藤一学の遺影が置かれていた。

「おみっちゃんは元気ですか……」

安東は斎藤の落とし胤の少女の話題をその母トメ吉に尋ねた。

「ええ、先月は久しぶりに帰ってきてくれて……洋子さんとも仲良くしてくれているようで」

そう言つとすぐに安東の手にした杯にトメ吉は静かに酒を注いだ。
「新の字が珍しく差しで飲もうなんて言うからどんなことかと思えば……お互いそんな立場になつたんだな」

赤松は静かに杯を干すとトメ吉にそれを差し出す。

「世の中変わるもんさ……まあ変わらないのはトメさんが相変わらず別嬪だつてことくらいかな」

「まあ、お上手なんだから！新さんは」

嵯峨がまだ西園寺家の部屋住みの時代の西園寺新三郎だつた時代。ここはまさに安東達の城だつた。学校を休んでこの部屋に居座つて酒を飲み続ける。そしてたまにこの店にツケを残している会社の重役のところに制服のまま尋ねて勘定を済ませるような付き馬まがいのことも何度かやつた。

「まつたく変わるもんだな」

そう言つて安東が杯を差し出すとトメ吉はそのころの一番の売れっ子だつたときを思い出させる笑顔で酒を注いでくれる。

「そうだ！今日はこの大事な会に欠席している不埒者がいるからその分の分はトメさんに飲んでもらいましょう」

嵯峨は思いついたように斎藤の膳の上から杯を取るとトメ吉に差し出す。

「いいんですか？私、飲んじゃいますよ？」

あのころには無かつた妖艶な笑み。安東は流れた時間を思い返すように徳利をトメ吉に差し出した。

「おつと手が早いのが。貞坊は昔からこれじゃ。本当に隅に置けんわ……恭子はどないしとんねん」

ニヤリと笑う赤松の顔を見ると安東の表情は曇つた。赤松の妹で今は安東の妻である恭子。その病状を思い出すとどう赤松に説明すれば良いのか悩んだ。

「すまん。しばらく家には帰っていないんだ。ただ最近はおさぎこむこともあまり無くなって色々話をしてくれるな」

「そうか……」

安東の言葉に安心したように頷くと赤松はゆっくりと肴の寄せ豆腐に箸を伸ばす。

「まあ忠さんと言えば相変わらず尻に敷かれているみたいだな」

「そないなことは……」

「無いのか？」

ニヤニヤと笑う嵯峨に突っ込まれて一人うつむく赤松。そんなやり取りはそれぞれが現在の胡州を取り巻く政治状況を演出している人材であると言うことを忘れさせるほど和やかなものだった。トメ吉も安堵したように漆が赤く輝く酒器で安東の杯に酒を注ぐ。

そんなトメ吉に笑顔を見せた後、すぐに安東の顔は真剣なものに変わった。

「それはそれとしてだ」

安東は杯を膳に置いて静かに嵯峨を見つめる。

「俺達を会わせた。もしかして仲直りさせるとか言うつまらない話じゃないんだろうな」

低くこもった安東の声。嵯峨は杯をあおり静かに目を赤松に向ける。

「そないに単純な立場ちゃうこと位はわかつとるわなあ……あれか？最後の酒席を見たかったんか？」

赤松の問いにも答えることなく遠慮がちに一步下がったトメ吉を一瞥した後、嵯峨は横に置かれた斎藤一学の遺影を手についた。

「俺達……馬鹿をやっていた時代があつて、あの戦争があつて、それから色々あつて今の立場だ。貞坊は今や陸軍じゃあ英雄だ。忠さ

んもどうして海軍や庶民には人気の人材。そして俺は遼州を率いる新星とか言われて持ち上げられてる」

そう言うつと嵯峨はわずかに残っていた杯の酒を飲み干した。赤松も安東も黙ったまま着流し姿のこのような店には似つかわしくない風情の男をじつと見つめている。

「でも俺達のどこが変わったんだ？ 斎藤の奴の戦死。おれは遼南で遼北の機甲師団を前にして無様な大敗を喫する直前に聞いたんだが……泣いたよやっぱり。不死身の憲兵隊長とか『人斬り新三』とか呼ばれていきがってたけど結局は中身は何にも変わっちゃいないんだ」

嵯峨の言葉に安東は静かに頷いた。赤松も黙ったまま膳の上に視線を走らせている。

「お前さん達の喧嘩。最後まで看取るのが俺の仕事なのかもしれない……だから言わせてもらうよ。勝負は一撃で決めてくれ。長引けば長引くほど俺は遼州同盟を抑えるのが難しくなる。にらみを利かせても地球軍の介入を抑えるのも限界がある。俺からのお願いはそれだけだ」

そう言うつと嵯峨は再び杯を手を取った。トメ吉はその空の杯に酒を注ぐ。沈黙が場を支配することになった。

沈黙する中、三人はそれぞれに酒をすする。誰一人話しかけることを知らない。そんな男達に愛想を尽かしたようにトメ吉は三味線を爪弾く。その調べがむなしく響く中で時だけが静かに過ぎた。

「あいつがいたらどう言うだろうな……」

安東の言葉に視線は自然とトメ吉に向いた。彼女も困惑したように作り笑顔で答える。

「分かんねえよ！俺には！」

そう叫ぶと立ち上がってそのままふすまを開いて庭に飛び出した嵯峨。あっけに取られて見守っていた安東達だったが一人ずつと立ち上がったトメ吉がそのまま廊下にまで出ると振り返った嵯峨の頬を平手で打った。

「甘えるんじゃないよ！男だろ？覚悟を決められないなら男を辞めちまいな！」

急激なトメ吉の変化に三人は呆然としていた。しかしその沈黙も安東の爆笑で途切れることになった。

「そりやいいや！新三！テメエはよく女物の着物を着てタバコをくゆらしてただろ？あの時みたいはこの店で居残りを決め込んだらどうだ？皇帝なんてくだらねえ仕事なんて捨てちまってさ！」

「そうやな。……ワシも付き合って海軍辞めたるわ。安東も付き合いで部屋で暇するのもええやろ。なあ？」

三人は笑い始めた。安東も嵯峨も赤松もそんなことができないのはわかっていて。でもそれでも今はそんなことを空想して楽しむことくらいしかできない。恐らく止めることのできない対立の構図の中、安東と赤松の二人が生きて再会することが無いことも二人とも分かっていた。

「それじゃあ飲むぞ！トメ吉さん、他に空いてる娘はいないの？」

「あら、年増のお酌は嫌でありんすか？」

昔のおちゃらけた人気芸者の姿がそこにあつた。

誰もが明日を忘れたい。その思いでこの店で酒をあおる。そんな退廃的な享樂におぼれるのも良いだろうと思ひながら三人は酒をあおり続けた。

「ああ……予想はしとったけどなあ」

明石は教導部隊の隊長室の机に足を乗せて目の前の端末を眺めていた。隊員達も席に座ってそれぞれに端末に目を走らせていた。流れているのはニュース。そこでは越州鎮台府の城―清大佐が西園寺政権を認めずに籠城に入ったと叫ぶアナウンサーの声が響いていた。「やはりあそこは動きますが……恐らくつぶしにかかるとしたら濃州ですよ」

ソファ―に腰掛けて楓が茶を啜っている。「濃州」と言う言葉に明石の顔はさらに苦々しいものへと変貌した。

「まあある程度予想してた話やから。城はんと言えば清原はんの数少ない親友ちゅうことになつとる。恐らく囧を頼まれたんやろな」
「囧？」

少し不思議そうな表情を浮かべて自分を見つめてくる楓にまだ予科の初等科と同じ年だという幼さが見えて明石は苦笑した。

「今、城氏討伐に動ける軍は限られとる。赤松はんの第三艦隊、醍醐はんの近衛師団のどちらかやろなあ。池はんの四条畷鎮台は国際宇宙港の防衛が一番の優先課題やさかい動かんちゃうか？どれも西園寺はんにはお世話になつとる方々や帝都を西園寺派が留守にすることになる」

明石の言葉に楓は納得したように頷いた。

「赤松公が動けばそのまま首都防衛が主任務の佐賀高家侯爵の強襲戦術部隊で帝都を制圧。そのまま比較的清原氏に近い立場の池氏の四条畷港から宇宙に上がって第三艦隊を挟み撃ちにするわけですか」

納得したように楓はうなづいた。

「ただそうすると問題は南極基地を醍醐はんの部隊が制圧するのにどれだけ時間がかかるかやな。池はんは先の大戦ではたいした功は

あげてないよって必死で来るで。しかも醍醐はんは徹底的にお人よ
しやさかいのう」

明石はそう言々と天井を見上げた。

「出撃準備は必要でしょうか？」

「まあ心の中だけにしておいたほうがええやるな。実際何事もあら
へんのが一番や」

そう言いながらも明石は半分以上このまま動乱が始まるのを予期
していた。そしてそれを心待ちにしていたような自分にも気が付い
ていた。先の大戦。特攻隊の隊長として死ぬはずだった自分が今ま
で生きてきたことに時々後悔する自分に驚く日々。そしてその意味
を見出せるような今回の政治と軍事の混乱。

『死に場所を見つけたんとちゃうか……』

心の中でそう思いながら真剣な視線を浴びせてくる楓に笑顔をこ
ぼした。

赤松忠満准将は第三艦隊司令室で画面の中のかつての友に苦い表情で接していた。

「俺は知らん」

先日飲み明かした安東貞盛はそう言う下を向いた。

「あのなあ、ワシは貞坊を責めるつもりで言うてるわけやないで。清原はんのすることに色々言いたいのはほんまやけどそれをすべて貞坊が把握し取るとは思ってたわい」

時に激しそうになるのを抑えながら赤松は言葉を続けようとして口ごもる。

越州コロニーの鎮台府の艦隊が濃州に向かっていることは二人とも知っていた。そしてその濃州は二人の親友だった斎藤一学の領邦であり、今は彼の妹の明子や忘れ形見のトメ吉の子光子が住むコロニーとして思い入れのある場所だった。

「城さんがあそのコロニーに含むところがあつたのは昔からだ。そして清原さんは城さんとは親しい。俺がどうこうできる関係じゃないんだ」

そう言い訳をする画面の中の友。赤松も知っていた。安東がどうこうできる話ではない。確かに安東の『胡州の侍』の異名は烏丸派の陣営を固めるために宣伝されている重要な売り文句のひとつだった。そして彼を慕う多くの士官達がそんな安東を持ち上げており、その様子が清原准将が一目置いているのは事実だった。だがそれは大局を動かすほどのことではなかった。

胡州はテラフォーミング化した遼州星系第四惑星と二つの衛星、そして衛星軌道上の十七のコロニー群と明日テロイドベルトの二十三のコロニー群で構成されている。物資を東和や外惑星コロニーに頼っているアステロイドベルトコロニー群では烏丸派の支持は少なくその中で越州は孤立していた。しかし、他のコロニーの防衛艦隊

は現在外惑星の動乱の仲裁のためはるか遠くに展開している。その状態で烏丸派の清原准将が親友の城一清提督に決起を依頼することは別に不思議な話でもなかった。

「どうしても……どないしても戦争にしたいんか？戦争がそんなに好きなんか？貞坊……」

答えなど求めていないと言うように赤松がつぶやく。

「すまん」

それだけ言うと安東は通信を切った。

「一人で苦しむなや……苦しんでどないすんねん。洋子や光子を殺すことになるかもしれへん城さんの行動を阻止でけへんことはお前のせいやないんや」

赤松はそう言うのと伸びをした。執務室の応接用ソファーには赤松の片腕である別所が静かに座っていた。二人の目が合う。そして大きなため息が赤松の口から漏れた。

「ご心中お察し……」

そこまで言つて別所は言葉に詰まった。一人顔を下げて目をこする赤松。上官の涙を初めて見た別所は当惑していた。

「ええよ、氣いつかわんでも。どうしようもないことは世の中色々あるやん」

赤松は顔を起こした。目は赤く染まっているのが別所からも見える。

「ですがどう動きますか？恐らく討伐隊には第三艦隊が選ばれるでしょうが……」

「清原さんは動くやろな。ワシ等が離れば決起の好機や。見逃すほどアホやないやろ」

そう言つてそのまま椅子に身を投げて伸びをする赤松。その様子を見て赤松がかなり悩んでいることに別所は気が付いた。

「でも良いんですか？閣下の奥さんは……」

「貴子さんのことは言つても無駄や。あの人はワシより男らしいよつて。『情に流されるなら死になさい』と言われるのが落ちなんぢやうか？」

安東貞盛の姉に当たる赤松忠満の妻貴子。凜として常に武家の妻を演じている彼女の姿を見慣れている別所も赤松の言うことはもつともだと思つていた。しかし、問題はさらに複雑だった。赤松の妹の恭子は安東の妻だった。彼女は心が弱く、輿入れ後は長いこと床に伏せていた。

「言いたいことはわかるんやけど……私情ははさみとうないなあ」
赤松はすぐさまそう言つて別所の言葉をさえぎる。

「ともかく醍醐はんと作戦のすりあわせをせなあかな。出かけるぞ」

そう言つて立ち上がつて詰襟の一番上のホックをかける赤松。つ

られて別所は腰に手をやるが先日の赤松の訓示で軍刀をはずしていたのを思い出して苦笑いを浮かべる。

「丸腰はやはり慣れないわなあ」

赤松はにこりと笑うと再び神妙な顔つきに戻って傾いていた帽子を被りなおした。

「おやつさん！」

ドアを開けるとそこには魚住と黒田の姿もあった。二人とも神妙な表情で赤松に敬礼する。

「官邸から出頭命令が出ました」

魚住の言葉にうなずいた後、廊下の天井を見上げる赤松。

「始まりやな」

そう言つと別所が先に立つて歩くのに付き従う赤松だった。

「すまないな……忠満」

閣僚を別室に待たせて西園寺基義は12ある客室のひとつのソファーから立ち上がって敬礼しようとする赤松を制するようにしてつぶやいた。ちよつとした会議が開けそうな部屋には赤松の他に陸軍大臣代行の醍醐文隆の他、海軍大臣代行や陸海軍の参謀部長が顔をそろえていた。そして当然のようにその中には参謀の一人として清原陸軍准将の姿もあった。

「越州鎮台府の艦隊は現在濃州の5000キロの地点のデブリを盾にして展開中。すぐに攻撃を仕掛ける様子は見れませんが……」

「憲兵隊員が全員拘束されたのは知っている。他にも私の支持者が越州で不法逮捕されていることもね」

海軍の情報将校の言葉に苦々しげに答えながら西園寺は上座の椅子に腰掛ける。

「今回の反乱……どう思うかね？清原君」

西園寺の一言には重みがあった。誰もが清原和人と越州鎮台府長官城一清准将とのつながりは知っていた。これが明らかに帝都に張り付いてにらみを効かす赤松の第三艦隊を引き剥がす目的の芝居なのは分かりきっていた。

「帝国の威信に対する挑戦。そして国内の秩序を乱す愚行としか言えませんか」

はつきりとそう断言する清原に生暖かい視線を投げる西園寺や彼を指示する軍幹部達。そして冷やかな笑みで彼らを見つめる烏丸派の将官の姿を見て赤松は大きくため息をついた。

「現在の状況ではこの反乱行為の鎮圧に動けるのは赤松准将の第三艦隊と醍醐侯の近衛師団が適当と思われませんが……」

そう言ったのは烏丸派の陸軍参謀だった。醍醐は思い切り嫌な顔をして威圧するように立ち上がっている参謀に目を向ける。

「確かにそれ以外の部隊を動かすわけには行かないだろう。外惑星の独立派を囲い込む作戦が失敗すればわが国は国際社会での信用を失う。かといって予備役を召集して帝都近郊の部隊を宇宙に上げるのは大げさすぎる」

西園寺はそう言いながらずっと清原を見つめていた。淡々とメモを取り時々端末に目をやる清原はそんな首相の言葉に耳を貸すつもりはないといった様子だった。

「よろしいですか？」

誰もが苛立ちを隠せない表情を浮かべている中、静かに赤松は手を上げて発言の機会を待った。

明らかに敵意に満ちた表情が赤松を捉えるが彼は無視して大きく深呼吸をした。

「ああ、どうぞ」

西園寺の表情はこれから赤松が話す内容に興味を感じていうような感じだった。同じく醍醐などの西園寺派の将校たちも期待を込めた表情で赤松の言葉を待ち続けている。

「今回の越州での叛乱についてですが……」

無理に標準語のアクセントでしゃべる赤松。その言葉に『叛乱』

と言っ言葉が使われたのを聞くと聴衆の一部が立ち上がるうとした。「待ちたまえ、君達！最後まで聞こうじゃないか」

余裕を持つて西園寺が制する。そして醍醐が振り向いてにらみを利かせると彼ら烏丸派の人々は静かに腰を下ろした。

「今回動いている艦隊ですが……どう見ても規定の稼働率を上回る規模の艦隊が作戦行動に移っているわけですが」

『まるで準備していたようだと言いたいのか！』

そこで飛んだ野次。赤松はそれにやけた陸軍大佐の目をにらみつけた。それなりに修羅場をくぐってきた自負のある赤松の視線を受けて烏丸派のその将校は下を向いて黙り込む。

「叛乱鎮圧にはそれなりの戦力と言いますか数を用意する必要がありますと思われます。元々鎮台府の城准将と貴下の上官の起こした叛乱です。数で脅せば兵士達の士気は落ちることでしょう。問題はそれが濃州攻略に彼らが成功した前か後かと言っことになると思います」

それだけ言っ赤松はぐるりと会議室の面々を眺めてから椅子に座った。頷くのは西園寺派、薄ら笑いを浮かべるのは烏丸派。どちらかにきれいに分かれている様を見て、先日の旧友である嵯峨の警告が思い出されてきた。

「数を用意できる即応部隊となると君の第三艦隊が動くと言うことになるのかね？」

先の大戦で一番多く戦死者を出した赤松達より十歳くらい年上の世代の将官が声をかける。その声の主本間中将は現在部隊を第六惑星衛星系に展開させているが、越州謀反の知らせを受けて駆けつけた艦隊司令だった。どちらかと言えば主張としては烏丸派に近い意見の持ち主だが、軍の政治への介入を快く思わない彼の信念からこの場の誰もが彼の意見に耳を傾けるだろうと赤松は踏んでいた。

「鎮台府の戦力は対艦戦に特化したものが配置されているのは皆さんもご存知のとおりです。そしてこちらでも対艦戦を考えればワシ……いえ、私の第三艦隊を当てるのが最良かと」

赤松は本間の言葉にそう答える。

しばらく沈黙が場を支配した。そしてこの場の全員が手にした端末を眺めている西園寺基義首相の次の言葉を待ち続けていた。

「なら考えるまでも無いんじゃないかな。最適な部隊を最適な叛乱軍に当てると言う現場の意見に私が口を挟む理由は無い」

あつさりとそう答えた西園寺の口調に誰もが耳を疑った。帝都の防衛を主任務とする近衛師団を預かる醍醐などは椅子から転げ落ちそうな様子だった。

「よろしいのですか？」

隣で西園寺が見つめている端末を支えていた秘書官が分を忘れてそう叫んでいた。

「よろしいも何も……叛乱の一刻も早い鎮圧が現在の急務だ。なにかね……この中に私の命をとりたいと念じている人でもいるのかな」

この西園寺の冗談は笑えなかった。誰もが黙ってお互いの顔を見合わせる。赤松は噴出しそうになるのを必死にこらえながら周りの将官の顔を眺めていた。

烏丸派の急進派として知られる中将の顔に渋い笑みが浮かんでいる。西園寺派でも慎重で知られる海軍大將は黙って目をつぶっている。それぞれ考えることは一つ。間違いなく西園寺は烏丸派の暴発を引き起こそうとしていることだけは誰の目にも明らかだった。

しかし誰も赤松の第三艦隊の出撃を止めるものはいない。

すでに議場の隅で立つて会議を眺めていた秘書官級の佐官達は端末で各地の情報を集めているところだった。赤松のつれてきた別所と魚住もしきりと携帯端末をいじり始めていた。明石や黒田はすでに原隊に戻ってしまったようで姿が見えない。

「なにかな……そんなに急に騒がしくなっちゃって……僕はおかしなことを言ったかな？」

とぼける西園寺。その視線の先には唇をかみ締めて西園寺をにらみ続けている清原の姿がある。

「では……時間も無いでしょうから解散と言うことで」

そう言つと西園寺は立ち上がった。そのまま誰とも目をあわずに扉を開く秘書官。廊下から盛んにフラッシュの光が西園寺が出て行くさまを彩っていた。

赤松は黙つて端末を覗き見て膨大な数のメールを確認してげんざりとした後で立ち上がろうとした。

「赤松君！」

声をかけてきたのは以外にも清原本人だった。薄ら笑いを浮かべる剃刀と呼ばれる近づきがたい表情を見て赤松は苦笑いを浮かべた。

「本当に良いんだね？」

「は？何がですか？」

とぼけて見せた赤松。その口調に肩透かしを食つたと言つように目を見開いた後シンパの面々を連れて会場を出ようとする清原。

『そちらの考えは読めてんで』

赤松はそう心の中で笑っていた。

「久々よのう」

明石はそう言うで大荷物を負った楓を見ながら乗り込もうとする胡州第三艦隊旗艦『播磨』を見上げた。帝都を離れて惑星胡州軌道上の第三艦隊の母港である予州は活気に満ちていた。先の大戦で大半の施設が破壊されたと言うのに跡も残さず改修された閉鎖型コロニーに接岸する戦艦や巡洋艦が並んでいる。

「壮観ですね」

楓はそう言う立ち止まった明石の隣できよきよと周りを見回した。

「ここはワシ等は片道切符で出かけたモンや。ワシの知り合いもほとんど死んどる」

明石の言葉に表情を変える楓。確かに明石にとってはかつての特攻機を満載した輸送艦の母港としてこの施設が考えられていることを思い返していた。

「ええねん。気にせんと言ってや……行こか」

そういい残してそのままタラップを進む。すれ違う兵士達の表情は硬い。誰もがある程度覚悟はできていた。

烏丸派の重鎮と目されている南極基地の池幸重大佐や安東貞盛の陸軍第一教導連隊。どちらも彼らが去れば帝都を占拠にかかるのは目に見えていた。その結果帝都の彼らの知り合いが戦火の中に置き去りにされる。その予定は変えられないと誰もが思っていた。

「おう、来たか」

『播磨』の隔壁に寄りかかってニヤニヤ笑っているのは魚住だった。

「ずいぶんな物資やないか。やはりとんぼ返りは勘定のうちか？」

明石の言葉にただなんとなく頷きながら荷物の重そうな楓に手を差し出す魚住。楓は彼を無視して『播磨』に乗り込む。

「……まあ誰でも同じことを考えているだろうな。今回の内戦はもう始まっているんだ」

魚住は『内戦』と言う言葉を使った。そのことに明石もすでに覚悟はできていた。

「権力争い……ワシも寺の息子やさかい結構体験しとるが……ええもんぢやうで」

「いいも悪いも無いさ。もうこの国には二つの派閥を並べておくよ。うな余裕は無いんだよ……案内するぞ」

静かに魚住はそう言つと先頭に立って質素なつくりのエレベータに明石達を導いた。

「いいんですか？別所さんや赤松提督には……」

「いいんだよ。別所も赤松のおやつさんもそう言う気遣いは好きじゃないから」

楓の心配にそう言つて笑う魚住。明石も微笑みながら狭苦しいエレベータが居住区に着くのを待つ。

「それにしても最新鋭の戦艦なんぞに乗ってええのんか？ワシみたいなチンピラが」

明石はトレードマークになってきたサングラスを直しながら見下ろすようにして小柄な魚住に目をやった。

「馬鹿だねえ。俺達は切り込み部隊だ。恐らく決起した清原さんの部隊にはあの安東大佐がいるだろ？あの人の猛攻を防ぐとなれば俺ら以外の誰がいるよ」

自分を励ますような口調の魚住。明石もその言葉に頷く。

先の大戦で329機の連合国のアサルト・モジュールを葬ったトップエースの安東貞盛。その『胡州の侍』のデータは教導部隊の隊員として活動している明石から見ても異常としか思えないものだった。反応速度、戦闘状況の判断、そして機体の性能を熟知しての機動はまさに天才の域に達している。明石も正直勝てるつもりなどさらさら無い。

「ほい、じゃあ案内するぞ」

考え込んでいた明石のわき腹をつつくと開いたエレベータのドアから飛び出す魚住。

「姫さんには済まないがうちは東和軍みたいに女子の個室は無いかな。明石の隣の部屋を用意したけどそこでいいかね？」

「かまいません。幼年校からそうでしたから」

微笑を浮かべている楓だが、さすがに大荷物を背負い続けて疲れしているように見えた。そのまま誰も通らない狭い廊下を抜けて士官

用の個室のある区画に入る。

「いいんですか？ここは士官用の……」

「大丈夫だよ。うちの連中は気が荒いからこっちのほうじゃないと女の子は危なくて仕方が無いよ……じゃあ、そのドアだ。生体キーの登録は済んでるから荷物をまとめちゃいなよ」

魚住の言葉によると敬礼する楓。明石と魚住も疲れているような楓に敬礼を返す。

「若いつてのはいいねえ……」

「ワシ等もまだそないな年でもないやろ」

老けたような言葉を吐いた魚住に明石は呆れたようにそう言った。

「ワシはここか？」

「ああ、隣が女の子だからな。気を使えよ」

そう言うのと振り向いて去っていく魚住。

「あとでブリーフィングルームで会おうや」

小柄な魚住の姿はそのまま士官の個室の一つに消えた。明石はそれを確認するように見守った後、バッグを持ったまま自分の私室に入った。士官用ということとでそれなりの調度品が並んでいる。戦艦とあつて金属製の机や戸棚は仕方の無い話だった。明石は硬そうなベッドにバッグを投げるとしばらく部屋を見回した。先の大戦後に就航した『播磨』。戦いの直前に完成しゲルパルト戦役で沈んだ『富岳』の700メートルには劣るものの500メートルの全長は現在胡州でも一番の巨艦である。その士官室もかつて明石が特攻機に乗るために出撃した輸送艦の比ではない位豪勢に見えた。

「生きてりゃええこともあるっちゅうわけやな」

そう言うとなんとなくすることもなくなつて執務用の机に備え付けられた簡素な椅子に腰掛ける。椅子も見た目よりは頑丈で2メートルを超える巨漢の明石の体をやすやすと受け止めた。

「敵は安東貞盛……」

そう言うって思い出すのは安東機のエースらしいパーソナルカラー。赤黒い地の上にどす黒い体をのた打ち回らせる浮世絵風のムカデの文様。その前に多くの地球軍のパイロットは絶望して死んでいった先の大戦。今度はそんな安東に明石達が挑むことになるのはほぼ誰もが考えていたところだった。

「死にたい死にたいと思うて闇市で転がってたら今度は死にとう無くなってきた……まるでファウスト博士や」

そんな独り言を言った明石の背中で呼び鈴が鳴る。

「どうぞ！開いとるで！」

明石のどら声が響くのとドアが開くのが同時だった。そこには先ほど魚住に見せた凜とした表情の面影もない楓の姿があった。

「あの……少佐……」

右手を抱えるようにしてうつむきがちに立っている楓。その様子は見た目どおりの13歳の少女のものだった。貴族特権で未成年で軍に入って下士官を務めているとはいえ、彼女はどこまで行っても少女でしかない。それを思い知ると明石はぎこちない笑みを浮かべて自分のバッグに手を伸ばした。

「ちよつと場所作るよつてここに座り」

そう言つと手で軽くベッドの縁を叩く。少しばかり笑顔を作ると楓はそのまま腰を下ろした。

「隊長……僕……」

「まあ座れや。話はそれからでもええんやろ？」

明らかに緊張している楓に声をかける。しばらく躊躇したあと、楓は仕方がないというようにベッドに座った。

「緊張してゐんです。僕」

少女が自分を『僕』と呼ぶことを不思議に思いながら楓に目をやった。明石は楓の冷たい感じの表情からにじみ出る恐怖にようやく自分が彼女を導いている存在であることに気づかされた。

「そらそうでないと困るわな。ワシ等は命のやり取りがお仕事やさかいそんなに気軽に構えられたらワシのほうが参るわ」

そう言つて笑顔を作ろうとして明石は気づいた。自分もまた緊張している。かつて死ぬものだと思つて対消滅系弾頭付きのミサイルにコックピットをつけた特攻機を満載した輸送艦で出撃するとき。その時も明石は数名の十代の兵士達を引き連れて同じように彼らの平常心を失つた表情を見ていたことを思い出した。だがその出撃は三日後の胡州と遼北人民共和国との電撃的な休戦協定で空振りに終わり明石は生き延びた。今回は確かにいつもの乗りなれたアサルト・モジュール三式での戦闘が想定されている。当然はじめから死ぬつもりなど明石には無い。

だが目の前の少女にとつては初めての戦場。そしてその過程は決して樂觀できるものではなかった。

すでに城一清の率いる越州鎮台府の艦隊は濃州への進撃を開始していることは明石の耳にも届いていた。そして誰もが帝都占拠を狙つて清原一派が決起するのは目に見えていることだった。最悪濃州を討つた越州の部隊と帝都を制覇後に一気に空に上がった清原派に挟まれての戦いさえ考えられる。

しかもその清原派には胡州一のエースとして知られる安東貞盛が

いる。

「なんや……ワシも何を言ったらええのんかわからん……生きて帰れる保障は無いし」

「いえ！死ぬのは恐れていません！」

そう言い切った楓の頭を明石は軽くこぶしで小突いた。

「そないなことは軽々しく言うなや。生きる死ぬは戦場ではただの運なんやと思うとったほうがええで。ワシも特攻機で出撃する、このまま死ぬ、何もできずに死ぬ、そう思うて戦場に行ったら戦争が終わった。それから後はほんまただの生ける屍や。何もする気ものうて寝るだけ。いつの間にか闇屋の幹部で切った張ったした……」

明石に小突かれた頭をさすりながら不思議そうな表情で巨漢の明石を見上げる楓。彼女も170センチを超える長身だが巨漢の明石に比べたらまさに小娘と言う雰囲気だった。静かにうつむいて明石の言葉に耳を傾けている。

「パイロット稼業の長い魚住のアホが言うとったわ。戦場じゃあ最後まで諦めなかったほうが生き延びるんだと。あいつの言うことはいちいち気に障るが多分それがほんまの話なんとちゃうやるか……」

そう言うとうつむいていた楓は静かに頷いた。

「洋子様が出ることは無いでしょう」

斎藤一実パイロットスーツで少女の前に立ちふさがった。すでに前線では戦いは始められていた。越州軍の主力は初めは様子見程度に駆逐艦などを繰り出しては引くと言う動きを見せていたが、胡州の第三艦隊が出撃準備に入ったと言う知らせとともに全艦隊を濃州第三コロニー、この濃州防衛部隊駐屯基地に向けて進めてきていた。

「私が動かなければ士気が下がります！それに一実様にはしてもらわねばならないことがあります」

そう言つて長い黒髪をヘルメットに収めようとしている少女、斎藤明子は分家でも名の知れたパイロットで防衛部隊長の斎藤一実大尉を避けて進もうとした。だがそれでも斎藤とその部下達は明子の前に立ちふさがる。

「洋子様！あなたを失えば濃州の士気は落ちます。そうすれば赤松公の艦隊が到着したとしても……」

斎藤の言葉に洋子は大きくため息をついた。

「まるで私が無能のようなおっしゃりようですね。私も胡州の青い騎士と呼ばれた斎藤一学の妹ですわよ。それなりの活躍くらい……」

「それが甘いと申し上げているのです！戦場では強い弱いより運次第で明暗が分かれるものです。大将を失えば必然的に濃州は落ちます！」

「でも……」

そう言つて口ごもる女主の鳩尾に一実はこぶしを放った。突然のことにそのまま意識を失う明子。

「大尉……」

部下達は突然の一実の行動にためらっている。一実は静かに彼女

を抱えると人を呼ぶべく駆逐艦のタラップに手を振った。

「この戦いは私情で動いてはならないものなのです。一学様の守った濃州。明子様が立派に支えていって下さらなければ意味がありません」

そう言つと事態を理解した兵士達は気を失つたままの洋子を担ぎ上げる。

「それでは濃州勢の力とやらを越州のならず者に見せてくれようか」

一実の笑いに周りのパイロットスーツの男達も笑顔を浮かべる。そしてそのまま駆逐艦のタラップに向けて無重力空間を浮いたまま進んでいくことになった。

「それで……勝てるのかね？」

青白いその表情に神経質そうな震えが走る。烏丸頼盛は閉め切られた寝室で布団から上体を起こしただけの姿で脇に控える清原、安東の顔を見つめていた。

「大丈夫でしょう。すでに在郷軍人会などを通して我々の同志には武器が支給されつつあります。後は……」

「保科さんの死を待つばかりか」

そう言うのとニヤリと笑う烏丸。安東はその表情とその言葉の意味に恐怖を覚えていた。烏丸家を頼る軍縮で行き場を失った元兵士達と特権を剥奪され続けている下級貴族達のために立ち上がる。そう思っていた清原達の動きの過程に彼等の恩人である保科老人の死までも計算に入っているとは寝耳に水の話だった。

「実はすでに集中治療室の中ですから今日は今日か……明日か……」

清原は淡々とそう言うのと下座の安東に目を向けた。その目が悲しみを湛えていたのが安東にとっての唯一の救いだった。一方西園寺派の呼び出しに仮病で応じている彼等の担ぐ四大公の一人である烏丸の目は生気を失ったように安藤の方をちらちら見るばかりだった。「では君の思うようにしたまえ。当然すべては保科卿の死のタイミングを見てからだ」

敗戦時の戦争責任者追放から拾ってくれた恩人の死を待っているかのような言葉に安東は握りこぶしを固めていた。だが襖が開くと清原は立ち上がり何も無かったように出て行こうとする。安東もまたその後に続いて貴人の寝所を後にした。

「何も言うな」

小声で清原がそう言うのを見て安東は怒りの言葉を飲み込んだ。「我々が掲げるのは秩序だ。その頂上に立つにはその秩序の上にある人物でなければならぬ。本来であれば保科さんに立つてもらい

たかったが……」

そう言いながら清原は烏丸の寝所を振り返ってため息をついた。そして安東も彼に同情した。四大公が政務を取り仕切り国をまとめる。それは胡州の建国以来の伝統だった。宰相の半分以上は西園寺、大河内、烏丸、嵯峨の当主が分家から輩出されており、そうでなくとも四家の影響を離れた政権は一つも存在していないのは事実だった。

彼等の敵である西園寺基義は本人が西園寺家当主であると言うことで影響力を保持している現状に不満を述べる人が多いほどの貴族嫌いで知られていた。事実、西園寺の同志を名乗る政治家達には平民出身者が多い。今回の組閣でも大臣の半数は平民からの登用だった。この流れを変えなければならない。そう考える清原が後ろ盾に病弱で優柔不断な烏丸公を持ち上げたのが身分の秩序を復活させることを意図していることは安東も察していた。

枯山水が見える廊下を歩きながら安東は自分が戻れない境界線を越えてしまったことを自然と理解していた。

「保科公が……亡くなられました……」

別所の言葉に司令官室の赤松は静かに頷いた。西園寺と烏丸の対立を危惧していた巨星保科老人の死の意味するところは一つだった。清原准将貴下の烏丸派の部隊の決起は近づいている。しかし赤松にはしなければならなかった。

「準備を。出撃準備の中止を……」

「それは無理やろ」

そう言つて手にしていたペンをくるりと回す。実際、別所に言われるまでもなく艦隊指揮官達は誰もがこの出撃を注視するように進言を受けていた。特に陸軍の帝都周辺の守備隊のわずかな西園寺派の一人、醍醐文隆准将には昨日の深夜まで説得を受けていた所だった。

「確かに越州の行動を許せば胡州は分裂します。ですが全艦出す必要は……」

「あるから出すんじゃ。必要ないのやつたら誰もそんなことするわけないやろ」

別所の言葉をあつさりとなえざる赤松。その態度の別所はこの上官があることを決めているのではないかと思つて口を開いた。

「清原軍と決戦を行なうつもりですか？」

そう言われると嘘のつけない赤松はニヤリと笑った。

「恐らく船の数なら陸軍の佐賀さんの揚陸艦を大量に動員してくるあちらが上や。でもこちらは海軍。宇宙を制するのはお手の物やろ？ ワシとしては貞坊……いや安東のアサルト・モジュール部隊がつぶせればいい勝負ができる思うとるんやけど」

「それならお任せください……と言いたい所ですが……」

赤松の挑発に乗るほど別所は自信家では無かった。海軍の教導隊の隊長として何度か安東とは模擬戦を経験しているがすべて安東が

勝利している。同じ三式ならば数で押してもどうにかなるだろうが、安東は現在、胡州陸軍で最新式の五式試作戦を使用しての運用試験を行なっている最中と聞いていた。そのスペックは別所も聞いていたので勝ち目が少ない事実も知っていた。

しばらく黙り込んでいる別所に近づくと赤松は手招きする。

「実は……新三の奴が動いてるみたいでな」

そう言っ て赤松は端末の画面を別所に向けてニヤリと笑った。

「洋子様！一実大尉が戦死されました！」

コロニーの管理ルームに立っていた斎藤明子に通信士官が声をかける。明子はただ黙って光がきらめく濃州外周コロニー群の戦闘を見つめていた。

「こちらの戦力はあと……」

静かに長い髪を翻して振り返る女性の姿を見て鎮台府を預かる樋口は気が引き締まる思いがしていた。彼女の兄、一学の死の時も彼女は涙を見せなかった。ただじっと何かに耐えているように唇をかみ締めて立ち尽くすのは今と変わらない。そして今はその兄が守った濃州に本格的な危機が迫っている。

すでに領民の避難は開始されていた。一番近い泉州はあの遼南皇帝である嵯峨惟基の領邦だった。もしそこに手を出せば遼州同盟を敵に回す。さすがに越州の切れ者と呼ばれる城一清もそこに手を出すことはしないと洋子は読んでいた。それらの指示を出してこうして部下達の指揮を執る少女を支えたい。樋口は心の底からそう念じていた。

「現在は補給のため『なみしお』と『くろしお』が待機中です、後は泉州から事実上の亡命と言う形で『来島』を旗艦とする巡洋艦二、駆逐艦四がこちらに向かっているところです」

「そうですか……」

明らかに戦力では勝ち目は無かった。そして第三艦隊も保科老人の死によって帝都の治安が悪化すれば引き返さなければならなくなるのは分かりきった話だった。

「それでは私も出ます。指揮をお願いします」

そう言った洋子。樋口はもうそれを止めることはできない。

「五式を使いますか？」

樋口の言葉に静かに頷く明子。

「あの機体は相性がいんですの。なんとなく時間を稼げるような気がしますね」

強がりのような笑い。ただこの絶望的な状況でも笑みをこぼせるのはあのエースと呼ばれた兄の血を引いていることがわかって樋口も気が楽になって孫のような主君に大きく頷いて見せた。

そのまま管制室を出た洋子は敬礼する部下達の前を静かに通り過ぎていた。

『これ以上……お兄様が守った濃州を好きにはさせません』
心に決め、そのままエレベータに乗り込む。

すでにパイロット経験のある兵士は出撃を終えていた。艦船やアサルト・モジュールの係留されているドックに向かうエレベータや通路には人影はまばらだった。エアロックの前でヘルメットを被り気密を保つフアスナーを閉める。そしてそのまま重いドアを開けるスイッチを押した。

そこには別世界があつた。重力が無い中、負傷した兵士の血液があちこちに飛び散っている。整備班員は被弾すれば空気が無くなってしまうドックの通路をヘルメットも着けずに行きかう。

「洋子様！」

一人の片腕に負傷したパイロットが声をかけてくる。引き止められるのが分かつていたので洋子は無視してそのまま通路を進んだ。振動が時折壁越しに伝わってきている。すでにこの防衛拠点に取り付いたアサルト・モジュールもあるのかもしれない。そんなことを思いながら彼女が運用試験をしていた五式の係留されているドックへと向かった。

「え？洋子さま？」

青い五式にシートをかけようと部下を指揮していた士官が振り返る。誰もが疲れ果てた表情で濃州の旗機を敵に渡すまいと偽装を施そうとするところに明子は駆けつけた形になった。

「動かせますね」

洋子の言葉に士官はしばらく考える。そのまま黙って部下達が作業を辞めたのを確認すると大きくため息をついた。

「はい、すぐにでも戦闘可能なようにできています……しかし……」

士官の言葉に迷うことなく明子は五式のコックピットに向かってジャンプした。

「これで少しは時間を稼げます！各員は民間人の脱出を優先してください」

仕方が無いと言うように士官は隠そうとしてかぶせたシートをはがすように部下に合図をする。洋子はそれを見ながらいつもの試験のときと同じようにコックピットを開けるための腹部の装甲に設けられたスイッチを押した。音も無く装甲版が跳ね上がりそのしたのコックピットのモニターが埋め込まれたフレームが開く。

「こちら『青鷲』、コントロール聞こえますか？」

すぐさまシートに身を投げてヘルメットの後ろのジャックにコードをつなげてシステムを起動させながら明子は樋口の顔が浮き上がるモニターに目をやった。

『では乙の13、および丙の23地区に敵が取り付いています!』
「了解」

洋子はすぐにエンジンに火を入れてそのまま大型エアロックを押し開ける。

「光?」

彼女がつぶやく。いくつもの閃光が目に入った。彼女は知っていた。かつて彼女の兄が同じように閃光の一つとなって消えたことを。そしてこれから自分はそれを作るために出撃すること。敵の揚陸艦は三隻、明らかにこちらの数の不足を知っているように腹を晒して浮かんでいた。その手前にはすでに大破して爆縮を繰り返している友軍の駆逐艦が見える。

『現在そちらに二機!直進してきます』

オペレータの男性の言葉に頷きレーダーとモニターに目をやった。
「素人じゃないのを分かってもらわないと!」

モニターの端の動くものにレールガンの照準を合わせる。相手はまるで馬鹿にしているようにあわてるそぶりもなく突っ込んでくる。
『その距離じゃあ……ねえ』

突然の通信と共に狙っていた二機の三式が火を吹いた。驚いてその火線の源を辿る。目視では見えないがレーダーはそこにアサルト・モジュールがいるのを確認していた。

『嬢ちゃんのでる戦場じゃねえよ、ここは』

聞きなれた人をなめきったような声。

「新三郎さん……?」

『忘れられてたら悲しいよねえ……ほら来た!』

突然闇から現れた見慣れない機体にぶつけられて明子の機体はよろめく。その何も無い空間にはレールガンの火線が走っていた。

『ぼけっとしてると食われちゃうよー』

画面が開くとそこには遼南人民軍大佐の軍服を着た兄の旧友である嵯峨惟基の姿が映っていた。

「……新三郎さん？」

機体を建て直し目の前の戦前の試作アサルト・モジュール四式を駆る遼南の皇帝を見据えた。

『それでいい。嵯峨惟基やムジャンタ・ラスコーはここにいないことになってるからな。西園寺新三郎、昔の一学のダチが遊びに来たと思ってくれよ！』

そう言いながら背後にレールガンに向けて迫ってきていた旧型の97式を撃ち落す。

「でも本当に……」

『今は俺は大麗で会議に出ていることになってるから……気にするなっ』

嵯峨の言葉に涙をこらえつつ洋子は周りを見据えた。

「樋口中佐……状況は？」

『敵は泉州艦隊を避けるようにして丁の四区画に向かってきています。恐らくは温存していたアサルト・モジュール部隊で一気に殲滅にかかると思われますが……』

その言葉にしばらく天を見た後嵯峨はニヤリと笑った。

『洋子坊。強くなりたいか？』

突然の問いに洋子は戸惑ったが静かに頷いた。

『それならここは俺についてきてくれ。樋口さんの予想では城の旦那は全軍率いてきているようだが実際の越州ではアサルト・モジュールの稼働率は高くない。恐らくはそのまま無人のミサイルポッドを使って戦力を削ぎにかかるはずだ。十分何とかなるぞ』

洋子を安心させるかのようにそう言っていると嵯峨は手元の端末の情報を表示して明子と濃州鎮台の司令室に送信した。そこには現在の越州艦隊の展開図が見て取れるがそれは樋口がリーダーで割り出したそれとはかなり違っていた。

『多くがデブリを偽装して艦隊に見せかけているだけだな。あちらも第三艦隊がこちらに急行していることくらい知っているよ。そしてもし帝都でことがあってもそれを無視して赤松の旦那が突進してきたらと言う事も想定しているはずだ。そうなると出せる戦力は限られてくる』

樋口達、濃州鎮台が艦船やアサルト・モジュールと思っていた艦影がデコイであることを示す水色に染められていく。

『まあ城の旦那の最後の足掻き。付き合ってやろうや』

余裕のある嵯峨の表情に笑顔を返すと洋子は敵の展開する丁区域に向かって機体を進めた。

「醍醐さんは逃げられたか……」

清原の言葉に安東は静かに頷いた。陸軍省大臣室。すでに西園寺内閣で陸軍大臣に指名された原大將は地下の武器庫に西園寺派の将校達と共に監禁されていた。

「現在は九条平の近衛師団に立てこもっているかあるいは……」

大臣室の前を駆け回る決起部隊の隊員の軍靴の音を気にしながら安東は静かに恩のある上官を見据えた。第三艦隊の留守を突いての挙兵後の状況は予定通りに進行している。醍醐がシンパの伝で近隣コロニーの常備軍を集めるため動き回っていることもすべては計算のうちだった。

「あとは問題になるのは西園寺卿だが……首相官邸は空振りだったようだな」

清原はそう言って大臣の執務機の端末を開いた。そこには西園寺家の本邸の表玄関が映っていた。機動部隊と対峙する一人の女性に彼は目を引かれた。

「西園寺の鬼姫か……」

淡い桜色のはかま姿で鉢巻を締めなぎなたを手に床机に座って決起部隊をにらみつける美女。その様子はきわめてシニールな光景だった。

「こちらの部隊には知らせてあるのか？ 康子さんの能力とかを」

「知らせていません。知らせても信じないでしょうから」

淡々と答える安東の姿に多少不機嫌になりながらにらみ合いを続ける様子を眺める清原。

「それとこれもあまりいいニュースではないですが……」

「言いたまえ」

焦っているように食い気味にしゃべる清原に安東は少しばかり不安を覚えていた。

「現在大麗での同盟機構設立準備会議に出席中のムジャンタ・ラス
コ―陛下ですが……」

「偽者だろ？あの人が今の状況を見逃すわけが無いよ。実際彼の被
官の池君と佐賀君が我々の支援に回っているのが信じられないくら
いだ」

驚く様子の無い清原。その姿に安東は一抹の不安を覚えた。

「事態は悪い方には進んでいない。すべてが予定通りだ。後は……」

そう言うつと清原は机の端末を操作する。そこに移るのは主な嵯峨家の被官達だった。

「間違いないのは嵯峨が今回の戦いには家臣達に身の振り方は自由にと伝えていることだ。とりあえず地下の佐賀高家卿と池卿はこちらに取り込んだ……」

髭の目立つ佐賀侯爵。先代の西園寺家当主、西園寺重基公爵の気まぐれで彼の三男の嵯峨惟基が跡目を継がなければ自分が嵯峨の名を名乗れたと年中口にしてる反骨の男が烏丸に擦り寄ってきたのは当然だと安東も思っていた。だが嵯峨の三侯爵の中で池幸重いけゆきしげが同調するとは安東も思っていなかった。火星奪還に燃える地球軍を翻弄した陸軍の策士。西園寺派の重鎮である醍醐とは同じ地球方面軍で戦った同志である。たとえ陸軍では烏丸派が優勢だとは言え、そちらに尻尾を振る理由が見つからなかった。

「浮かないようだな『胡州の侍』殿は」

そう言うつてにやりと笑う清原の顔。正直安東はそう言うところがこの恩人の嫌いなところだった。妙に自分の手柄を誇って見せる。實際池の説得を行なったのは清原であり、誰もが説得はできないだろう彼を引きずり込んだことで陸軍では醍醐卿の勢力を大きく削ぐことに成功したのは事実だった。

「胡州南極基地の防衛部隊……あまりに鍵を握りすぎていると思うんですが……」

「だからだよ。醍醐君も馬鹿じゃない。決起までに相当数の陸軍士官の行方が消えていると言う報告もあった。いくつかの地表コロニーの防衛部隊が我々に対して音信を途絶しているところから見て彼らを率いて宇宙に上がって決戦を挑むのが醍醐君のプランだろう……」

…だから彼を宇宙に上げないためには南極基地の防衛部隊を引き込む必要があるんだ。それくらいは分かるだろ？」

時々見せる相手を見下すような表情の清原。彼が嫌いで西園寺派についている将校がかなりいるのも安東には分かった。ただそれだけ説明をしても納得しないような安藤に清原は不機嫌そうな態度になる。同時に大臣の執務机に來客が告げられた。

「私だ」

『烏丸卿がお見えになりました』

「そうか。では私が行こう。それと安東君」

得意げに顔を上げる上官に仏頂面しか見せられない安東。その様子に少しばかり顔をゆがめた後、満面の笑みで清原は立ち上がって安東の肩を叩いた。

「大丈夫だ、気にすることは無いよ……そうだ。このところ家にも帰っていないだろ？たまには顔を出して恭子さんを安心させてやれ」

そう言うつと清原は笑みを浮かべて大臣室を出て行く。安東は相変わらず腑に落ちない表情で恩人に続いて居心地の悪い陸軍大臣の執務室を後にした。

安東は車から降りると玄関で立ち止まった。

「御前……」

「いや、いい。気にしないでくれ」

心配そうに言葉をかけてくる運転手の田中にそう言うつと玄関を開いた。目の前に座っている安東の子供時代からこの家に仕えている飯田という名の下男が眠りから覚めて驚いた表情で安東を見上げた。

「これは！御前！」

「気にするな。たまたま暇ができたから帰ってきただけだ」

そう言うつと安東は静かに腰を下ろして軍用のブーツを脱ぐために腰をかける。

「恭子様は今日は発作もなく……」

「分かつてる。ちゃんと顔は出すさ」

妻の恭子の名前を出されて少し照れながらコートを飯田に差し出した。

恭子は病んでいた。医師は心労がたたっていると言うが、それだけが原因でないのは安東にも分かっていた。確かに彼女は兄の赤松忠満と夫との対立に心を痛めていたのは事実だが、それ以上に何かがあるのではと安東は医師を問い詰めて答えを引き出した。神経系が次第に衰弱して死に至る病気。医師は安東にそう打ち明けた。神経系に欠陥がなければサイボーグ化しての延命は可能だが、肝心の脊髄から小脳にかけての神経に問題があるとなれば話は別だった。

延命の道が無い。そのことは恭子には黙っているが、彼女もうすうす感づいているらしく最近では軍務で忙しい安東がたまに顔を出しても会おうとしない日が続いていた。

「それじゃあちよつと見てくるよ」

飯田にそう優しく言い残して安東は廊下を恭子が暮らしている別館へと進んだ。彼の領邦である羽州はアステロイドベルトでも大型

の小惑星が多く存在していて資源に恵まれたところだった。父母に早くしなれて姉であり今は敵である赤松家に嫁いだ姉の貴子と二人で烏丸卿の後見で暮らしてもこの屋敷を管理できる程度の収入はあった。

庭の大きな緑色の岩に目をやると、そこには恭子の姿があった。

「恭子！起きていて……」

安東が思わず庭に下りたのを見て恭子は驚くような表情で手にしていたトンボ珠を振り回しながら別館の方へと消えていった。

そのまま駆け出した安東。だが閉め切られたふすまを見てその手は戸から離れていた。

「おかえりなさい……」

ようやく搾り出したと言うような恭子の声に静かに頷く安東。何も言えずにただ日暮れの庭にたたずむ。

「調子はどうなんだ？」

「悪くは無いです」

扉の裏に張り付いて開かないように踏ん張っている恭子のことを思うと安東は胸が締め付けられる気持ちになった。始めは二人はこうではなかったはずだ。安東はそう思い返してみる。

高等予科で将来の士官として過ごしていたとき。喧嘩ばかりの彼の日常に西園寺家の三男の西園寺新三郎、その学友として付いて回る赤松忠満、そしてなぜか馬が合って共にすごしていた濃州候の時期当主である斎藤一学。陸軍予科などの不良と悶着を起こして怒鳴られるのは赤松と安東。二人は自然とお互いの家に入り浸るようになった。そんな中で次第にお互いの姉と妹に引かれていったのは不思議なことだった。

「実はな……」

ようやく士官学校に進むという日、赤松家の洋風のリビングで寝転んで漫画を読んでいた安東に正座をしている赤松の姿を見つけてめんどくさそうに安東は起き上がった。

「恭子かな……貴様のことを好きなんやて」

赤松の言いにくそうな表情の後ろの扉にじっと張り付いている恭子。赤松の知らない話だったが当時すでに恭子と安東は付き合っていた。

「で？」

真剣な赤松の表情が面白くて安東は漫画を脇においてソファアの

上から見下ろすように土下座する親友の姿を見下ろしていた。

「別に……そんな、特にお願いは無いんやけど」

「そうか、なら野暮なことは辞めとけ」

そう言いながら静かに扉の隙間から笑みを浮かべている恭子と笑っていた。

「いや、ワシも言わなアカンことがあつてな」

「ほう、聞こうじゃねえか」

うつむいたままじっとしている赤松。その姿を余裕を持って見つめていた安東だが次の赤松の一言に思わずソファから転げ落ちそうになった。

「ワシ、明日貴子さんと入籍すんねん」

突然の言葉に安東はソファーから滑り落ちた。貴子、それが自分の姉のことであることは間違いなかった。三人兄弟の末っ子で要領のいい赤松が色々家に来ては勝手口で姉と話しているのは見かけていたがそんな話は姉から聞いていなかった。

「なんだよそれ！俺達が馬鹿だったみたいじゃないか！」
「結果的にはそやな」

赤松の超然とした態度に呆然とさせられたその瞬間。だが今の安東の立場はそんなコメディーを思い出して微笑むくらいのことしかできない状況だった。赤松は国賊と恩人達が言う西園寺基義の右腕。そして自分は清原卿の決起に一枚噛んでこうして自宅に戻ってきたところだった。そしてその自宅には不治の病に心を蝕まれた妻。

「じゃあいい、そのまま聞いてくれ」

ふすまを閉ざす恭子にゆっくりと安東は話しかけた。

「現在、俺は烏丸公の一派として決起軍の一人となった……これも恩を返さなければならぬからだ。烏丸公や清原さんには軍への復帰に関して大きな恩を買った俺だ。断ることなんてできない」

そこまで言ったところで恭子はふすまから手を離れたようでカタリと言うふすまが動く音がした。ここで飛び込めば妻の心は傷つくとそのまま安東は言葉を続ける。

「つまり君の兄である忠満とは敵味方に分かれると言うことだ。あいつも今じゃあ第三艦隊の司令だ。その任務を放棄することも無いだろうし主君である西園寺公を裏切るような男じゃないことは君も知っているはずだ」

「だから……なんですか？」

冷たいかすれた声が安東の耳に届いた。

「兄が敵に回るのは分かっています。子供じゃないんですから。私

だつて烏丸公と西園寺公が対立していることやあなたが清原准将に恩があることは知っています」

声は震えていた。怒りか、悲しみか。安東はただ頭を垂れて恭子が落ち着くのを待つことにした。

「あなたはいいですよ。自分が信じているように動けばいいだけです。たとえば烏丸公が負けても義に殉じたといえは済む話ですから。でも私は……」

言葉が途切れた。安東は何もいえなかった。暗い庭の静寂に耐えながら安東は静かに妻のいる部屋のふすまを見つめていた。

「御大将……どないしりました？」

明石はじつと碁盤を覗き込んで動かない上官赤松忠満を見つめてそう言っていた。あまり上下の隔てを面白く思わない西園寺派の将校らしく、赤松も時間ができるところして艦内を見て周ることが多かった。そして碁の腕前が同じくらいの明石とはこうして囲碁を楽しむこともあった。

「ああ、あかな……気になることは色々あるけど……なあ」

「貴子様のこととかですか？」

隣で観戦していた楓の言葉に思わず頭を掻くのがいかにも赤松らしかった。緻密な戦況分析で艦を動かして輸送艦隊を逃がすことを得意とした猛将のもう一つの顔、恐妻家としての赤松がそこにいた。「通信ですよ」

帽子と共に置いた端末が震えているのを楓が指差す。赤松は碁盤を見つめたままそのスイッチを入れた。

「司令……帝都から通信ですが」

「帝都？もう清原はんが制圧しとるやろ？どこのアホが……」

「言いくいのですが奥様からです」

通信兵の言葉に思わず顔をしかめる赤松。仕方なく明石は碁盤を横にずらした。

「あなた。その様子だと遊んでいましたね」

冷たい氷のような表情に赤松は思わず苦笑した。その様子はあまりに滑稽で明石も楓も静かに上官の観察を始めることにした。

「これも仕事のうちや。部下の気持ちも分からん指揮官についてく兵隊なんぞどこにもおらんわ」

『言い訳はそれくらいにして……恭子さんがまた倒れたそうですわ』

貴子の一言に赤松の表情が揺らぐ。緻密な計算機のような戦術家

の突然の豹変に明石は少しばかり驚きを覚えた。安東恭子。赤松の妹であり、先の大戦で兄二人と母を失った赤松の唯一の親類なのは艦隊でも有名な話だった。

「そうか……ありがとうな」

「何かあったらまた連絡させてもらうわね」

「ええて……アイツも武家の娘や。自分のことは自分でするもんや」

そう言いつつ赤松の表情はこわばっているのを明石は見逃さなかった。

『それではこれから要さんが西園寺卿を迎えに行くそうなので切りますわ』

「ああ……」

表情を変えずに戦地に赴く夫の通信を切る貴子。明石は静かに碁石をつかんでいる赤松に目をやった。

「ええんですか？」

明石の言葉に一度天を向き涙をこらえる。赤松の時に見せる直情的なところがまともな経歴を持つていない明石には好感が持てるどころだった。

「そないなこと貴様が気にせんでええんや。それよりついに動いたな……」

そう言うとき赤松は立ち上がる。その瞬時に締まった表情に明石と楓は表情を変えた。彼らばかりでなく、このパイロット控え室にいる全員が一つの意思にまとまったように赤松を見つめる。

「ワシはブリッジに上がる。タコ、パイロットを集めてや」

「は！」

赤松の一言にすぐさま敬礼して明石は部屋を飛び出した。従卒扱いの楓も彼の後に続く。

「魚住中佐は確か仮眠中です。黒田少佐は……」

「全員叩き起こしたれ！グダグダ言うたら外におっぱり出す言つてな」

その明石の言葉ににこりと笑うときそのまま士官の個室へと走る楓。明石はそのままハンガーへと駆けつける。

「いよいよか！」

ハンガーに向かう廊下の待合室には別所がコーヒーを飲んでいてそれを見て立ち止まった明石は大きく頷く。周りのつなぎやパイロットスーツを着た将兵達も大きく頷きあう。

「いよいよ出番だな……言つたら？死ぬにはまだ早いってな」

巨漢の明石の肩を別所が大きく叩く。だがようやくここに来て明石はこの重大さを感じて足が震えるのを感じていた。

「これで勝たなあ……」

「逆賊だな。士官クラスは全員斬首か切腹か……」

そう言つて笑つ別所を憎らしげに見下ろしながら飛び起きてきたらしい魚住と黒田を振り返る明石だった。

そんなやり取りの中、戦艦『播磨』に待機しているパイロットや技術兵達がハンガーに集まる。誰もが覚悟を決めたような表情を浮かべる中で明石達の妙に慣れた感じの言動は奇異に見られているようで、敬礼をしながらも不審そうな表情が明石の目に付いた。

「なんや……みな葬式みたいやで」

声をかけてみるが緊張した雰囲気は変わらない。そつと視線を落としてみれば楓も少し緊張したような表情で明石を見上げている。

「明石隊長は気にならないんですか？」

楓の言葉が震えていた。明石はそこでようやく自分が緊張していないことに気が付いた。

「今回は生還できるかもしれんやろ？死に行く訳や無い。勝ちに行くんじゃ」

そう言つて楓の長い黒髪をなでる。いつもなら猛然と講義してくるはずの楓の表情がまだ硬かった。明石は周りを見回し、安全第一と書かれた壁面の隣につるされた白い額を指差した。白い額にはあまり上手とは言えない筆文字で『至誠』とだけ書かれていた。

「ええか、ワシ等軍人はあそこにあるように誠に至る道を探すだけや。他の事は政治家さんにおまかせ。ワシ等のできることはただ誠で敵に当たること。それだけ考えておいたらええねん」

明石のその言葉に楓も赤松直筆の額に目をやる。その様子を別所達はニヤニヤしながら眺めていた。

「こうしてみると親子じゃねえか」

そんな魚住の軽口も軽く笑つて無視する二人。別所はそれを微笑みながら見ながら集まり始めた兵卒達をまとめようとハンガーの中央に向かう。

「全員整列！これから赤松司令からの訓示がある！」

別所の張り上げた言葉にあちこちで固まっていた兵士達がそれぞれ

れの部隊ごとに並び始めた。明石や魚住、黒田達もその部下達の顔を見つけては呼び寄せる。次第に兵士の群れは列となり、先頭に明石、魚住、黒田らのアサルト・モジュール部隊の隊長や整備班長、技術部長などの士官が部下達をまとめて並ばせる。

「それではしばし待て！」

別所のその言葉にハンガーは沈黙した。そしてそれを図っていたように彼の背中に大きく広がったモニターには赤松の姿が浮かび上がった。

『総員に告げる！』

赤松の珍しい標準語アクセントの演説に全員がモニターに目を向けた。鋭く光る眼光。いつもの上下の隔ての無い気さくな指揮官の面影はそこには無い。明石もじっとモニターを見つめ続けていた。

『清原准将貴下の部隊が現在帝都を占拠して我々の後方に進軍してきていることは諸君も承知していることと思う。いや、今回の作戦が立案された時点で彼等がそれをもくろんでいたのは私も君達と同じく承知していることだった』

静かに周りを見回した明石の目には頷く兵達の姿が見えた。

『彼等は貴族制こそが胡州を胡州たらしめていると言う。だがそうだろうか？胡州に生きる人々の中で貴族の称号を持つのは一パーセントに満たない。武家と合わせても五パーセントを超えるかどうかと言うところだ。それだけの人物が胡州を胡州たらしめているのか？私ははなはだ疑問だ』

その言葉に頷く隊員達。彼等も多くは武家の出身だが、平民出の隊員も多い。上流貴族の出でありながら隣に立つ嵯峨楓も赤松の言葉に頷いていた。

『胡州を胡州たらしめている一パーセントの人々の為に軍を動かす。これは正義と言えるだろうか？これが誠と言えるだろうか？少なくとも私はそうは思わない。また、そうして政権を力で奪取することが正義だとはとても信じることができる話ではない』

赤松はそういった後、静かに手元にあったコップから水を飲む。いつもならこう言う時には茶々を入れる魚住もただまっすぐとモニターを見つめて赤松の次の言葉を待ち続けていた。

『彼等が一パーセント、多く見て六パーセントの人々の為に軍を動かすなら我々は残りの九十四パーセントの人々の為に軍を動かす！幸い濃州に関することだが、越州軍は攻略を断念して補給のため動

けずにいる。ここで我々が決起部隊へと矛先を向けても濃州の安全は確保できる状況にある。つまり我々の敵は唯一つ。清原氏の私兵だけだ』

誰もが黙っていた。だが明石も兵達がこの瞬間を覚悟し、待ち構えてこの艦隊の出撃に加わっていることをこのわずかな瞬間で理解した。

『清原氏の手勢は弱くは無い。君等と同じ胡州軍の厳しい訓練を乗り越えた猛者達だ。ただ、それは相手とて同じことだ。我々をそうやすやすと挟み撃ちにして殲滅できるとは思っていないだろう。だが、彼等の大義はわずか六パーセントの人々の大義だ。それに対して我々の大義は九十四パーセントの大義。義は我等にある！そのことはこれから決戦に挑み、それに勝利するまで忘れないでいてもらいたい』

そう言つて静かに赤松は敬礼をした。ハンガーの兵士達はモニタ―に向けて敬礼をする。明石もいつの間にかそんな兵達に合わせて敬礼をしていた。

近衛師団の通用門に巨大な人影が現れた。当然のように入り口を封鎖している決起部隊は警戒を始めて待機させていたアサルト・モジュールを起動させた。コックピットの中ではサイボーグ用の顔が半分以上隠れるヘルメットを着用した士官候補生西園寺要がじっと外で起動を始めるアサルト・モジュールの群れを眺めていた。

「ほう、やる気ですか？」

すぐさま右手のレールガンを構えてそのまま連射する。起動がされていない機体はひとたまりも無く火を噴いて倒れた。

『いきなり撃つな！お前のお袋を殺されたいのか！』

「いやあ、寝てる機体をぶつつぶした方が被害が少なくて済むじゃないですか。それにアタシの任務は陽動ですよ。好きに暴れさせてもらいます」

そう言うと一緒に機体をジャンプさせる。突然のことにまだ烏丸派の決起部隊は何が起きたか理解できずにいた。すでに起動済みの三式が二機合わせるように宙に浮いた近衛師団の新型機に付いて飛び上がる。

「五式の実力はどの程度かねえ」

付いてきた敵機に照準を合わせるが、相手が師団の敷地を背にしているので攻撃ができないことに気づく。

『馬鹿やっているんじゃない！ともかく動き回ってひきつけられればいいんだ！』

「簡単に言ってくれるねえ……」

要はそう言うとすぐに近くの森に機体を突入させる。敵の二機もそれを見てそのまま要の機体を追う。

『今から救出隊出る！その間ひきつけている！』

通信をしていた士官の搭乗していた装甲車両が虚を付いて封鎖されていた街道のバリケードを踏み越えて都心部へと走り出した。

「それでいいわけだ……後はスコアでも稼がせてもらおうかね」

要はそう言っていると背中張り付こうとしている先の大戦の従軍章をマーキングしている動きの良い三式にターゲットを絞った。下手に動けばやられると思ったのか、公園の池のほとりでじっとしている敵。もう一機は要を挟み込みようとしているようにオブジェの影を動いているのがリーダーで見取れる。

「ステルス性能の差がこれだけあるとかわいそうに思えてくるな……」

そう言っただけで真後ろを取ったつもりで飛び込んでくる新人の機体に照準を合わせた。

「さよならだな！」

振り向きざまのレールガンの一撃で三式のコックピットが吹き飛ぶ。それに驚いて飛び出した隊長機。

「小娘相手になにやってんだか」

自然と要の頬に笑みが浮かんだ。さすがにすぐに冷静さを取り戻した敵は再び森に隠れる。

「でかい図体で森の中……逃げるのか？逃げれるのかよ」

笑みが浮かぶ。自分の残酷さに気づいて少しばかり嫌になる要。三歳で生身の体を失って大人の義体をあてがわれて生きてきた彼女、胡州貴族の頂点に立つ四大公家の筆頭、西園寺家の一人娘と言う立場から人の目を気にして生きてきた自分。そんな自分を本来の自分にしてくれたのが軍の訓練だったのは意外なことだった。

父も、恐ろしい母も彼女の軍の予科学校への進学には反対だったが、彼女は反対されればされるほど軍に志願したいと言う気持ちが高まった。屋敷に出入りしている醍醐文隆などの軍の幹部にねだってなんとかあこがれていた叔父嵯峨惟基の入った予科学校に入学して日に日に訓練と言う名の暴力になじんでいくうちに悟ったこと。自分がどれほど攻撃的な人間なのか。それを悟った今、要は目の前のベテランパイロットが旧式の機体の性能に悪態をつきながら自分から逃げ惑っていることを想像して笑いをこらえていた。

「さあて。どこまで逃げれるかな？小娘相手だと油断していたんだ。簡単に殺すようなことはしないからさあ……出てきて遊ぼうじゃねえの」

熱センサーはそのまま公園の森の木をなぎ倒しながら進んでいる標的を示している。今撃てば相手を蜂の巣にできると確信しているが要はまだ敵の止めを刺すつもりは無かった。上空に決起部隊の信号を出しているヘリが現れる。

「ずいぶんと用意がいいことで」

そう言うつと要は機体をジャンプさせた。そのままヘリの操縦席を五式の空いた左手を使って握りつぶす。

友軍のあつさりと無様に死ぬ様を見てようやく三式のパイロットの頭に血が上った。レールガンの掃射が行なわれようとしているが、その照準はすでに要の首筋に刺さったコードを通じて彼女の意識の中に取り込まれていた。

ひたすら引き金を引きながら弾が出ないことに焦っているだろう敵パイロットを想像して大笑いする要。

「相手が悪かったな……」

そう言うつと要はレールガンを放つ。森の中に立つ三式の頭部が吹き飛ぶ。そして右腕、左足、右足、左足。一発ずつ正確に命中する弾丸。すでに脱出装置のシステムにはウィルスが仕込んであり、死に行くのを待つだけのパイロット。

『卑怯者が！』

傍受した通信に最後に叫んだベテランパイロットの叫びに悦に入りながら要は三発の弾丸を腹部のコックピットに命中させて決着をつけた。

「動きがあるようですね」

門の前に座っていた西園寺康子は静かに立ち上がった。杖のように傍らに構えている大きな薙刀に取り囲む決起部隊のサーチライトが輝いて見えた。兵士達は常に照準を康子に向けられるようにそれぞれに覚悟をしながら輸送車両から降りてからずっと命令を待ち続けていたが、数人の下士官が指揮車両に向かって駆け出しているのを見逃さなかった。

「誰か！」

振り返って一言言くと女中が一人恐る恐る康子の傍らまで歩いてきた。おぼつかない足元と真つ青な女中の顔に思わず噴出しそうになりながら康子はその肩を叩いた。

「まもなく醍醐さんの手の迎えが来ます。準備をするように」

「で？……お……奥様？」

女中は兵士達のライフルと康子の薙刀を見比べて大きくため息をつく。

「心配には及びません。私が父から使うなと言われた力を使えばあの程度の手勢は数に入りません」

きっぱりとそう言い切る康子に女中は納得できないような顔をした後、ちらりと兵達を一瞥して門の中に駆け込んだ。

『西園寺卿に告ぐ！』

指揮車両からこれで七回目の降伏勧告が行なわれようとしていた。だがその音量は小さく明らかに何かが起きたことを康子に確認させる意味しか持たなかった。

『これより五分以内に投降しない場合には今度こそ武力行使に写らざるを得ない！速やかに門を開け投降するように！』

「無駄なことはやめたほうがいいのに」

すぐにつぶやいて薙刀の刃をじっと眺めている康子。兵士達は彼

女の余裕を理解できずにただ発砲命令を待っていた。それでも康子が表情一つ変えないところで数人の兵士達はその異常さにささやきあい不安を隠せずにいるようだった。士官達が戻ってきて再び静寂が闇夜を支配する。そんな状況でかすかだが遠くで砲声が響いた。

「始まったようね。先手必勝で行きましょうか」

そう言つと康子はすぐさま精神を集中して両手でしっかりと薙刀を握つて振りかぶつた。

「え？」

兵士の一人がそうつぶやいたのも当然だった。彼の視界から急に康子の姿が忽然と消えたのだから。そして後方で血飛沫を浴びて倒れる戦友。

「なんだ！どうした！」

士官は叫んだ瞬間にその首が消し飛んでいた。

「ごめんなさいね。皆さんに恨みがあるわけでは無いですけど」

邸宅に砲を向けていた装甲車の上にいつの間にか康子が立っていた。兵士達は銃を構えるのも忘れて呆然と康子の血に染まった紫小紋の留袖のたなびくのを眺めていただけだった。

「でもまだおやりになるのが兵隊さんですものね」

四輪駆動車に乗っていた機関銃手が銃口を康子に向けようと手を動かした。次の瞬間には康子は消え、彼の両腕も鋭利な刃物で切り取ったように車内に転がった。

「撃て！いや撃つな！味方に当たる！」

「撤退だ！撤収！」

将校達は混乱して部下達に向かってわめくだけ。兵士も誰も銃口をどこに向けたらいいのか悩むようにあちこちを見回っている。

「屋敷を撃て！こうなれば道連れ！」

そう叫んだ佐官の腹部が一撃で切り裂かれる。

「お屋敷に攻撃なんてしたら命がいくらあっても足りないですよ」

どこからとも無く聞こえる声。兵士達は恐慌状態で右往左往する。その間にもあちこちで兵士の首が落ち、腕がちぎれ、足が切り取られる。

「助けて！」

「うわ！」

普段なら、もし相手が銃を構えた普通の兵隊なら戦力差も気にせず呐喊攻撃も辞さない胡州の兵士も見えない敵の存在にただ慌てふためくばかりだった。そして逃げ出した彼等に車載機関銃の掃射が届き始める。

「ああ、早かったみたいですね」

近衛師団の車両が到着したときには西園寺邸の前の道路はぶつ切りにされた兵士の死体と、手足を失ってもがく烏丸派の生き残りの兵士と血まみれで微笑んでいる西園寺康子の姿があるばかりだった。

「以上が報告になります！」

戦艦『美濃』。大戦後の軍縮協定で廃棄されることが決まり解体を待っていた旧世代の戦艦の参謀控え室。端末に写った帝都の通信将校の顔が消えると清原は渋い表情で机越しに立つ安東の顔を見上げた。

「十分予想された事態だと思つのですが……」

安東の表情を殺した言葉が気に入らず、清原はそのままうつむいた。

現在遼州系第四惑星胡州の各地で彼等の同志の部隊が宇宙に上がっていた。この四条畷港も民間のシャトルをすべて運休させて廃棄処理待ちの旧型戦艦にアサル・モジュールを満載して宇宙に上げるのを待っている段階だった。状況は西園寺基義が近衛師団に保護されている以外は順調に進んでいた。

清原と同じ烏丸家の被官ばかりではなく地下佐賀家、池家と言つた嵯峨家の重鎮や大河内家の片腕として知られる里見義和の第八分遣艦隊なども清原に賛同して胡州衛星軌道上の西園寺派と目される艦船の一斉拿捕を行なっていた。

「安東君。まだ踏ん切りがつかないかね」

上官、それ以上に軍への復帰に手を尽くしてくれた恩人の清原の前でだけ安東は本心をさらけ出していた。彼から見ればこの戦いは清原の保身のための戦いにしか見えなかった。

恐らく烏丸派が勝つたところで腐敗した貴族制がいつまでも維持できないことは誰の眼にも明らかだった。清原も十分知っていることだが、地球のアメリカをはじめとする国々は烏丸派のクーデターを一齐に非難して大使の召還を始めた国も多い。国内的にもこの決起により先の大戦で凍結されている対外資産についての絶望的展開から産業界は烏丸派への支援を止めると言う脅しを非公式に打診し

てきていた。

『負けても地獄。勝っても地獄だ』

安東の心の声が聞こえたと言うように憔悴しきった清原が顔を上げる。

「どうなのかね」

清原の諦めかけた顔。だが、安東はすでにすべてを決めていた。

「私の答えはいつも決まっています。大恩ある……」

「いや、いい。君はそれでもいいだろうが君の部下達はどうかね？秋田君や安倍君あたりはおおっぴらに私の悪口を言って回って……」

そこまで清原が言ったところで安東は大きく机を叩いた。

「清原さん！そんなことを言っていられる状況なんですか！」

突然の部下の怒りに清原は目を丸くした。そしてしばらく満遍なく安東を眺めた後大きく深呼吸をした。

「安東君。君も胡州の軍人だろ？上官に意見するときの作法も覚えておくべきだと思わないかね？」

そう言うとそのまま後ろを向いた清原に大きいため息をつくとき安東は参謀控え室を飛び出すように出て行った。

「戦力では互角。だがあちらは本隊の醍醐君は南極港を使うことができない……戦いは数だ。勝ちが決まっているんだ。あとは戦後の交渉を進めるばかりじゃないか」

清原はそう言うときデスクに向き直り資料を集めようと端末を起動した。

「どうだ……どれだけ集まった」

それほど広く無い胡州下河内基地の司令室。本来連隊規模しかないはずの陸軍基地は陸軍、海軍両軍の兵士でこった返していた。そこで醍醐はひたすらすすっていたラーメンのどんぶりから顔を上げて目の前の連隊長の小見中佐に顔を向けた。

「現在胡州の基地の四割はうちが我々に同調することを表明しました。あちらが抑えてるのは二割。まあ問題は宇宙に上がる手段を清原一派に握られていることです……」

その言葉に頷く醍醐。彼は清原達の決起が近いと知ってからすべて準備を整えてこの内紛に備えていた。下河内連隊は元々混成連隊として嵯峨惟基が立ち上げた部隊。上層部には醍醐の顔が利いた。

「しかし……あちらも大変でしょうね。うちにも下士官クラスで烏丸さんの所から寝返ってきた兵隊がたくさんいるもんで正直困っているくらいです……」

准将の階級章をつけた髭の陸軍士官が笑う。

「烏丸さん達の兵隊は士気が低いですからねえ……って最初から自分達の利益にならない公約をバンバン掲げている連中と心中するほどお人よしは多くないと言うことですよ」

そう言つと醍醐は仕上げとばかりに湯飲みのお茶をすすりこむ。

「ですが……状況はいささか不利ですね。宇宙に上るには四条畷が極地港でないとアサルト・モジュールで宇宙戦争ができる船は扱っていないですから……」

小見の一言に醍醐は頭を搔く。

「四条畷は今は清原さんの直系の部隊が十重二十重で守りを固めるはずだ。さすがにあの部隊とやりあうには戦力が足りないなあ……」

「……」
「醍醐さん。極地の池さんには？」

小見の言葉にがっかりしたように肩を落としながら見上げる醍醐。その姿が滑稽で隣の陸軍准将が噴出していた。

「小見君。池の野郎の頭の固さは有名だからな。清原さんのことは嫌いだろつが保科さんの遺志を継ぐとなれば話は別だ。保科さんには色々お世話になった池のことだ。簡単にはいかないぞ」

そう言つと醍醐は外の喧騒を見上げるべく立ち上がった。

「結局戦争かよ」

「戦争やないで、内乱や」

明石の私室で愚痴る魚住に明石が突っ込む。中隊長の私室と言ってもそれほど広くはない部屋。ただでさえ巨漢の明石の他に三人も集まれば狭苦しくも感じられた。持ち寄った酒とつまみを手に沈痛な面持ちで四人は飲み続けていた。

「これが胡州の現実という奴だろうな。貴族制と言う体制をどう評価するかで国が真つ二つに割れる。いつかは経験しなければならぬ事実だ」

あつさりそう言つてウイスキーを喉に流し込んだ別所を見て黒田は苦笑いを浮かべる。

「俺達は全員爵位持ちだからな……魚住。お前の親類はどうなんだ？ 帝都は烏丸さんの影響が強いんだろ？」

黒田も人造人間の出自だが、赤松の口ぞえで海軍士官だった嫡子を亡くした泉州の黒田家の末期養子として爵位を得ていた。

「ああ、多分ほとんどは清原さんの部隊にいるんじゃないか？ 元々俺は馬が会わないから顔を出さないけど……と言つか陸軍の大半は清原さんか佐賀さんの下にも付いたほうが多いだろうな」

そう言つて魚住は酒をあおる。第三艦隊が越州ににらみを利かせながら帝都に反転している状況。四人とも今跳躍航行で宇宙に上がったばかりの清原の軍の本隊を叩きたい気持ちはあった。だが宇宙の軍艦の航行を定めた東都条約で惑星軌道上への軍艦の跳躍航行は禁止されていた。そしてそう言うことを守らなければ地球軍や同盟軍がてぐすね引いて介入の機会をうかがっている現状を悪化させかねないことも知っていた。

「それにしても……いらいらするな！」

魚住はたまらず立ち上がり何度かファイティングポーズをとった

後でパンチを何も無い空間に放つ。

「止めとけや。疲れるだけやろ」

そんな明石の言葉に諦めたような顔を浮かべて魚住が椅子に座る。
「でも魚住の気持ちも分かるぞ。俺の部下の連中も開戦を決意したときは盛り上がったが今となっては親類を敵に回すのがわかってどんどん士気は落ちているところだ。これじゃあ戦いにもならないぞ」

黒田はそう言うとお目遣いに黙ってウィスキーをなめている別所を見上げた。

「戦争？内戦？お前等覚悟をしてなかったわけじゃないだろ？」

そう言つと遠いところを見るような目をする別所。明石は彼のこととが今ひとつ判らずに行つた。自分や魚住は文科系の大学生だつた。そして仕方なく出征を命じられ戦火の中に飛び込んだ。黒田も人造人間の製造者の目的に沿つて軍に適應するように作られた。だが別所は違つた。

帝都病院の院長の息子。実業義塾大学医学部のエリート。どちらにしても戦争とは縁遠い有為の人材。軍に入るとしても軍医が最適と目される階層である。だが別所はパイロットとしての道を選んだ。深く突つ込んだことは無い。志願の為に休学していた大学もすでに卒業し、インターンを済ませてから軍に舞い戻つたと言つ話を聞いたときは呆れてものが言えなかつた。

「別所。お前はそないに戦争が好きか？」

明石の言葉ににんまり笑い殻になつたショツトグラスにウイスキーを注ぐ。

「戦争が好きか？俺は好き嫌いで仕事を選ぶつもりはないよ」

「本当か？そんな悪い顔して言えることかよ」

ふざけた調子の魚住の言葉にもただ済まして酒を舐めている。

「まあ……あえて言えば俺は大医になりたいと言つところかな」

再び三人をだまそうと言つような表情で天井を見上げる。

「大医……国を直す医師になるか。ずいぶん大きく出たじゃないか」

あまり酒の強くない黒田はそう言つとすでに烏龍茶に切り替へてするめを啜えている。

「まあ。実は俺は気が短いんだ。目の前の患者一人一人を治す。そりゃあ立派なことで賞賛に値するいい仕事だ。そういう医師を助けるために研究を続ける。これもまた立派。そういう人材は大歓迎

だ。だが俺はどちらも勤まりそうにない。その病んでいる人達がなぜ病むかが気になる。貧しい人がなぜ貧しいか気になる。そうなる
と政治家になるのが一番だが、上流貴族や組織の重鎮がトップを占
めてる政界じゃ俺のできることなんて何も無い」

「だから軍か…… なんか結局力任せかいな」

絡む明石に再び別所は天井を見上げた。

「こいつ酔うと天井ばかり見よる」

大学野球時代には投手の癖を見抜くのが得意だった明石はそう思
いながら自分のコップに安い日本酒を注いだ。

「だが晋一。そういう風に割り切って本当にいいのか？」

突然普段無口な黒田がそう言ったので明石は驚きの目を向けた。

赤みがかかった髪を短く刈り込んだ頭とがっちりとしたローマの彫像を思わせる鋭い鷹鼻と眼光に別所はしばらくぼんやりと突然の発言に呆然とするように見つめ返していた。

「割り切るも何も……」

「人が死ぬんだぞ……。俺はいいんだ。戦争で死ぬために作られた存在だからな。だが貴様等は違うだろ？」

「黒田よう。お前と俺らは生まれ方が違うただけだぜ。死んでかまわないなんて思っちゃいねえよ」

魚住がたしなめるように黒田の肩を叩く。黒田が人の手で作られたのは誰もが知っていることだったので明石も大きく頷く。

「そやな。自分を死ぬために作られたなんていいなや。それを言うたら人間みな死ぬにきまつとるやないか」

明石はそう言うと言った自分の空になったコップに酒を注いだあとそのまま瓶を黒田に向ける。

「飲みがたらんのやろ？ほら」

向けられた酒瓶に自分の半分くらいしか飲んでいないコップを差し出す。明石はそれになみなみと酒を注ぐがわずかにこぼれそうになつて黒田は口で酒を迎えに行く。

「誰もが予想していながら避けることができなかった戦いか……まあ戦争なんてものはみんなそんなもんなのかもしれねえな」

「おう、哲学者気取りか？」

明石と黒田のやり取りにニヤリと笑う別所。それを黒田が先ほどのようなどがめるような視線で見つめている。

「この国の貴族制はそこまで根深いと言うことだ。たとえ俺達が勝つて、烏丸卿や清原さんが政治や軍から追い出されても状況はそう

変わるもんじゃない。西園寺さんも急な改革で貴族特権の剥奪をやれば政権がつぶれるくらいことは承知しているはずだ。赤松の親父もそうだ。軍での平民の出世はある程度許さだろうが同程度の評価をすれば軍の多くを占める士族達は何を始めるかわからん」

「それでもやるのか？」

「通りしゃべった別所に黒田が訪ねる。」

「それは俺の決めることじゃない。赤松の親父は腹をくくった。これからは俺等は生きて勝利を勝ち取れるように励む意外に何もできないだろ」

あつさりそう言つと別所は手にしたショットグラスのウイスキーをあおった。

「ようこそ！軌道上コロニー豊州へ！」

大柄の男が小型シャトルから降りようとする清原の前に立った。

清原は若干引き気味にテンションの高い大男を見上げた。正確に言えば決してその佐賀高家少将は長身と言うわけではなかった。清原が小柄なのは確かだったが、その見下すような視線から佐賀は大きく見えるように振舞っていた。

「ずいぶんと艦船を出す予定なんですね」

清原の脇から出てきた安東の顔を見ると佐賀は渋い顔をした。そして同時に安東も敵意の視線で佐賀と言う大貴族の肉の厚い顔をにらみつけた。

佐賀家はあの嵯峨の分家に当たり、長く中絶していた本家を継げると信じて西園寺や烏丸に工作を仕掛けていた人物と安東も記憶していた。そして今回西園寺家の三男を本家に押し付けられた意趣返しにこうして大軍を率いて駆けつけて恩を売ろうと言う魂胆に安東は敵意しかもてなかった。

「そう言えば佐賀さん。弟さんは？」

口の悪い清原らしく聞いてはいけない話から切り出したのでさすがの安東もあわてた。佐賀の弟は現在宇宙に上がるべく手勢を集めて南極基地に進軍を開始した醍醐文隆であり、二人の仲は犬猿そのものであることは有名すぎる話だった。

「なるほど、清原さんは私よりも文隆を重視するとおっしゃるんですか？」

その言葉にさすがの清原も黙り込んで自分の口が滑ったことに気が付いた。周りの将校達もそこに漂う不穏な空気に黙り込んでいる。「そうだ、新型の巡洋艦の開発の方はどうなっているんですかね？」

慌てて清原が切り出すがそれにまるで反応せずに佐賀はそのまま

通路を反転して歩き始めた。安東は静かに清原の耳元に口を寄せる。
「あの男は小心者ですから。多少脅してやればいいことを聞いてくれますよ。まあ戦場に近づいてから算段を打ちます」

安東の言葉にようやく安心して清原は佐賀の歩みに従うように通路を歩き始めた。

「遠いな……抵抗する部隊は？」

醍醐は仮説テントでじつと座ってコーヒーを飲んでいた。絶え間なく響くアサルト・モジュールの飛ぶ爆音と装甲車両の地響き。あわただしく連絡士官達が駆け回るのを満足げに眺める。

「元々この星の部隊は西園寺さんの息がかかっていますから。現在清原派に同調して籠城している部隊は三つ」

眼鏡の連絡士官が試すように手にした端末のモニターを隠して醍醐を見つめる。

「陸南の田村さんと北最上の織田さん……」

そこまで言うと言と醍醐はコーヒーをテーブルに置いて立ち上がる。

そのまま正解を言われて安堵しているような将校をどかせるとそのまま端末のキーボードを叩き始める。

「陸南の四千は分断しているが織田さんの所は南下されるとことだな。南極の池。あいつはなんだって清原と組したがるのか……」

モニターにはロマンスグレーの中年男の顔が映っていた。

池幸重少将。醍醐、地下佐賀と並ぶ嵯峨の三老と呼ばれる嵯峨家の家臣団の頂点に立つ男。兄の佐賀高家が嵯峨家の領邦欲しさに清原派に付いたような清原派の揺さぶりを受けたわけでもなくただ胡州星上の四条躰に継ぐ宇宙港を固めて沈黙する様は驚異的に見えた。「あれじゃないですか？西園寺卿が嫌いだとか」

「別にそんなことは無いだろ？惟基が嵯峨の家督を継げたのはあの人の助言があつたからだぞ。嫌いならそもそも西園寺の三男で康子様に頭の上がない惟基の相続を認めるわけが無い」

そう言つて醍醐はモニターの前の椅子にどっかりと腰をかける。

「それなら何で……」

眼鏡の将校を一瞥してモニターを見る。そして醍醐はにんまりと笑つてその連絡将校を見上げた。

「わからん」

明るくそう言われると将校もただ呆れるしかなかった。

「あいつのことだ。俺と自分のどちらが強いかわべたいとかそんな理由じゃないのか？ 胡州は軍人の国だ。あいつも俺もそれを思い知らされて今まで生きてきた。名声や出世。どちらも上位の貴族じゃして当たり前。お互い将官として部隊を仕切るような立場になった。ならどっちが強いかわめてみたくなる。そんなところじゃないのか？」

平然と楽しむように言い切った上司に連絡将校はただ呆れた顔を向けるだけだった。

「でもそんな無意味で無謀な戦い……基地警備部隊は旧式の九七式しか配備されていないはずですよ。たとえ援軍が来たとしても……」

「陥落するだろうな。遅かれ早かれ」

そう言うのと醍醐は笑って見せる。その様子に再び眼鏡の将校は呆れた。

「だがな。それで十分なんだ。赤松の第三艦隊。士気は高いし練度もそれなりだ。だが豊州だのなんだの勢力を飲み込んで大軍になった清原さんとこと比べるとどうしても見劣りする。俺等が宇宙に上がって支援しなければ戦いがどう動くか……」

醍醐の言葉に将校もようやく気づく。

「時間稼ぎですか？でも外惑星に展開している部隊が現在急行中ですし……」

「おいおい、全面内戦に突入のフラグは立てないでくれよ。他の艦隊は間に合わないよ。間に合ったところでそうなれば地球の勢力や同盟が顔を出すことになる。恐らく胡州は解体されて貴族云々の話ではなくなるな」

そう言われて将校はようやく気が付いた。この戦いは第三艦隊と清原派の合同軍の直接対決ですべての帰趨が決定されること。それを阻止するためには一刻も早く部隊を宇宙に上げる必要があること。「それじゃあ、基地のシャトルで部隊を打ち上げればいいんじゃないですか？」

「おいおい、それじゃあ上がった方がいいが個別撃破されておしまいだよ。そのくらいのことは考えてるさ兄貴も」

実の兄が陸軍でもうだつの上がない指揮官だと知っている醍醐。決して兄を舐めているわけではなかった。

「そうするとやはり我々が決戦に間に合うかどうか……」

「そうだな。それとどれだけの部隊を宇宙に上げれるかで勝負の半分は決まる」

そう言々と醍醐は満足そうにテーブルに置きっぱなしになっていたコーヒーのカップを手に取り静かに飲み始めた。

「親父……いつまでここで籠っているんだ？」

いらだたしげに叫ぶ陸軍士官学校の制服を着た娘に頭を掻きながら西園寺基義は困っていた。妻の康子の活躍でどうか私邸から抜け出し、現在は帝都で数少ない西園寺派の拠点である近衛師団の基地に籠ったまま三日を迎えようとしていた。

「そんなに戦争がしたいの？要ちゃん」

母、康子のやたらと穏やかな笑みに引いて構える要。要は三歳で全身の九割を失ってそのまま遺伝子解析で成長後の彼女を模した義体を使用している。実際予科学校に進んでからは軍事用とまでは行かないとは言え民間の軍事会社などが使用している強力で頑強な義体を使用している。生身の普通の人間なら喧嘩を売るのは自殺行為と言えるが、相手は一個中隊の警備部隊を薙刀一つで蹴散らした母である。しかも要も相当に康子には鍛えられたので彼女には頭が上がらないところがあった。

「母さんの言うとおりだぞ。清原君も馬鹿じゃない。第三艦隊を叩かずには俺を処刑するためにここを急襲すれば軍事政権として烏丸さんを立てても国際世論は納得しない。ただでさえ先の大戦の負けのおかげで対外資産の凍結や各種の輸出禁止目録の数を減らせないでいるこの国だ。一挙にベルルカンのような失敗国家が出来上がるくらいのこととは考えているさ」

そう言うのと平然と妻の入れた煎茶をおいしそうに飲んだ。

「だからって……赤松さん頼みでいいのかよ」

食い下がる娘。それを余裕の笑みで西園寺は見つめる。

「もちろんそれじゃあ困るよね。たぶん今の戦力でぶつかれば赤松君には悪いが勝ち目は無い。特に時間をかけての戦闘となれば濃州攻略を諦めて反転してきた越州の城君の部隊と挟み撃ちだ。見事に全滅となるだろうね」

そこまで言うとは再び湯飲みに手を伸ばす。そんな父親に心底あきれ果てたと言うように立ち上がる要。

「親父。死ぬときは西園寺家の当主らしくしろよ」

「え？俺が何で死ぬの？」

「第三艦隊が壊滅したらここも危ないんだよ！それとも惟基さんを頼って遼南に亡命する準備でもしているのか？」

怒りに任せて顔を寄せてくる娘に少しばかりからかいすぎたと反省するような笑みを浮かべる西園寺。

「まあ聞け。今のままではと言ったのを聞いてなかったのか？今のままじゃなければいいんだよ」

父親の妙な言い回しに引っ張られるようにして要は静かに畳の上に座り込んだ。

「それじゃあ何か起こるみてえな話し振りじゃねえか」

「要ちゃん！そんな『ねえか』なんていけません！」

「ああ、すいません……母さん」

「『母さん』……？」

「いえ！お母様！」

父親に突っ込みを入れるはずが母康子にいつものように叱られた要だが、さすがの父も要がそんなことにはごまかされるわけではないというように大きいため息をついた。

「あのな、要。お前も何度か地下佐賀の大將にはあつたる？どう見る」

「どう見ると言われても……」

曖昧な要の返事に父親の顔は厳しくなる。普段は家族の前ではいい加減でだらしの無い父だが、政敵を目の前にして論破する際の気合を何度か見たことのある要の表情は硬くなる。

「俺は正直お前にはこれまでの西園寺家は譲るつもりは無いんだ。爺さんも俺も反骨で鳴らした一門だ。お前は度胸は据わっているがそれだけじゃ世間を渡っていくのは無理だ。軍人になるのを最後は許したのもお前の人を見る目が甘いからだ。その目つきや言動で一度会った人間の特徴をすぐに捉えることができるかどうか。四大公家なんぞに生まれるとそれくらいの芸当は求められるんだぞ。良く覚えて置け」

珍しい父親の説教に要は頭を掻きながらどう答えるか迷っていた。分かったの？要ちゃん」

猫なで声の康子。ここで逆らえばどうなるか分からないと言つことでは仕方なく頷く。

「じゃあ、佐賀高家。どういう人物だと見る」

再びの父親の問いかけにしばらく要は考えていた。

「気が強いような……」

「まさか……あいつは小心者だよ。さも無きやとつくに新三郎の首と胴体が離れているはずだ」

あっさりと自説を覆す父に短気な要の視線は鋭くとがった。

「實際命を賭けてまで貴族制を守ろうと言う人間がどれだけいるか……とりあえず利益だけを見て動いている人間は御しやすいものさ」

父の笑いにどうにも納得できないような表情を浮かべる要。母、康子は親子でそっくりなたれ目を見て面白そうに微笑んでいる。

「じゃあ佐賀さんが寝返ってくるわけですね」

「あのなあ、すぐに結論を出そうとするのは良くない癖だ。止めたほうがいい」

「裏切るって言ったのは親父じゃないか」

そう言つて要は康子を見た。父を『親父』と呼んだことで明らかに康子是不機嫌そうな顔をしている。冷や汗を流しながら要は父に向き直つた。

「寝返るって言うのはそれなりの勇気がいることだ。そこまでの度量は佐賀君には無いよ。ただ、いくつかの烏丸派ということ宇宙に上がった人達には色々粉はかけてみたよ。結果はかなりいい具合だ。清原君は切れ者だ。仕事も速く決断力もある。だが人徳は……」

「まるで自分は人徳があるみたいじゃないか」

「要さん！」

「すいません！お母様！」

康子に謝りながらも納得できない要。父もようやく娘の人生経験が足りないことを悟つて大きなため息をついた。

「ともかく戦場は入り乱れての乱戦になるだろう。そうなれば実戦経験の豊富な赤松君に分がある。清原君も懐刀の安東君の使い方次第で勝機は見出せるだろうが……」

「まるで人事だな。清原准将が勝つたら親父は斬首だと思うぞ」
あくまで楽しんでいるような父に釘を刺してみた。

「なあに、人の上に立つと言うのはそれなりのリスクを負うものさ。俺は四大公の筆頭に生まれちゃった。兄貴は遼南で好き勝手やって戦死。弟もそのまま実家に魅入られて今じゃあ遼南皇帝だ。俺が責務を果たさないわけに行かないだろ？まったく因果な生まれだよ」
西園寺はそう言々と妻子を見ながら満足げに頷いた。

「醍醐卿からの連絡。無視を続けてもよろしいのですか？」

すでに大半の豊州の艦隊は出撃を完了し、旗艦の佐賀の戦艦『山城』とその護衛艦の出撃を待つばかり。その緊張感の中、艦隊司令の佐賀高家は側近達を集めて静かに彼等の顔を眺めていた。『山城』の艦長の言葉。確かに彼の弟であり嵯峨泉州公家の三家老の家柄の醍醐家を継いだ醍醐文隆が何度と無く高家に寝返りを打診する連絡がもたらされているのは事実だった。主君である嵯峨惟基は現在、遼南皇帝の地位にあり、遼南の皇帝を帝と仰ぐ胡州においては嵯峨と言つ食えない皇帝の一言がどれだけの意味を持つかは佐賀も知り尽くしていた。

だが皇帝ムジャンタ・ラスコーからの指示は唯一つ、好きにしろと言つものだった。三家老は池家の当主陸軍准将池幸重は南極で烏丸派に付くと宣言し、同じ三家老の醍醐の進軍をてぐすね引いて待ち構えていた。

佐賀は正直迷っていた。

主君のラスコーは義理とは言え醍醐の上に立ちこれから佐賀が倒しに行く第三艦隊司令赤松忠満とは高等予科学校の同期である。そして赤松が担いだみこしの上に立つ西園寺基義は義理の兄である。さらに先日烏丸派の陸軍将校達が西園寺家の包囲をしていながら基義等に逃げられて西園寺派の帝都での牙城である近衛師団に籠城された話は自分が烏丸派に付くことがかなりの危険を伴うことになるだろうと予想させた。

「しかしいまさら引くわけにも行かないのではないですか？」

気の弱そうな情報担当の将校の眼鏡をいじる様を見てもさらに佐賀の視線は曖昧になる。

「確かにこのまま西園寺派に付いたところで……」

「馬鹿言つな！この国の秩序の破壊を見逃せと言つのか？」

『秩序は崩れるものだ。今の時局では仕方が無いことだ』

「確かに清原さんが勝っても次第に貴族の立場は無くなっていくだろうな」

この場にいる参謀ばかりでなく先導艦の艦隊司令も交えての会議はまるで結論を先延ばしにするためだけにあるように続いていた。そして佐賀はただ渋い顔でその様子を眺めている。

「時に……濃州から進んできている越州の艦隊は？」

その言葉に一同は啞然とした。すでに越州の艦隊はかなりの損害を出して撤退を開始していることくらいは佐賀も知っていると思っていた。

「その話でしたら……」

参謀の一言に自分の他力本願な本音が出たことに少し後悔しながら仕方なく佐賀は言葉を続けようとした。

「勝てなければ意味は無い。あの茶坊主もそれを知って沈黙しているんだろぅからな」

佐賀の卑屈な笑み。そして『茶坊主』と言う言葉に参謀達は苦笑いを浮かべた。

殿上嵯峨家の家督。四大公の一つとして知られるその地位は長く不在が続き、地下佐賀家の当主である佐賀高家は泉州をはじめとするコロニー群の管理を代行している西園寺家に何度と無く足を運んでその家の家督相続を運動していた。だがそれは無駄に終わって西園寺家の三男と言う地位の西園寺新三郎に奪われることになった。

先の大戦では憲兵隊の隊長として幾多の戦争犯罪に手を染めて捕虜として地球に送られた新三郎こと嵯峨惟基の非道を訴えて廃嫡と自分への相続を訴えたが殿上人は誰一人彼の言葉に耳を貸すことは無かった。そして遼南皇帝として立った嵯峨を指を咥えて見ているしかない自分を影で嘲笑している目の前の参謀達にどういう顔をすればいいのか佐賀は分からなかった。

今回も西園寺派に付くことを強制されるかと思えば、嵯峨の言葉は自分の態度は勝手に決めると言う投げやりな言葉だけだった。同僚の嵯峨家三家老の池幸重は西園寺基義が嫌いだと平然と言つてのけ、烏丸派の重鎮として胡州陸軍の西園寺派の軍を釘付けにするために南極基地に居座って同僚の醍醐文隆の軍が動くのを待ち構えている。

そんな状況だったが、佐賀はこの状況でもまだ迷っていた。

「越州の脅威が無いと分かれば第三艦隊は全艦をこちらに向けてくるんだろ？」

佐賀も自分の言葉が震えていることは分かっていた。参謀達の表情は変わらないが誰もが腹の中では自分の優柔不断にあきれ果てているだろぅと思うと自分自身に腹が立つてくる。

「それでは高家様……」

参謀の一人、片目のアサルト・モジュールパイロット上がりの大佐が仕方が無いと言うように口を開く。それにすぎるとような目を向ける佐賀。他の参謀達が哑然としているのを知りながらも佐賀はその大佐の言葉にすぎるとしかなかった。

「動くタイミングをずらせればいいのですよ。どちらが勝つか。分からない現状では烏丸公にだけ恩を売るのは得策ではありません。ゆつくりと戦闘宙域に現れて勝ちそうな軍勢に協力する。それが昔から一番賢いやり方です」

佐賀は自分が言いたかったことを代弁してくれた片目の大佐にすがりつきたい気持ちをようやく抑えて咳払いをした。彼には周りの部下達はその卑怯極まりない策に同調するだろう上官をあざ笑っているような妄想に駆られながらもしばらく呆然と周りを見渡した。

「日和見を決め込めと言うのか？」

佐賀の言葉に誰もが少しばかり複雑な表情を浮かべた。そしてその顔つきが佐賀をさらに苛立たせた。確かにそうすれば参謀達の身分は保証されるのは間違いなかった。だが寝返りを打った自分への世間の風当たりは想像するだけでぞっとした。

「日和見とは言い方が悪いですね。ただ戦いに間に合うかどうか分からない事情が多くあると言うことですよ。清原提督には醍醐派の陸軍部隊のけん制が必要だったと、赤松さんには烏丸派の勢いに飲まれたと説明すればいいだけの話です。ある意味事実ですから」

片目の鋭い眼光が佐賀を貫く。そしてその口元の笑みが佐賀に決意を迫った。

「……文隆の軍は何隻の艦艇を用意できるんだ？」

佐賀は熟慮の後そう言うって視線を机の上のモニターに落とした。参謀達は安堵したと言うように資料を探し始める。

「恐らく南極基地の艦艇に池少将は手をつけないでしょうから。多ければ戦艦『伊勢』級を三隻。巡洋艦は五隻ほどがあるはずです。軌道上に待機している同調した泉州の艦艇を含めれば我々と同規模の艦隊を編成できるはずです……」

そこまで言うと言目参謀は明らかな笑みを佐賀に向けてくる。

「それなら警戒は必要だな。我々にはその脅威……いやその監視をする義務があるだろ？」

小声でささやく佐賀。その落ちつかない様子に参謀達はまた不安にさいなまれているような顔になる。

「だれか……不服なものはいろのかね？」

明らかに泣き言のような調子で佐賀がつぶやくが誰一人それに答えるものは無い。自分がどう言う部下に出会ったのかを佐賀はここで始めて思い知った。

『文隆、赤松君……君達がうらやましいよ』

自分の決断力の無さを棚に上げて佐賀はそう心の中で独り言を繰り返すだけだった。

「そないに緊張することあらへんで」

しきりと軍服のカラーを気にする正親町三条楓を見ながらぶつかりそうになりそうな頭を下げつつ第三艦隊旗艦『播磨』の艦隊司令室に明石は入った。『至誠』の文字の掛け軸がかかった司令の執務机には赤松忠満が一人、筆でなにやら書付を残しているところだった。

「おう、タコとお嬢か」

そう言つと真剣な面差しを崩して立ち上がり応接用のソファーに二人を導く赤松。女性としては長身の180cm近い楓と同じくらいの身長だがその軽い腰はどう見てもかなり背の低い人物に見えて2mを超える大男の明石はどうにも苦笑してしまふ。

「あーなんかええもん無かったかな……」

「さすがに酒はあかんのと違いますか？」

「誰が酒出すなんて言うかいな。甘いもんのはなしや」

上官が二人とも関西弁を使うのを見ながら硬い表情で楓は明石の隣に腰を下ろした。

「特命……ですよね」

楓の言葉に赤松の表情がほぐれる。そして赤松はそのまま忙しく明石達の正面のソファーから飛び上がるようにして執務机の上の和紙の書簡を手にとって応接用の机に置いた。

「手紙ですか」

明石は静かにそう言つて書簡に視線を向ける。楓は少しこの先の赤松の言動が予想できたと言うように不機嫌そうに頬を膨らませた。「済まんなあ。ワシは知つてのとりの恐妻家やからな……」

そう言つて頭を掻く。公私混同。本来そんなことをしない人間と思つていた明石だが、その赤松の食えない表情に苦笑いを浮かべることができた。

「手紙を届けばいいんですね」
硬い表情のまま楓は静かに書簡に手を伸ばそうとした。

「ですが……敵艦隊を迂回するとなるといつ着くか分かりませんよ」

楓の言葉はもつともな話であるが明石は少しかり赤松の表情から仕掛けがあることを見抜いた。

「正親町三条曹長。君の専用機は清原派の艦隊には連絡してあるから。攻撃は無いと思うた方がええな」

そんな赤松の言葉に楓の顔が青く染まった。

「僕が……いえ、自分が女だからですか？」

赤松も明石も大きいため息をつく。しばらくの沈黙。ようやく息を整えた赤松が口を開いた。

「それもあるのは事実や。そして次には嵯峨の家督を継ぐからと言い出すつもりやろ？それもあつとる。そやけどそれ以上にこの手紙には意味があんねん。私信をワシが出すわけにも……これはできれば烏丸はんの手の元で開封された後に貴子はんの手に届くのが理想やねん」

「はあ」

捕まって手紙を取り上げられて読まれることが本文の手紙。そう知らされて意味も分からず楓はうつむいた。

「正親町三条の。親父はああ言つとるが実際撃ち合いにならん言う保障はどこにも無い。それ考えたらできるだけ腕の立つパイロットが適任とワシも考えたんや。すまんがこの任務受けてくれ」

隣の上官の明石まで頭を下げてくる。仕方がないというようにおずおずと楓は手紙を手にとった。

「そのまま渡していいんですよ……僕は中身を知らないままで」「読みたいんか？」

赤松の言葉に激しく首を振る楓。そんな少女の照れる様を見て赤松も明石も思わず笑顔になる。

「それでは失礼します！」

楓はすばやく立ち上がるとそのまま司令室を飛び出していった。

「ああでもせなあいつは死にかねんからなあ」

大きく息をした後の赤松の言葉。明石も頷くばかり。

「戦場はこの一戦に限ったことやないからな。どっちが勝っても遺恨が残る。同盟や地球の介入も想定内や。難しい時代にはそれなりに人がいる。あいつはその素質があるとワシは思うとります」

「そやな」

明石の言葉に大きく頷いた後、赤松はそのままたちあがって執務机に腰を下ろした。

「すべてはお前に任せる」

安東貞盛はそう言うヘルメットを被る。彼の率いるのは胡州陸軍第一強襲揚陸艦隊。主力は搭載されたアサルト・モジュール三式。どれも近年の慢性的な国家予算の不足から稼動する機体は多くは無かった。そんな彼が見つめた先のモニターの中には気の弱そうな初老の男の影が映っていた。

それは艦隊参謀の秋田義貞大佐。安東家の一族衆でも長老格になる男だった。

先の大戦で安東家の抑えるコロニー群羽州は大きな被害を出した。三度の直接攻撃と潜入部隊による破壊工作によりその人口の半分以上い終戦後の胡州での発言力は著しく衰えた。そしてそのことを憂える若い将校達が安東のところに集まったもの自然な出来事だった。国家予算規模に見合わない巨大な軍組織の縮小は彼等若手の将校達の身分を次々に奪い去った。羽州の修復中のコロニーには失業した軍人達が何をするわけでもなくたむろしている様をいつでも見ることができた。その光景は安東にとって屈辱以外の何物でもなかった。

烏丸頼盛には確かに羽州相続に辺り尽力してくれた大恩があり、清原には軍へ復帰できた恩義もあった。それだけが安東をこうして親友赤松忠満討伐に向かわせたわけではなかった。この揚陸艦に乗る若いパイロットや技師達の生活。それを守ること。それが一番に安東に課せられた義務だと安東は思っていた。

「ですが貞盛君。本当にいいのか？」

一族衆の長老の顔に戻った秋田の一声が響く。その弱気な言葉に安東は激怒しそうになるのを無理に抑えるために深呼吸をした。秋田は過激な貴族至上主義を唱える清原に接近する安東を快く思っていないことは知っていた。いつかは胡州の貴族支配は瓦解する。それは誰もが予想していることだった。強大な軍事力で遼州星系に覇

を唱えていた二十年前くらいを境に胡州の経済状況は悪化した。アステロイドベルトの資源は次第に枯渇し始め、胡州本星の開発も資本の投下をためらう東和に国家体制の矛盾を指摘されて行き詰まっていた。そんな状況でのゲルパルトとの対地球戦争はそこにわずかに残っていた体制を支えるエネルギーすら胡州から奪い去ることになった。

安東も目端の利く秋田なら醍醐の地上部隊に協力するだろうと思いは込んでいた。そんな秋田から揚陸艦隊の提供を申し出られたときは少しばかり面食らうことになったほどだった。

『結局彼も羽州軍人だったと言うことか』

そう思うと静かに秋田の映っていたモニターを消してヘルメットを被って背後に立つ巨大な赤い三式に向き直った。

向き直る安東を直立不動の姿勢で迎える教導部隊の生徒達。多くは平民の出で彼らからすれば自分達の行動が平民の権利を制限する戦いになると知っても彼等は安東に着いてきてくれていた。

「貴様等。本当にいいんだな」

あと数日で第三艦隊との決戦に挑む最後の模擬訓練。どの顔も緊張と焦りの中静かに安東を見つめてくる。安東の隣でニコニコと彼を見守っていた教導部隊の副隊長の小男がそのままの表情で部下達を眺める。

「大佐。うちにそんなことで大佐を裏切る奴はいませんよ」

『そんなこと』。それは秋田との会話のことを指すのだろうと思つて安東は苦笑いを浮かべた。ここまで来てまだ上官が迷っている。本来ならそんなことは見せてはいけないと思うことをやってしまった自分に少しばかり恥じ入りながら苦笑いを浮かべる。

「自分達は……ただ安東教官についていくだけです！」

五分刈りの頭を振りながら戦闘に立つ曹長がそんな安東の苦笑いに答えるように叫んだ。部下達は誰もが大きく頷き安東の次の言葉を待っていた。

「これから模擬訓練に入る」

そう叫んだところでそれまで含み笑いなどを浮かべていた生徒達の表情が引き締まった。それに満足するように頷くと安東は言葉を続けた。

「訓練だと言ってもこれが実戦までの最後の訓練だ。被弾したら死んだと思え、命中させたら殺したと思え。それぞれに死力を尽くし勝利を目指す。これは訓練も実戦も変わらん」

ここまで言つたところでシミュレータのセットアップをしていた技官達が現れる。訓示の最中と知ると厳しい表情でこれから各機体のシミュレーション機能を使用しての最後の訓練を行なう生徒達を

眺めていた。

「諸君等は今回の戦いでは私の部下として百足のエンブレムを背負うことになる。別にそれは誇りでも権威でもない。ただ俺のエンブレムを背負えば敵もひるむ。面白いことだが俺は赤松の手下連中にはかなり恐れられているんだそうだ。諸君が俺の顔をつぶさない限り相手はいつでもひるんでいると思え」

その言葉に生徒達は大きく頷いた。

「それでは各機搭乗準備に向かえ！」

この安東の一言で生徒達はハンガーに散った。安東もまた自分の赤黒い機体に向けてゆっくりと歩き出した。

「それにしても良いんですか？もう二ヶ月ですよ」

鏡の前でメイクをしている男。まるで役者か何かのようだが、ここが高級ホテルの一室と考えるとその回りのメイクアーティスト達が非常に不自然に見えた。そしてその男に良く似た男がソファに腰掛け着流し姿で新聞を片手に牛乳を飲んでいる。一度カップを置くとその男、嵯峨惟基こと遼南皇帝ムジャンタ・ラスコーは静かに伸びをした。

「すまねえな。俺もまずいとは思っているんだけど……しばらくは頼むことになりそうだね、影武者」

「すまないと分かっていたら何で軍を動かさなかったんですか？」

影武者役の弟。兄のゆるい目元を演出するべく影を作っているアーティストを気にしながらそう言った。嵯峨は仕方がないというようにもう一度カップを手にして静かに牛乳を口に含む。

「軍を動かすのは拙いからな。アンリの馬鹿もそうなれば公私混同だと騒ぎ始める。それに下手して第三次遼州大戦勃発なんてことになつたら大変だろ？」

そう言いながらいつもの自虐的な笑みを浮かべる嵯峨。仕方がないというように弟は静かにため息をついた。胡州の混乱が熱い内戦と言つもので象徴されるとすれば遼南の内部は裏に隠れた権力闘争と言つ冷たい戦争と呼べるような状態にあった。

第二次遼州戦争では胡州や外惑星のゲルパルト帝国と同じ枢軸側に属した遼南帝国だが、大戦末期にクーデターを起こしたガルシア・ゴンザレス将軍が霊帝の贈り名のムジャンタ・バスバを追放して実権を握ってから国はいくつもの軍閥が割拠する内乱状態に陥った。嵯峨は内戦末期に北兼軍閥を掌握して人民軍陣営として参戦し、ガルシア・ゴンザレスを倒す為の戦いで大きな功を立てた。その後、いとうはやと人民政府は北天軍閥と嵯峨や彼の右腕の伊藤隼人民委員の派閥に分

裂。嵯峨のクーデターで政権は彼の手に落ち、人民政府とは対立関係にあった東海・南都の軍閥も参加しての遼南帝国が再び立つことになった。

だがその政権も軍事力の統一ができない状況では不安定だった。

嵯峨は非情にも手を打っていく。まずは花山院軍閥が胡州の烏丸派と気脈を通じていることを口実に攻撃して攻め滅ぼした。そして南都軍閥についてはその首領のアシリ・ブルゴーニユ候を宰相に任じて懐柔して遼州の軍事系統を一つにまとめることには成功していた。アシリ・ブルゴーニユは嵯峨の説く遼州星系全体を統括する同盟政府の建設にはあまり積極的では無く、現在でも両者の間には隙間風が吹いているとささやかれることが多くなっていた。

そんな状況でバスバ帝の百人を超える愛人の一人の子である弟の吉川俊太郎が兄の影武者を勤めているのは非常に微妙な状況だと嵯峨自身も分かっていることだった。

「まあ……アンリはもう気づいてるからいいとしてだ」

嵯峨は立ち上がると額を右手の人差し指でつつきながら何かを考えていた。ようやくメイクの終わった嵯峨とほとんど変わらない姿の弟を見ても嵯峨の表情は緩まなかった。

「問題はやはり胡州か……本音は兄貴や忠さんに勝ってほしいが戦争は時の運だ」

「そうですか？色々噂を聞くんですが……あの地下の大将……佐賀高家とか言いましたか……彼を揺さぶっているとか……」

にやりと笑う影武者の嵯峨。その表情を受けて本物は静かな笑みを浮かべた。

「まあ事実だから認めるよ。あいつの参謀の中に俺の息のかかった連中を送りこむのにはそれなりに苦労したしな」

そう言って再びソファーに体を投げ出す兄。その様子を見ながら偽者である吉川俊太郎は大きく息をついた。

「なんだ？まだ不安なのか？俺より皇帝経験は長いくせに」

一度影武者を頼まれるとそのままずっと勝手に動き回る兄に何かを言いたくなったが無駄だと悟って吉川は黙り込む。そして今回の長い影武者生活についての愚痴を続けようとしたが馬鹿らしくなつて口をつぐんだ。

「おう、分かってくれたか。それじゃあ俺はいつもどおり裏口から出るから」

「見つからないでくださいよ」

立ち上がる兄の姿を見送ろうとする吉川。彼自身自分が24歳だと言つのにそんな自分より若く見える39歳の嵯峨を見送ろうと立ち上がる。

「そんな見送りなんていらねえよ。餓鬼じゃねえんだ」

「その口調も何とかしてくださいよ。いずれ本業の皇帝家業が長く

続くことになるんですから」

「へ？そりゃあ大変そうだね俊太郎ちゃん」

「ずっと影武者を続けるって言うんですか？お断りです」

先手を打たれてうつむき加減に部屋のドアに手をかける嵯峨を見送ることを辞めて吉川はそのまま静かに鏡の前に腰を下ろした。

一人の将軍がじつと射出台に乘せられた三百メートルはあろうかと言つ重巡洋艦を見上げながら弁当を突付いていた。胡州南極点にある南極基地。窓の外は零下70度と言つとてつもない酷寒の地。男はただ弁当のエビフライを口に入れるともぐもぐと噛みながらぼんやりと外を眺めているだけ。

「ここでしたか、池少将」

一人の連絡将校が窓辺の出っ張りに腰掛けている小柄な将軍、池^{いけ}幸重^{ゆきしげ}に声をかけた。

「あれか？醍醐がそれなりの準備をしてきたと言つことか？」

現在池の加担する烏丸派の陸軍部隊は帝都とこの南極基地以外の拠点を次々と醍醐文隆等の西園寺派の部隊に駆逐されつつあった。もしこの軍勢がこの基地を落とせば烏丸派の勝機は万に一つも無くなる。そのことは池自身も理解していた。

「現在主力の第四軍が東方で待機。さらに同調する部隊は……」

「やめとけよ、そんな皮算用なんて」

そう言つて池は弁当のふたを閉じて用事を取り出して再び窓の外の戦闘艦の林立する光景に目をやる。

「あちらだつてこの基地が傷だらけだつたら意味が無いんだ。この基地の守備兵だけでも十分戦争にはなるよ」

簡単に言つてのける池に連絡将校は理解できないとも言つような顔をした。

「おいおい、将校がそんな気弱そうな顔をするもんじゃないぞ。士気に関わるからな」

にやり。そう笑つた池はそのまま出窓の縁から立ち上がる。そして士官の手にしていたメモ帳を奪い取つた。

「おう、十分な部隊だな。この基地を焼け野原にするのが目的なら戦うだけ無駄だと思わせる戦力だ」

それだけ言っていると池はメモを連絡将校に渡した。

「ですが……もし彼等をここで足止めできたとしても……」

そう言いかけた将校に眉をひそめる禿頭の池。

「なんだ？ 気弱はいかんと言ったばかりだぞ？ それにあの臆病者の佐賀の野郎まで清原さんと心中する覚悟ができたって話じゃないか。俺達がいまさらどうこうできる話じゃないんだよ」

池はそのまま廊下を進んでいく。連絡将校はその池の度量の大きさに勝敗に関わらず彼を支えようと言う心をさらに強くするのだった。

「まだ応答は無いのか？」

そう叫んだ醍醐に参謀達はただ頷くばかりは無かった。

醍醐の激に賛同する母星防衛任務の陸軍部隊は次々と集まっていた。すでに過半数の部隊は醍醐の近衛師団に同調する姿勢を見せ、帝都奪還作戦と同時に宇宙に上がるための南極基地制圧へと動き出していた。そんな醍醐が同じ嵯峨家の三家老として南極基地司令の池幸重少将と連絡を取ろうとしても完全に音信を途絶した防衛部隊は沈黙を守っていた。

「なんと言つても基地の施設を人質に取られているようなものですから……」

参謀の一人がそう言つて頭を掻く。醍醐もそれは十分想定していた事態だった。清原和人という男が西園寺と大河内の恩顧の部隊の数が自分達の軍を数では勝っていることを計算に入れずに戦争を始めるほどおろかだとは思つていなかった。

先手を打つて帝都周辺の基地を制圧。そして部隊を宇宙に上げたあとに基地を破壊。残った大規模軍港はすでに味方の勢力下。その状況で宇宙の戦いに勝つて再び胡州に降下して数に勝る敵を圧倒する。そんなシナリオは定番過ぎるがそれゆえに有効だと醍醐も認めざるを得なかった。

「出方を見たいところだが……どうしたものかね」

そんな醍醐の言葉に天幕の下で参謀達は黙り込んでいた。薄い大気を圧縮するテントの中。蒸しあげようとしても言うような暖房の熱気で誰もが汗をかく。そんな状況下で誰もが黙り込んだままで醍醐を見つめている。

「失礼します！」

連絡将校が扉を開いて駆け込んできた。

その様子はまるでおぼれている人間に藁束を投げたような状態だ

った。全身の視線を浴びて手に書状を持った連絡将校は思わず引いていた。

「なんだ？会議中だぞ」

参謀の一人がそう言ったのを手で制して醍醐は連絡将校に目を向ける。

「書状か。池からか？」

「はい、そうですが……」

「こちらに持ってきてくれ」

醍醐の言葉にもただためらいながら連絡将校は上座の醍醐の所まで書状を運んできた。

古風な筆で書かれた書状を開いた醍醐はしばらく沈黙した。参謀達はその様子を静かに見つめている。沈黙が続いた後、いかにも意外だと言う表情で醍醐は書状をテーブルに置いた。

「降伏するから時間をくれ？」

醍醐の言葉に幕僚達はざわめく。明らかに誰も予想を覆す書状の内容にそれぞれが顔を見合わせた。

「時間稼ぎじゃないですか？」

「だろうな」

眼鏡の参謀の言葉に醍醐は苦笑いを浮かべた。すでにいつ第三艦隊はかなりの船速で清原側の艦艇群に向かっているのは誰もが知っていた。そして時間が惜しいと言うことにかけては一番知り尽くしているはずの醍醐が苦笑いを浮かべているのが奇妙に覚える参謀達は黙ったまま彼を見つめていた。

「だが、現状で南極基地の施設の無血接收は利益になるな」

醍醐のそんな言葉に参謀達はいきり立つ。

「池さんがそういう事を言っているのには理由があるはずですよ！それを見極めてから……」

「いや！即攻撃をかけるべきですよ！防御体勢の準備のための時間稼ぎですから」

「出撃命令を！」

下手の部隊指揮官達は逸ったように叫ぶ。だが醍醐はそれを見てもただ静かに座っているだけだった。

「どう思つかね、君達も若いのおんなじ気持ちか？」

そう言う総指揮官の言葉に参謀達は沈黙した。攻撃を仕掛けて基地の施設が損壊すれば第三艦隊の支援にはとても間に合わない。またずる時間を引き延ばす池の策略に乗っても同じこと。

「無益な血を流さずに済む選択肢としてはいいことかもしれません」

手前に座っていた頬に傷のある大佐の言葉に満足げに醍醐は頷いた。

「私も書状を書こう。あいつとは同僚だからな。どういつ返事が来るか楽しみだ」

そう言つて無理のある笑みを浮かべると醍醐は立ち上がつて静かに背を向けた。それを見た参謀達は立ち上がり、それぞれの持ち場へと散つていった。

艦隊司令室の赤松の顔は冴えなかった。地下佐賀の艦隊が清原派の揚陸艇の背後で緩慢な動きを見せているのは歓迎すべきことだったが、肝心の胡州陸軍の主力を指揮している醍醐の部隊が南極基地で動けずにいる状況が彼をいらだたせていた。

「別所。やはり醍醐さんは間に合いそうにないな」

独特のアクセントでつぶやく上官に別所はただ苦笑いを浮かべるだけだった。

幸い背後を脅かそうとする動きを見せていた越州艦隊は魚住等のアサルト・モジュール部隊に一蹴されるとそのままコロニーに戻り沈黙していた。

「醍醐候の部隊はあてにしないほうがよろしいかと」

ソファーに腰掛けて端末をいじっている別所晋一中佐を忌々しげに見つめる赤松。自分でもそれが不条理だと思いながら芳しくない戦前の状況に苦虫を噛み潰した表情しか浮かべることはできなかった。

「ですが、いい話もありますよ」

そう言うつと別所は端末のモニターを執務机に張り付いている赤松から見えるように展開させる。そこには佐賀の先日の会議の様子が映っていた。誰もが暗澹とした面持ちで周りをきよろきよろと見回す。上座の佐賀高家も表情は冴えない。

「あちらも状況は同じと言うわけやな。ちんたら動いとるのは時間稼ぎ。勝ち馬に乗ろうたあええ度胸や。新の字が許す思うとるんやろつか？」

ようやく赤松の顔に笑みが戻った。だが、人の不幸を喜んでいられるほど赤松は樂觀主義者ではなかった。すぐにその表情は元に戻り静かに自分を見つめている別所に目を向ける。

「それはそうと清原さんの方の戦力分析。佐賀の旦那を抜いたのは

できたんか？」

「ええ、敵の主力は陸軍の輸送艦艇を使用しています。こちらの艦隊の戦艦と比べたら火力でははるかに劣ります」

「火力は劣るか……アサルト・モジュールの数は倍か？それとも……」

再び視線を落とす赤松。腹心中の腹心の別所だけに見せる落ち込んだ表情。別所は大きくため息をつくと再び端末をいじり始めた。

「三倍ですね。まあこちらは実戦経験のある連中が多いですが、あちらは訓練生上がりがほとんど。互角には戦える戦力だとは思いますが……」

「そないなことはわかつとんねん。そやけど……」

「指揮官に弱気は禁物ですよ。まあ先日の手紙の効果がどう出るか……楓の腕の見せ所というところですか」

そう言つて別所はニヤリと笑った。

「連行しました」

そういう言葉に安東は一人複雑な表情を浮かべていた。

先行している巡洋艦『羽黒』艦内。そこに第三艦隊から発進した三式が捕獲されたのはある意味奇妙に思えて思わず首をひねった。そしてそのパイロットが親友嵯峨惟基の娘である正親町三条楓曹長だったと言うことでさらにそれを命じた赤松忠満の真意を測りかねていた。

狭い営倉につれてこられた楓はヘルメットを脱いでその長い後ろ髪を整えると壁際に立っていた安東の方を見上げてきた。

「君達は席を外したまえ」

安東がそう言うと言導学校の生徒である彼の部下は固そうな敬礼をしてそのまま部屋を出て行った。

「久しぶりだね」

そう言うと言と楓の正面のパイプ椅子に安東は腰を下ろした。机の上には一通の書状。筆まめな赤松らしい踊るような筆の書体が踊っているのが見える。

「ごらんにならないんですか？」

誰もその書状に手を触れなかったらしく、楓はいかにも自分の行為が無駄だったと言うような諦めた調子で訪ねてきた。

「忠さんのことだ。貴子姉さんに書状を出すと言っるのは口実だろ？」

そう言いながら部下達にも確認させなかった書状を開きにかかった。じつとその手を見つめる楓に少しばかり照れながら安東は書状を開いた。予想通りそれは安東の妻であり赤松の妹に当たる安藤恭子への手紙だった。

「あまりにも読める展開だな。これで俺が動揺すると思っているのかな、忠さんは」

「それは無いんじゃないですか？公私混同は元々しない人ですから」

「そつだ。だからこそ狙いが読めない……」

しばらく安東は考えた後、ふと不安そうに目を泳がせる楓を見つけた。

「……いや、ある程度読めたよ。まったくこういうことには気の回る奴だ」

呆然とする楓。それを見て安東は一人合点がいったように頷く。書状はあくまで口実。問題は目の前の少女の処遇にあった。安東も赤松も公私混同をすることは無い。だが、正親町三条楓の父である嵯峨惟基にもそれが当てはまるかは別問題だった。切れ者で鳴らし、表情をほとんどその自虐的な笑みの底に沈めていた予科学校での悪友が何を考えているのか。安東はそれが昔から分からなかった。

「そういえば新の字は元気かね？」

思わずそう言ってしまったと思ったのは安東だった。

「父上のことは私は知りません。事実上の家出状態ですから」

平然とそう言う楓にかつての友の表情を思い出す。

『やはり新三郎の娘だけある。喰えないな』

心の中でそう思うと安東の頬は緩んだ。何を考えているのかまったく分からない突拍子の無い友人、西園寺新三郎。同期だった胡州軍高等予科学校時代も、士官学校を経ずに直接陸軍大学に入学した際も、社交界で名の通ったエリーゼ・シュトルンベルグを妻にすると言い出したときもまったく安東の理解の外にいた友。

そんな男と同じようにポーカーフェイスで黙り込んでいる楓の前の椅子に座り苦笑いを浮かべている自分がいぶんちっばけに見えるてくるのを安東は感じていた。

「まあ忠さんも新の字に遠慮して君を戦場から遠ざけたわけか……それなら……」

「どうするんです？」

まったく持つて父と似て先と先にと話題を振ってくる。安東はさすがにこれには苦笑した。

「君の任務はこの手紙を恭子に届けることだろ？」

「まあそういう話ですが……個人的にはここで大佐殿と刺し違えると言うのも一つの任務遂行の形態だと思うのですが」

「ずいぶん物騒なことを言うじゃないか。何か武器でもあるのか？」

安東の言葉に不敵に笑う楓。身体検査は済んでいる。パイロットスーツのバックパックのパルス推進器も外しており、完全に素手と言う楓。格闘術なら身長では互角の楓に対して安東は負ける気はしなかった。

「何か持ち込んできているのかな」

黙り込んでいる楓は今度は笑みを浮かべてきた。こついう口でのやり取りはさすがにその父の嵯峨惟基、かつての西園寺新三郎を髣髴とさせて安東にまでその笑いは伝染した。

「時に安東大佐……」

勿体をつけるように楓がつぶやく。まだ幼く見えるその言葉に警戒感を持っている自分を知って安東は苦笑いを浮かべていた。

「何か言いたいことがあるのかね……」

「法術と言うものをご存知ですか？」

突然の話題の変化に安東は呆然として楓を見つめた。

安東も知っていた。遼州人の一部に地球人には無い力を持っている人物がまれに見られることを、そしてその力を持っていた存在の一人が目目の前の少女の父親だと言うことも分かっていた。実際、予科の時に嵯峨がふざけ半分で手に彫刻刀を突き刺しても血が出ないと言つて他愛も無いそして信じがたい芸をその目で見ていなかったら今の引きつる頬を説明することはできなかっただろう。

「君がその術士だとも言うのかね？」

そのようにカマをかけてみても少女は黙って微笑んでいるだけだった。

「君の父親の力を受け継いでいるのかね？」

もう一度安東は尋ねる。そこでようやく少女はまじめな顔をして首元に手をやった。

「頸動脈。重要な血管ですよね……ここを絞められると何分くらいで脳が酸欠状態になるか……試してみたことはありませんか？」

「今度は脅しか」

不敵に笑う楓。安東がもし彼女が嵯峨惟基の娘であることを知らなかったら。そして嵯峨惟基がかつての彼の友人の西園寺新三郎と同一人物であることを知らなかったら。そのまま少女とはいえ殴り倒していたことだろう。だが事実は彼女は嵯峨惟基の娘であり、西園寺新三郎は絶家の嵯峨家をついで嵯峨惟基と名乗っていた。

「何が狙いだ？」

楓の笑みにようやく安東はそれだけ答えた。

「僕の望みはそれほどたいしたことではありません……いや、安東さんには難しいかな……」

そう言っ て少女は安東を見上げて再びにんまりと笑った。

捕虜になっても平然と笑みを浮かべる少女に安東は彼の父の親友嵯峨惟基の顔を思い出す。そして予科学校時代、自分が買った他校との喧嘩に勝手に先回りして出かけて行っただけで一人で片付けてくる時の満面の笑みを思い出していた。

「俺に難しい願い？この戦いを終わらせることか？じゃあそれは無理だ」

そう答えるしかなかった。すでに胡州での軍事衝突が始まっていると言う情報をつかんでいる安東。二つに割れた国を一つにまとめるには軍事衝突で勝者を決めるしかない状態まで来ている事は彼もわかっていた。

「違います」

「違う？」

楓の笑みがまぶしく安東の目の中で広がっていくように見える。

それが交渉ごとでは嵯峨や赤松のようにには行かない自分の弱点を見透かされたようで気まずい雰囲気になった。

「清原准将に会わせていただきたいのですが……」

少女の言葉に安東は呆れた。今更安東が彼女を清原に会わせたとことで状況は変わるとは思えなかった。そしてそのことはこの喰えない親友の娘も分かりきっているはずだった。

「それをしてどうなる？」

「どうにもなりませんね……」

再びの沈黙。安東には少女の真意がはかりかねた。

「でも戦後を考えると大きな意味があると思いますよ。清原准将はこの戦いで終わりにするにはもったいない人材ですから」

まるで宰相でも気取るかのように平然と言ったのける楓。ただ呆れながら安東は少女を見つめていた。

「それは逆じゃないかね。現状の戦力では第三艦隊には分が悪い状

況だ。地上の醍醐さんの部隊は間違いなく間に合わない」

「確かにそのとおりですね。だがそうなると赤松様や西園寺卿はどうなるでしょうか？」

「当然今回のことの責任を取られて身柄を拘束されて裁判にかけられるだろうな」

決まりきったことを言われて懽然としながら安東が答える。だが楓はその答えがあまりにもひねりがないというように笑みすら浮かべて安東をにらんできた。

そこまで聞いて安東は気がついた。

「やはり脅しに来たんだな……恭子のことで」

初めて楓の顔が驚愕のそれに変わるのでようやく安東は落ち着くことができた。

「体が弱い人間を出しに脅す。新三郎か……入れ知恵は」

その言葉に一瞬にそれまでの強気の楓の表情が崩れた。そしておずおずと頷く。安東は安心して立ち上がった。

「俺の決意は変わらない。手紙ならそのまま持って恭子に渡してくれてかまわないぞ」

「渡す？私を見逃すと言うんですか？」

今度は驚いて見せたのは楓だった。それを無視するように安東はそのままドアのところの端末を起動していた。

「いいんですか？」

「何が？」

すでに起動して画面には担当士官の顔が映っているのに振り向く安東。その冷たい視線を見つけて楓は静かにうつむいてしまっていた。

「お客さんはお帰りだ。一応第三艦隊所属の特機だから管制官に間違えられて撃ち落とされると拙いからちゃんと連絡をしておいてくれ」

それだけ言うと安東はすぐに端末を閉じてしまった。

「帝都には恐らく五時間くらいで着くだろう。準備は好きにしてくれてかまわない。何なら護衛でもつけるかね」

笑みがあるというのにその安東の目は笑っていなかった。楓は静かに頷く。

「忠さんも新の字も俺が昔のお調子者だと思っていたんだろうな。俺も忠さんには要領のいい兄貴分であって欲しかったし新の字は飄々

とした天才気取りでいてくれればよかったんだがな」

遠くを見るような安東の視線。それを見て楓は彼等高等予科の三羽鳥達がすでに共存できない領域にまでこの戦いが来ているという事実をしみじみとかみ締めることになった。

「明け渡すから待っていてくれ？」

醍醐は一人呆然と池の使者からの話を聞いてそうつぶやいてしまっていた。南極基地の包囲はほぼ完成し、いつでも突入を開始できる状況。それに合わせるように音信を途絶していた池の南極基地防衛部隊から使者がやってきたことだけでも十分驚くべきことだが、平然と明け渡すと言い放った池幸重の息子池昌重中佐の言葉にただ呆然とするだけだった。

「お分かりになりませんか？部隊には元々烏丸公の恩顧の兵が大勢います。彼等を説得して投降させる。これに時間が必要なのはお分かりになりますよね？」

若きエリート士官。自分もそうだったがまるで言葉に酔っている様な表情が醍醐の気に障った。

「なるほど。分からないことではないな。でもそうは待てないぞ」

「三日。それで十分でしょう」

あっさりと答える池の次男。長男は海軍に勤務しており、第三艦隊所属の巡洋艦『愛宕』の副長をしていることを嵯峨は思い出した。「やはり君も兄弟のことが気になるのか？」

そう尋ねてみるがこの場に連れ出されてからずっと崩れない笑みのまま使者は一言も話さなくなった。

「どうしますか、司令」

参謀の一人が声をかける。そしてその様子は醍醐から見てもこれが好機だと思わせるような用件だった。たとえ力任せに攻め寄せれば停泊中の軍用艦をすべて破壊する位のことは誰でも考え付く。そしてそのような事態になれば第三艦隊と清原准将貴下の揚陸艦を中心とした烏丸派の艦隊の激突には間に合わなくなる。

「もう一度聞くが確かに明け渡してくれるんだね、無傷で」

その醍醐の声に黙って大きく池昌重は首を縦に振った。

「他に選択肢はないですよ。とりあえず待ちましょう……それでだめなら……」

右目に眼帯をつけた初老の参謀が残った左目で昌重をにらみつける。それでもまったくその笑みは崩れることを知らない。

「それでは少し会議を開くから席を外してくれないか」

醍醐のその言葉に昌重の笑みはさらに明るくなるように見えた。

「それではよろしくご検討ください」

そう言つて笑つた表情のまま池昌重は頭を下げて立ち上がった。

テントを出て行くその後姿に参謀達の判断が揺れているのは醍醐にも分かった。

「本気で投降するつもりなのかな」

下座の中佐の参謀の言葉に全員がうなだれる。

「投降するなら今は遅すぎる。どうせ時間稼ぎだ」

「しかし時間稼ぎなら宇宙港施設の破壊をしたほうが手っ取り早いと思います」

「それはできないだろ。既存のインフラを破壊すれば民衆の支持を得られなくなるぞ」

「どうせ貴族主義者の行動だ。はじめから民衆の支持などあてにはしてないんじゃないか？」

参謀達の言葉が続く中、醍醐は黙つて目を閉じていた。片目の大佐。アフリカ戦線の修羅場で失つた目を隠してうつむいていた彼が静かに周りを見回す。

「池司令には本格的な軍事衝突は初めてのはず……」

彼の一言に周りの参謀達は口をつぐんだ。多くはアフリカ戦線やゲルパルト陥落のころから醍醐の部下として活躍してきた猛者達。

政治的やり取りは別としてその戦歴は誰にも負けないと自負している彼等はじつとその時も最前線までこまめに視察に来て適当な助言をする醍醐の姿を思い出し凝視する。

「無駄な戦いは避けたい。基地は無傷で手に入れないと意味は無い。たとえ突入してもすべての施設が破壊されるなら意味は無い」

そう言つと醍醐は再びうつむいた。

「もう俺等は負けたのかもしれないな。烏丸派の決起を甘く見ていた俺の失態だ。とりあえず池に花を持たせるしかないだろう」

醍醐の顔が情けないと言つようにゆがむ。そしてそのまま唇を噛み締めて視線をテーブルに落とした。

「では申し出を受けると？」

隻眼の参謀の言葉にただ静かに首を縦に振る醍醐だった。

「仕方が無い。受けない理由はないからな」

そう言つと立ち上がる醍醐。誰もその決断に異を唱えるものはいない。

「池君を呼んでくれ」

入り口に座つていた連絡将校がすぐに端末を起動する。参謀達も仕方が無いというように黙り込んだ。

「それでは……もし投降を取りやめると言い出した場合には？」

隻眼の参謀の言葉に醍醐は遠くを見るような顔をした。

「仕方が無いな。赤松君には本当に申し訳ないことになる」

そう言つた時に仮設指揮所の薄い扉がノックされた。

「入りたまえ！」

醍醐の声につられて警備兵に挟まれるようにして再び池昌重が現れる。

「結論はどうなんでしょうか」

許されてもいないのに末席の椅子に腰掛けながら昌重がつぶやく。
「見て分かるんじゃないか？」

挑戦的な笑みを醍醐は浮かべた。そこで昌重は大きく頷いた。

「さすが醍醐將軍は話が早い。早速……」

「まだなんとも言つていないけどな」

醍醐は満面の笑みの昌重を見ながらそうつぶやいた。昌重はその言葉に一瞬顔面に満ち溢れていた笑顔が途切れた。

「と……申しますと？人質でも取るつと言つんですか？」

再び昌重の顔に笑みが戻る。元からそのことは覚悟してきている。醍醐には昌重の態度がそういうものに見えていた。

「つまらないことをするつもりは無いよ。ただこれだけは伝えてくれ」

そう言つとゆっくりと醍醐は立ち上がつて昌重をにらみつける。

「勝手に死ぬな。まだこの国には人が必要なんだとな」
突然の醍醐の言葉に昌重はうつむいて自分の表情をどう作ればいいのか迷っているように見えた。

「いつまでこうしてりゃいいんだよ」

パイロットスーツの女性が目の前の盆栽を弄っている中年男性に声をかけた。

「そんなことを言っても仕方が無いじゃないの」

その隣で静かにお茶を飲んでいた和服の女性。その手元には薙刀が置かれていてその状況が緊迫したものであることを周りの近衛師団の兵士達にも思い知らせた。胡州帝国帝都、近衛師団駐屯基地。すでに兵士達とそれにかくまわれている西園寺家の人々が籠城を始めて一週間が過ぎていた。各地で黙って盆栽を弄っている宰相西園寺基義公爵支持派の部隊が決起したが、彼等は帝都ではなく反対側の南極基地攻略へと向かっていた。帝都は現在も西園寺排斥派の部隊に占拠されていたが、西園寺支持派のゲリラ的反撃と士気の高い近衛師団に攻めあぐねているのが現状だった。

「赤松君が勝つかどうかだろうな……」

ようやく覚悟を決めて切った枝がどうにも形が決まらないことに気づいてうなだれながら基義がそうつぶやいた。

「勝つのか？じゃあ負けたらどうなるんだよ！」

叫ぶパイロットスーツの女性は西園寺要。基義の一人娘でそのパイロットスーツには胡州軍高等予科学校の三年生であることを示す徽章がつけられていた。

「まあ……縛り首か斬首か……康子さん。どれにします？」

「そうね……斬首は腕がいい人ならいいけど」

お茶を飲み終えて留袖のすそをそろえながら薙刀の女性、基義の妻西園寺康子は淡々とそう答えた。

「死ぬ気かよ二人とも！」

地団駄を踏む要を気にしながら一人の連絡将校が走ってハンガーの奥に畳を敷いて暮らしている西園寺家の人々の前に頭を垂れた。

「閣下。準備ができました」

「そうか」

士官の声に要を無視するようにして基義は立ち上がった。

「どこ行く気だ？親父」

「ちよつと工作をね」

忌々しげに父を見上げる要に一瞥するとそのまま基義は連絡将校の後に続いてアサルト・モジュールの並ぶハンガーの出口へと向かった。

父が去つても要はパイロットスーツのままうちよろと落ち着き無く歩き続けた。

「要ちゃん」

一度足を止めるが康子の声にも耳を貸さずに再びぐるぐるとハンガーの片隅に置かれていく多々身の回りを回り始める。

「要ちゃん！」

そう言うとき突然康子の姿が消え、同時に要は足を払われたように後頭部から地面に叩き付けられる様に倒れこんだ。気がついた要の首筋に薙刀を突きつけている康子がそこに現れる。

「なんだ……いえ、すいません！お母様！反省しています！」

刃を向けて冷徹な表情を浮かべる母にさすがの要も反省したように叫んだ。康子はそれを見るとにっこりと笑いつて再びたみに座つてお茶を飲み始めた。その光景に周りの近衛師団の兵士達はあつけに取られる。明らかに康子は瞬時に五メートルほどの距離を移動していた。いや、目で見る限り移動していると言うよりワープでもしたかと言う速度だった。ただ康子が西園寺邸を脱出した時に清原派の一個中隊の警備部隊を瞬殺した話は聞いているのでなんとなく納得しながらもおびえて要達から距離をとるようになった。

チタン合金の頭蓋骨の持ち主の要は平然と起き上がると静かにたたみに腰を下ろした。

「工作つたつて……なんだ、叔父貴でも呼ぶのか？それともアステロイドのアメリカ海兵隊基地に連絡をとるとか……」

「まだまだね、要ちゃんは」

康子は余裕の笑みで引き続いてお茶を飲み続けている。

「おいしいわね。新ちゃんのお茶はやっぱり最高」

義理の弟で姉の息子に当たる西園寺新三郎こと嵯峨惟基の名前を出したところで要は少しばかり首をひねった。

「叔父貴じや無いんだろ？親父が働きかけているのは」

そう言う娘に康子はお茶を入れてやった。要は素直にそれを受け取りそのままじつと茶の中を見つめていた。

「意思の強い人にはこういう場面では何を言っても無駄よ。相手を見て話をしないとね」

康子は悠然とお茶を飲みながらそうつぶやいた。

「なんで佐賀君は泉州の自衛軍に声をかけない！」

清原は各艦の司令を集めた会議で開口一番にそう叫んだ。急ごしらえの合同軍とあってその言葉に向ける指揮官達の反応はさまざまだった。

同調して頷くのは半数にも満たない。まるで当たり前だと言うように冷笑を浮かべるもの、困ったような表情で周りを見回すもの、そして大きいため息をつくもの。否定的な反応に清原は深呼吸して周りを見渡した。佐賀の貴下の胡州軌道コロニー軍の司令達は多忙と言ふことで出席すらしていない。その空いた席の隣には清原が信頼を置く羽州艦隊の指揮官である秋田義貞の姿があった。

「拙いですね。このままではアステロイドベルトが戦場になります。一応宇宙に対応できる装備はありますが、あちらは艦隊戦のプロとして知られる赤松さん。苦戦は必至になりますよ」

「それは……分かってているんだ。けどなんでその入りのコロニー自衛軍に影響力のある佐賀君がここにいないんだ！」

その言葉に再び司令達から失笑が聞こえた。

多くの司令達は清原の大義、烏丸公を報じる為にこの場にいるわけではなかった。多くは貴族制の維持が部下達の生活にかかわると言うことでとりあえず参加した者が多い。他にも毒舌で知られる西園寺基義に一泡吹かせるためや海軍に恨みがある陸軍指揮官などが集まっていた。

『これは勝つても意味が無いな』

秋田は周りを見回しながらそう思っていた。事実一番の精鋭部隊である自分達が下座に置かれ、出席の見込みの無い佐賀の席が上座の方に置かれていることに苛立ちを感じていた。

「清原君。一度佐賀君には申し入れをしておくべきじゃないかね？」

ざわめく中で堂々と立ち上がり口を開いたのは烏丸清盛陸軍大將だった。烏丸家の分家の出であり、子の無い烏丸頼盛に次女の響子を養子に出すという話はこの場にいる誰もが知っている話だった。

「それはどうですかね。下手に手を出せばあの御仁のことです。弟からの催促に乗っかって我々を攻撃してくるかもしれませんよ？」

誘いのつもりで秋田の吐いた言葉に指揮官達はざわめいた。だが烏丸は表情を変えない。そのままテーブルの上のコップの水を飲み干すと静かに話しはじめた。

「君達にも聞いてもらいたい！我々は強い！」

烏丸の言葉にそれまでささやきあっていた司令達の視線は彼に集中した。

「確かに第三艦隊司令の赤松君は実績を上げたことになっている。だがそれは数隻の護衛艦隊の指揮官としての話だ。大艦隊を指揮しての戦いでは逆に難しい惑星降下作戦を指揮してきた我々に分があるのを忘れてもらっては困る」

そこまで言うと言を合わせていた指揮官達の顔に余裕の笑みが浮かんできた。

「アステロイドベルトに寄って目くらましに走ると言うのもその自信の無さの表れだ。もし彼が絶対に負けないと言う信念を持っているなら正面からかかってくるはずだ」

そこまで来て数人の指揮官がまばらな拍手をした。それに酔うように烏丸の言葉は続く。

「そして何より我々の保有するアサルト・モジュールの数が違う。二式を中心に390機。そして支援攻撃機も赤松君の部隊の二倍は超える」

数字を出されるとさすがに自信がなさそうな表情を浮かべていた指揮官達もお互いに励ましあうように歓喜の呟きをもらし始めた。

「つまり我々は勝てる戦いにでるんだ。たとえ佐賀君の部隊が動かなくても十分勝算はある。がたがた騒いだところで赤松君には勝ち目が無いんだ」

そう言うってから一口水を口に含むと烏丸は椅子に腰掛けた。まばらだった拍手が大きくなっていく。その有様に上座の清原まで熱心に拍手を始めた。そして感動の涙を流しながら立ち上がると全員の視線を浴びながら満足げに頷く。

「諸君！我々は勝利に向けて進んでいる」

そこで再び拍手が巻き起こった。だが一人秋田だけは拍手をすることは無く冷徹な目で熱狂する同僚達を眺めていた。そのまま静かにコップに口をつけ、それぞれの指揮官達の表情の変化を観察し続けていた。

『佐賀さんが来ないとなればうなだれて、烏丸さんがその存在を無視して数を上げれば喜んで尻尾を振るか……』

秋田の表情を歓喜の渦に飲み込まれた同僚達は見向きもしなかった。

「これは決まったな」

ふとつぶやいて周りを見回したが清原が始めた演説に夢中の同僚達は秋田の言葉に耳を貸してはいないようだった。

「それでは隊長、ありがとうございます！」

明石の巨体を見上げて敬礼した部下達はそのままシミュレータ訓練場を後にした。のんびりとパイロットスーツのまま椅子に腰掛ける明石だが、その顔の横にスポーツドリンク入りのカップが差し出された。

「なんだ、別所やん」

そう言うとも明石は差し出されたカップを受け取り唇を浸す。

「なんだは無いだろ。正親町三条の奴は解放されてそのまま帝都に向かっているそうだ」

作業着姿の別所は明石の隣に腰掛けゆつくりと自分のためのコーヒーを啜る。

「アステロイドベルトに到達できたのは幸いだな。この量のデブリならロングレンジの攻撃はほとんど意味が無い」

「そないなことワイもわかっとなる」

安心したような笑みの二人。明石の部下達も消え、部屋は電力消費量の調整のため二段階ほど暗くなった。

「その顔。なんかまた企んどるな……」

別所の顔を見るとついそんなことを言ってしまう。明石が身を持ち崩して闇屋で発砲事件などを起こしている間に別所は医師免許を取るだけでなく軍隊と言う組織で生きる多くの知恵を身につけている事実は明石も認めていた。そんな世に『播州侯の懐刀』と呼ばれる別所がただの茶飲み話に疲れている明石を誘うわけが無いことは良く理解できた。

「どうやら佐賀さんが寝返るらしい」

突然の別所の言葉に明石は口にしていたスポーツ飲料を吹いた。そしてそのまままじめな表情の別所に顔を向ける。

「おい、おい、おい！そないなことワシにしゃべってもええのんか

？」

「お前の部隊はたぶん前衛に展開することになるだろうからな。下手に佐賀さんの部隊を叩いて味方を減らすようなまねをされたら困るだろ？」

そこで別所は初めて笑みを浮かべた。そしてそのまま静かにコーヒーを啜る。ブラックのコーヒーの苦味に別所は一度顔をしかめるとそのままシミュレータの機械の並ぶ部屋の周りを見回した。

「知つとるのは赤松の親父とワレくらいやろな。でも何で佐賀の旦那が……弟の醍醐はんとは犬猿の仲やし、主君のあの気まぐれな皇帝陛下とはこちらも不仲で知られとる。それに楓もワシの部下なんやで、寝返る理由がなんかあるんやろが……」

明石はそういいながら剃り上げられた頭を叩きながら隣に座っている別所を見下ろした。

「ふー。何から説明したほうがいいかな」

懐疑的な顔の明石を説得する切り札を探そうと別所は明石の頭からつま先まで満遍なく眺める。

「説明もなにも……確かに佐賀さんの動きが鈍いのはわかつとるけどなあ」

「それで十分じゃないかな」

明石の言葉に糸口を見つけたと言うように口を開いた別所。その言葉にしばらく明石はぼかんとしていた。

「十分？」

「そうだ。佐賀さんの狙いは今は遼南皇帝をしている殿上嵯峨家の家督だ。別に清原さんのように貴族主義がどうのと言うような思想で動いているわけじゃない。今回の戦いでどちらが勝とうがどんな政権ができればようが狙いが果たされなきゃ意味が無いんだ。たとえ俺達が勝って西園寺公が政権に復帰しても殿上嵯峨家が継げれば万事解決。そちらの方が楽だともいえるな」

「楽って……貴族の権限は制限されるやろが」

「それは烏丸派が勝つても同じだよ。醍醐さんが西園寺派にいた限りその兄としての監督責任を烏丸公が問わないわけが無い。あの人はそういう血縁的なものを絶対視するところがあるからな」

別所の言葉に頷きながらそれでも明石には腑に落ちないところがあった。

「ならなんで清原はんを最初に受け入れたんやらなあ？あそこでけりがついとつたらワシ等も楽できたやないか」

「そりゃあその時点では西園寺派からの接触がまだだったと言うことだろうな。貴族の尊厳を守ると宣言している清原さん達の方がくみしやすかった。そういうわけじゃないのかな」

別所の言葉にもまだ明石は得心できないと言うように首をかしげ

る。

「恐らく佐賀さんが迷い始めたのはそれから後のことだ。事実、現在この位置から最大船速で三日の距離にたどり着いてから二日間。佐賀さんの艦隊は動いていない。その間に誰かがあの御仁の耳元でこちらについたほうが得だとささやきかけた。そして佐賀さんもそう読んで動かなくなった。それが事実じゃないかな」

押し量って物事を述べる時に別所はあごの辺りに手を寄せる癖がある。その癖を大学野球の時に見抜いていたことを思い出しながら明石はようやく納得したように立ち上がった。

「それなら何とか勝負になるやろな。シャワーでも使わせてもらわ」

そう言っ明石はそのまま椅子に座っている別所を置いてシミュレータの並ぶ訓練施設を出て行った。

廊下を過ぎる。明石の巨体は目立つので旗艦『播磨』で彼のことを知らない人物はいない。通りすぎる艦船クルーの敬礼を受け流しながら少し離れたシャワー室に向かった。

「隊長！お先失礼します！」

すでにシャワーを終えた部下達の最後の一人が声をかけてきた。

「ああ……すまんが着替え持ってきてくれへんかな？執務室のテールの上にあるさかい」

「了解しました！」

明るい声で新人パイロットの中でも有望な小柄な曹長が走り去っていく。明石はそれを見送ると湯気に煙るシャワー室に入った。シャワー室は半分が改装中で使用ができなかった。先の大戦で明石くらしいの年齢の男性は人口に占める割合が極端に低下していた。事実男子のみの入学資格だった高等予科学校はすでに共学化されている。ブリッジクルーには三人の女性士官がいた。そして中隊長付きの従卒として正親町三条楓曹長が明石に着いていたことからシャワー室の半分以上を女性用にしようという軍の方針も理解できることだった。

「貴族……か……」

パイロットスーツを脱いでシャワーの湯が頭から流れ下るのを感じながら目を閉じて明石は考える。

寺社貴族の次男坊として生まれた自分。そしてそのまま貴族の誇りなどを教え込まれてその体制を守るために身をなげうつつもりで飛び込んだ特攻隊。だが出撃を待たずに終戦を迎え、居場所を求めて闇屋になった自分。多くの闇屋は現金しか信用しなかった。その時には定期的に貴族年金が下りる明石はその現金を使ってきたわめて有利な条件で物資を仕入れ、法外な値段で食うや食わずの人々から金をむしりとることに平然としていられた。自然とそのうまい取引作法と特攻崩れの度胸のよさを買われて闇屋の元締めの片腕になっ

たのも半分はその貴族の特権があつたからだつた。

目に染みるボディーソープで剃り揚げられた頭を洗いながらそんな時代を思い出してつい噴出してしまった明石。

所詮どこまで言つても貴族制が崩壊しない限り自分の値打ちにはその貴族だからと言うやつかみが付きまとうことになる。兄嫁や実家の寺の面々に古い制度に従つて頭を下げて生きるのが嫌で実家を飛び出したはずが結局頼っている根源が貴族と言う肩書きだったことに気づいて明石はどうにも情けない気分になった。

「ワシがワシであるために戦わなあかんのやな」

自分自身に言い聞かせるようにして明石は頭から熱い湯を景気良くかぶっていた。

「おう！よろしく頼むぞ」

池幸重は次男の昌重の肩を叩いた。

南極基地警備部隊は全軍を基地から外の市街地に移動していた。市民は包囲する醍醐の民派に時間稼ぎをして何とか脱出させた。そして昌重には負傷したものや新婚の兵士達をホバーに乗せてそのまま醍醐の本部へと向かわせる予定になっていた。

「しかし父上、いいのですか？」

息子の頬が震えていることにすぐに幸重は気がついたが、肩をもう一度叩いて落ち着かせるべく腰をかがめてひざ立ちで頭を下げている昌重に顔を近づける。

「俺の我侂だ。それに貴様を付き合わせるわけにはいかんな」

そう言うのと立ち上がり大きく息をする。司令部の仮設テントには緊張した空気が走り、池親子を見守る部下達の姿が見えた。

「醍醐と俺。どっちが戦上手か知りたいだけだ。別にどちらが勝とうがこの動乱の主流とはならないだろうからな」

幸重はそう言うて懷から扇子を取り出す。耐寒装備の充実したテントとはいえ、零下の世界。誰もが震えている中、一人扇子で仰いでみせる父の姿に昌重は涙を浮かべた。

「なんて顔をしているんだ。ここまで醍醐の奴を足止めすれば十分なんだ。あとは俺と醍醐の勝負と言うわけだから……貴様等もいんだぞ！抜きたい奴は今のうちだ！」

周りを見回して幸重が叫ぶ。誰もが苦笑いで老将の言葉に耳も貸さずに計器の設定作業を続けている。

「見ての通り。俺達の意地という奴を見せるまでは死ねないってことだ。あいつには良く言い聞かせておいてくれ」

満面の笑みの父を見ると昌重は仕方が無いと言うように立ち上がる。

「元気でな！あと家内の世話も頼むぞ」

昌重は何度も振り返りながらテントから出て行く息子を見送る。

「さて、俺の戦争と言う奴を醍醐の野郎に見せてやるうじゃないか」

そう言つて扇子を叩くとそのまま幕僚達が待ち構えている会議室へと足早に去る池幸重だった。

「やはりそうか」

参謀達が今にも下手の椅子に座っている池昌重中佐を斬り殺さんばかりの雰囲気の中かで静かに醍醐文隆准将はつぶやいた。

「意外に平然とお答えになるんですね。予想はしていましたか？」

怒りが殺意にまで達している一同を涼しい顔で眺める昌重。

南極防衛部隊が基地施設の放棄を始めた時点である程度醍醐は同僚として付き合いの長い池幸重がそのまま市街地に立てこもって徹底抗戦をすることは読めていた。部下達が避難民の誘導を頼まれたのはその為の準備と思っていたが聞き流してそのままにしていた。

そして今日、降伏の期限とされた日には池は使者として次男の昌重とトラック一杯の催眠剤で眠らされた兵士と負傷した兵士を満載したトレーラーを醍醐の駐屯している南極基地から30kmの地点まで送り届けた時点で今の部下達の血走った目が見られることは予想していた。

『醍醐はアフリカでは英雄と扱われたそうだが胡州ではどうなのか俺の部隊で試させてくれ』

そう言う言葉を池が吐いたとしても醍醐は不思議には思わなかった。

先の大戦では西園寺恩顧の陸軍幹部として激戦地をたらいまわしにされた醍醐とは違って、池は胡州軌道上の警備などのぬるい任務ばかりを任されていた。開戦を当然と口にしていた烏丸卿に目をかけられて安全な任務についていた池が何度も最前線への出動を志願したという話は醍醐も何度も聞かされていた。

そしてその遺伝子を継いだ息子の殺気立つ上級士官達を歯牙にもかけないような風貌に醍醐は大いに興味を引かれた。

「昌重君。あれかな？池は君にこの場で死んで来いと言ったのかね？」

もう笑みしか醍醐の表情には浮かぶものは無かった。

「いいえ、醍醐の奴はどこまでも勝負師だから貴様が基地に戻って指揮を始めるまで攻撃はしてこないだろう……と言われましたが」

そう答えた昌重の涼しい表情。醍醐の隣の隻眼の士官も奥歯を噛み締めて怒りをどうにか静めようと必死だった。

「それは面白い話だな」

醍醐は周りを見回す。昌重が言葉を口にするたびに参謀達の怒りは増していくのが良く分かる。だが醍醐は一人面白そうに身を乗り出してまじまじと昌重の姿を見つめた。

「だが俺は指揮官でもある……この意味は分かるだろ？」

醍醐はそう言つて怒りに震える参謀達を眺める。彼等は笑みを浮かべる醍醐を見て大きく頷いた。さすがの昌重も極地の寒さで震えるどころか額に浮かぶ汗をぬぐつた。

「それも……当然ですね」

さすがにその声は震えている。それを聞いて醍醐は満足げに立ち上がった。

「諸君！池の息子の処遇は君達に任せたいと思つのだが……」

そう言つて背を向けた醍醐を伸びをするようにして昌重が見つめた。一斉に歓喜の表情で参謀達は哀れな昌重を見つめた。

「司令！それは残念ながら……」

処断の声が上がる前に叫ぶ声があつた。その声の主を探そうと振り向いた醍醐の視界に参謀の一人、馬加まくわりすけたね資胤中佐の凡庸な顔が浮かんでいた。

「なんだよ。君等の結論は顔を見れば分かるよ」

「そうですが、この戦いの意味を考えれば一時の感情に流されるのは得策ではありません」

慎重に言葉を選びながら馬加はそのまま言葉を続けようとする。

周りの指揮官はその馬加に苛立ちの視線を向けていた。

「これは胡州の内部での私闘だ。戦争法規なんて無視してもいいんじゃないか？」

「いえ、だからこそ守るべきものが戦争法規なんです」

醍醐の言葉をさえぎり馬加が叫ぶ。その声に再び参謀達は馬加にいきり立つような顔を向けた。

「彼はあくまで池准将の意思を伝えに来た。その時点で彼は保護されなければならない。もし彼に危害が加えられれば少数とはいえ池さんの部隊は復讐に燃えて襲い掛かってくる。それにたとえ第三艦

隊が我々の支援が無くても勝利できたとしても陸軍は感情で動く馬鹿ばかりというレッテルを貼られることになる……あんまり歓迎すべきことではないんじゃないでしょうか」

そんな馬加の言葉にしばらく醍醐は沈黙しながら熟考を始めた。

「そうだ。池中佐」

つぶやくように静かに漏れた醍醐の言葉に昌重は伸びをした。

「あのトレーラーの面々は俺に引き取ってもらったためにつれてきたんだな？」

醍醐の言葉に静かに昌重は頷いた。

「死ぬのは池の一族郎党だけで十分ですから。それにその連中にも後に続いて国を支えて欲しい人物も多い。ですから彼らを無理に眠らせて連れてきました」

「そつか……」

再び考え込むようにして昌重に背を向ける醍醐。

「司令……ご決断を」

隻眼の参謀が急かす。その言葉に馬加は静かに醍醐を見上げた。

「さすがに君を父親の元に返すわけには行かないな……」

醍醐はそのままつぶやく。参謀達は歡喜の目で昌重をにらみつけた。

「では、せめて最期は切腹することをお許しいただきたい」

昌重は覚悟を決めたようにつぶやく。テントの上空を飛ぶ反重力パルスエンジンの独特の爆音が響き渡る。その不可思議な雰囲気思わず醍醐は振り向きざまにニヤリと笑った。

「それもできないな。今は25世紀だぞ」

そう行つて醍醐はそのまま隣に置かれていた軍刀を手に昌重に歩み寄った。参謀の誰もがそれが抜き放たれて昌重に突き立てられるだろうと目をそむけた。

醍醐は昌重の隣で剣を抜くとその刃紋をゆっくりと眺めた。上品に輝いてはいるが、新刀であり一人として人を切ったことの無い澄み切った刀身がテントを照らすライトにゆれる。

「覚悟はいいかね」

そんな醍醐の言葉に大きく頷く昌重。醍醐は大きく軍刀を振り上げて昌重の首を撃ち落そうと構えた。

静寂があたりを包む。振り上げられた刀が下ろされる時間を待つ。
「どうぞ」

沈黙に耐えられずに昌重は首を伸ばした。そしてまた沈黙が支配する。

「いい覚悟だな」

醍醐はそう言つと剣をおろした。周りの参謀達がざわめく。命を捨てるものだと思つてつづいていた昌重は驚いたように隣に立つ醍醐を見上げた。

「その度胸。買うのも良いものだな」

そう言つと醍醐は剣を鞘に収めて再び上座に戻ってしまった。その急な行動に昌重も参謀達もあつけに取られた。

「なぜ……こいつを帰すんですか！」

参謀の一人、はげた頭の佐官がそう叫ぶ。だが椅子に腰掛けた醍醐はまるで返答をするつもりは無いと言つるように首をひねる。

「これでいいんですね。それでは……」

馬加がそう言つて立ち上がるうとするのを醍醐が制するように右手を上げる。

「こいつを池の野郎に返すとは一言も言つてないぞ」

「ですが……」

「返すつもりはない」

思惑が読めないというように馬加は不満そうな顔で席に座った。

「昌重。お前はここで戦いのすべてを見る」

醍醐の突然の言葉に参謀達ばかりでなく当の昌重も驚きの表情で醍醐を見た。そこには真剣そのものの醍醐がいた。一部の笑みもその顔には無かった。

「この戦いがいかに無駄か。この戦いがどれほど役に立たないものか良く知る義務が貴様にはある。あくまで最後まで。どちらが勝つ

にしるここの施設のすべての情報を手に入れてもかまわない。すべてを知って戦いの終わりまで生き抜け。それが貴様の義務だ」

そう吐き捨てるように言い切ると醍醐は立ち上がって奥の天幕へと消えていった。参謀達もあっけに取られながら醍醐の決定には逆らうこともできずに渋々昌重をにらみつけながら天幕を出て行った。

「俺は……」

呆然とする昌重。そんな彼の肩を馬加は優しく叩いて立ち上がるように促す。

「そういうわけだ、こちらに来てもらおうぞ」

ただ一人笑みを浮かべる馬加につれられて昌重も会議場を後にした。

第三艦隊旗艦『播磨』の明かりの消えた食堂。三人の男がテーブルを囲んでいた。

「明日からは飲めないから……」

別所晋一はそう言うで一升瓶を持ち上げてその瓶を覆う白い包装紙を静かに引き裂いた。

「生一本か……楽しみやな」

そう言ったのは三人の中でも群を抜いた巨漢の明石清海。そしてその手に湯飲みを手渡しながら小柄な魚住雅吉がニヤニヤと笑っている。

「笑いを浮かべるとは余裕だな。安東さんはでっかい壁だぞ」

別所はそのまま湯飲みを差し出してきた魚住に酒を注いだ。

「そりゃあそうだが、出会うとは限らないだろ？ムカデのエンブレムを見たらとりあえずお前等に任せるよ」

そう言う乾杯もせずに酒をすすする。

「そないに急がんでも……それにええのんか？ワシがその手柄いだきたいんやけど」

独特のアクセントでそのグローブのような大きな手で湯飲みを握れば明石はまるで猪口でちびちびと酒を飲んでいるようにも見えた。

「二人とも単純だな」

別所はそのまま自分の湯飲みを酒を注ぐと一口舐める。そして目の前にあるラッキョウの漬物を手に取ると口の中に放り込んだ。

「単純やて……そやな。安東はんの生徒達。あいつ等の塗装も恐らくムカデの絵が描かれることになるんちゃうかなあ」

「何でそんなことをするんだ？」

いまいち事情が分からず魚住が二人を見つめる。別所は大きくため息をついて心を静めるために酒を口に含んだ。

「安東大佐の機体の色知らないパイロットはこの艦隊にはいない

だろ？もしパイロットが別人でもあの派手なムカデの文様を見れば
安東大佐の機体だと思ってこっちは混乱する。昔から良くある手だ
よ」

「ああ、それくらいのこととはしてくるだろうからな」

納得がいったというように頷くと魚住は静かに酒を飲み始めた。

「しかし皮肉なもんだな……」

すでに一杯飲みきった別所が一升瓶に手を伸ばす。甘みと粘り気のある大吟醸酒がそつけない湯飲みに注がれるのは少しばかり残念に思う明石だが、今の時点でそんなことを口に出す気はさらさらなかった。

「戦争で人生がおかしなつてしもたワシ等が戦争で主張を通す。矛盾と言ったらええのんか……」

「矛盾だろ。まあ世の中そんなもんさ」

軽くそう言つと魚住は別所の置いた酒瓶を手にして自分の湯飲み酒を注ぐ。

「まあ矛盾は矛盾だが、それでも俺達は部下の連中に前の大戦の狂気を味合わせたくないのが本音だからな」

別所の言葉に明石と魚住は大きく頷いた。

「ワシ等で終わりにしようや。こんなおかしな世の中は」

そう言つと明石は一息で残った酒を喉に流し込む。

「なんだよ、タコ。もう少し味わえよ」

魚住が苦々しそうな表情で明石の置いた湯飲み酒に酒を注いでいた。明石は頷きながら別所を見てみた。別所はのんびりとラッキョウをつまんでいた。そして視線が自分に集まっているのに気づくと仕方が無いと言つように酒を飲んだ。

「結局俺達はこう言う世代なんだな。清原さんの所でも同じような境遇の面々が酒でも飲んでるだろうな」

「そうだな。損ばかりしていた世代と言われても仕方がねえや。あの時は鉄砲玉扱い。今度は中間管理職の悲哀だ。なんとも気が休まらなかったなんてないしな」

別所と魚住の言葉に明石は頷いていた。彼等以外誰もいない食堂。たぶんこれからは戦時用の食料の配給が行なわれるばかりで料理と

呼べるものが食べられなくなるのは分かっている。機能を失うだろう食堂を眺めてみると明石も戦線に近いことを感じた。

「まあ、今日は飲もう。明日からは本当の戦争だ」

別所はそう言つと空になった湯飲みにたっぷり酒を注いだ。

火砲の爆裂音。断続的な機関銃の銃声。時々悲鳴と嗚咽が響く最前線の塹壕の中。少し土嚢を積み上げただけの粗末な仮設指揮所の椅子に池幸重は座って地図を見下ろしていた。

「主な地下壕のある施設にはやはり攻撃があつたようです」

「まあそつだらうな……食料局もミサイルの雨が降ったか。さすがに醍醐だ」

参謀の言葉ににんまりと笑い南極基地近くのこの極地ポートの町の地図を見回す池。

「それにしてもこんな最前線に指揮所があるとは予想していないんじゃないですか？」

隣の眼鏡の副官の言葉にそれまで緩んでいた表情が急に引き締まった。

「醍醐はそれほど馬鹿じゃないよ。主な指揮命令系統の維持のために必要な地点は攻略済み。そうなればあいつだって俺が最前線をこのこ歩き回って命令を出していることくらい気づくはずだ。そうなれば今度はこう言うちよつとした施設に猛攻をかけてくるはずだ」

そう言うに従卒の出したカップのコーヒーを受け取って握り締める。零下50度を下回る極地の風は土嚢やテントの生地の間から流れ込んで指揮所をいっぺんに冷やしてしまう。

「あいつもあと五時間ぐらいが山だと踏んでるだろうからな。いつここに爆弾が落ちてもおかしくないぜ」

池が見回すのを見て参謀達はニヤニヤと笑みを浮かべていた。

「そのくらいの覚悟はできていますよ。それにすべての兵はあと六時間で投降する手はずを整えていますから」

大きく満足げに頷くと池は再び地図に目をやった。どちらが勝利しても重要な胡州のインフラである南極基地の宇宙港は無事に確保

されるように彼の部隊は配置されていた。事実もうすでにまったく
防御のなされていない南極基地には醍醐側の部隊が進行してきてい
ることは机の上に表示されていた。

「さて、俺達はすべての義務を果たした訳だ。後は清原のおっさん
が第三艦隊を止められるかどうか……天のみぞ知るところか
な」

そう言いながら池は満足そうにコーヒーをすすった。

「結局間に合わず……か」

赤松忠満准将は第三艦隊旗艦『播磨』のブリッジで静かにそうつぶやいた。二時間前、南極基地の制圧に醍醐文隆司令の部隊が成功したものの停泊中の艦船のエンジンの再起動までに数日が必要と言う連絡を受け、ブリッジクルーに焦りの色が見えていた。

「人さんを当てにしとつたらあかんで。勝つ時は勝つもんや」

そう言いながら帽子を被りなおす。そのしぐさが苦戦中の時の赤松の癖だと知っている艦長はつい笑みが浮かんでしまっていた。

「笑わんといてな」

赤松はその表情を見つけると小声でそう告げた。

全艦隊はアステロイドベルトのデブリに身を隠していた。敵は陸軍所有の 대기圏付近での揚陸活動をメインに使用されることを想定して作られた揚陸艇。支援火器は充実しているものの対艦戦を想定したつくりにはなっていないかった。戦力差は第三艦隊にはかなり不利なのは誰もがわかつている。それゆえに醍醐の部隊の参戦が不可能になったのは痛かった。

「あちらはどないなつとんねん」

「は、羽州の巡洋艦三隻が先行しています。やはり対艦戦で揚陸艇を突出させるのは不利だと見ているのでしょう」

上司のリラックスした問いに参謀の一人がそう答える。そのまま赤松はしばらく声に出さない笑いを漏らしていた。

「こらあワシのことを買いかぶつとるんやなあ。何も考えんと力押しで来られたらどないもこないもなかったが……こら勝ちの目も出てくるかもしれへんなあ」

そのつぶやきに周りを囲む参謀達に笑みが広がる。そしてそれを見たブリッジクルー達も少しかり明るい表情を浮かべるようになった。

「でもしめていかなあかで。羽州の艦隊は恐らく指揮官は秋田はんでアサルト・モジュール部隊はあの安東と見て間違いないからな。こちらにもそれなりに準備を進めとかなあかん」

静かにそう言った赤松。参謀達は次の日には始まるだろう戦争のことを思いながら信じるべき指揮官の姿を目に焼き付けていた。

「それにしても……」

参謀の言葉にすっかり気分を害したと言うように赤松が振り返る。その言葉を発した参謀もそれを察して慌てて手を振り回した。

「佐賀の泉州艦隊が気になるものですから……」

その言葉は誰もが予期していた内容だった。赤松も満面の笑みで参謀達に目を向ける。

「佐賀さんか？あの人にそれほどの度胸があるわけないやん。たぶん今頃は必死になって清原さんに助命嘆願でもしとるんちゃうのん？」

その言葉にブリッジは沈黙した。佐賀の艦隊は陸軍部隊とはいえ艦大戦のできるだけの艦を保有し、多量のアサルト・モジュールを保有していた。

「なに静まりかえっとるん」

赤松はそう言うがすでに泉州艦隊が南極基地の情勢を手にして全速力でこちらに向かっていることは誰もが知っていた。

「佐賀少将の艦隊。甘く見るべきではありませんよ」

参謀の一人がつぶやくと『播磨』のブリッジは急に凍りついたような雰囲気に取り囲まれた。

「知らんのやな」

赤松のつぶやきに誰もが静かに耳を澄ます。

「佐賀の旦那。あの人に歴史をどうにかできるような度胸は無いで流れるまま、流される。所詮はあの御仁はそこまでの人や。気にすることもないやろ」

「ですが……」

「なんやねん。ほんまに口だけは達者やな」

同じ参謀の言葉を聴いて明らかに不機嫌に答える赤松。

「佐賀の旦那は動かん。間違いないで」

赤松の言葉に誰もが不安を隠しきれない状況で彼を見つめていた。

泉州艦隊の指揮官達を迎えた佐賀の表情は優れなかった。旗艦軽戦艦『摂津』の会議室。憂鬱な沈黙が続く。

「文隆が間に合わないと言うことだが……」

佐賀高家の言葉に誰もが冷や汗をかいていた。嵯峨家三老の醍醐文隆と池幸重。二人の猛将がぶつかり合った結果、醍醐は勝利を手にしたもののすでに南極基地の艦船がどう考えてもアステロイドベルトでの第三艦隊の援護には間に合わないことは明白だった。

「数では確かに清原侯に分があります」

「分がある？ならば俺が遅れて参加したことは……」

その時点で佐賀の価値は指揮官や参謀の間で落ちているのは間違いなかった。しかし、佐賀はそれには気づかなかった。遼南皇帝として四大公の責務を果たすことのできない嵯峨惟基を追い落とす。そんな野心を持つ男の器がこれほど小さいと言うことです。誰かが佐賀高家は何を言い出してもおかしくない状況だと思いを固めていた。

「遅れて参加した以上、清原准将が我々を厚遇するとは思えませんね」

「そうですね。恐らく池さんの待遇が上がることでしょう」

「嵯峨の家裁は池さんで決まりでしょうね」

諦めたようにつぶやく参謀達。佐賀はそれが自分への非難の言葉であることを忘れて彼等をにらみつけた。誰もが優柔不断な指揮官に愛想を付かそうとしている時、下手で手を上げる男がいた。

「よろしいでしょうか？」

小見大佐。嵯峨の部下として遼南戦線から付き従っていたので嵯峨の監察と言われている待遇の良くない男だが、それゆえに珍しく意見を言いたがっている彼に佐賀は最後の望みを託した。

「言いたまえ」

佐賀の言葉には疲労と諦めがこもっていた。そんな佐賀に配慮するように静かに小見は立ち上がって周りの諦めきった参謀達を見回した。

「動かなければいいんです」

その小見の言葉に一同はただ黙り込んだ。

「動かない？」

佐賀の不愉快そうな顔に対して小見は癖の有りそうな目つきで上官を見上げていた。

「そうです、動かなければいいんです。我々はそもそもどちらの味方なんですか？清原さん？いや、彼には切れ者の安東と言う切り札がある。その他大勢としてしか見ていませんよ。一方赤松君は？あの人だつて我々を信用しているわけではない。むしろ敵視しているんじゃないですか。軌道上のコロニーで清原さんの軍の補給を担当したのは事実ですから」

ここまで話が進んだ時点でどの指揮官達も目を伏せていた。先延ばしに結論を延ばしていった結果、どちらの軍からも蝙蝠扱いされる状況になる。予想のケースの中でも最悪の状況だった。

「じゃあ動かなければさらに我々の状況は悪化するんじゃないのかな」

腕組みしていた恰幅のいい大佐の言葉に小見は大きく頷く。

「悪化しますね」

「なに？それじゃあ意味が無いじゃないか」

いらだつたような佐賀の言葉。それに大して立ち上がった小見はほくそえんだ。

「そもそも選んでどちらかに着くことができる状況は過ぎたんですよ。今からでも参戦可能な艦船は我々も多数持っているのは事実ですよ。でもそれをどちらかの陣営に参加させたところで戦いが終われば我々が負けた軍とつるんでいたと言う話は出てくる。そんな戦いに部下を危険に晒すのが指揮官のすることですか？」

小見の最後の言葉に指揮官達はようやく気づいた。

清原が勝てば佐賀の糾弾の先鋒に立つのは安東貞盛となる。彼は根っからのパイロット。無駄に部下の命を損なえば自分達の立場がなくなるのは明白だった。一方赤松は部下思いで知られる猛将である。無駄な戦いをするとなればどういつ報復人事を食らうことになるか分らない。

「なるほど、部下の命のためか……軌道上に上がった清原君を支援したのも無用な混乱を避けて部下の命を守った……と？」

そこまで佐賀が悟るようにつぶやくと小見は大きく頷いた。

「そうです。人命を優先し、無益な戦いを避けるために軌道上の清原さんの部下達を助けた。そして現在は対立する二派の暴走を防ぐために我々はここにいる。それが一番適した言い訳ですよ」

小見の言葉を聞きながら佐賀は何度と無く大きく頷いた。

「元氣そうじゃないか」

営倉の中。後ろ手に縛られた士官が笑顔で歩いてきた醍醐の方を見るところだった。満面の笑み。敗軍の将とは思えないそのふてぶてしさに醍醐は戸惑うような笑みを向けた。

「池。これがお前の望んだ結末なのか？」

醍醐の言葉。そして長年にわたる同僚の背中に自分の息子がいるのを見て安心したように池は息を吐いた。

「なあに、これからだよ。これで貴様がどう思おうが決戦はすべて宇宙での激突にかかるわけだ。他人に運命を任せるって言う気持ちはどうだ？」

まるで勝者のような笑顔。ある意味醍醐もその表情の裏にある闇を知ることができた。

「今回の戦い。うちも戦死者は千人越えた。わざわざそんなことをする必要は……」

「ああ、必要は無いだろうな」

池のその一言に醍醐は逆上したようにたちあがった。そして思わず右手を振り上げたところで部下達に押さえつけられた。

「おい、醍醐。お前は勘違いしているぜ」

逆上する同僚を見上げながら余裕の笑みを浮かべる池。その態度にさらに醍醐の怒りに火がつく。

「なにが勘違いだ！人が死んだんだぞ！命が消えたんだぞ！」

「ただ誇りは守られた……お前の部下も俺の部下も……違うか？」

その言葉はまたも醍醐の神経を逆なでした。それを察したように部下達は虜囚との面会がただ上官を怒らせるだけだったことに気づいて彼を取り押さえる。

「醍醐。お前と俺じゃあ何もかも違ったと言うことだ。俺は誇りを取り、貴様は命をとった。その結果がどうなるか……宇宙を見なが

ら観戦しようじゃないか」

部下達に押さえつけられながら醍醐は縛られているだけの池をにらみつけた。

池は暴れる醍醐を涼しげに見つめるだけだった。

「大丈夫かよ」

明石が青い顔をしているのに気づいた別所が声をかける。幹部のみのブリーフィングルーム。すでに羽州艦隊が先行して胡州海軍第三艦隊の待ち構えているアステロイドのデブリに向かっていった。

「ああ、ワシは考えてみると初陣やったなあ」

「確かに」

振り返る魚住と黒田の顔が笑顔に染まっている。

「今度は帰りの燃料もあるからな。安心して戦えるぞ」

別所はそう言いながらモニターを指していたペンを振り回しながら明石の目の前まで来た。そしておもむろに明石の剃りあげられた額を触る。

「熱は無いか。なら問題ないな」

その動作に明石は別所もまた先の大戦で人生を狂わされた被害者であることを思い出した。そして同世代の他の艦のアサルト・モジュール部隊の部隊長達もそんな一人なのかと思うと次第に目頭が熱くなった。考えてみれば別所も魚住も戦争が無ければたぶん球場で数回話をしたくらいでこれほどまでに近い存在にはならなかっただろう。別所は父の跡をついで病院の内科医になり、魚住は商社か何かのサラリーマンになっていたことだろう。自分も宗教学者が務まるほどでは無かったので実家の寺で読経の日々を過ごしていたはずだった。

しかし戦争はすべてを変えた。

三人はそれぞれ第三艦隊の最前線に有って指揮を執る旗艦『播磨』の最前線部隊を指揮することが決定していた。お互い命を預けての戦いになるのは目に見えていた。

『俺達と同じような物語があいつ等にもあるんやるか？』

黙って明石は周りの熱心に作戦の要綱を伝える別所の言葉を聴い

ている指揮官達を眺めている。

「ぼんやりしてるんじゃないぞ！タコ」

あまりに別のことを考えていた明石に別所の投げたペンが飛んだ。それをすばやく交わすと明石はしてやったりというようににんまりと笑っていた。

「それでは健闘を祈る」

そんな別所の言葉に明石はペンをよけた感覚で目を覚ましたように顔を上げた。他の艦から出撃する部隊の隊長達は足早に会議室を出て行く。

「そんなに眠いのかよ」

ぼんやりとした顔の魚住。その隣では不思議そうな表情の黒田が明石の顔を覗き込んでくる。

「すまんのう。ワシはどうかしとるかもしれんわ」

そんな明石の言葉に魚住は不思議そうな顔をした後で立ち上がる。相手は『胡州の侍』安東貞盛大佐殿だ。そう簡単に話が済むはずはないからな」

立ち上がり伸びをする魚住。邀撃部隊の経験のある彼はある意味達観したように大きくあくびをする余裕があった。

「なんや、落ちついとるやん」

「まあな。生きて帰れるかどうかはわからんが今のところ俺の神経はまともらしいや。それより貴様はさつきから変だぞ」

再び自分のことを魚住に指摘されて明石は覚悟を決めたような表情で立ち上がる。二メートルを超える巨漢の明石が立ち上がると慣れているとはいえ小柄な魚住はのけぞるように反り返る。

「明石、一つだけ助言をしてやるよ」

明石が立ち上がるのを見ると、艦隊付きの参謀と打ち合わせをしていた別所が駆け寄ってきてニヤリと笑った。

「なんやねん。気持ちわるいなあ」

そう言って胸のポケットからサングラスを取り出した明石を見上げて再び別所は笑みを浮かべる。

「これは一番大事なことだと俺は思っているんだ」

「だからなんやねん」

なぜか別所の態度に明石はいらだっていた。それが初の実戦を前にした苛立ち妥当ことは明石も分かっていた。そしてそんな苛立ちを読み取らせまいと必死に強気な表情を作り上げようとするがどうせ別所にはばれるだろうと諦めた瞬間だった。

「英雄になろうとしないことだ。相手は強い。元々技量の差が大きいく出るアサルト・モジュール戦じゃあ安東さん相手には勝ち目は無い。とにかく生き残れ」

そんな言葉に少し違和感を感じながら明石は手を振って会議室を後にした。

羽州艦隊旗艦『羽黒』は出撃準備に追われていた。

「全アサルト・モジュールの出撃準備まであと二時間になります」

艦長で司令官の秋田義貞の言葉にパイロットスーツ姿の安東貞盛は大きく頷いた。

「時間的には余裕があるな。忠満のことだ。俺がじきじきに出るところくらい予想はついているだろう」

そう言うヘルメットを被り静かにモニターの中のせわしなげに整備員の走り回るハンガーを見つめた。

「ですがこの数での攻撃……本隊が来るまで待ったほうが……」

「それならいつまで待てばいいのか示してくれないか？」

厳しい調子の安東の言葉に秋田は少しばかり戸惑った。部下思いで人望のある主君の姿は日々消えかけていった。佐賀艦隊が事実上動きを止め、本隊の清原が指揮する揚陸艇の部隊はそれを気にして足をとめていた。

『時間が経てば同盟や地球の艦隊が動く……その前に勝負をつけるしかない』

そう繰り返しながらまるで言うことを聞くつもりが無い清原の取り巻きにいらだちながら日々をすごした分だけ主君の心が荒れていくのは秋田も我慢できない話だった。

「それと今なら赤松さんに投降……」

そこまで言う秋田は殺気を込めた目で安東ににらまれていた。

「それ以上言うな。この場で反逆罪で処刑されたいのか？」

本来ならそんな言葉を口にしないはずの安東。静かに秋田は沈黙して周りの将兵を見回した。

誰もが黙り込んでいた。彼らの多くは庶民の出だった。清原の理想などまるで得にはならないと言うのに安東の人望を慕ってついてきた兵士達の表情にも疲労の色が見える。

「とにかく我々は勝つしかない。それも一撃でだ」

そう言つと安東はヘルメットの顔を覆うシャッターを下ろした。

「そうですね。勝つしか……」

秋田はそう言つと艦隊司令の椅子に座つてまっすぐモニターを見つめる。

「よろしく頼む」

そう言い残して安東はブリッジを後にした。

「羽州艦隊が突出、左翼に展開する模様です」

情報士官の言葉に赤松は静かに頷いた。第三艦隊旗艦『播磨』のブリッジ。彼の座る艦隊司令の椅子の前には近辺の宇宙の海図が浮かび上がっていた。

「貞やんも苦労症やなあ。清原はんは動き出したばかり……孤立しても知らんでほんま」

苦笑いを浮かべる赤松の余裕は他の参謀達の厳しい表情とはまるで違った色をかもし出していた。

「ですが本隊が到着すればこちらは倍の敵を相手にすることになりますか……」

「倍？」

眼鏡の参謀の言葉に不思議な生き物を見るような表情で見つめる赤松。

「佐賀高家候をお忘れですか？」

うるたえてそう答えた参謀の言葉に赤松は笑い始めた。次第にその笑い声は大きくなり、周りの参謀達はお互い顔を見合わせて上官の奇行を眺めていた。

「あの御仁にそないな度胸は無いんとちゃうか？確かに貞坊が動き出してから慌てて展開を始めたが……邪魔になるだけやてあれじゃ」

清原の陸軍揚陸艇の群れの後ろに展開する佐賀の泉州艦隊を指差す赤松。だがそれだとしても戦力では清原達『官派』が上回っていることは誰もが知り尽くしていた。

「こちらは訓練ですべて阿吽の呼吸で動ける一個艦隊や。それに対してあちらさんは寄せ集めの烏合の衆。負ける要素がどこにあんの」

周りを見回す赤松。その目の前の羽州艦隊に赤いランプが光る。

「アサルト・モジュールが発艦した模様です！」

オペレータの声に赤松は頷く。そして目を左翼の艦隊のしるしに向けた。

「これは出てやらなあかな。うちのアサルト・モジュールを全部当てたれ」

それだけつぶやくと赤松はニヤリと笑って椅子に寄りかかり伸びをした。

「完了です、御武運を！」

技術士官の敬礼を返すと明石はエンジン系のモニターを確認した後でコックピットを閉める。閉鎖した空間。かつては死しなかった実戦に今度は帰ってくることを考えながら座っている自分が奇妙でつい笑みを浮かべていた。

「隊長、何かいいことでもあったんですか？」

そう尋ねてきた若い部下の顔を見て自分がにやけているのに気づいて各計器類のチェックを始める。

「ワレ等と一緒にワシも実戦は初めてやさかい、色々気持ちが悪く落ち着かん言うつか……」

「おう、それなら予定通りの後詰を頼むぞ」

すでに旗艦『播磨』のアサルト・モジュールカタパルトで待機している魚住の声にさすがの明石も力チンと来た。

「魚住も死なん程度に気張れや……おいしいところは皆ワイ等がいただくさかいに」

明石の軽口になんまりと笑みを浮かべる魚住。画面の中にはすでに発艦した別所と黒田の真剣な顔があるだけに実に間抜けに見えて再び明石の頬に笑みが浮かんだ。

「じゃあお先に！」

そう言うとかタパルトに乗った魚住のアサルト・モジュールが射出されていく。

「ほなワシ等も行こうか？」

そう言うとかタパルトに向けて移動を開始する。バックパックを背負った長期戦モードの機内の雰囲気。長距離航行後に敵艦に体当たりすることを目的に作られた回天部隊の訓練が頭をよぎる。「隊長、レーザード・フラッグは左三つ巴に二引き両でいいですか？」

ぼんやりしていた明石に恐る恐る高校を出たばかりと言う曹長が声をかける。レーザー・フラッグ。チャフがばら撒かれた戦場では戦国時代の武士を真似るように背中からレーザーで作られた旗指物をなびかせるのが胡州軍では常識となっていた。左三つ巴に二引き両は艦隊司令赤松の家紋。『守護天使』と呼ばれた先の大戦でも活躍した誇り高き家紋である。

「そやな。ワシも初陣やからうちの家紋を使っても安東はんに笑われるだけや。それで行こ」

あっさりそう言う明石もレーザー・フラッグの設定を行なう。その間にオートマチックで明石と二人の部下の機体はカタパルトに乗っていた。

「いよいよ……か」

感慨深げに明石がつぶやく。その吐息に部下達は大きく深呼吸をして答えた。

「左翼を崩せばそのままアステロイド越しの戦いになる。各員アサルト・モジュールは無視しろ！狙いは船だ！」

小さなデブリをかわしながら進む真つ赤なムカデの描かれたアサルト・モジュール『三式』。その搭乗者は『胡州の侍』の二つ名の安東貞盛。続く部下達の機体と同じくレイザード・フラッグは赤い色の『扇に鷹の羽』。

『あちらも『播磨から一個中隊が出撃した模様です』

オペレータのデータを見ながらヘルメットの下の安東の顔は笑っていた。

「別所晋一、魚住雅吉。どちらも学徒兵上がりだが凄腕だからな。期待させてもらおうか」

安東の顔はかつて地球軍の猛攻を生き延びた戦士の顔に変わっていた。

『ついに清原艦隊からも攻撃隊が出ました』

そんな言葉に安東は眉をひそめた。

「遅すぎるな……デブリ越しの砲撃戦を主体とした艦隊戦なら勝ち目は無いぞ」

部下達に聞こえないほどに小さくささやく。そんな安東の見る先にはいくつもの揚陸艇から光となって宇宙に散る友軍機が見えていた。

『隊長！望遠距離での射撃が可能な地点に到達しました！』

新型駆逐アサルト・モジュール『火龍』部隊の隊長から声がかかる。

「とりあえずけん制射撃を頼む」

再び自分の部隊の指揮に集中する安東。

後方からレールガンの強力な火砲が点にしか見えない敵部隊に撃ち込まれる。それでも散開もせず第三艦隊からの機体は突入を続

けてきていた。

「度胸は十分か。学徒兵とはいえ舐めたら痛い目にあいそうだな」
自分の中のパイロットとしての自負に火がともる。すでに安東は
一戦士として敵部隊に突入する覚悟を決めていた。

『隊長！ムカデが！』

「見えとるわい！」

部下の叫びに明石は眉をひそめた。

『この距離で狙撃？いや、こちらの様子を見ているわけやなあ』

明石はそう言うとともにパルスエンジンと同時に推進剤に点火して一気に加速をかける。

「相対速度を落としたらあかんで！棒立ち厳禁や！」

『了解！』

訓練の時と同じく明石を真似て二人の部下の機体は加速を始めた。
『タコ！抜け駆けか！』

魚住の苦虫を噛み潰した表情に得意げに笑みを浮かべる明石。先頭を切る別所隊までの距離が一気に詰まる。

「各員このまま展開！止まったら喰われるで！」

明石はすぐに別所を追い抜くとその上方に動いた。

『明石、相手はあの安東大佐だ』

「なんや、別所の旦那ともあるうものが臆病風かいな……！」

軽口を叩こうとしたと単に目の前をレールガンの望遠射撃が掠めて明石の笑みが凍った。

『いきがるのは戦場に到達してからにすべきだな』

黒田の言葉にモニターの中で魚住が大きく頷く。

「まあ見たつてくれや。ワシが伊達に一度死んだ人間やと思ひ知らしたるさかい」

そう叫ぶと覚悟を決めたと言うように明石はパルスエンジンを限界出力へとあげた。

「予定通り羽州分遣艦隊が第三艦隊左翼と衝突しています」

ブリッジではなく会議室に並ぶ清原派の参謀達。モニターを眺めていた士官の言葉に静かに清原は頷いた。

「佐賀君はどうかね？」

眼鏡の参謀はそうつぶやいた清原に渋い顔をした。

「現在一部艦船にトラブルが発生したとの連絡を受けています。そのせいで予州と肥州の同志が到着するのが遅れるらしく……」

「邪魔をしに来たのか！高家は！」

恰幅のいい参謀が机を叩く。戦場を映し出すモニターには主力が現在アステロイドのデブリの薄い右翼に展開しながら第三艦隊を包囲しようとしている様子が映っている。

「まあいいじゃないか。これなら我々の勝利は確実だ……」

「そうかな？」

笑顔を浮かべていた頬に傷のある佐官の言葉に清原は首を振った。
「ですが……すでにアサルト・モジュールの展開が始まった以上あちらも砲撃戦を避けてくるのは間違いないかと思うのですが……」

「推論でものを言うものではないね。相手は赤松君だ。奇策を何か使ってくるかもしれない」

そう言う手元のボードを捜査してモニターに赤いラインを引いた。デブリが比較的薄いライン。間違いなくそこにすでに第三艦隊のアサルト・モジュールが展開しているもおかしくない場所だけに参謀達は清原の考えにため息を漏らした。

「このラインの制圧をしてから艦船を突入させようじゃないか。障害物がなくなれば数の違いは間違いなく彼等を絶望させることになる」

清原の笑みに参謀達は感服して会議室の張り詰めた空気は少しずつ緩んでいった。

「距離をとれ！」

明石が叫ぶのと同時に目の前でレールガンの弾丸が真空で炸裂する。

『チャ……フ……』

部下との通信が途絶える。強烈な指向性ECMが一瞬明石の操る三式のモニターの乱れを誘う。

「格闘戦に持ち込む気か？」

次の瞬間には今度はミサイルが前面の空間で炸裂。レーダーがすぐに機能停止をする。明石はそれでも突入をやめなかった。

『今回は死ぬ気は無い……やけど死んでいった仲間の面子もあるからのっ』

自分の額に汗が浮かんでいるのが実感できる。そのまま明石の機体は一気にばら撒かれたチャフの雲を抜けた。

すぐさま飛び込んだのが赤いムカデのエンブレムと檜扇のレザード・フラッグ。そしてサーベルが明石の機体の目前を掠めた。

「やられた！」

明石が叫んだのも無理は無かった。五機のムカデのエンブレムの三式に明石は取り囲まれていた。

「偽者か……でも位置が悪いな」

完全に包囲しているだけに火器が使えない敵に明石はレールガンでまず正面の三式に照準を合わせる。

『隊長！』

「来んでええ！罨や」

チャフの雲を避けて左翼に動いた部下の機体が一刀両断された。

「安東はん！」

部下の死を目の当たりにしてついレールガンの照準が外れて安東貴下のムカデの三式を大きく外れてレールガンの弾丸が通り過ぎる

のが見えた。

「タコ！熱くなるな！」

魚住の声がヘルメットの中に響き渡って明石は冷静さを取り戻した。包囲している敵部隊をもう一度にらみつけてみる。どれも明らかに連携がおかしいことにすぐに気づいた。

「促成栽培に喰われたる訳にはいかんのう！」

すぐに初弾を外した敵に照準してトリガーを引く。まるで吸い込まれるようにコックピットに着弾したレールガンの弾道を確認するとすぐさまその後ろから現れた敵にも照準を絞る。

「俺ももらうぞ！」

今度は黒田の叫び。狙いをつけていたムカデのエンブレムの敵機に上方から連射が注がれすぐに敵機は大破していった。

「人の獲物を横取りすんなや！」

すぐさまサーベルで明石のもう一人の部下の三式の右手を切り落としていた敵のコックピットにレールガンを撃ちこむ。

「隊長！殺す気ですか！」

「ええやん、ワレはちゃんと生きとるぞ」

にんまりと笑う明石だがすぐに意識は先ほどちらりと見えたやけに動きの良い三式に向いていた。

「胡州一の侍。喰ったるで」

ようやく回復したリーダーを見て戦闘がかなりの乱戦になっていることがすぐに分かった。そして二機のすばやい動きの機体があることがすぐに見て取れた。

「別所がおいしいところを喰う気か？ええ度胸や」

そう叫ぶとすぐさま直線距離で一番近い敵の首をサーベルで落としてそのままアポジモーターに火を入れた。

「なんだ！」

安東は後方に気配を感じてレーダーに目を移した。目の前のかなりのやり手のパイロットの操縦する三式相手に手間取っているところに敵は増やしたくなかった。

『任せてください！』

若い声が響いた。本来なら止めるべきところだったけどそれどころではなかった。

『俺も焼きが回ったか……』

目の前の赤松家の家紋の左三つ巴に二引き両のレーザー・フラッグの三式にはまるで隙が無かった。明らかに大戦を生き延びた古強者の風格がそこには見て取れる。

「第四中隊！そのまま前進して退路を絶て！何とか時間を稼ぐんだ」

安東の言葉に後方で待機していた駆逐アサルト・モジュール部隊と旧式の97式改で構成された予備戦力が動き出した。

「目の前にとらわれるか全体を見れるか。相手のパイロットの技量が分かるな」

至近距離となりレールガンを投げつけてサーベルを抜くパイロットの思い切りの良さに感心しながら安東は笑みを浮かべていた。

『駄目です！側面から狙撃され……ウワ！』

突然の通信に安東にも冷や汗が流れた。そしてある程度の技量の目の前の部隊長らしいパイロットがここにいて安東の相手をしていたのは戦力を迂回するだろう安東の作戦を読んでいたことに気がついた。

「そのまま最大速度で突っ切れ！敵艦の射程まで届けば動かなくなる！」

そう叫ぶのが精一杯だった。すでに二合斬りあって相手が自分と

ほぼ互角の腕前だと気づき、そしてその機体に左三つ巴のエンブレムがあるのを見つけると安東は笑みを浮かべた。

「さすが海軍教導隊の切れ者別所晋一ってところか？」

安東の頭はすでに部隊指揮官としてでは無くパイロットの意識に切り替わっていた。

「左翼に明らかな裂け目を作って……貞坊なら間違いなく食いつく。ワシも人が悪いねえ」

ブリッジで各部隊の戦闘の模様を見ながら赤松は笑みを浮かべていた。敵の本隊の数に押されているもののすべてが赤松の予想した通りに展開していた。左翼にわざとこの旗艦『播磨』を囷として展開すれば気の短い安東は自ら出撃して沈めにかかるのはよく分かっていた。

中央の艦隊が先に艦載アサルト・モジュールを使い切るように出撃させたのは敵の揚陸艦にはろくな対艦兵器が搭載されていないことを見込んでの行動だった。アサルト・モジュール部隊が補給のために引き返したところで主砲の一斉掃射を行なうことで敵艦を撃滅するというシナリオどおりに話は進んでいる。そして後方でこの旗艦『播磨』目指して進んでいる佐賀高家の泉州艦隊には戦意が無いこともすでに明らかだった。

「陸軍はやはり所詮は大気圏内の軍隊ですな」

眼鏡の参謀の言葉だが赤松は油断をする気はさらさら無かった。安東の部隊は確かに現在この『播磨』の艦載機部隊を指揮している別所晋一のおかげで何とか安東隊と互角な戦いを展開している。だがそれがいつ崩れても不思議でないことは赤松が一番よく分かっていた。安東の暴走を誘う為に護衛の艦は巡洋艦が二隻。しかも旧型の巡洋艦には各三機のアサルト・モジュールしか搭載ができず、しかも最新式の三式ではなく急場しのぎの97式改だけという有様だった。

「後は若いのが決めてくれるんちゃうのん？」

会議の際に赤松のその一言でこの奇策は実行に移された。

「佐賀さんがどう動かれるかですな」

参謀の一人の言葉に艦隊司令の椅子に座って頬杖をついて眺めて

いる赤松。

「人の手柄を当てにして作戦を立てる……ワシも小さな男やなあ」
そう言って見せた赤松の頬に笑みが浮かんでいることは周りの参謀達には気づかれることが無かった。

『弾切れ！帰還する！』

別所の叫びに明石はにんまりと笑った。敵影。明らかにその俊敏で的確な機動は『胡州の侍』安東貞盛のものだった。目の前でそれを見れば明石の闘争本能に火がついた。

『時間を稼ぐだけでいいぞ！』

退却のために大量のチャフと指向性ECMをかける別所の機体に変わり明石がムカデのエンブレムの前に立った。

『これで勝てれば大金星やな』

自然と笑みが浮かんでくるのが明石にも分かった。現在魚住は羽州艦隊に同調して動いてきた越州分遣艦隊のアサルト・モジュール群と交戦中。ロングレンジ仕様の機体の黒田が出てくる心配も無い。『ワシの名前も上げさせてもらいまっさ！』

そう言うのと早速レールガンを投げ捨てて毒々しい赤い色の安東の三式に斬りかかる。まるでそれを待っていたかのように安東もライフルを投げ捨て剣を抜いた。

『なかなか興味深いな！君は』

敵からの指向性通信が割り込んでくる。ヘルメット越しに見えるのは明らかにきつい目つきが特徴の安東貞盛陸軍大佐その人だった。『ありがとうございます！認めてくれはったんですね！』

安東に上段からの一撃を受け止められながら明石が叫ぶ。だがそこには余裕の表情の安東がいるばかりだった。

『いやあ、退屈はしないがまだまだだね』

今度は連続で繰り出される安東の突きを受け止めざるを得なくなる。一気の攻撃に明石は思い切り歯を噛み締めて耐えた。

『筋がいいが実戦を知らない……君の名は？』

『明石清海言います！』

『坊さんか……それにしても思い切りがいいな！』

「生まれは関係ないんとちやいますか！」

一気に距離をとると明石は安東の赤い機体をにらみつけた。まだ背後では明石の部下と安東の率いる幼年兵の戦いが続いていた。

『なんやて……あれが三式の機動？……あほな』

焦る明石。確かに同じ三式だが安東の機動はまるで見たことが無いほどの確で俊敏だった。完全に翻弄されていると言う感覚が明石を襲う。

『でもあちらは一機でたくさん相手にする覚悟やな。スラスター出力は最小でパルスエンジンと腕や足を降る質量機動でごまかしをかける』

それは十分分かっていた。だが上段からの剣先は食い止められ、突きはかわされ、体当たりは逃げられる。次第に自分が焦っているのが分かる。

『まだまだ未熟！』

「なんや！」

安東の笑みが指向性通信のモニターに拡大された次の瞬間には明石の三式の右腕は斬りおとされていた。そのまま入った蹴りでコックピットに衝撃が走り明石は何とか機体を立て直そうとしたがすでに安東は『播磨』に向けて加速をつけているところだった。

「黒田！そっち行つたで！」

『了解！』

機体の損壊状況を明石は確認する。右腕は肩から斬りおとされ、けられた時に腰の間接の一部に負荷がかかり戦闘行動は不能になっていた。

「なんやねん！」

明石は思い切り自分の身長に合わせた大型のシートを叩いた。

いくら悔しがってもすでに安東は彼の担当区域をすでに抜けて黒田隊と交戦状態に入っていた。

『隊長……ご無事ですか？』

正親町三条楓を加えて三人いた明石の部下は今は一人に減ってい

た。

「帰等や。近くに味方の船は？」

『『鈴鹿』がいます。そちらで修理を受けましょう』

悔しいと言う顔の部下を見て、明石も自分が負けたことを思い知って齒軋りをした。

「なんだ、赤松は押されてるじゃないか」

会議室で参謀達に囲まれながら佐賀はつぶやいた。周りでも今からでも清原派に加担する為に泉州艦隊を迂回する為に大回りをしてる越州などの艦隊に道を明けるべきだと主張したい士官達がざわめいていた。

「しかし今行つてどうします？」

そう言つたのは小見だつた。本家嵯峨家の被官であり、猛将嵯峨惟基の教えを受けた実力者の言葉にあたりは静まり返つた。

「今なら間に合ふんじゃないかな。それに圧倒的に清原君の部隊の方が優勢じゃないか」

長身で痩せ型。どう見ても実戦の経験の無い佐官の言葉にきつと見据える小見。その殺気だつた目ににらまれて哀れな指揮官は黙り込むしかなかった。

「優勢なのは確かです。そして我が艦隊が参戦すれば万が一にも赤松さんには勝ち目は無い」

「認めるんだな？我々が参加すれば勝負がつくことを」

佐賀の言葉に小見は大きく頷いた。

「だが一つ忘れてはならないことをお忘れのようなので」

「何が言いたい」

あつさりと自分の言うことを認める小見に佐賀は怪訝そうな視線を投げる。

「勝ち馬に乗る。それが自力なら問題は無いでしょう。ですが私を含めて殿上家の被官を勝手に動かしたことは事実ですよね」

そんな小見の言葉に佐賀の顔は引きつった。

本来は泉州コロニーの管理を殿上嵯峨家から命じられているだけの佐賀が自分の手持ちの陸軍師団と一緒に今回は出撃させていた。そのことは明らかに越権行為であり、嵯峨惟基から見れば暴挙と言

うことになるのは目に見えていた。

「泉州は勝ちの決まった清原候を支持して勝ち馬に乗った。しかもその戦いは本家の意図とはかけ離れている。世間に対して恥ということを知っている人間のすることではない。そう言われて戦いが終わって捨てられた武人がどれほどいることか……」

小見の独り言のようなつぶやきに会議室のモニターを見つめている幹部達は肝を冷やしていた。

「な、ならば貴官は赤松側に付けと言うのか！黙ってみていと言
い出したのは貴様ではないか！」

髭面の士官に表情を殺したように目を向ける小見。その慌てる姿
に同調するように佐賀は小見の顔を覗き込んだ。

「いえ、私はどちらにつくかまでは言っていないよ。ただ見てい
ればどちらが勝つかは見えてくる。そしてどちらに着くべきかの選
択は佐賀高家閣下のご存念に添った形にするのが一番だと申し上げ
たまでですか？」

小見の言葉に一齐に視線が佐賀に集まる。佐賀は慌てたように咳
払いをすると静かに椅子に腰を下ろした。

「赤松に逆転の要素は無いのか？」

渋々声を絞り出す佐賀。そしてその声でつい笑顔を浮かべそうに
なった若手の情報将校が驚いたように端末の操作を開始する。

「まだ……始まったばかりだ」

それだけ言々と佐賀は黙り込んだ。その表情があまりにも慌てて
いるように見えたので周りの参謀達は不安そうに小見に目を向ける。
小見は一人、涼しい表情で自分の方に視線を向ける参謀達の視線
を浴びていた。

テーブルの中央のモニターに戦況が表示される。拡大された左翼
にはすさまじい勢いで赤松側のアサルト・モジュールを撃墜してい
る清原側のエースの姿が見えていた。

「現在、『播磨』に向けて安東貞盛大佐が攻撃をかけています」
淡々と感情を殺したようにつぶやく士官の言葉に会議室がざわめ
く。

「安東君か。彼はなかなかの腕前だが……彼が出なければなら
ないほどののか？」

佐賀の言葉に情報将校は黙り込んだ。そして佐賀の目は若手のお

どおどした情報将校から小見に向けられた。

「いい試金石がいるではないですか」

満面の笑みの小見。そしてその笑みを不愉快に感じた佐賀はそのまま視線をテーブルの上のモニターに再び向けることになった。

「対空防御能力が30パーセント低下！」

「『多摩』と『天竜』の艦載機を左翼から展開！『筑波』も準備させてんか？」

赤松の言葉を聞くとすぐにオペレータは作業を開始する。

「相手は安東貞盛。耐え切れませんか」

副官の笑みが赤松にも伝染してくる。

「まあ貞坊は真面目やからな。ちゃんと仕事はする……ええパイロットや」

「敵を褒めるんですか？」

笑顔の赤松にちらりと目をやる長身の参謀。艦隊司令の椅子で赤松はただ楽しそうに目の前のモニターを眺めている。

「敵やなんて思うとらんで。アイツはいつだってワシのダチや」

「そうですか」

副官がそう言ったとたんに振動が第三艦隊旗艦『播磨』を襲う。

「第三艦橋に直撃弾！被害を確認します」

オペレータの焦った声を聞いても平然としてモニターから目を離さない赤松。

「あそこは今は無人やからな。安心できるわ」

「しかしこれだけ無人化ができるとなると我々も必要なくなるんじゃないですかね」

旗艦『播磨』には実は整備員とブリッジクルーしか乗船していなかった。対空防御機能はすべてブリッジからの操作で起動するように設定し、レーダーなどの機材も他の艦からの情報を集めると言う形でクルーを他の艦に載せ換えての戦闘である。

「ですがもうそろそろ気づくんじゃないですかね。安東君も馬鹿じゃない」

長身の参謀の助言に大きく頷くと満足そうに赤松はモニターの中

に映る友軍機を次々と葬る赤いムカデの絵の書きなぐられた三式、
安東貞盛の機体を見つめていた。

『火龍隊呐喊します！』

安東は部下の報告を聞きながら目の前に立ちはだかった新型のアサルト・モジュールを袈裟懸けにした。

『おかしい……忠さん。あんたは何を考えているんだ……』

部下に聞かれまいと静かに目をつぶり考える安東。だが答えは出てこなかった。

『敵駆逐艦の存在を確認！』

『雑魚にはかまうな！』播磨』を沈めれば終わる！』

上下左右で繰り広げられる死闘。その向こうにはわずかに巨艦の腹を晒している第三艦隊旗艦『播磨』の姿があるはずだった。

『このままだと沈むぞ』

再び命知らずの教導部隊の機体が勝負を挑むが軽くないして安東は引いた。

『安東大佐！』

突然の羽州艦隊司令の秋田義貞の顔に驚いたように目を剥いた。

『何で直接通信をしてきた！』

『中央艦隊が引き始めました！清原隊に乱れがあるようです！』

この言葉に安東は寒気のようなものが背筋を走るのを感じた。

『乱れ？原因は分らないのか？』

『何でも望遠距離での狙撃を受けて次々と艦が沈められているとか

……』

その時点で安東は気づいた。

『新三か……』

静かにそう言うと安東は頭の後ろに下げていたヘルメットを被りなおした。

「吉田ー。何とか当ててるねえ」

巨大な重力波レールガンを支えるアサルト・モジュール。その20メートル弱の機体の三倍の砲身が再び光り始めた。

「隊長！二発は無駄にしていますよ」

吉田と呼ばれた男はそのレールガンと接続されたエネルギーユニットを操作しながら苦笑いを浮かべていた。

「しょうがねえだろ？俺は生身なんだからさ」

「まあ四隻目。確実に当ててくださいね」

特徴の無い顔の吉田の言葉に頷く隊長と呼ばれた男。嵯峨惟基はパイロットスーツではなく遼南帝国大元帥の制服を着て目の前の狙撃用照準機を覗き込んでいた。

「おっと……新型の宮古級の揚陸艦か？贅沢すぎるねえ」

そう言うトリガーを引き絞る。すぐに飛び出した黒い弾丸はそのまま大型揚陸艦の中央部に命中し船は真つ二つになった。

「貞坊……いや安東貞盛大佐。俺は貴様と赤松の喧嘩に手を出すのはどうかと思っただが……清原と烏丸。あの二人に政権を渡されると色々困るんだ」

つぶやきながら爆縮を終えたカートリッジを排出して次弾を装てんする。一瞬カートリッジから黒い煙のようなものが流れ出る。その煙が嵯峨の専用機『カネミツ』の表面に陽炎のようなものを浮かび上がらせた。

「後いくつくらい沈めますか？」

吉田からの通信に苦笑いを浮かべる嵯峨。

「あと二、三隻だな。それ以上はさすがの清原さんも俺の存在に気づくだろうしな」

そう言う装てんしたカートリッジの状況を確認する画面を起動させる嵯峨。

「忠さん。これで負けたら俺は知らんぞ」

嵯峨は静かにそう言った後でタバコを胸のポケットから取り出した。

「『榛名』、『妙高』中破！さらに……」

「わざわざ言わなくても見れば分かる！」

いつの間にか清原は立ち上がっていた。互角の戦いに展開できる、そう考えた矢先に先導艦があらぬ方向から攻撃を仕掛けられた。

「赤松さんは予想がついていたようですね……」

眼鏡の参謀の言葉に首をひねる清原。

「おかしい、そんな……射撃地点は特定できないのか？」

「駄目です！データが少なすぎます！」

オペレータの言葉に齒を噛み締めながら清原は席に着くしかなかった。

「こちらも本腰を据えてかかるべきかと……」

長身の参謀の言葉に頷く清原、だが次の瞬間清原は気がついたように背後に立つ秘書官に声をかけた。

「佐賀君の泉州艦隊があるだろ！連絡をつけろ！できれば直接通信で……」

「足元を見られますよ」

「かまわん！負ければすべてが終わるんだ！」

秘書官を怒鳴りつける清原の姿には冷静さは微塵も無かった。秘書官は慌てて会議室を飛び出す。

「彼の言うことももつともだ。戦後に影響を与えます……」

長身の参謀がそこまで言ったところで言葉を飲み込んだ。悪意に満ちた清原の視線。それこそ自分が戦後に立場を失うだろうと思つて口をつぐむ。

「どうしたんだ……赤松はしばらくは撃つてこない。そう言ったのは誰かね……」

周りを見回す清原。彼の目には誰も彼もが自分を裏切ろうとしているように見えた。

「保科公の恩を忘れて暴走する輩がいれば私は決して容赦はしないからな。君達がここにいて言うてそれが免罪符になるとは…」

…」
その時船が大きく揺れて叫んでいた清原の体は大きく背もたれに叩きつけられた。

「今度はどうした!」

衝撃にずり落ちた椅子にしがみつく清原。シートベルトをしていたオペレータが焦りつつキーボードを叩く。

「今度は第三艦隊です!」

「何だって!」

清原が叫ぶのもっともだった。すべての第三艦隊の船はアステロイドベルトにある。そう信じ込んでいた参謀や清原達。だがその一部艦隊が下方に展開し射撃を始めていた。

「どうした!監視は何をやっていた!」

「国籍不明の貨物船が浮かんでいるのでそれと誤認したような……」

「そんな詐欺のような真似をあいつがするか!」

清原はようやく椅子に座りなおし帽子を直しながら叫ぶ。実際下方を貨物船が行き来していたのは事実だった。だがレーダーにはそれは別の三隻の高速駆逐砲艦の姿を映していた。

「慢心があつたか……」

搾り出すようにして清原は言葉を吐き出した。周りの参謀達も明らかに動揺した様子で拡大される高速艦の動きに目をやっていた。

「艦載機は戻せんのか?」

「いや、今戻せば中央は完全に抜かれてこちらは丸裸だ」

「だがここで打撃を受ければ立ち直れんぞ」

口々に叫ぶ参謀達。清原はそこで初めて彼等がまるで役に立たない存在だと言うことに気づいた。

「左翼は……羽州艦隊はどうなっている!」

清原の言葉にオペレータが左翼の状況をモニターに映す。そこには明らかに苦戦中の安東のアサルト・モジュール三式の姿が映っていた。

「終わったな……」

あたりに聞こえないようにつぶやくと清原は視線を落とした。

「帰等しろだと！ふざけるな！」

叫んだ安東だがすでに左翼の戦線は切り崩されていた。対艦装備の火龍は多くが落とされ、無事な機体は補給中。自分の機体の火器は弾切れ。サーベルで駆逐艦を大破させるのが精一杯だった。

『大佐。運が無かったんです。引きましょう』

秋田の顔がしたり顔に見えて思わず殴りたくなる衝動を抑えて安東はうなだれた。

「^{しんがり}殿はうちが勤める。各機に帰等命令を出してくれ」

諦めたようにつぶやくと煙を上げつつも平然と戦闘を続けている赤松の乗艦『播磨』を一瞥した。

「よくできる部下だ。うらやましい限りだよ」

それだけ言うと安東は帰途につこうとした。だが目の前には隊長機の三つ巴紋のエンブレムの機体が立ちはだかる。

「明石とか言っただな」

すぐさま安東へのサーベルの一撃が打ち込まれる。何とかそれと交わして背後を取ろうとするがすでに敵の機体は正面を向いていた。「読みがいいパイロットだ。将来有望だな」

自然に笑みがこぼれるのを感じながら再び斬撃を打ち出してくる相手の動きを丁寧にあわす。

『逃げる気ですか！』

泉州訛りのアクセントで叫ぶ若者。その姿に安東の頬は自然と緩んでいた。

「今は貴官とじゃれているわけにはいかないのだな」

再び距離をとる安東。だがすぐに明石とか名乗ったパイロットの機体が間合いを詰めてくる。

「読めてるぞ」

何も無いはずの空間と思った明石の期待が煙幕に包まれる。

『S・マイン!』

それだけ叫ぶがすぐにその煙に含まれたチャフですべてのセンサーがエラーを起こして動きを止めている。

「後で遊んでやるよ」

捨て台詞を吐くと安東は撤退していく味方部隊に続いて撤退を開始した。

「撤退やて？」

明石は機体の状況確認を終えた画面を見ながらつぶやいていた。
『どうしたんだろうな。もう一波攻撃を仕掛けられたら……負けるぞ』

そんな魚住のつぶやきに頷く明石。安東の部隊を半分以上片付けたが部下は一人として生き残ってはいなかった。二人とも周りの機体の残骸を見ながら静かにヘルメットを脱いだ。

「こらまあ……悲惨やな」

周りには数知れぬデブリ。それが昨日まで笑っていた人間の操縦していた機体だったとはとても思えない状況だった。

『明石、魚住。すぐ帰等しろ。追撃戦の準備に当たるぞ』

別所の冷静な言葉に思わず明石は熱くなるところだった。

「死んだんやで……人が一杯死んだんやで」

『分かっているが感傷に浸れるほど世の中が甘くないのは貴様も知っているだろ？』

淡々とつぶやく別所の顔を見る。すでに割り切ったと言うような表情の黒田がヘルメットを被っていた。

『晋一よう。俺にも一分ぐらい部下の弔いの黙祷をする時間をくれよ』

魚住の言葉に明石も大きく頷いた。

『まあいいだろう。だが時間は何よりも貴重なのを覚えておけ』

別所はそう言うと言信を切った。

「あいつも辛いんや。わかったげなあかんで」

『言われねえでも分かってるよ』

魚住はそう言うと言を閉じつつむく。明石も僧職に有ったものらしくポケットに入れていた数珠を取り出すと金属片の散らばる空間を見つめて静かに手を合わせた。

「清原さんは撤退を始めたのか……」

渋い表情で佐賀高家がつぶやいた。

ささやきあつ参謀達。彼らが自分を見捨てて保身に走ることは分
かりきっていた。だがそれをとめることなど今の彼にはできなかった。
た。

「江州第三師団、出撃を開始しました！」

「『鈴鹿』からの連絡です！『これより叛乱軍討伐を開始する。清
原氏の乗艦の情報を送られたし！』との事です」

力が抜けていくのが分かった。佐賀のそんな表情にすでに半数の
指揮官達は彼の言葉も待たずに会議室を後にしていた。

「佐賀閣下……」

満面の笑みでうつむく佐賀を見下ろす小見。そして静かに佐賀は
立ち上がった。

「満足か？」

「いえ、あなたが生きている限り私は満足しませんよ」

その言葉に佐賀は小見の胸倉をつかみ上げた。

「この状況。ある程度打開できるのは閣下しかないと思いますが」

まだ小見は笑っていた。その笑みに自分の全身の力が抜けていく
のを感じる佐賀。

「仕方が無い……」

「どう仕方が無いんですか？」

再び笑みを向けてくる小見。だがそれに反応をする力は佐賀には
残っていないかった。

「全艦攻撃を開始。敵は清原和人」

小さい声で佐賀がつぶやいた。満足げに頷くと小見はオペレータ
がモニターを見つめている執務室に向かう。

「終わったな……」

佐賀のつぶやきに耳を貸すものはもう誰もいなかった。

「脱出艇はこちらになります。今なら羽州艦隊の撤退に間に合うはずです」

副官の言葉に清原は大きく頷いた。爆発音が背後で響くのを見るとそのまま乗り込む。

「帝都に戻ればいくらでも挽回できる。烏丸公にもご助言いただければ……」

そう言って乗り込んだシャトル。背後に爆発の光が再び光った。

静かに武装した警備班員の後についてそのままシャトルの貴賓室に入る清原。そこですぐに彼は目にした端末の前に座って起動をはじめた。

「閣下、通信はご遠慮願えますでしょうか……」

クルーに声をかけられて不審そうな顔で見上げる清原。

「こちらの位置が特定されます」

「しかしこのままばらばらに帝都に向かえば効率が悪い。今は一人でも戦力が欲しいところだ」

その言葉に副官は大きくため息をついた。

「なんだその態度は」

「やはりあなたは戦場を知らない人だ」

副官のその言葉にさすがに頭にきた清原が手を振り上げた。平然と左頬を差し出す副官。だが清原の左腕が振り下ろされることは無かった。

「捕まることを恐れては政治はできないよ」

そう言うのと起動した端末に向かい何かを打ち込んでいく。

「負けるべくして負けたんですね。我々は」

副官のため息を無視して清原は作業を続けていた。

「最善は尽くしますが捕まった時は諦めてください」

パイロットはそれだけ言うのと貴賓室の扉を閉めた。

「出撃だ！準備をしろ！」

安東はそう叫ぶとパイロット控え室から飛び出した。部下達もそれに続く、そしてそのままハンガーに來た時によりやく異変に気がついた。

警備兵が整備員に銃を突きつけて整列させている。そしてその指揮を執っているのは艦長の秋田貞義だった。

「何のつもりだ……」

そう言つと威嚇射撃がすぐに飛んできた。

「安東大佐。我々はこれから第三艦隊に降伏します」

秋田のまじめな表情に安東は顔をゆがめた。

「命が惜しいのか？」

秋田は首を振る。そしてその立場も安東には十分に分かった。

もはや官派に逆転の目は無かった。おそらく今回の逆転劇に一枚噛んでいる親友の嵯峨惟基。あの男を敵に回している以上奇跡は期待できない。そして羽州が官派一枚に染まったとなれば戦後の懲罰はどのような形で彼等の領邦を襲うか分かったものではない。

「降伏は貴様等がしろ。俺は貫くべき信義を貫く」

そう言つて自分の機体を目指す安東だがその足元に秋田の拳銃の射撃音が響いた。

「大佐はそのまま自室に戻ってください」

死んだような目が安東を見つめている。思わず安東は敵意をはらんだ目を秋田に向けていた。

「大佐が動けばさらに赤松准将を怒らせることになります。ですので大佐には……」

「ごめんだな！」

そう叫ぶと身を翻し安東は走り出した。射撃音が響き肩に痛みが走るが無理をしてそのまま控え室の隣の脱出用エアロックに飛び込

む。

『大佐！無駄な抵抗はやめてください！これ以上は！』

叫ぶ秋田の声がインターホンを通して響く中、安東は大きくため息をついた。

『大佐！抵抗はやめてください！』

驚いたように叫ぶ秋田の声を聞きながら安東は笑みを浮かべていた。

「部下に裏切られての最期……俺らしいか」

そう言うパイロットスーツについていた短刀を取り出す。外部のモニターでその様子が見えるらしく秋田は部下にドアの破壊をするように命じたようで外が相変わらず騒がしい。

しずかに中央の床にどっかりと座る。短刀の刃は静かに銀色の光を放っていた。

「辞世の句くらい用意しておくべきだったかもしれないが……それはらしくないかな」

そう言うとともに喉にその刃を添える。鋭い刃は静かに喉の肌を切り裂き痛みが安東の顔をしかめさせた。

扉の外から非常用の鉈でドアを壊す音が響いてくる。

「恭子すまない。俺の信義だけは譲れないんだ」

さらに短刀の刃を押すべく左手を添える。次第に短刀を持つ右手に赤い血が流れてくるのが分かる。

「大佐！」

半分壊された扉から秋田が叫ぶのが安東からも見えた。

「じゃあな」

慌てる秋田を見ながら安東は左手に力を込めた。鮮血が流れる中、安東の意識が途切れる。

「早くしろ！医務官を呼べ！すぐに輸血だ！」

秋田は部下達を急き立てるが静かに床に倒れていく主君を目にして彼の目にも涙が浮かんだ。

「大佐！」

そんな秋田の叫びはどこにも届くことは無かった。

「羽州艦隊が降伏……終わったな」

パイロットの詰め所で黒田がつぶやくのについ明石は笑顔を見せていた。終わってみれば五体満足で戦いを生き延びたのは隊長の明石達四人だけだった。半数の部下は戦死。他の部下達も多くは回収されて医務室で眠っている。

「終わったとはいえないだろうな……これだけの死者が出たんだ。清原さんはもとより烏丸公も無事じゃあ済まないぞ」

別所がそう言いながらコーヒーを飲んでいた。魚住はカップを別所から受け取るとそこに手にしていたフラスコから焼酎を注いで口に含む。

「これから先は政治の話さ。俺達の出る幕じゃない……と言うか出る幕をなくす為に俺達は戦って勝ったんだからな」

苦笑いの魚住に頷く明石。貴族の特権の縮小は自然と彼等の権威を裏打ちしていた軍の発言権の制限が行なわれることは誰にも分かることだった。

「ええんちゃうか？兵隊や言うてええ人間ばかりやないやろ？アホもおれば君子もある。人間なんざそないなもんなんとちゃうか？」

「おう、やくざにしては良いこと言うじゃねえか」

座っている明石の頭をぺたぺた叩く魚住。その様子がおかしいのか黒田が噴出した。

「別所大佐」

申し訳なさそうに連絡将校が顔を出した。

「おう、いるぞ」

若い将校の方に目を向けた別所。その厳しい表情にひるんだように頬を硬直させる少尉の顔がおかしくてまた黒田が噴出した。

「現在シャトルで清原准将等が逃亡しているとの連絡が入りました

……」

「追討戦か……」

「そやな」

少尉の言葉を聴き終わることも無く四人は立ち上がった。
「はじめはつけたるやないか」

明石は三人を見回しながらこぶしを強く握り締めていた。

「臨検が来ました……遼北のようですね」

小さなシャトルの窓から清原が顔を見せる。黄色い三ツ星のマークの小型艇がシャトルに近づいてくるのが見える。

「遼北か……国交が無いのが痛いな」

秘書官の言葉に難しい顔をする清原。その様子に誰もが静かに頷いた。

『停船勧告が出ました……突破しますか？相手は旧型艇ですから振り切れると思いますよ』

「いや、臨検を受けよう。国交が無いだけでなくこちらの状況は正確に把握していないだろうからな」

そんな清原の言葉に秘書官は失望したように頷いた。

『……停船後は指示に従ってもらおう』

遼北は北京語が公用語のはずだが自然な日本語のアナウンスが貴賓室にも聞こえてくる。そしてそのまま停船すると宇宙服の警備部隊員が飛び出してくる。

「なんだ？臨検にしては物々しいような……」

「もうすでに手配が済んでいるんじゃないでしょうか」

半分やけになったように秘書官はつぶやいた。そこで清原は明らかにわれに返ったようにひざを打った。

「これで終わりなんだな」

決して驚くわけでもなくつぶやく清原。その様子には慌てふためく彼を想像していた側近達の予想を裏切るものがあつた。

「このまま恐らくは……近いところは濃州ですね。そちらに送致されるかと……」

秘書官の言葉に黙って頷く清原。

「抵抗はするな。これ以上の死者を私は望んでいない」

そう言う清原の言葉に秘書官は大きく頷いた。

天幕の中。醍醐文隆はじっと目をつぶって第三艦隊からの報告を聞いていた。

「終わりましたね」

副官の言葉にしばらく躊躇した後に頷く。

「これで終わりではないと思うがな」

その口調が滑らかさを欠いている理由は天幕の下の指揮官達にもよく分かつていた。

兄、佐賀高家の裏切りが宇宙での戦いの帰趨を決めたのは間違いないことだった。そしてその裏切りが兄の無能さを物語るような偶発的なものだったと聞いたことも醍醐の不安そうな面持ちの原因となっていた。

「とりあえず抵抗している部隊に投降を呼びかけるべきだな。このまま帝都まで300キロ。それなりに強固な敵部隊と遭遇することもあるだろうが……」

「仕方がありません。とりあえず大掃除が必要だったと言うことでしょうから」

副官のその言葉に頷くと醍醐は立ち上がった。そしてそのまま天幕の入り口でガスマスクをつけて外に出る。テラフォーミング化済みとはいえ遼州星系第四惑星胡州の空は赤く染まって独特の土煙が太陽をさえぎっているのが分かる。

「これからが問題だ……な」

そう言って見上げた空に友軍の攻撃機やアサルト・モジュールが編隊を組んで飛んでいくのが見えた。

「さて、後は嵯峨殿の仕置きを待つしかないだろうな」

レンズの向こうに見える赤い空。それを憂鬱そうに見つめる醍醐。そしてその先で苦虫を噛み潰すような表情を浮かべて苦悩しているだろう兄を想像すると醍醐の心は痛んでいた。

「いらつしゃっているんですね」

濃州女卿である斎藤洋子はそう言いながら濃州首府の廊下を静かに歩いていった。そのか細い体を包む軍服が似合わない様を見て次官を務めている老人は涙が出るのを抑えていた。

「……はい。とりあえず銃殺命令が出ている人物の処刑には莊園領主の立会いが必要と言うことになっていますので……」

明らかにその白髪の間じる髪の下に脳は無邪気に自分を慕ってくれているかつての少女が、これからクーデターの首班と対峙してそれを処刑すると言ふ難題を経験することの恐怖を思つて泣き出したいのを必死にこらえていた。

「いいですよ、私はこうなる定めだったのです。このお兄様が愛した濃州を守りきることができたのですから。その仕上げとして私が手を汚すのも覚悟はしています」

そう言いながらも洋子の視線はどこと無く泳いでいるように見える。それを見ると次官に付き従う高官達が目頭を押さえるのが洋子の心も乱れそうになる。

会堂と呼ばれる大きな木製の扉の前で立ち止まる洋子。それを見て古風なボルトアクションライフルを手にした衛兵は静かに扉を開いた。

赤いカーテン越しにコロニーの中央部のミラーから注ぐ太陽の光がまぶしかった。だが今の洋子にはそれを避けていることはできなかった。

「斎藤女侯爵！」

叫んだ男の目を見ると洋子もさすがにうろたえてしまっていた。

かつて帝都へ陳情に出かけると見かけた烏丸公の片腕と呼ばれた切れ者、清原和人准将がニヤリと不気味な笑みを浮かべていた。武術の心得があるわけでも縄抜けの名人と言つわけでもない。後ろ手

に縛られてひざを付いたままこのコロニーの主が座るべき椅子の目の前に看守に両脇を抑えられながら座っている。

そのまま椅子に座る洋子を見上げる清原の様子はまるで両脇の銃を突きつけている濃州鎮台の兵士を引き連れた將軍のようにも見えて洋子はようやく威容を正して清原を見下ろした。

「清原様。このたびの動乱の責任を取られるならなぜ自決されなかったのですか？」

静かにそして鋭い口調が自分の口から飛び出すのに洋子は少しばかり当惑していた。彼女を軍務の面で支えた斎藤一実の死の原因を作った男。兵士達の多くと流れ弾を食らったコロニーの住民の死を思えばそれも当然のことだと思いながら彼女はそのまま目の前の罪人をにらみつけた。

「清原様」

「様をつけるべき相手ではないんじゃないかな。私はもはや罪人だ」

そう言いつつ清原にどこと無く余裕があるのが洋子にはきにいらなかった。

『お兄様が戦死されたあの戦争もこの人のような上層部の無知が生み出したのですわね』

洋子は自分の視線が殺気を帯びたものだと言うのが清原の笑みから見て取れるのを不思議に感じながらただ正面を見つめていた。

憎いはずだった。許せないはずだった。

恐らく無様に命乞いをするか、逆に殺せとわめき散らすのならばすぐに刑場に送るように書類に印を押したことだろう。だがただ落ち着いて余裕を持って座っている清原が気に入らず、なんとかどちらかの反応をさせてみたいと思った。

「この場には斎藤家の恩顧のものしかおりませんの」

「ふうん。そうなのかね。それならここで八つ裂きにされても私は文句が言えないわけだね」

脅してみてもまるで無関心を装うように笑みを浮かべる清原。その表情に洋子はさらにいらだった。深呼吸をして部下達を見回してみる。誰もが殺気を隠せずに清原の息の根の止まるのを待っているかのような表情を浮かべていた。さすがにその表情を見ると洋子も目の前の虜囚が哀れに思えてくる。

「言葉が足りなかったようですね。つまりあなたには生きるチャンスが有るかもしれないということなのですが……」

「姫様！」

次官の言葉を制して洋子は立ち上がった。そして目の前の虜囚が命乞いをするだろうとつかつかと歩み寄った。

だがそれは無意味なやり取りだった。相変わらずさわやかに笑みを浮かべたまま清原はただじつと洋子を見上げていた。

「それはこの胡州での生きる場所を与えてくれると考えていいのかな」

思いもしない言葉に洋子は息を呑んだ。

「あなたは反逆者なんですよ……今となつては」

洋子の言葉にまるで言葉の意味が理解できないと言つ表情をする清原。

「あなたは……」

「君から見ればそうだろうが私がただの反逆者なら誰も付いてこなかったと思わないかね？越州の城君が私の手助けをしてくれた。それだけを見ても私が単なる叛乱分子じゃないことは証明されていると思うんだが……」

そう言つて清原は不敵に笑つた。

「そうしてあなたは敵を作つたんですね？」

「否定はしないな。私は常に理想を追っている。その理想を理解できない……」

「私は理解したくありません！」

饒舌に話し出した清原の言葉を洋子は両手を振り上げて止めて見せた。

「そう、こういう話にいつもなるんだ。なら武力を用いて国を変えるしかないだろ？」

まるで懲りずにつぶやく清原をにらみつける洋子の目が殺気を帯びる。

「君と私は絶対に相容れない。ならば殺しあうしかないんだ」

「それは悲しくないですか？」

淡々と語る清原の言葉に洋子は涙を浮かべながら返す。

「悲しい？目の前に理想があるかもしれないんだ。人間は進歩するもの。常に上を目指す」

「なら貴族以外の人間の上昇志向をへし折るような体制を何で支持するんですか？」

「私はこの国の文化と伝統を重んじるだけだ。それが成り上がりの

下世話な人間の跋扈する世の中からこの国を救う唯一つのやり方だからね」

まるで言葉が通じない。そんな清原に洋子は最後の言葉を口にするしかなかった。

「濁官の害、清官のそれに如かず」

「斎藤君。それはどういう意味かね」

初めて少しばかり驚いたような表情を清原が見せたのを見て洋子
は大きくため息をついた。

「汚職や職権乱用で国を傾けることも平然として行なう穢れた役人
よりも、正義と信じて信念を貫く国士気取りの役人のほうがはるか
に国に害を為すという意味です」

その洋子の言葉に初めて清原は感情的な表情を見せた。その瞬時
の切り替わりによろやく洋子は目の前の叛乱分子としてこれから処
刑される人物が人間だと言うことが分かった。

「私はそれほど愚かだと？」

「あなたが烏丸公を担いで政権を取ったとして何ができますか？貴
族制の廃止を求めている同盟諸国。国内の胡州系資産の凍結は軍縮
会議の再開を前提としている地球の国々。どちらも敵に回して鎖国
でもすることができないならいいですが、コロニー国家で多くの物資
を輸入に頼っているわが国にそんな我を通せる方法があるわけ無い
じゃないですか」

諦めるようにつぶやくがその時にはもうすでに目の前の人物は会
話を拒否するように口をふさいだ。

「都合が悪くなると黙り込む。それがあなたの世界観の限界です」

そう言つと洋子は次官に目をやった。彼はそのまま後ろ手に縛ら
れている清原の前に立つ。

「水をいただけないかね」

小声で清原はつぶやく。次官は首を振った。

「ここで柿でも出されたら私はなんと言つべきかね」

「石田三成を気取っても無駄ですよ。あなたにはそれほどの度量は
ありませんから」

洋子はそれだけ言々と領主の椅子から降りてそのまま処刑を待つ
囚人が頭を垂れている部屋を後にした。

戦火は帝都を巡り広がりを見せていた。そんな中、籠城を続けていた近衛師団は3キロまで近づいた醍醐隊に呼応するように攻勢に転じた。

「閣下！」

戦闘が始まって二時間。突入部隊に同行していた醍醐はそのまま近衛師団に突入し、ハンガーで敷いた畳の上で茶をたてている西園寺基義首相に頭を下げた。そしてその正面に本来ここにいるはずの無い茶人の姿を見かけて驚愕を受けた。

「驚くこと無いんじゃないですか？急いで来たんですから。のんびりさせてくださいよ」

そう言つて醍醐に茶碗を向けるのは主君である嵯峨惟基。現遼南帝国皇帝の姿だった。

「暇なんですか？御前は」

「ひどいこと言うね……体が一つじゃ足りないから今は同時に遼北での山岳民族隔離政策に対する抗議文を東都で読んでいるところですよ」

「影武者ですか」

着ているのは遼南軍大元帥の略章付きの軍服。恐らくは彼が個人的に保持していると言う法術対応アサルト・モジュール『カネミツ』を使って到着したのだろう。理由が分かると安心して醍醐はたたみの縁に腰を下ろした。

「烏丸さんは抑えたのか？」

黙って茶を飲んでいた西園寺がつぶやく。

「首相府は制圧しましたが陸軍省と警視庁に反乱軍が立てこもっています。しばらくは時間がかかるかもしれませんがね」

「そうか」

それだけ言うといつもの饒舌さを忘れられるほどに静かに西園寺

は茶を啜った。

「庶民院の議員の半数が殺害されたそうだ。建て直しには時間がかかりそうだな」

「生き残った連中も今度の件で拘留されるでしょ……どうします？ 今後の対応」

「それは皇帝陛下の一存で決まるんじゃないですか？ わが国も遼州帝国の剣と呼ばれた国ですから」

皮肉るように弟を見つめる西園寺。嵯峨は一本取られたと言うように頭を掻いた。

「そりゃあ建前でしょ。俺だってせいぜい聞こえのいい演説するくらいしかできませんよ」

「そういう割にはきつちり清原さんの艦隊の戦闘艦を沈めたそうじゃないか」

「やっぱりばれますかね」

そう言って舌を出す姿は醍醐から見てもかつての悪童のままの姿だった。

「それより兄の処遇ですが……」

「醍醐さん。今はそれより治安の回復が必要なんじゃないですか？今だって叛乱部隊が下町になだれ込んだりしたらめちゃくちゃになりますよ。そこら辺の指揮もきつちりしてもらわないと」

そう言つと嵯峨はのんびりとタバコを取り出して火をつけた。

「おい、新三^{しんざ}。俺にもよこせ」

「兄さんは吸わないんじゃないかった……」

「たまにはそういう気分になるんだよ」

西園寺はそう言つと弟からタバコを一本受け取る。そしてそのままライターをかざす嵯峨から火を受け取る。

「どうです？ 醍醐さんも」

そう言つた嵯峨の言葉に軽く首を振った。

「さてどうなることか……とりあえず烏丸さんが無事に見つかるといいんだけどね」

嵯峨の何気ない言葉にしばらく場が沈黙した。誇り高い貴族の烏丸頼盛がこの情勢で生きていることはあまり考えられないことだった。

「誰も彼も死にいくみたいだな」

「悪党ばかりが生き延びる。世の中なんてそんなもんでしょ」

つぶやく兄を見ながら嵯峨は平然とタバコをくゆらせていた。

「烏丸はんは自決されたか……」

明石はのんびり自分用の通信端末の画面を開いてコーヒを啜っていた。すでに残党部隊もほぼ投降し、アステロイドベルトは穏やかさを取り戻しつつあった。こうしてのんびりと自室でくつろぐのも明石には新鮮に覺えた。

その時扉をノックする音が響く。

「開いとるよー」

間抜けな明石の声を聞くと現れたのは別所だった。難しい顔をしながらベッドに座って端末を見ている明石に笑いかける。

「ほんまに笑顔の似合わんやつちゃな」

「余計なお世話だ」

そう言うつと別所は明石のしている画面を覗きこんだ。

「胡州本星も一件落着か」

「そないに簡単に行くつと……」

「思つちやいないよ」

別所は苦笑いを浮かべながら明石の執務机の椅子に腰掛ける。

「清原候は濃州で銃殺。安東大佐は部下の秋田さんに裏切られて自決。そして烏丸公も……」

別所の言葉に明石は諦めたように端末のスイッチを切った。死には慣れていた明石だった。人間魚雷を搭載した輸送艦で出撃を待つ日々にも次々と戦友は消えていった。その後、芸州で闇屋を始めたときもつまらない理由のトラブルや横領品の奪い合いで同業者があつさりと殺されるなんてこともよくある話だった。

そして今、軍人としてかつて戦うことを想定もしていなかった内戦を戦つて見せた。

「こないにたくさん人が死んで……誰が得する言つんやろな。ほんま人死にはええ加減飽きたところや言うつのに」

「これからも出てくるぜ……西園寺さんが天下を取っても特に変わる事なんてないからな。すぐに民衆に飽きられてまた軍部が台頭するだろうな。結局人間なんてそんなもんだよ……悲しいけどな」

別所が即答するのに明石は驚いて目を向けた。自分などよりははるかに艦隊司令赤松忠満の覚えが高く色々動き回っていると言う噂の別所の言葉だけに重みがあった。

「そら……面倒やな」

「なあに。面倒ごとを処理する為にこの世はあるのさ。面倒ごとがなくなったら人間の存在理由なんてなくなるんだ」

奇妙な詭弁を弄する別所に諦めたような表情で明石は剃りあげられた頭を搔いていた。

「これを託されました」

正親町三条楓は目の前の安東恭子に彼女の兄、赤松忠満からの手紙を手渡した。沈黙する二人。そして恭子は静かに震える手で手紙を開いた。

たまに屋敷の外では銃声が響いていた。ほとんどの政府機関は西園寺派の兵士、通称『民派』が制圧していたがいまだ烏丸派の『官派』の部隊による抵抗が続いていた。近衛師団の基地から車両を借りてこの安東邸までの間。三回ほど銃撃戦に巻き込まれるのを恐れて大回りをしたことを覚えている。

「すみません……あの人が……貞盛さんが死んだと言うのは……」

途中まで読んだところで顔を上げた恭子の白い顔に楓はどきりとした。それはまるで生ける屍だった。元々あまり気丈では無いとは聞いていた。鬱屈したようにいつも下ばかり向いていて心配だと楓は父の嵯峨惟基から彼女については聞かされていた。

「秋田大佐の叛乱で追い詰められて自決したらしいです」

ごまかすことはできない。楓はそう決意して事実を告げた。その時に表情が崩れて泣き出す恭子を想像していたが目の前の恭子はただ口を一字に結んで手紙に目を戻しただけだった。

母屋から離れた別宅。まるで籠の鳥のようだ。楓はそう思いながら座椅子にもたれかかり手紙を読む恭子を見つめていた。

「言い訳……こんなの欲しくありません」

小さいつぶやき。消え入るような言葉。楓は聞き返そうとしたがすでに彼女は手にした手紙を投げ捨てて口元に怪しげな笑みを浮かべていた。

「それは武家に生まれた定めです。事実安東大佐は何度と無く『播磨』に襲い掛かり……」

「そんなことを聞いているんじゃないんです！」

急に立ち上がった恭子は投げ捨てた兄からの手紙を引き裂いた。そしてかけらを無造作に手に取るとそのまま丸めて歩き出し、それを縁側から外に投げた。

空は相変わらずの胡州らしい赤い空だった。それを背後に背負うようにしてよろよろと楓などいないかのように歩き始める恭子。楓はどうしたらいいのか分からずしばらく呆然と恭子を見詰めていた。

西園寺基義を首班とする臨時政府による戒厳令は一週間の期限を切って施行された。多くの官派の將校達は獄につながれ、ようやく帝都は日常を取り戻した。

屋敷町の嵯峨家帝都邸。一人その家の主である嵯峨惟基は縁側で木切れを削っているところだった。

「新の字。ええのんか？」

渋い茶を啜りながらつぶやく海軍の將軍は赤松忠満。彼の第三艦隊が直接帝都に接岸した時点でもはや官派に逆転の目はなくなっていた。そしてその足で彼が嵯峨邸を訪れたのには訳があった。

「俺は本来ここにいない人だからね。結構目に付かないように気を使ってるんだよ」

「その割には醍醐さんに召集をかけたらしいじゃないか。貴様の被官では池准將が身柄を拘束されているんだ。醍醐さんのことだ。助命嘆願をするのは確実だが……どうするつもりだ」

そう言つと再び湯飲みに口をつける赤松。テラフォーミングされたからといって鳥が飛んでいるわけでも虫が鳴くわけでもない純粹培養と言える庭園。それを見つめながら嵯峨はただ一心に木切れを短刀で削るだけだった。

「父上、醍醐様、佐賀様がおいでです」

静かにふすまを開いた嵯峨の娘、正親町三条楓。

「おう、楓坊。ええ顔になったんちゃうか？」

「お褒めいただいて恐縮です」

深々と頭を下げる楓の言葉にようやく嵯峨が振り返って二人を見つめた。

「おいおい、忠さん。楓を落としに来たのか？それよりお二方が……会おう。応接間に通してくれ」

父の言葉に頷くと楓はそのまま廊下に消えた。赤松は不思議そう

な顔で嵯峨を見つめている。

「忠さん。会っていきいますか？」

そう言う嵯峨の表情が見るものを凍らせるような迫力を秘めていたので仕方なく赤松は頷いていた。

「会うのんはえんやけど……」

赤松が気になったのは一呼吸したあとにそのまま掛け軸の下に剣に嵯峨が手を伸ばしたからだった。

「忠さん、これ持つてくれます？」

嵯峨はそう言うとそのまま太刀を赤松に差し出した。立ち上がったばかりの赤松がよろける。

「結構重いもんやな」

「そうですよねえ……まあ重さで頭を叩き割るとかできますからね」

そう言うつと短剣を握って部屋を出る嵯峨の後をつけて赤松も廊下を進んだ。

庭は少しばかり荒れていた。嵯峨は現在は遼南皇帝。この屋敷に来るのは年に数回と言うこともあつて主がいないのをいいことに雑草があちこちに生えているのが見える。

「来た時思つたんやけど……」

「なんです？」

振り返つた嵯峨の表情が死んでいるのに赤松は驚いた。だが同時に納得できることでもあつた。

かつて参謀本部から見捨てられてゲリラ討伐の憲兵部隊や時間稼ぎの陸軍混成連隊を指揮した経験。そこで嵯峨はどれほどの汚い戦いを生き抜いてきたかは赤松も知っていた。恐らく無抵抗なゲリラや戦友を見殺しにするような撤退戦で同じ表情を嵯峨の部下達は見てきたのだろう。そう思うと明るい予科時代の嵯峨をよく知っている赤松の心は痛んだ。

「ここですか……」

珍しい洋間。その扉の前で嵯峨は立ち止まると大きく深呼吸をした。

「ええんやな、俺がおつても」

赤松の言葉に作り笑いで答えた嵯峨はそのまま扉を開いた。

テーブルには醍醐がいた。彼も主君の機嫌の悪さは予想していたようですぐに立ち上がると頭を下げる。そしてその隣には呆然と立ち尽くすという言葉のためにいるような青白い顔の佐賀高家が軍服でなく紺色のジャケットにループタイと言う普段着で入ってきた嵯峨と赤松を見つめている姿があった。

「大公！」

「俺、一応皇帝なんだけど……」

醍醐の言葉に苦笑いを浮かべるとそのまま嵯峨は椅子に腰掛けた。赤松が覗き見た親友の顔。そこには悪魔でもにらみつけるような厳しい表情が浮かんでいた。

「忠さん。その椅子に座ってくれ、醍醐さんも頭を下げるのはいいから」

赤松も醍醐もただ下座で立ち尽くしている佐賀高家をちらりと見た後テーブルに付く。まるで当然なことのように佐賀を無視している嵯峨に佐賀の弟である醍醐文隆は我慢できずに立ち上がった。

「兄のことでしたら私の責任です」

嵯峨が手にしている短刀をすばやく見つけて醍醐が叫んだ。だが表情一つ変えずに嵯峨は醍醐に目をやった。

「佐賀のことか？そんなものは処分は決まってるよ」

そう言つてニヤリと笑うと立ち上がる。おどおどと主君を見つめる佐賀。その姿に満足したように短刀を佐賀の足元に投げた。

「裏切り、寝返り。俺の顔に泥を塗ったんだ。それなりの責任の取り方は分かるだろ？」

嵯峨のにんまりと笑う様に佐賀はその言葉が冗談か何かのように感じられているような硬い笑みを浮かべていた。

「忠さん、兼光」

仕方が無いというように赤松は手にしていた太刀を嵯峨に渡した。静かに鞘を抜いてじっくりとその刃を吟味するように見つめる。

「大公！早まらないでください！」

「早まる？遅すぎたの間違いじゃないのか？決起の時点で俺の顔の利く連中を使って謀殺つてのも味があつてよかったんだがね」

テーブルから飛び出して嵯峨が投げた短刀を手に取ると醍醐は地

べたに頭を擦り付けてわびる。そんな弟の姿がよく理解できないというように佐賀はただ立ち尽くしている。

「弟にこれだけさせて……さあ、腹なり首なりそれで切ってくれ。俺が止めを刺してやる」

相変わらず放心状態の佐賀を哀れな生き物を見つめるような目で嵯峨は眺めていた。

どすんと佐賀は跪く。そしてそのまま頭を下げた。

「おい、誰も命乞いなんて頼んでねえぞ。腹を切れと言ったんだ」

嵯峨の言葉に今度は黙って額を床に摩り付けるほどに頭を下げた。
「新の字。ええ加減にせえよ……」

そう言った赤松に向かい振り向いた嵯峨。そこには狂気とも言えるような感情を押し殺した目が並んでいた。そんな旧友に赤松は思わず黙り込んだ。

「御前！なにとぞ！兄の不始末は……」

「醍醐さん。俺は高家さんと話してるんですよ……ねえ」

ニヤリと笑う嵯峨。その様子を見て醍醐も思わず諦めた。佐賀が仕方が無いというように震えながら短剣に手を伸ばした。

「ほう……作法は分かってるでしょ？なんと云っても胡州の貴族様なんだから……」

下卑た笑いが嵯峨の顔を覆う。そしてそんな主君を見ながら佐賀は静かに短剣の鞘を払った。

「やめてくれ！兄上！」

醍醐はそう叫ぶと兄である佐賀の手を思い切り叩いた。短剣が廊下へと転がっていく。

「おう……いい兄弟愛だ……忠さん。どうしましょうか？」

今度はふざけた調子で振り返った嵯峨だが、その目の前には赤松のこぶしがあった。

「ホンマに！ええ加減にせえよ！人の命で遊ぶのは……」

よろけた嵯峨。その口元に血が浮いていた。それをぬぐうと嵯峨は今度は片膝を付いて醍醐の肩を叩いた。

「確かに……忠さんの言うことももつともだね」

そう言いつつ嵯峨は相変わらず不機嫌そうに立ち上がるとそのまま椅子に戻った。

「とりあえず首と胴体がつながった感想はどうだ？」

「お許しただけるのですか？」

嵯峨の投げやりな言葉に佐賀は少しばかり笑みを浮かべて顔を上げる。

「まあ姉貴にさあ。殺すなって言われてるんだよ。これ以上人死に出して何をしたいんだってね」

嵯峨の義理の姉、西園寺康子。その化け物じみたこの内戦での戦いの噂が駆け巡っているだけに彼女に諭された嵯峨が無理をしないのを納得して赤松は自分の席に戻った。

「兄上……」

「すまん……文隆」

力が抜けたように頭を下げる弟をなだめる兄。その様子に嵯峨の視線は惹きつけられていた。

「なんやかんや言いながら血のつながりつてのは重要なんだねえ」

赤松のそう言う旧友の表情が複雑なものになっているのを察した母の同じ唯一の弟ムジャンタ・バスバを政治的取引の関係で斬殺しなければならなくなった時。それ以上に父、霊帝の送り名のムジャンタ・カバラと死闘を繰り広げた少年時代からこの男には誰も信じられないという信念が芽生えたのかもしれない。そんなことを考えながら貧弱な少年としか見れなかった13歳の時の出会いのことを思い出す。

「それにしてもええのんか？まもなく影武者さんが帝都に入国することになってんで」

「あっ！」

思い出したように立ち上がり頭を掻く。そして腕の端末で時間を確認して大きくため息をつく嵯峨。

「つまらないことに時間使っちゃったよ……あと二時間で鵜園殿で宰相の任命式だ」

「お上、お急ぎください」

気分を切り替えた醍醐は立ち上がると自分の端末を開いて陸軍省に連絡を取る。そんな勝者達を眺めながら決して自分が許されることはないと思いながら佐賀は一人で床に座り続けていた。

「暇やな」

そう言いながら明石はこつてりと油の浮いたラーメンを嚙っていた。その目の前では静かに楓がどうしたらいいいのか分からないように座っている。

「いいんだよ、好きに食べば」

魚住はもうすでに頼んでいた替え玉が来るとそれをラーメンの中に入れてしまった。第三艦隊クルーは久しぶりの休日を楽しんでいた。パイロットは三分の一が戦死。明石も例外ではなくこの数日は戦死した部下達の家を訪問して頭を下げる日々が続いていた。

官庁街や上流貴族の住む屋敷町などは今でも多くの武装した治安維持部隊が闊歩しているがこういった下町にみると猛すでにそんな堅苦しい雰囲気は抜けていた。

「おやじ！ワシにも替え玉や」

そう言うとも明石はどんぶりをカウンターに載せた。うれしそうに頭を下げながら麺を湯に投ずる大将。

「しかし……別所の奴も災難だな。しばらくは海軍での官派の取調べがお仕事だ。パイロット上がりの俺等にはつらいよ」

「それを言うなら一番の悲劇は黒田やろ。付き合いいいのも考えもんや」

大将が差し出した替え玉入りのどんぶりを受け取りスープに麺をなじませる明石。その様子によろやく踏ん切りが付いたというように楓は麺に箸を伸ばす。

「そのまま麺を取ってだし汁につけて食べる。簡単だろ？」

そう言いながらチャーシューをかじる魚住。上官の言葉に仕方が無いというように楓が麺をだし汁につけた。

「しかし……あの噂はほんまやるか？」

「噂って？」

魚住のとぼけた表情に明石は大きくため息をついた。

「あの中央突破を狙った官派の部隊がとんでもない望遠距離から狙撃されて流れが変わったって言う噂だよ」

「そら初耳やな。詳しく話せ」

箸を握りなおした明石は興味深そうに魚住の顔を見つめていた。

「法術の話は知ってるか？」

「突然なんやねん……法術？修験道の一種かなにか？」

魚住の突拍子の無い話に呆然と訪ねる明石。そしてその言葉にかすかに動きを止めた楓を見て魚住はどう話を切り出したらいいか考えた。

「正親町三条曹長。何か聞いたことがあるか？」

「な……何がですか？」

「お前の親父さんの嵯峨惟基や伯母の西園寺康子様。そして……」

魚住が追い詰めるたびに小さくなる楓。明石もこれを見て少しばかり不審に思った。

「隠し事か？隠さなあかんことならこいつなんて無視してやり」

「ひでえなあ。実際さっきの狙撃手の話を聞きたがったのはタコじやねえか」

「まあそうなんやけど……なあ」

明石が目をやると鳩が豆鉄砲を食らったようにあたふたと麺を啜る楓。この少女の過去に何があるかを明石も知りたくないわけではなかった。

嵯峨惟基。元々かなり胡散臭い人物の娘である彼女がその巨人の持つ秘密。そして一族である西園寺康子の秘密について何かを知っていることはすぐにわかった。それでも明石がそちらに話題を振らなかったのはその秘密が今は知るべきじゃない事実だと言うことを直感していたからだった。

前の大戦の終戦前日。特攻用の兵器のメンテナンスを頼みに言った際、明石は見たくも無い出撃表を見ることになった。

そこには貴族は原則として出撃させないと言う注意書きが書かれていた。艦には明石以外は爵位を持つ人物はいなかった。そして明石は所詮は寺社貴族の次男坊ということで士族や平民上がりの同僚

達や上官達と同じ恐怖を体験していると信じていた。

それが裏切られた時。その仕組みを知ってしまった時。もうすでに戦後のドヤ街を徘徊する運命は決まっていたのだと明石は思っていた。

「ワシは聞きとらない」

明石はいつの間にかそうつぶやいていた。

「聞かせるとか聞きたくないとか面倒な奴だな」

そう言つとニヤリと笑つて黙り込む魚住。その様子になぜか満足げな楓。

「まあ知らんでもええことなのはようわかった。で？」

「で？つてなんだよ」

魚住はそう言いながら手元の携帯端末を開く。そしてそのままいくつか操作をすると明石の腕の携帯端末が着信を知らせた。

「あんまり広めたくは無かつたんだがな。一応法術に関する陸軍と海軍の資料で俺が届く範囲のものは送つたぞ。もしもつと深入りしたければ別所に聞け」

そう言つと魚住は立ち上がった。

「そう言えば……久しぶりに野球でもやりたいな」

「チームがおらん」

「まったく空気が読めん奴だな……何も職業野球をやるうってわけじゃねえんだから」

呆れたようにそう言つとボールを投げるフォームを再現してみせる魚住。その様子を苦笑いで眺める明石。

「まあしばらくは安泰と行きたい所だが……どうなるか」

「どうなるかではなく我々がどうするかだと思つのですが……」

黙つていた楓の突然の言葉に魚住も明石も彼女の顔を見た。

「見ないでください。恥ずかしい……」

その急に見つめられて恥ずかしがる姿に魚住と明石は大笑いを始めた。

「おい、何してるんだ？」

水を飲みと言つていた黒田が帰ってくる。

「まあ……あれだ。特に何もやってなかつたよ」

ごまかすような魚住の言葉に黒田は不思議そうな顔をして明石を

見つめていた。明石も楓もただ何も言うつことがないというように黙って微笑んでいた。

「いい奴等みてえじゃねえか……いいねえ忠さん」

胡州帝国海軍省。式典に顔を出しただけでそのまま着流し姿で第三艦隊司令室を訪ねていた嵯峨。にんまりと笑いながら食事を済ませて芝生で談笑している明石達にその視線を投げていた。

「自分の娘もあるやん。自画自賛はやめてんか……」

赤松は執務机で端末をたたきながらそう応える。部屋に響くタイピングの音。嵯峨は飽きたというようにそのまま当然のように応接セツトのソファ―に腰を下ろした。

「兄貴の組閣……大河内さんに召集かけるらしいじゃねえか。大丈夫なのか？」

「ああ、だいぶ良うなってるらしいで。何でも清原はんが決起したと聞いたら『ワシが締めたる！』って叫んで病室で暴れとったって話やからな」

嵯峨と赤松。二人にとって海軍の重鎮大河内吉元元帥は高等予科学校の校長というイメージがいつまで経っても抜けなかった。そしてそのカイゼル髭を思い出せば今は亡き斎藤一学と安東貞盛の顔が思い出された。

「おう、新の字。暇みたいやな」

ようやく作業を終えた赤松が立ち上がる。その有様を呆然と見上げる嵯峨。

「まあな。墓参りか？」

嵯峨はそう言うのと立ち上がった。そして同時に来客を知らせるベルが赤松の机の端になった。

「誰やね……」

「貴子さんだな」

「まあ、新三郎さん……お久しぶりですわね」

紺色の留袖に映える目鼻立ちのはっきりした女性の姿に頭を掻く

嵯峨。そして彼女の隣にちよこんと立つ赤松の娘直満の姿を見ると自然と嵯峨の声に緊張が走った。

「ちようど良いですね、貴子さん。実は……」

「貴子、待たせたな。とりあえず下で待っていてくれへんか？この馬鹿にも墓参りくらいさせたいよつてに」

そう言つと赤松は伸びをして机の隅においてあつた制帽をかぶつて首もとのボタンをしっかりと締めなおした。

静かに廊下を出る二人。

勝利の余韻に浸ることも許されず緊張した空気の流れる海軍省。

その廊下を黙って二人は歩く。エレベータ。消費された物資の計算書を手にした事務官達に押されるようにして二人はそのまま一番奥に追いやられた。

「あ！赤松將軍」

「ええで、仕事が一番大事や」

そんな赤松の言葉に疲れた笑みを浮かべると事務官はすぐ次の階で開いた扉から出て行く。

「戦争は……本当に物量の浪費だからな」

「そう思つたら胡州の海外資産の凍結解除をなんとかせいや」

そんな赤松の不満に懷手の嵯峨がにんまりと笑う。ドアが開きセキリティーチェックを済ませた二人の前には貴子が立っていた。そしてその隣には先ほどまで庭で話をしていた明石、別所、魚住、黒田そして正親町三条楓の姿があった。

「忠満さん。この人達も付き合いたいんですって」

貴子の笑みを含んだ言葉に思わず赤松の顔が緩んだ。

「楓。どうだ、部隊は」

久しぶりに会う親子の姿をほほえましげに巨漢の明石が見下ろしている。

「勉強になります。色々と」

「ああ、そうだ。未来の旦那は見つかったんか？」

赤松の言葉に楓は理解できないと言うような顔をしていた。

「忠さん……こいつは要の馬鹿にご執心でね。お前さんのお袋みたいに」

父の言葉に顔を赤らめてうつむく楓。明石達は楓の父親のよく分からない言葉にしばらく呆然と楓を眺めていた。

「なんや……女子同士がええんやな」
おなこ

赤松の言葉に楓が頬を赤らめる。その話を初めて知った明石達はただ呆然と楓を見つめていた。

「そういうわけ。じゃあ別所君、車を」

貴子の言葉にはじかれるように別所と明石が走り出した。

「いろいろ大変ですね、嵯峨殿も」

「まあね」

黒田の言葉に嵯峨は大きくため息をついた。

「それにしても……むなしい勝利ですね」

魚住の言葉。それを避難するように貴子が振り返った。弟の信念を貫いての死。それを受け止めている彼女には魚住の言葉は軽はずみに思えていた。

「まあ……あれや。人間の人生は一度しかない。ワシも貞坊もそれをかけて動いた。そしてそれに付き合って死んじまった人間がいる。そういう事実を受け止めとかなとな」

そんな言葉を言って視線を上げた赤松の前にもうすでに別所のセダンと明石のワゴン車が止まっていた。

「おう、それじゃあワシは別所の車に乗るから……新三と楓は明石のに乗り」

「俺と黒田も明石のには乗れるでしょ」

魚住はそう言うのと嬉々として明石の黒いワゴン車に向かう。

「やっぱりたくさん乗れると便利やのう」

「そのうちパシリに使ってやるよ」

明石の言葉に返す魚住。そのまま車止めに止められた車の後部座席の奥へと嵯峨が身を滑り込ませた。

「陛下、助手席の方が広いですよ」

「いいんだよ。楓、隣に座れ」

嵯峨の言葉に嫌な顔をしながら窮屈そうに楓は座席に体を押し込んだ。

「かなり香水がきついんですね」

楓の言葉に振り向いた明石が苦笑いを浮かべた。

「ええやん。それで陛下」

「陛下は辞めてくんねえかな」

「そうだぞ。嵯峨大佐……墓苑でいいんですよ」

明石の仏頂面を見ながら助手席に座った魚住が振り向いて笑う。

「頼む」

それだけ言うと嵯峨は静かに目をつぶった。

「すみません。魚住の奴はデリカシーがないもので」

そう言つて頭を下げる黒田を片目で確認してにんまりと笑つて見せた嵯峨に楓が大きく安堵の息をついた。

すでに市街戦の跡はかなり修復が進んでいた。時々商店や屋敷の壁に銃痕が残っているのが先日近衛師団突入の戦闘の激しさを物語っている。自然とそんな光景を前にして会話も途切れた。

街が流れて消え、市街調整区域を抜けると空の赤い雲が車内までも赤く染めてくる。

「どうしても思い出すな……」

不意に嵯峨がつぶやく。この先には墓所があるばかり。明石はそれを聞いて何度となく戦友や学友の墓参りに行きたくても行けない闇屋時代を思い出した。

「もうそろそろ……」

振り向いて知らせようとした魚住が明石の急ブレーキでシートに頭をしたたかぶつけた。

「何しやがんだ！」

「そこで検問やつてるやん」

淡々と応える明石を魚住は恨めしそうににらみつけた。

近づいてくる警察官。それも運転する明石の海軍の制服を見て少しばかり表情が曇った。

「すみません……免許書を……」

窓が開いて眼鏡の警官の言葉に明石は懷から免許書を取り出す。

「この先……他のコローへの通用道は閉鎖されていますが……」

「ええねん。墓参りや」

明石の言葉に警察官の表情に緊張が走った。この先には墓地と言えは上流貴族の墓所しかない。その様子にすぐに免許書を返すと堅苦しい敬礼を試みせる。

「あんなにしゃっちょこばらなくてもええのになあ」

「なあにこの国は二百年も庶民は貴族に頭を下げておこぼれをもらうものと言う教育が行き届いているんだ。仕方ねえんじゃねえか？」

投げやりな嵯峨の言葉。そのまま車は墓所へ続く道を走る。人死にがたくさん出たあとだというのに墓所への道はなぜか明石の車だけが走っている状況だった。

「えらい空いてますな」

「今葬式しても誰も来ないから自重してるんじゃないの？」

そう言う嵯峨は門が見えてきたのでなんとかシートベルトを緩めるようなしぐさをした。車はそのまま門のところで止まる。今度は守衛と墓所管理の職員が近づいてきた。

「これは……安東様のお知り合いの方ですね」

「何で分かるの？」

「先ほど赤松様からすぐに到着するから準備をしておけと言われましたので」

職員はそう言うカードを明石に手渡した。

「さすが忠さん。気が利くねえ」

嵯峨はそう言つとにんまりと笑い明石からカードを受け取った。

そのまま車を係員に預けると明石達はそのまま墓地への階段を上がった。たまに線香の香りが漂い、墓所であることを再確認しながらお互いに顔を見合わせる。

「どうも……失礼します」

喪服の老女が突然脇から現れ明石達の隣を通り過ぎていく。彼女が今回の動乱で何を失ったのかは分からない。ただ沈黙が一同を支配していた。

「おう、来たんやな」

桶の置かれる場所で一人立ち尽くしていた赤松の顔を見て一同はほっとした気分になっていた。

「ここにいるならカードなんて……」

嵯峨はそう言うと言った器具にカードを差し込む。テラフォーミング化した土地らしく、胡州では水は貴重だった。その桶入れの中から水に満たされた桶が出てきた。明石は成り行きでその桶を手にしていた。

「行こか」

そう言うと言った赤松はそのまま墓所に向かう。並んでいる墓標。どれも貴族達の墓地であり墓石には高級な石材が使われ、凝った装飾が施されていた。

「あれ……恭子さんじゃねえのか？」

嵯峨の言葉に赤松が大きく身を乗り出す。明石が見たのは黒い喪服の女性が跪いて墓を拝んでいる有様だった。赤松がいつの間にかその女性に向かって歩き始める。

「赤松將軍。妹さんが……」

明石がそう言うて見たが赤松は一人立ち尽くしていた。明石達はそれを見て大きなため息をつくと彼を置いて嵯峨の後ろについて歩き始めた。

「お兄様……新三郎さん……」

恭子は驚いたように嵯峨を見つめた。そして明石はその瞳が正気を失った人物のものだとすぐに直感できた。

「一応、俺は嵯峨の跡取りになっただけだな」

「貞盛さんもないわよ……」

そう言うのにこりと笑って彼女は新しい塔婆の目立つ黒い墓石をいとおしそうに見上げていた。

重い空気。だれもが黙り込んで静かに墓石を眺める。線香の香りが当たりに漂った。

「返して……」

「すまない」

兄の言葉にその発せられたほうを見た恭子の顔は涙に濡れていた。

「なんで……貞盛さんは……」

「それは武家の習いでしょ」

卒塔婆の脇から貴子が現れてそう言った。そんな弟の死を一言で片付けた姉に殺気を込めた視線を投げる恭子。明石達はただ呆然と二人を見守るばかりだった。

「忠義に生きて忠義に死んだ。私としてはよくやったと褒めてやりたいわ」

「そんな……」

恭子は赤に菊模様の留袖の裾を目に当てて涙をぬぐう。そんな有様に明石はその後の羽州の混乱の話を思いだした。

安東を自刃に追い込んだ秋田義貞が跡目を継ぐべく西園寺邸を訪ねたが、宰相西園寺基義は門をくぐることにすら許さなかった。そしてそのままシンパを集めて会議をしているところに過激派が襲撃をかけ、秋田一門の多くは惨殺されたという。

「一学……貞坊……いい奴ばかり死にやがる」

嵯峨はそう言うと言にしてきていた桶の水を墓石にかけた。静かに水が流れる。そして線香を持っていた貴子が明石達にも線香を配った。

「貞盛は明るいのが好きだったから……泣くのはよししょうよ」

逆賊として公に葬儀を行なうことも許されずに恭子と数人の被官だけで行なわれた葬儀に参加できなかった姉は静かに弟の墓標に線香を献じた。そして静かに手を合わせる。

「ありがとう……有難うございます」
途切れ途切れに恭子は義姉に静かに頭を下げた。

「ところでその坊さん」

「ワシのこと……」

「そういうこと」

明石は突然嵯峨に声をかけられて当惑していた。着流し姿、丸腰でまるで殺気を感じない姿は逆に奇妙に見えた。

「お前さん達もこの戦いを生き延びたわけだ。だがこれからどうなるか分からねえぞ。何が起きるか読めない時代だ」

「新三が言うことやないんとちゃうか？」

赤松の突込みを無視して嵯峨は話し続けた。

「何かを得るには何かを捨てなきゃいけないものだ」

「そうかもしれませんね」

後ろからいきなり声をかけられ嵯峨は驚いたふりをするように振り向いた。そこには疲れたような表情の別所が立っていた。

「なんだよ……あれか？車に忘れ物とか」

「まあそんなところです」

そう言つと別所は手にしたものを一人墓の前に跪いている恭子に差し出した。

「安東大佐の遺髪だそうです」

小さな紙袋。恭子はそれを握り締めると胸の前に抱いて黙り込んだ。

「これが現実さ。俺や忠さんもこれから貞坊の分まで生きなきゃならなくなる」

黙って蹲っている恭子を見ながら嵯峨は大きくため息をついた。

「ところで坊さんよ」

嵯峨の言葉に気が付いて視線を落とす明石。なんとなく言葉を選ぶのが疲れてきた明石はただ黙って嵯峨を見つめていた。

「忠さん……そのうちこいつを借りて良いかな？」

「借りるって……あれか？遼南の騎士団だのなんだのに……」

「違うよ。俺の直感だがどこかでこいつの力が必要になりそうなんだわ」

しばらく誰もが嵯峨の言葉の意味に気づかなかった。ただ一人貴子は納得したような感じで夫に笑顔で合図していた。

「同盟絡みか……ずいぶん急な話やな」

「遅すぎるよりいいと思いますよ」

ようやく夫の墓から立ち上がった恭子。その目の涙はようやく乾こうとしているところだった。

「私もいつも遅すぎましたから……」

「そんなこと言うてくれてもうれしないです……」

「お兄様を喜ばせるつもりはないです」

最後の言葉ははつきりしていた。そして深々と貴子達に一礼すると恭子はそのまま線香の香りの漂う中を歩いていった。

「つらいな忠さん。泣いて暴れてくれたほうが良かったんじゃないのか？」

嵯峨の言葉に苦笑いを浮かべる赤松。そんな様子を見ながらエキセントリックな皇帝、嵯峨惟基をまじまじと見つめる明石。嵯峨もその視線を嫌ってか安東の墓石に桶の水をかけた。

「勝ったって言うけど……」

つぶやく赤松の顔に勝者の誇りは無かった。親友を倒して、妹を不幸にして手に入れた勝利。それは甘くないものだと言うことが明石の目にもわかった。

「勝っちゃいねえよ。むしろ本当に勝ったのは貞坊の方かもしれないよ。俺達はこれから世の中の毀誉褒貶を浴びながら生きていくことになる。たぶん今回の官派の敗北を認められない人間も多い……」

「しばらくは乱れるでしょうね」

嵯峨の言葉を引きつぐ別所。過激派の一部の暴走が続いている以上、明石もそれを否定できなかった。

「だからみなさんにかんばってもらわないと」
いつの間にか明石の目の前に来ていた貴子の声。明石の身が引き締まる。

「そういうこと。で……」

明石に目をやった後、嵯峨は墓石に手を合わせる赤松を覗き込んだ。

「しばらくはワシの手駒やからな。貸さんぞ」

「まあそうだろうね。俺ももう少しこいつに丸みが出たら……」

「ワシそんなに太つとります？」

とぼけたような明石の言葉に赤松と嵯峨は顔を見合わせた。さわやかな笑い声が墓地に響いた。その笑いはつい黒田に、そして魚住へと伝染した。

「わかつとりますよ。ワシはまだ闇屋の癖が抜けとらん」

「そういう事だ。もう少し制服の似合う面になったら迎えに来るわ……」
「楓」

嵯峨は黙っている娘に声をかけるとそのまま歩き出した。

「皇帝陛下……」

「いらねえよ、護衛なんか。それよりオメエ等も頭下げとけよ。仏さんに失礼だ」

そう言つと嵯峨は楓を連れてそのまま墓地の出口を目指した。

「湿っぽいのは貞坊も喜ばんやろ・・・うち寄るか？」

そんな赤松の一言に大きく頷く魚住。明石と黒田は苦笑いでその様子を見ていた。

「いいですわね。嵯峨さんからイノシシの肉が届いてますの・・・牡丹鍋はいかが？」

「牡丹鍋？」

呆然と別所がつぶやく。

「あれや・・・イノシシの肉の鍋。ワシも話しか聞いたことあらへんけどなあ」

「イノシシ？遼南の自然は偉大だな」

黒田の顔もほころんでいる。そんな若者達を見ながら赤松は背後の親友の墓石を見上げた。

「貞坊・・・悪いがわしはしばらくお前のところには行けんようになってもうたわ」

「そうですね。直満も立派な安東家の跡継ぎにしないと・・・」

大きく貴子が頷く。

明石はその有様を見ながらなんとなくうれしくなって剃りあげられた頭を撫で回した。

「それじゃ・・・行こか」

赤松が桶を持って歩き出す。その手から桶をとろうとする別所。

「ええねん。ワシが持ちたいから持つんや」

笑顔でそれを交わす赤松。彼の心には二度と自分達と同じ道を歩ませたくない若者たちがいた。そしていとおしげに部下達を眺める夫を満足げに貴子は眺めると胡州のテラフォーミング化された赤い大気を見上げた。

「これから何も起きませんように」

いつも強気で通している妻の思いもかけない言葉に赤松は満足げに頷くと天を仰いだ。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7225f/>

遼州戦記 播州愚連隊

2010年10月8日12時13分発行